

平野山古窯跡群

第12地点 遺跡

第2次発掘調査報告書

1998

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

ひら の やま

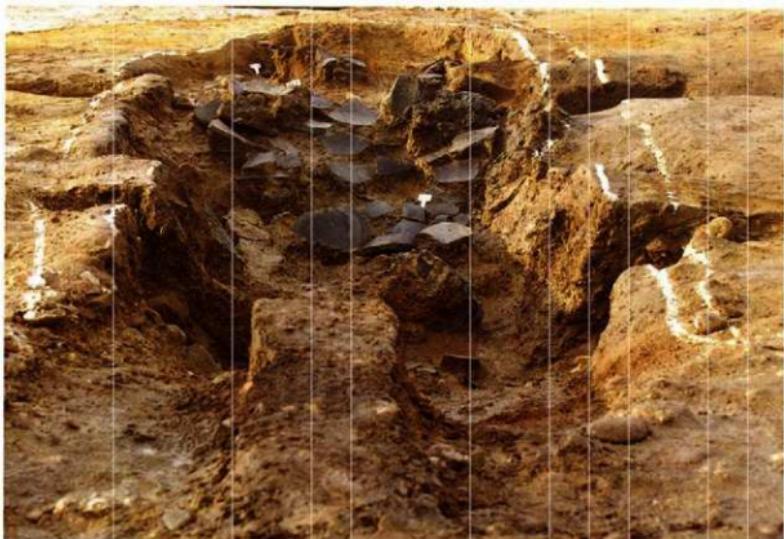
平野山古窯跡群

第12地点遺跡

第2次発掘調査報告書

平成10年2月

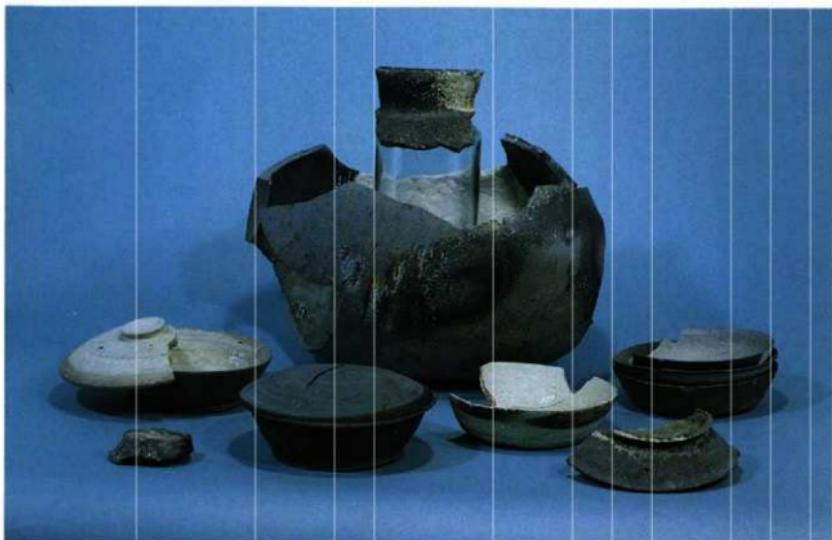
財団法人 山形県埋蔵文化財センター



SQ1 須恵器出土状況（南東から）



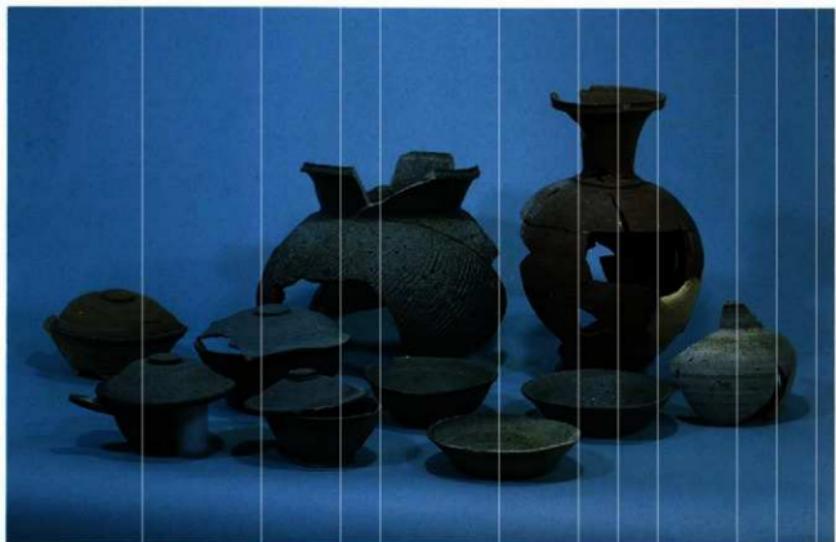
SQ33 須恵器出土状況（北から）



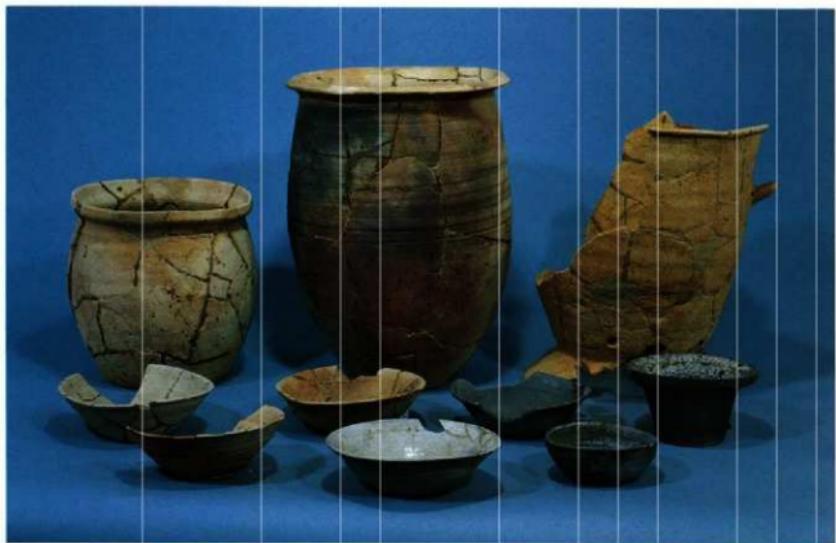
平野山古窯跡群第12地点遺跡 A群土器



平野山古窯跡群第12地点遺跡 B群土器



平野山古窯跡群第12地点遺跡 C群土器



平野山古窯跡群第12地点遺跡 D群土器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが平成7年度に発掘調査を実施した平野山古窯跡群第12地点遺跡の調査成果をまとめたものです。

平野山古窯跡群は、山形県のほぼ中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は北に葉山、北西に月山を望み、南の最上川と北の寒河江川との間に平野が開けた、緑豊かな街です。初夏には桜桃がたわわに実り、「さくらんぼの里」として全国にその名を知られています。

この度東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設工事に伴い、工事に先立って平野山古窯群第12地点遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、奈良時代から平安時代にかけての須恵器を焼いた窯跡と、土抗や河跡などが検出されました。また、整理箱にして700箱を超す須恵器が灰原などから出土しており、本遺跡が古代の最上郡を代表する古窯跡群であることが確認されました。近くにある高瀬山遺跡などの須恵器も大部分がここで焼かれたものでしょう。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成10年2月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

1 本書は、東北横断自動車事業酒田線（寒河江～西川間）建設工事に係る「平野山古窯跡群第12地点遺跡」の第2次発掘調査報告書である。

2 調査は日本道路公団仙台建設局（現東北支社）の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

　遺跡名 平野山古窯跡群第12地点遺跡（C S G H Y - II）　遺跡番号 440

　所在地 山形県寒河江市大字柴橋字高松ほか

　調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター

　調査期間 平成7年4月1日～平成9年12月31日

　現地調査 平成7年8月21日～平成7年12月8日

　発掘調査担当者（役職名は平成7年4月1日現在）

　調査第二課長 佐藤 庄一

　主任調査研究員 阿部 明彦

　調査研究員 鈴木 良仁

　〃 氏家 信行

　嘱託職員 須賀井明子

　〃 志田 純子

　資料整理担当者

　調査第一課長 佐藤 庄一

　主任調査研究員 阿部 明彦（平成7・8年度）

　〃 佐藤 正俊（平成9年度）

　調査研究員 鈴木 良仁

　嘱託職員 須賀井明子

　黒坂 広美（平成8年度）

4 発掘調査および本書を作成するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形県寒河江建設事務所、西村山教育事務所、寒河江市教育委員会等関係機関から協力をいただいた。また、遺跡周辺の地形について阿子島功氏（山形大学人文学部）から、出土土器については利部修氏（秋田県立秋田県埋蔵文化財センター）からご指導を賜わった。ここに記して感謝を申し上げる。

5 本書の作成は鈴木良仁・佐藤庄一・須賀井明子・黒坂広美があたり、本文の執筆は佐藤庄一・須賀井明子が担当した。編集は丸山晶子・森谷昌央が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6 委託業務は下記のとおりである。

　造構の写真実測 アジア航測株式会社　　遺物の写真実測 株式会社シン技術コンサル
　理化学分析 パリノ・サーヴェイ株式会社

7 出土遺物、調査記録については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S Q……窯跡	S G……河川跡	S K……土坑
S D……溝跡	S P……単独のピット	S X……性格不明遺構
E L……炉跡	E U……埋設土器	
R P……登録土器	R Q……登録石器	R W……登録木製品

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-56° 05'-Wを測る。
- (3) 遺構実測図は1/20・1/40・1/60・1/200縮尺で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (4) 遺構実測図、土層断面図中のスクリーントーン、記号は下記のとおりである。



焼土・被熱部分



窯壁・
スサ入り粘土



植物遺存体

- (5) 遺物実測図・拓影図のうち土器は1/3、木製品は1/2・1/3、石器は1/2で採録し、各々スケールを付した。ただし、大形の遺物については一部1/4縮尺のものもある。
遺物図版については1/3を基準とするが、一部任意の縮尺とした。
- (6) 土器拓影図と木製品で、断面の外側部分は左側、内側部分は右側に表示している。
- (7) 遺物実測図中のスクリーントーンは下記のとおりである。なお、土器の断面図のうち黒ベタは須恵器を示す。



黒色処理



うるし

- (8) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (9) 遺構観察表・遺物観察表中の()内の数値は、図上復元による推定値または残存値を示している。
- (10) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経緯	3
II 遺跡の概要	
1 立地と自然環境	4
2 歴史的環境	4
3 遺跡の層序	7
III 検出遺構	
1 西区	
(1) 窯跡	9
(2) 灰原帶	17
(3) その他の遺構	22
2 南区	25
IV 出土遺物	
1 繩文時代の遺物	
(1) 繩文土器	30
(2) 石器	31
2 奈良・平安時代の遺物	
(1) 奈良・平安時代の土器分類	41
3 遺構および灰原出土の遺物	
(1) 窯体内出土の遺物	46
(2) 灰原Gブロック出土の遺物	52
(3) 灰原Hブロック出土の遺物	57
(4) 灰原Jブロック出土の遺物	66
(5) 灰原Lブロック出土の遺物	76
(6) 灰原Mブロック出土の遺物	83
(7) 灰原Pブロック出土の遺物	86
(8) 灰原Sブロック出土の遺物	86
(9) その他の遺構出土の遺物	92
(10) S G31河跡出土の遺物	95
(11) S G31捨て場出土の遺物	102
(12) ヘラ書き文字について	102
4 木製品その他	
(1) 木製品	106

(2) 近世陶磁器	106
(3) 金属製品	106
(4) 自然遺物	106
V　まとめと考察	
1 平野山古窯跡群第12地点遺跡の窯関連遺構	145
2 一括土器群とその変遷について	146
参考文献	164
報告書抄録	165

付録	巻末
1 「平野山古窯跡群第12地点遺跡における考古地磁気年代推定」	1
2 「平野山古窯跡群第12地点遺跡の奈良・平安時代の花粉化石群」	7
3 「平野山古窯跡群第12地点遺跡出土木材の樹種同定」	11
4 「平野山古窯跡群第12地点遺跡出土須恵器等の材料分析」	15

表

表1 窯跡計測表.....	18	表6 奈良・平安時代の土器観察表(16)	125
表2 遺構計測表.....	18	奈良・平安時代の土器観察表(17)	126
表3 土器分類表(1).....	42	奈良・平安時代の土器観察表(18)	127
土器分類表(2).....	44	奈良・平安時代の土器観察表(19)	128
表4 石器計測表(1)	108	奈良・平安時代の土器観察表(20)	129
石器計測表(2)	109	奈良・平安時代の土器観察表(21)	130
表5 木製品計測表	109	奈良・平安時代の土器観察表(22)	131
表6 奈良・平安時代の土器観察表(1)	110	奈良・平安時代の土器観察表(23)	132
奈良・平安時代の土器観察表(2)	111	奈良・平安時代の土器観察表(24)	133
奈良・平安時代の土器観察表(3)	112	奈良・平安時代の土器観察表(25)	134
奈良・平安時代の土器観察表(4)	113	奈良・平安時代の土器観察表(26)	135
奈良・平安時代の土器観察表(5)	114	奈良・平安時代の土器観察表(27)	136
奈良・平安時代の土器観察表(6)	115	奈良・平安時代の土器観察表(28)	137
奈良・平安時代の土器観察表(7)	116	奈良・平安時代の土器観察表(29)	138
奈良・平安時代の土器観察表(8)	117	奈良・平安時代の土器観察表(30)	139
奈良・平安時代の土器観察表(9)	118	奈良・平安時代の土器観察表(31)	140
奈良・平安時代の土器観察表(10)	119	奈良・平安時代の土器観察表(32)	141
奈良・平安時代の土器観察表(11)	120	奈良・平安時代の土器観察表(33)	142
奈良・平安時代の土器観察表(12)	121	奈良・平安時代の土器観察表(34)	143
奈良・平安時代の土器観察表(13)	122	奈良・平安時代の土器観察表(35)	144
奈良・平安時代の土器観察表(14)	123	表7 各遺構・灰原土器組成表	163
奈良・平安時代の土器観察表(15)	124		

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第35図 窯体内出土遺物 S Q33(2)	49
第2図 古窯跡分布図	5	第36図 窯体内出土遺物 S Q33(3)	50
第3図 第12地点遺跡概要図	6	第37図 窯体内出土遺物 S Q40・46	51
第4図 第2次調査区概要図	7	第38図 Gブロック出土遺物 須恵器(1)	53
第5図 基本層序	8	第39図 Gブロック出土遺物 須恵器(2)	54
第6図 遺構配置図	10	第40図 Gブロック出土遺物 土師器(1)	55
第7図 S Q 1 窯跡	11	第41図 Gブロック出土遺物 土師器(2)	56
第8図 S Q 4・5 窯跡	12	第42図 Hブロック出土遺物 須恵器(1)	58
第9図 S Q 40・46 窯跡	13	第43図 Hブロック出土遺物 須恵器(2)	59
第10図 S Q 33 窯跡	15・16	第44図 Hブロック出土遺物 須恵器(3)	60
第11図 グリッド別土器出土量図	18	第45図 Hブロック出土遺物 須恵器(4)	61
第12図 灰原ブロック分け模式図	19・20	第46図 Hブロック出土遺物 須恵器(5)	62
第13図 灰原横断面土層図	19・20	第47図 Hブロック出土遺物 須恵器(6)	63
第14図 灰原縦断面土層図	21	第48図 Hブロック出土遺物 須恵器(7)	64
第15図 E U30・S K50・S P57・65・84	24	第49図 Hブロック出土遺物 陶硯・土師器	65
第16図 S X 6	25	第50図 Jブロック出土遺物 須恵器(1)	67
第17図 S G31河跡	26	第51図 Jブロック出土遺物 須恵器(2)	68
第18図 S G31捨て場	27	第52図 Jブロック出土遺物 須恵器(3)	69
第19図 E L 2・3 炉跡	28	第53図 Jブロック出土遺物 須恵器(4)	70
第20図 南区石器出土地点	28	第54図 Jブロック出土遺物 須恵器(5)	71
第21図 グリッド別石器出土量図	29	第55図 Jブロック出土遺物 須恵器(6)	72
第22図 繩文土器	30	第56図 Jブロック出土遺物 土師器(1)	73
第23図 石器(1)	32	第57図 Jブロック出土遺物 土師器(2)	74
第24図 石器(2)	33	第58図 Jブロック出土遺物 土師器(3)	75
第25図 石器(3)	35	第59図 Lブロック出土遺物 須恵器(1)	77
第26図 石器(4)	36	第60図 Lブロック出土遺物 須恵器(2)	78
第27図 石器(5)	37	第61図 Lブロック出土遺物 須恵器(3)	79
第28図 石器(6)	38	第62図 Lブロック出土遺物 須恵器(4)	80
第29図 石器(7)	39	第63図 Lブロック出土遺物 須恵器(5)	81
第30図 石器(8)	40	第64図 Lブロック出土遺物 須恵器(6)・土師器	82
第31図 土器分類図(1)	43	第65図 Mブロック出土遺物 須恵器(1)・陶硯	84
第32図 土器分類図(2)	45	第66図 Mブロック出土遺物 須恵器(2)・土師器	85
第33図 窯体内出土遺物 S Q 1・4・5・9	47	第67図 Pブロック出土遺物 須恵器(1)	87
第34図 窯体内出土遺物 S Q 33(1)	48	第68図 Pブロック出土遺物 須恵器(2)	88

第69図	P ブロック出土遺物	須恵器(3).....	89
第70図	P ブロック出土遺物	土師器他.....	90
第71図	S ブロック出土遺物	須恵器.....	91
第72図	その他の遺構出土遺物(1).....	93	
第73図	その他の遺構出土遺物(2).....	94	
第74図	S G31河跡出土遺物	須恵器(1).....	96
第75図	S G31河跡出土遺物	須恵器(2).....	97
第76図	S G31河跡出土遺物	須恵器(3).....	98
第77図	S G31河跡出土遺物	土師器(1).....	99
第78図	S G31河跡出土遺物	土師器(2).....	100
第79図	S G31河跡出土遺物	土師器(3)他	101
第80図	S G31捨て場出土遺物(1)	103	
第81図	S G31捨て場出土遺物(2)	104	
第82図	ヘラ描き文字等	105	
第83図	木製品	107	
第84図	坏類土器の法量分布(1)	148	
第85図	S Q 1・灰原L ブロック出土土器群	149	
第86図	坏類土器の法量分布(2)	150	
第87図	S Q 5・灰原P ブロック出土土器群	151	
第88図	坏類土器の法量分布(3)	152	
第89図	河北町不動木遺跡S D 1溝跡出土土器群	153	
第90図	坏類土器の法量分布(4)	154	
第91図	S Q 33・灰原H ブロック出土土器群	155	
第92図	坏類土器の法量分布(5)	156	
第93図	平野山古窯跡群第14地点1・2号窯・捨て場出土土器群	158	
第94図	坏類土器の法量分布(6)	159	
第95図	坏類土器の法量分布(7)	160	
第96図	S G31捨て場・E U30出土土器群	161	
第97図	長岡山洲崎窯跡出土須恵器	162	

付 図 窯跡列と灰原ブロック配置図

図 版

巻頭図版 1 S Q 1 須恵器出土状況

S Q33 須恵器出土状況

巻頭図版 2 平野山古窯跡群第12地点遺跡A群土器

平野山古窯跡群第12地点遺跡B群土器

巻頭図版 3 平野山古窯跡群第12地点遺跡C群土器

平野山古窯跡群第12地点遺跡D群土器

図版 1 遺跡近景、土層断面

図版 2 遺跡全景、調査風景他

図版 3 窯跡列全景

図版 4 S Q 1 窯跡

図版 5 S Q33窯跡

図版 6 S Q 4・5・9・40・46窯跡

図版 7 S Q41~45窯跡

図版 8 S Q 1 灰原(L ブロック)

図版 9 S Q33灰原(H ブロック)

図版10 G・J・M ブロック

図版11 P・S ブロック・東区

図版12 西区 北側

図版13 西区 中央・南側

図版14 S G31土器捨て場

図版15 南区(縄文時代)

図版16 南区(平安時代)

図版17 S Q 1・4・5・9 出土須恵器

図版18 S Q33出土須恵器(1)

図版19 S Q33出土須恵器(2)

図版20 S Q33出土須恵器(3)・

G ブロック出土須恵器(1)

- 図版21 Gブロック出土須恵器(2)・土師器(1)
- 図版22 Gブロック出土須恵器(3)・土師器(2)
- 図版23 Gブロック出土土師器(3)・
Hブロック出土須恵器(1)
- 図版24 Hブロック出土須恵器(2)
- 図版25 Hブロック出土須恵器(3)
- 図版26 Hブロック出土須恵器(4)
- 図版27 Hブロック出土須恵器(5)
- 図版28 Hブロック出土須恵器(6)
- 図版29 Hブロック出土須恵器(7)
- 図版30 Hブロック出土須恵器(8)
- 図版31 Hブロック出土須恵器(9)・土師器(1)
- 図版32 Hブロック出土土師器(2)・
Jブロック出土須恵器(1)
- 図版33 Jブロック出土須恵器(2)
- 図版34 Jブロック出土須恵器(3)
- 図版35 Jブロック出土須恵器(4)
- 図版36 Jブロック出土須恵器(5)
- 図版37 Jブロック出土須恵器(6)・土師器(1)
- 図版38 Jブロック出土土師器(2)
- 図版39 Jブロック出土土師器他(3)
- 図版40 Jブロック出土土師器(4)・
Lブロック出土須恵器(1)
- 図版41 Lブロック出土須恵器(2)
- 図版42 Lブロック出土須恵器(3)
- 図版43 Lブロック出土須恵器(4)
- 図版44 Lブロック出土須恵器(5)
- 図版45 Lブロック出土須恵器(6)
- 図版46 Lブロック出土土師器・
Mブロック出土須恵器(1)
- 図版47 Mブロック出土須恵器(2)
- 図版48 Mブロック出土土師器・
Pブロック出土須恵器(1)
- 図版49 Pブロック出土須恵器(2)
- 図版50 Pブロック出土須恵器(3)
- 図版51 Pブロック出土須恵器(4)・土師器
- 図版52 Pブロック出土須恵器(5)・
その他の遺構出土遺物(1)
- 図版53 その他の遺構出土遺物(2)
- 図版54 その他の遺構出土遺物(3)・
S G31河跡出土須恵器(1)
- 図版55 S G31河跡出土須恵器(2)
- 図版56 S G31河跡出土須恵器(3)
- 図版57 S G31河跡出土須恵器(4)
- 図版58 S G31河跡出土土師器(1)
- 図版59 S G31河跡出土土師器(2)
- 図版60 S G31河跡出土土師器(3)・
S G31捨て場出土須恵器(1)
- 図版61 S G31捨て場出土須恵器(2)・土師器(1)
- 図版62 S G31捨て場出土土師器(2)
- 図版63 S G31捨て場出土土師器(3)・
灰原出土須恵器重ね焼き
- 図版64 墨書き・ヘラ描き文字等集成
- 図版65 繩文土器・石器(1)
- 図版66 石器(2)
- 図版67 石器(3)
- 図版68 石器(4)
- 図版69 石器(5)
- 図版70 石器(6)
- 図版71 石器(7)
- 図版72 石器(8)
- 図版73 石器(9)・木製品

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

寒河江市の西部、平野山の東部斜面の中腹から裾部にかけては、多くの窯跡や須恵器・瓦の散布地が確認されており、これらを一括して「平野山古窯跡群」と呼称している。

平野山古窯跡の研究の歴史は古く、明治40年（1907）頃に寒河江市州崎の故菅井弥五平（邑岳）氏が、平野山の第1地点から蓮華文瓦の破片を発見したのに始まるという。その後、大正13年（1924）に弥五平の息子である菅井半五郎氏が、庄内の歴史研究家である阿部正己氏を平野山に案内して踏査を行った。同年6月に阿部氏は『考古学雑誌』第14巻第9号に「羽前国西村山郡平野山古窯址」と題する論文を発表し、その中で「庄内の城輪村の出羽国分寺址の瓦は、平野山の窯に於て製造されたり」と推定し、県内に大きな反響を呼んだ。阿部氏のこの立論によって平野山古窯跡は広く周知されるようになり、昭和2年（1927）には山形県の史蹟として指定を受け、その石碑が第12地点に建立されている。なお、平野山古窯跡で制作された瓦が、当時の国府であった城輪棚跡において屋根瓦として使用されたかどうかについては賛否両論がある。

戦後の昭和38・39年になって、寒河江高等学校郷土研究班の生徒達や山形大学の学生による表面採集調査が行われ、平野山とその周辺に13ヶ所（第1～13地点）の須恵器ないし瓦の窯跡や散布地が確認された。このうち第1地点を昭和40年に山形大学教育学部の柏倉亮吉研究室が、翌41年には第3地点を寒河江市教育委員会が主体となり、発掘調査を実施した。両年度の調査成果は、昭和45年に柏倉亮吉氏と伊藤（小野）忍氏によって『平野山古窯跡群－山形県における古代窯業遺跡の研究－』という報告書にまとめられ、以後の山形県内における須恵器研究の指針となった（文献2）。

その後昭和58年に、新農業構造改善事業の一環としての平野山農地造成工事に伴い、寒河江市教育委員会が新規発見の第14地点の発掘調査を実施した（文献8）。さらに、平成3年に、国道287号道路改良事業に伴い、山形県教育委員会が第12地点の発掘調査を実施した。この時の調査では、奈良時代から平安時代にかけての須恵器窯跡3基と竪穴住居跡6棟、縄文時代の陥し穴32基などが検出されている（文献19）。

平成元年度に東北横断自動車道酒田線建設工事が計画され、平野山古窯跡群第12地点が工事予定地に含まれることになった。山形県教育委員会では平成6年8月に本地点の試掘を伴う分布調査を行ったところ、第12地点のうち国道287号線南側を中心に奈良・平安時代の遺物が出土し、窯跡の灰原の可能性も予測された（文献24）。これをもとに同教育委員会が関係機関と遺跡の取り扱いについて協議をした結果、第12地点について記録保存のための発掘調査を実施することになったものである。平野山古窯跡群の第12地点としては、平成3年の山形県教育委員会による調査に続く第2次発掘調査となる。

発掘調査は日本道路公団仙台建設局の委託を受け、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は、平成7年8月21日から同年12月8日までの実質75日間である。

I 調査の経緯



遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 平野山古窯跡群 (●第12地点)	縄文・奈良～平安	19 日和田遺跡	縄文
2 富山遺跡	旧石器	20 西覚寺遺跡	旧石器
3 富山2遺跡	奈良～平安	21 富沢II遺跡	縄文・平安
4 木ノ沢橋跡	平安・中世	22 富沢I遺跡	縄文
5 金谷原遺跡	旧石器	23 白岩館跡	中世～近世
6 高松IV遺跡	平安	24 中谷沢遺跡	縄文
7 高松III遺跡	平安	25 上谷沢遺跡	縄文
8 高松II遺跡	縄文・奈良～平安・中世	26 瀬間山遺跡	縄文
9 高松I遺跡	縄文・平安	27 左沢城跡	南北朝～元和
10 落衣長者屋敷遺跡	縄文・奈良～平安・中世	28 下原遺跡	縄文
11 高瀬山遺跡群	旧石器～中世	29 小見遺跡	縄文
12 三条遺跡	縄文・弥生～平安・中世	30 藤田窯跡	平安
13 石田遺跡	縄文・弥生	31 藤田原遺跡	縄文
14 寒河江城跡	室町	32 向原遺跡	縄文
15 山岸遺跡	縄文	33 明神山遺跡	旧石器
16 石持原遺跡	縄文	34 うぐいす沢遺跡	縄文
17 柴橋蛇塚遺跡	縄文	35 柴橋遺跡	縄文
18 柴橋窯跡	平安	36 不動木遺跡	奈良～平安

第1図 遺跡位置図 (S=1:50,000)

2 調査の方法と経緯（図版1・2）

今回の発掘調査は、東西約200m・南北約300mの遺跡範囲のうち、東北横断自動車道酒田線の建設工事に係る4,700m²を調査対象範囲として実施した。

調査の地区割りは、遺跡の地形や調査の行程を配慮して、ほぼ東西に延びる農道の南側を南区とし、農道の北側については高台の部分を西区、湿地帯の低い部分を東区とした。

発掘調査は平成7年8月21日から開始した。まずバックホーを用いて表土や水田の盤を作る際に埋め立てられた土を剥ぎ取り、大型のキャリア・ダンプでその土を調査区外に運び出す作業を実施した。この重機械を用いた作業は、西区から始めて東区、南区という順序で行った。東区は深い湿地となっているため、重機械がぬかるみ、作業が難航した。

つぎに、重機械で表土を除去した所から、5m四方を1単位とするグリッドの基準杭を設定した。グリッドの基準は、Y軸を南北、X軸を東西方向にとり、第1象限で座標を表示した。各グリッドの名称はX軸のアルファベット記号を先に、Y軸の数字を後にして、例えばM-30グリッド(G)というように呼ぶ(第4・12図)。南北基準線(Y軸)の方位は、横断自動車道の中心杭に合わせたため、磁北に対して約56度西へ傾いている。

東北横断自動車道の工事日程との兼ね合いから、最初に自動車道の南側と北側の側道に係る部分の調査を行い、つぎに調査期間中の天候を考慮して湿地となっている東区の調査、最後に西区斜面にある灰原と同区高台の窯跡を含む遺構の調査を平行して実施した。

側道に係る部分の調査は8月28日から開始した。側道部分のうち南区は、泥炭層と砂礫層との境から須恵器などの遺物が多量に出土するため、包含層の掘り下げと遺構の精査を行った。ここからは河跡が検出され、その下層からは木製品や縄文時代の遺物も出土している。また東区は泥炭層の最下部から須恵器や縄文時代の遺物が少量出土している。側道に係る部分は、9月29日に関係者に対する説明会を実施のうえ、引き渡しを行っている。

東区本体の調査は10月2日から開始した。重機械による掘削後の面整理ののち、排水を兼ねたトレンチを数本入れたが、遺構はなく、遺物もほとんど出土しなかった。さらに、東区中央部に重機械による深掘り区を設定したが、ここでも同様な状況であり、湧水も生じてきただため、10月16日で調査を打ち切った。

西区の掘り下げおよび遺構検出・精査作業は9月29日から開始し、調査終了日までを要している。とくに西区東端の傾斜変換地が須恵器窯跡の灰原に当ったため、この部分の精査に多くの労力を要した。窯体や灰原は帶状に土を残し、土層を観察しながら掘り下げ、隨時写真や図面などによる記録を行った。出土した遺物は、遺構内のものは遺構の層位毎に、一括や復元可能なものは遺物番号を付して記録、取り上げを行っている。

西区の灰原が最深部で約2mと深かったことと不順な天候ため、当初の11月30日までの調査期間を12月8日まで延長して実施している。調査の終盤の12月5日には、遺跡全体の航空写真と、西区の遺構の図化を目的とした写真測量を委託業務によって行った。

なお、調査全体の成果について11月22日に第2回の調査説明会を実施し、約100名の方々の参加を得ている。

II 遺跡の概要

1 立地と自然環境

山形盆地の西縁で盆地がやや西に広がる部分がある。この辺りがさくらんぼの里として有名な寒河江市である。JR寒河江駅から約3キロほど西に向かうと、果樹に覆われた小丘陵平野山（標高274m）に突き当たる。その北側には寒河江川が、南側では県内を貫いて流れる最上川が大きく蛇行し東流している。県下屈指の須恵器生産地である平野山古窯跡群の大半は、この平野山南東麓のなだらかな傾斜面上（標高130～190m）に立地しているが、例外的に第12地点遺跡は南東端の山裾部分（標高110～117m）にある。地目は果樹畠と水田で、現在国道287号線が遺跡内を横切っている（第1図、図版1・2）。

山形大学の阿子島功教授が航空写真から読み取った最上川北岸の微地形（文献27）に明治28年測図の地形図を合成して（第2図）検討すると、平野山の南東部一帯の水田の旧地形は最上川の氾濫原で、小規模な旧河道や沼地が現在の水田面下に埋もれていることが見て取れる。本遺跡は平野山から続く河岸段丘面が南側に半島状に細長く突き出た突端にあたり、その南縁と東縁を流れている旧河道2条が今回の調査で確認されている。須恵器窯は低位段丘面と氾濫原との境目をなす小規模な段丘崖を利用して営まれている。また、本遺跡全体の概要図（第3図）の等高線でみた微地形から、工房施設は標高113m～117mの比較的平坦で窯にもほど近いところに置き、標高111～112mの傾斜変換帯や沢の小谷斜面を登窯に、その下の湿地部分を灰原に利用するといった企画性がうかがえる。第2次調査区の北東側にも登窯に適した同様の小崖が続いているため、まだ窯跡が遺存している可能性がある。

平野山一帯に奈良～平安時代を通じて連綿と登窯群が築かれた背景としてこの他、陶土となる良質の白色粘土層がこの近辺に堆積していること、燃料となるマツ・クヌギ・コナラ等が豊富であったらしいことなどが挙げられる。さらに、須恵器を搬出するのが舟運であれば、大河川に近接しているといった利便性も大きな要因と考えられる。

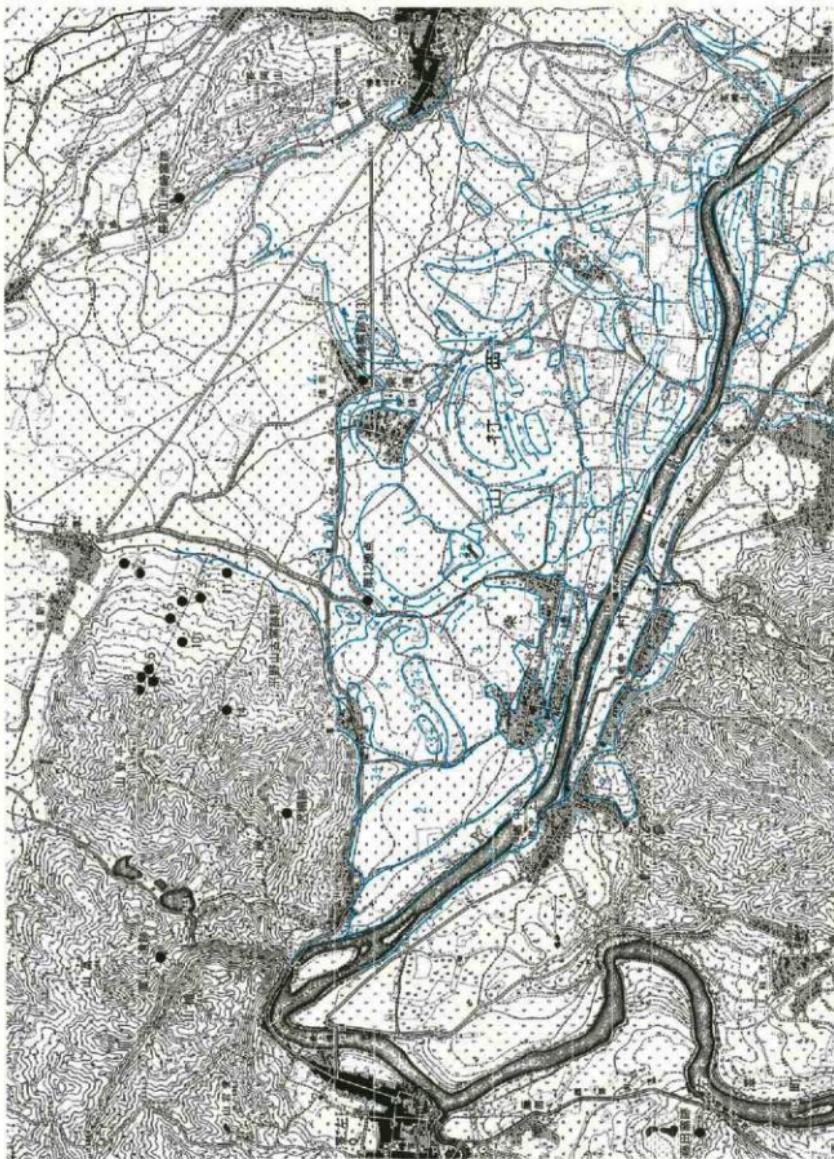
2 歴史的環境

当地は奈良時代「最上郡」に属していた。最上郡は靈亀2年（716年）に成立した「出羽国」に組み込まれた後、886年に「最上郡」と「村山郡」に分かれる。村山郡内には大山・長岡・村山・大倉・梁田・得有の六郷があったとされるが、最上川と寒河江川とに区切られた地域は「長岡郷」にあたるとみられる。ここ数年の高速道関連の大規模な発掘調査により、三条・落衣長者屋敷遺跡を含めた高瀬山遺跡群では8世紀中葉～9世紀末のムラの様相が明らかにされつつある。また、高瀬山の東側には条里制の地割りも見られるため、長岡郷の中心と考えられるこれらの集落一帯は、律令国家の方針に従って計画的に造られたものとみることが出来る。

村山郡内では須恵器窯跡は山形盆地丘陵の西縁側と東縁側の二つの地域にまとまっているが、平野山古窯跡群は「村山西部丘陵地域古窯跡群」に属し、これまで14ヶ所の窯跡又は須恵器散布地が確認されている（第2図）。このうちの第13地点は別名「柴橋窯跡」と呼ばれ、第12地

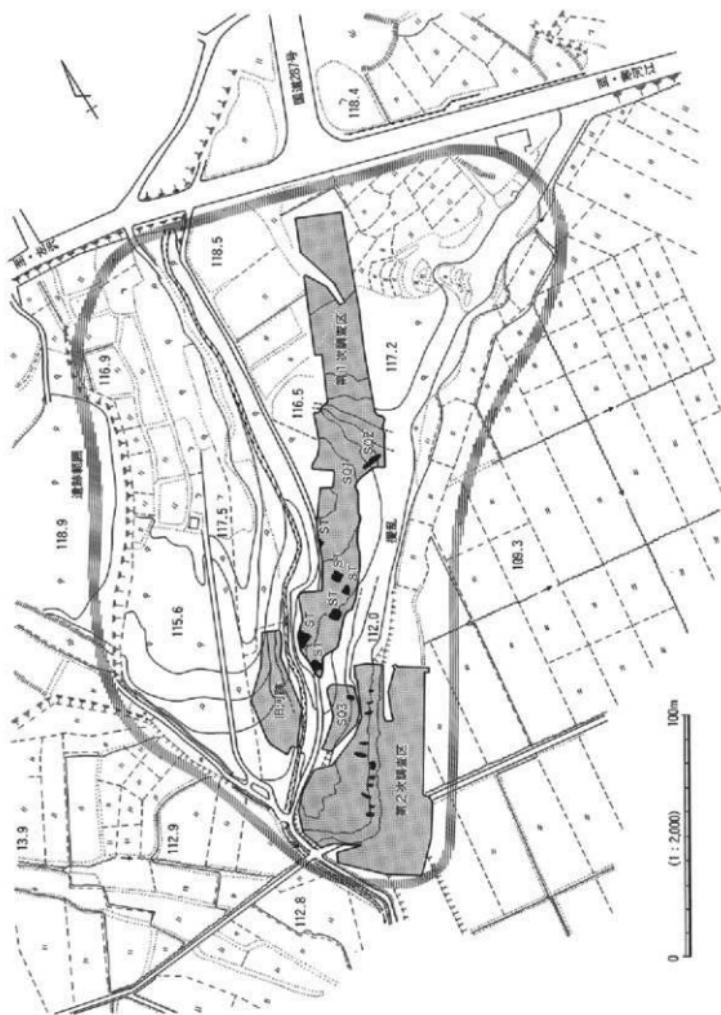
第2図 古墳群分布図 (S=1:25,000)

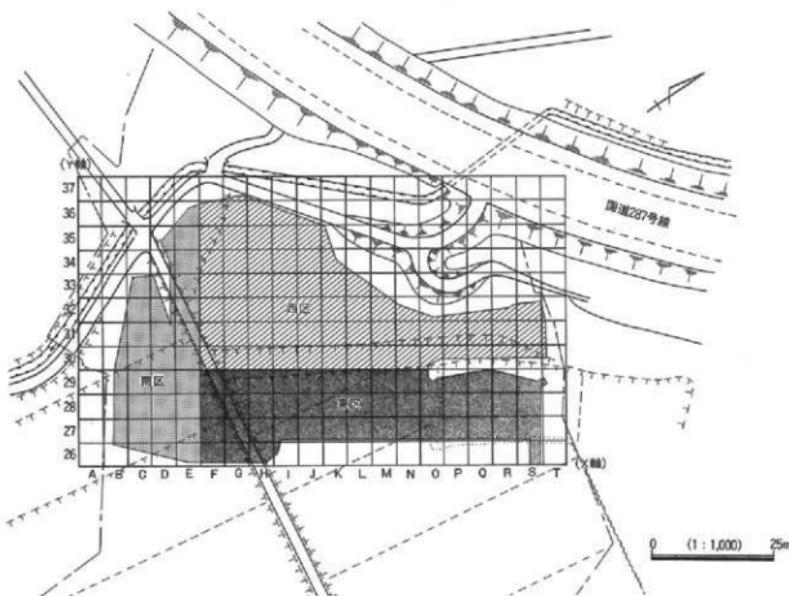
0: 沖洲周縁 1~3: 沖洲堤防 (+---はさらに掘分したもの) 4: 河川堤防 (X形27 P12-16)



II 進跡の概要

第3図 第12地点遺跡概要図





第4図 第2次調査区概要図

点遺跡と同様、河岸段丘と氾濫原の境界付近に立地していたようである。その北東にある長岡山北端東斜面の「長岡山洲崎窯跡」からは、8世紀前葉頃の須恵器有台環が採集された（第97図）。また、大江町藤田の「藤田窯跡」では3基の窯跡が検出され、10世紀中葉頃の須恵器环などが出土している（文献9）。

窯跡そのものではないが、富山の谷合に立地する富山2遺跡では、ロクロビットを持つ竪穴建物跡や愛知県猿投窯の原始灰釉陶器が見つかったことなどから、ほぼ9世紀代の須恵器工人の集落と考えられている（文献26）。この時期の遺跡が山間地に立地する例は少なく、平野山の南側の鏡山尾根上にある木ノ沢掘跡の9世紀代の竪穴住居跡も、平野山古窯群の須恵器工人と何らかの関連があるものと思われる。

3 遺跡の層序（第5図・図版1）

第2次調査区は河岸段丘と氾濫原の境目に位置する。基本層序はI～VIの6層に分けられる。第5図は西・東・南区のそれぞれを代表するものである。以下形成された順に述べる。

西区にのみ認められるVI層はいわゆる地山で、段丘を形成している地層である。西区内では粗砂を主に東端では疊層もみられ、水はけのよい安定した地盤である。部分的に白色粘土層が露頭する。奈良～平安時代の窯跡や土坑、1次調査の縄文時代の陥し穴などの遺構はこのVI層を掘り込んで造られているが、後世の畑作のためにかなりの部分が削平を受けていた。

V層は最上川の氾濫により運ばれてきた土砂の堆積土層で、疊混じりの粗砂と黒色泥質粘土とが分厚い互層を成して南区と東区に広がる。砂礫層が氾濫時の旧河道と思われる。河の氾濫は幾度となく繰りかえされたと考えられるが、第2図での切り合いから見て、西から流れ込むS G31の方が南から流れ込む旧河道よりも早く出来たようである。重機で一部掘り下げたところ、上面より約2m下の黒色泥質粘土から白樺のような表皮の付いた流木や松かさなどの自然遺物が出土した。縄文時代の遺構や遺物はこのV層上面にあたる。S G31が大氾濫した後、縄文時代のある時期には河底が露出し、川は細い流れになっていたようである。縄文人はその水辺を利用し、何らかの生産活動を行っていたものと思われる。

IV層は標高約112m以下の低い部分に広がる水成堆積の黒色泥質粘土で、形成当時は湿地であったと見られる。奈良～平安時代の遺物を包含する。このIV層はシダ類らしき植物遺存体や風倒木が挟まつた間層（洪水で一気に埋ったもの）2枚によってさらに3層に細分することが出来る。最も古いIV-3層中には遺物はほとんど見られない。IV-2層は8世紀中葉～9世紀後半の須恵器・土師器を大量に含む。灰原の覆土はこの層中にあるため、窯が操業していたのはこのIV-2層が形成されつつあった時期と考えられる。IV-1層は南区のS G31の洪水に関連するものとみられ、遺物から見て9世紀後半頃と思われる。概観すると、東区内の旧河道が淀んでシダなどの植物が生えていた頃、段丘斜面に登窯が築かれ始め、灰や焼き損じの須恵器は湿地部分（IV-2層）へ投げ捨てられて、灰原が厚く堆積していく。洪水に見舞われたのは、窯の操業前と終わりに近い時期にあたるものと思われる。

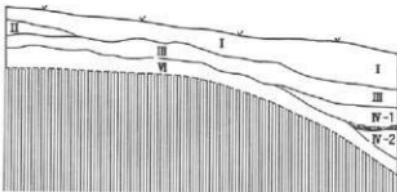
III層は砂層で、遺構は認められない。II層は田・畑の旧耕作土で、I層が現表土である。

H=112.00m

西区

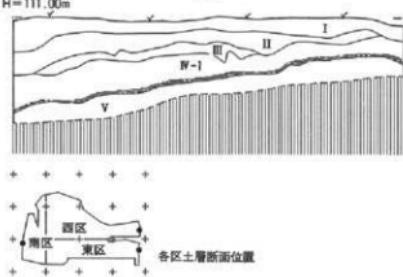
基本層序	
I	7.5Y R4/2 黄褐色
	10Y R2/3 黒褐色
II	10Y R3/2 暗褐色
	10Y R4/2 深褐色
W-1	10G Y4/1 砂質灰色
W-2	10Y R2/1 黒色
W-3	10Y R1.7/1 黑色
Y	10Y R5/6 黄褐色
10G Y6/1 オリーブ灰色	
W-4	2.5Y G2/2 深褐色

備考、他の耕作土(西区)
Ⅲ層、水田耕作土(東・南区) 勾配ややあり
Ⅳ-1 層、しづらってい 田耕作土・未脫水の炭化物をやや含む
Ⅳ-2 層、砂質粘土上、ワック状に砂質の強い窯所と瓦質の窯所が混じる
Ⅳ-3 層、瓦質の窯所を含む、瓦質の窯所が混じる
W-1 層、灰原を含む
W-2 層、W-3 層上の層に植物の根茎質が大量に堆積する
此此質は遺物を含む、粒子細い、粒子細小でめりがある
区において、W-3層との間にびっしりと植物遺存体が詰まっている
(頭的ながりきをもつ)、根茎木の根茎のレベルでもある
此炭質/植物質 しまり良い、べたべたする、極端な炭化質で水分子を多く含む
W-4 層、W-3層上の層の根茎質
10G Y6/1 オリーブ灰色 窯土層は細かく、下層に壁タイル部がグリメ化している
砂質、粘土質、細砂、火山・西区ではこの層を掘り込んで遺構が作
られている。部分的に白っぽい、均質な粘土あり



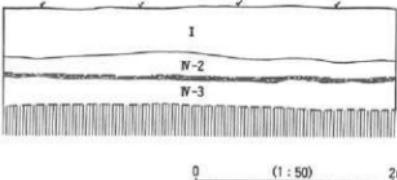
H=111.00m

南区



H=111.00m

東区



第5図 基本層序

III 検出遺構

第2次調査で検出された遺構はほとんどが西区に集中する。主な遺構は奈良～平安時代の窯跡12基とこれに付随し東区まで広がる灰原帯、粘土貯蔵穴1基、ロクロピット3基、土器埋設遺構1基、性格不明の石組遺構1基である。その他焼土を伴う土坑・粘土の採掘坑と思われる土坑、時期の不明な歴跡・溝跡・小ピットなど検出されている。これに対し南区は旧河道域である。西から流れていた旧河道（S G31河跡）と南から流れてきた旧河道とが切り合っている。S G31内の河岸には平安時代の土器捨て場が、また河底の上面からは縄文時代の石組炉が見つかった。南旧河道底の自然の落ち込み部分からは縄文時代の石器ツールが出土している（第20図）。東区は旧河道が淀んだ湿地帯にあたり北東へ行くほど深くなる。ここでは遺構は確認されていないが、V層を掘り下げたトレンチ内で縄文時代の石器剝片の集中する箇所が見つかっている。

1 西区

(1) 窯跡（図版3～7）

今回検出された窯跡は12基すべてが湿地にのぞむ小崖の南東斜面に位置する。南北約60mの内に5m以下の間隔で並び、VI層の砂礫層を掘込んで造られている。窯跡同士の重複関係はない。しかし後世に削平や擾乱・土砂の流出などを受け、窯の遺存状態はよくない。窯は小崖の傾斜変換点（標高約112m）に、等高線とほぼ直交するかやや北寄りに傾いて造られている。窯壁が確認出来たのはSQ1・33の2基のみである。北部にあるSQ4・5・9の西側は旧地形では斜面が続いており、第1次調査でSQ3が確認された場所と地続きである。中央部のSQ1と46は傾斜変換点よりもやや高い所に位置するため、削平されている割合が大きい。南部にあるSQ40～SQ45では遺存しているのはVI層を掘りくぼめた痕跡のみで、西区小崖面に黒いプランが並んでいる様子が遠景で確認出来た。

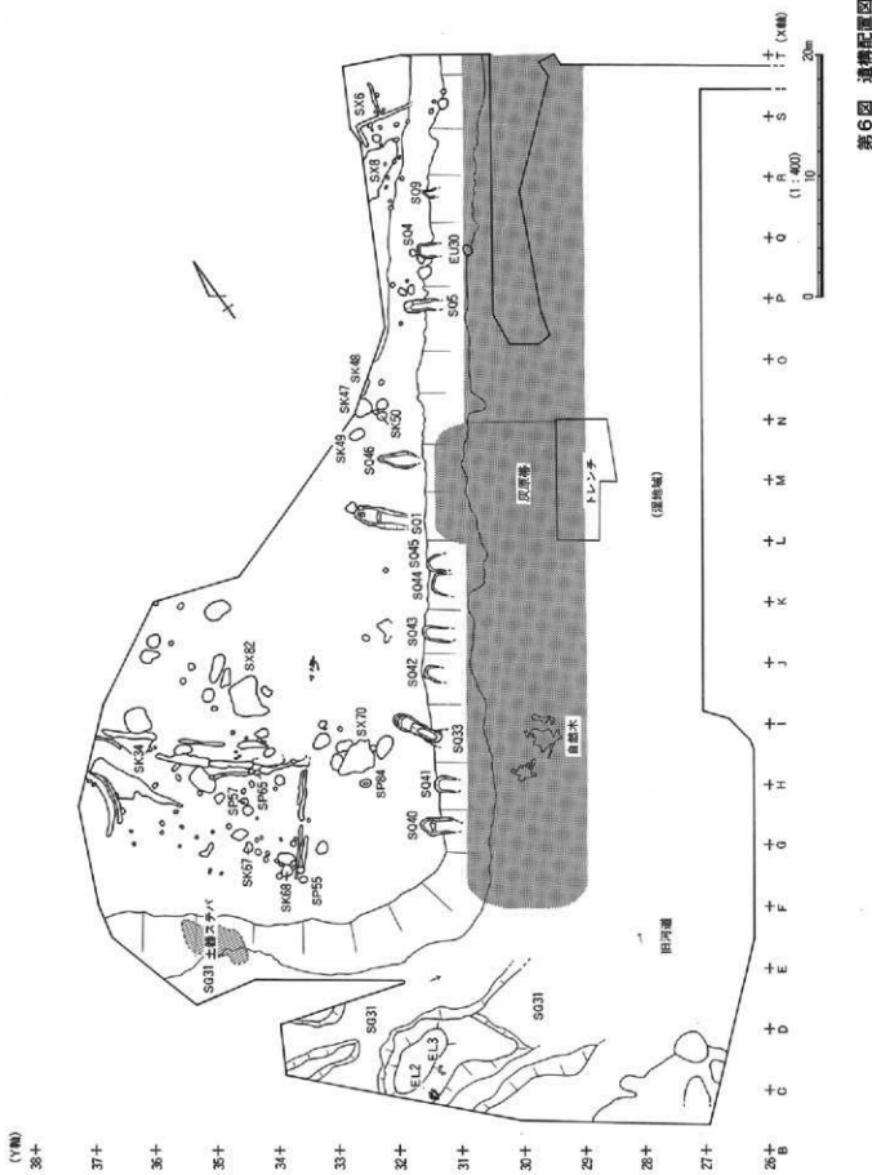
以下、窯体内から遺物が出土した窯跡について述べる。

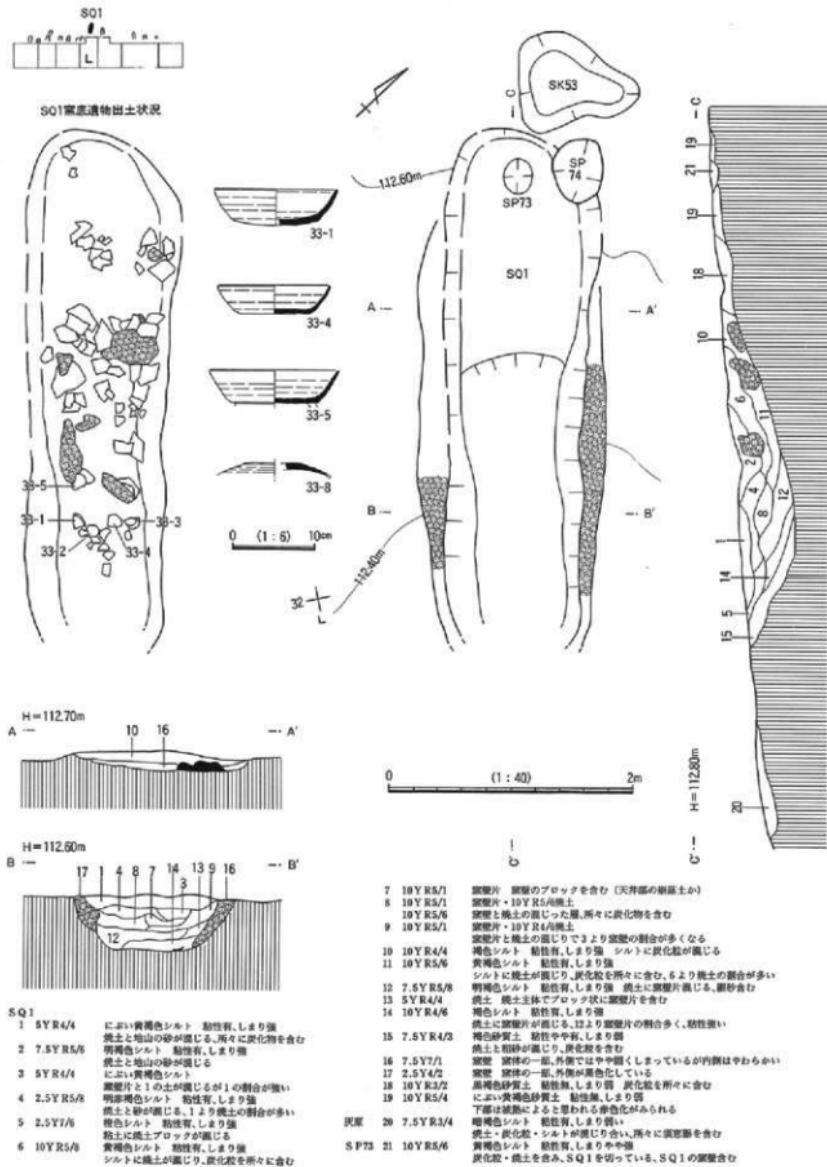
SQ1（第7図、図版4）

L-31・32グリッド内に位置し、地山をやや掘りくぼめて構築した半地下式無階無段登窯と思われる。天井部や煙道部など上部のかなりの部分がすでに削平を受け、窯壁の一部・床面構造がかろうじて残っている状態である。焼成部の中央も後世の水路で壊されている。平面形は細長い砲弾形で、焚口から焼成部まであまり幅の変化が見られない。水平残長は4.30m、最大幅は焚口1.27m・燃焼部1.46m・焼成部1.51mである。排水溝などの窯に付帯する設備は確認されなかった。SK53・SP73・74に切られているが、SQ1との関連は不明である。中軸線の方位はN-45°-Wである。

側壁残高は最長で47cm、焼成部の一部分にのみ窯体が遺存する。しかし後世にやや動いたものと思われ、考古地磁気の測定は出来なかった。壁厚は10～23cm程度で、スサ入り粘土が還元焼成を受けて暗青灰色に堅く焼きしまっている。壁の工具痕などは検出されなかった。

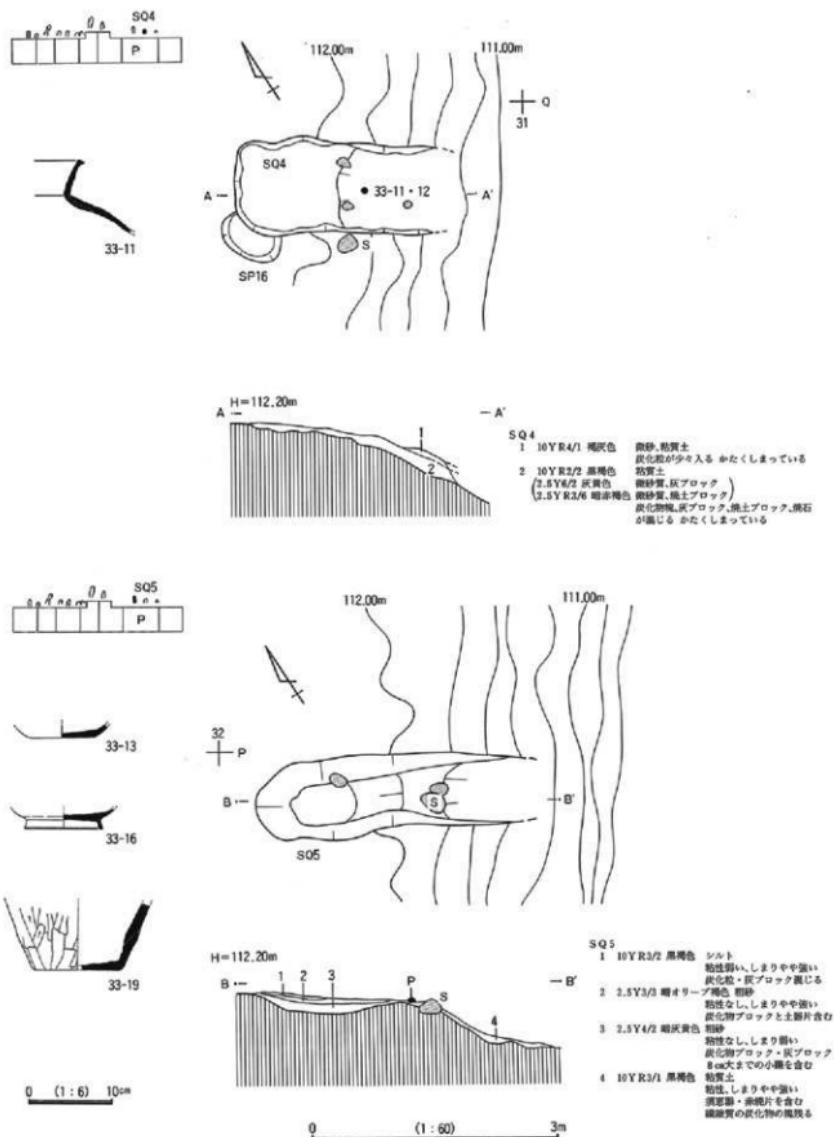
III 検出遺構





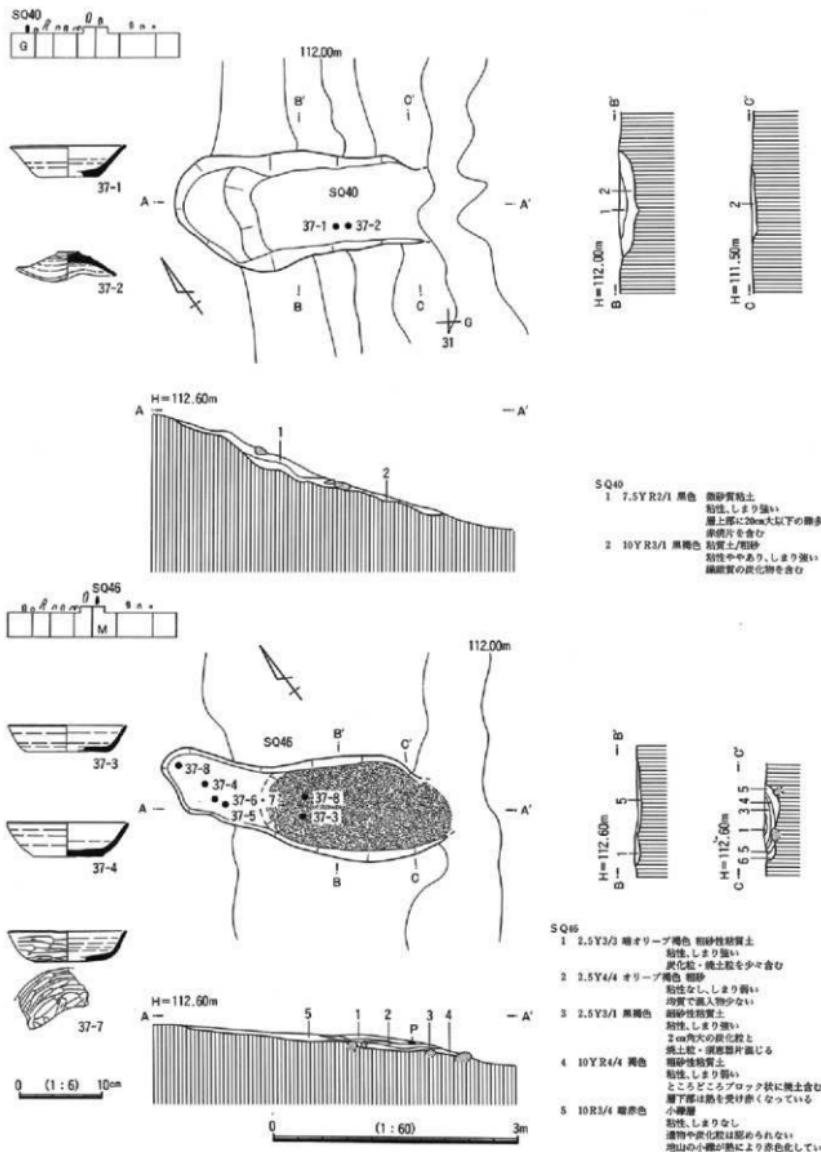
第7図 SQ1竪跡

III 换出遺構



第8図 SQ4・5窓跡

III 検出遺構



第9図 S Q40・46窓跡

窯底の状態は良くない。遺存する床面は堅くなく、ほぼ平坦でなだらかに傾斜する。焼成部での勾配は約18度であった。床に掘込みやピットなどは見られない。覆土には大量の焼土・灰・窯体片、そして炭化物の薄い層がみられる。しかし底面および覆土などの観察からは窯の操業回数等の情報は得られなかった。地山のVI層は砂礫層であるが、このS Q 1は比較的粗砂の多い軟弱な地盤の上に構築されているため、繰り返しの使用に耐えられたかどうか不明である。

遺物は床面からの出土がほとんどで整理箱に4箱分である。焼成部の傾斜変換点やや奥寄りに、須恵器の环が7点まとめて出土した。このうちの1点は焼台として使用されている。より煙道に近い方には大型甕の体部破片が散布していた。甕にはスサ入り粘土塊や灰が付着しており、焼き損じとして窯内部に残されたか、あるいは焼台に使用されたものと見られる。

S Q 33 (第10図、図版5)

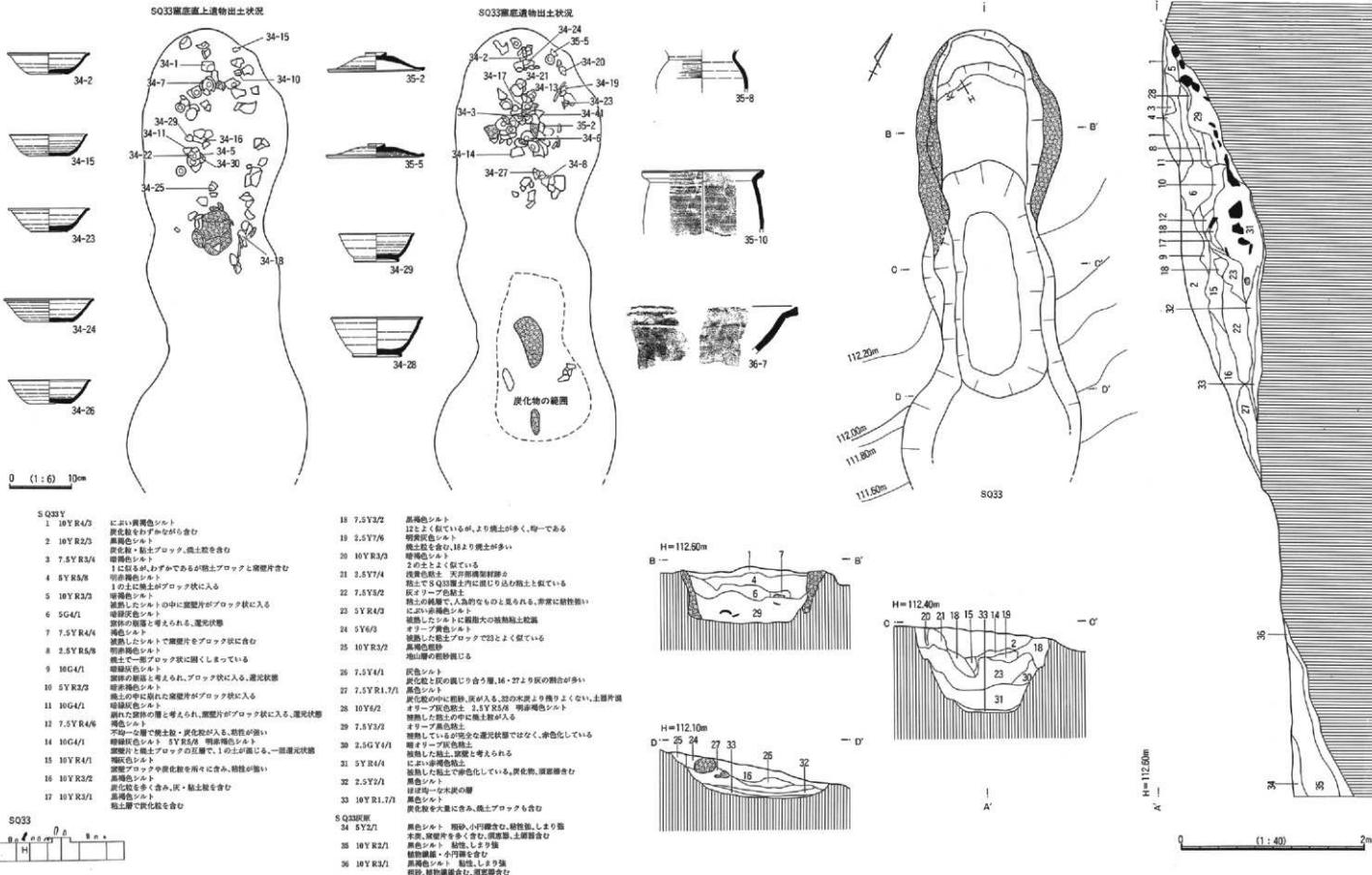
H・I-31・32グリッド内に位置する。ロクロピット・粘土を採掘した跡と思われる遺構が西に隣接する。地山の比較的堅い部分を深く掘りくぼめて構築された半地下式無階無段登窯である。中央部がややすぼまつひょうたん型をしていること、中軸線がN-32°-Wと等高線に対しかなり北に振れていることなど、他の窯跡とはやや様相を異にする。規模は水平残長4.53mで、幅は焚口1.70m・燃焼部1.42m・焼成部1.58mを測る。煙道部・天井部は削平されているが12基の窯跡の中では最も遺存状態がよい。重複する遺構や付帯施設などは確認されない。床面は焚口から燃焼部までほぼ平坦で、焼成部との境目から約25度の角度での立ち上がりが見られた。窯底の傾斜変換点近辺にわずかな窪みが観察された。横断面形は燃焼部・焼成部共に逆台形を呈する。燃焼部東壁側の細長い凹みは、天井部の構架材を突き刺した跡である可能性が考えられる。

側壁は最も深い傾斜変換点付近で0.92mあり、焼成部入り口から奥の部分にかけてスサ入り粘土で塗り固められた窯壁が比較的よく残っている。一部ドーム状に天井部へと続くふくらみもみられる。考古地磁気年代測定ではAD 890±90と、遺物年代観と大むね合致した結果が出ている(付図1)。焚口側から焼成部を見上げると比較的せまく、一度に焼成出来る須恵器の量はさほど多くはなかったものと推定される。

焚口付近の覆土には炭化物と焼土が多量に見られた。燃焼部・焼成部覆土中には焼土・灰・スサ入り粘土塊が大量に含まれる。出土遺物数が多いため數度に分けて遺物の取り上げを行ったが、ほとんどが床面出土のものである。覆土の観察や灰がこびりついた遺物も混じっていることなどから、操業時に天井部が崩落したため、須恵器を全部は取りだせないまま窯を放棄したものと見られ、遺物はほぼ元の位置を保っていると思われる。焼成部の焚口により近い方に甕類、煙道側に環類が多く分布しており、窯詰めの状態がある程度は推定できる。また覆土内から器形が土師器で還元焰焼成の甕と鍋が出土したが、焼き台として使われたものかと思われる。遺物は整理箱で9箱分出土した。

S Q 4 (第8図、図版6)

P-31グリッドに位置し、平面形は角の丸い長方形に近い。検出した時点では小崖斜面にへばりつくように炭化物・焼石・遺物がみられたが、遺存状態が極めて悪く底面の一部しか残っ



第10図 S Q33竪跡

ていない。被熱している部分は確認出来なかった。燃焼部・焼成部などの判別は出来ない。規模は残長1.71m、幅は最大で1.19m、中軸線の方向はN-54°-W、全体的になだらかに傾斜している。深さは19cmのみ残っており、覆土はかろうじて2層に分けられる。S P 16と重複している。遺物は少なく薄手の須恵器甕の口縁部と体部が覆土の2層から見つかった。

S Q 5 (第8図、図版6)

S Q 4 同様底部のみの遺存で、検出時は全体的に繊維質の炭化物が散布していた。O-31グリッド内でS Q 4 の隣りにある。平面形は細長く、残長は2.94m・幅1.02mである。中軸線の方向はN-59°-Wで、重複する遺構はない。断面形から見ても焚口・燃焼部・焼成部の判別はつけ難いが、西側でわずかに窪んでいる。中央部のやや高まった部分に20~30cm大の礫が数点あり、その内側に遺物が見られる。須恵器の环と甕底部など数点出土した。

S Q 40 (第9図、図版6)

12基の窯跡の南端にあたりG-31グリッド内に位置する。平面は砲弾形を呈している。中軸線の方向はN-54°-Wで、残長は3m・最大幅1.40m・深さ31cm、傾斜角度は約22度である。床面すら残っていない状態で、焚き口・燃焼部・焼成部などの分類は出来ない。覆土はIV層の黒色粘質土とよく似ている。明確な焼土や被熱部分などは認められないが、繊維質の炭化物を含む。遺物は覆土2層より須恵器の环と蓋が出土している。

S Q 46 (第9図、図版6)

S Q 1 同様、標高112mラインより上の平坦部に位置する、細かい礫層の上に築かれている。グリッドはM-31・32である。約3m北側に粘土貯蔵穴と思われるS K 50などがある。平面形は細長い不整形で、残長は2.42m・最大幅1.24m・深さ11cmと遺存状態は極めて悪く、床面が赤く堅く焼けているのは窯底下的地山が被熱した部分と思われる。中軸線の方向はN-58°-Wで、傾斜角度は約5度であった。遺物はほとんどが西側の覆土5層から出土した。

(2) 灰原帯 (第11~14図、図版8~11)

12基の窯跡列の東側斜面下に沿ってひろがる。奈良~平安時代の須恵器・土師器の焼き損じ、ザクザクとした大きめの炭化物・灰・焼土、そして窯壁片を大量に包含する灰原である。

窯のある斜面(VI層)および湿地の縁辺部(下からV層・IV-3層)ではIV-2層が徐々に堆積しつつある時期で、そこに各窯跡の焚き口から搔き捨てられた灰や焼土・遺物がそれぞれレンズ状に堆積していき、長年の操業期間中にそれらがつながってしまったものとみられる。

平面的にみると、西・東区双方にまたがるF~R-29・30グリッド内で東西約10m×南北約70m程の細長い帶状をしている。S Q 1・46付近の凸部を加えると面積は約725m²に及ぶ。

層位的には、東西縦断面では灰原覆土は最厚部で平均約60cmある。全体的に標高111.20~111.40m辺りで上部が削平されていた。南北横断面は調査行程の都合上G~Mグリッド内のY軸30グリッドの中央ライン35mを実測したが、土層の線引きは現地調査時点ではっきりと掘めない部分もあったため、それぞれの層に含まれる遺物の型式学的な年代も加味している。

この灰原から出土した須恵器・土師器は第2次調査の出土遺物数量の大半を占めている。遺物の主なものは登録(RP)番号をつけて取り上げたが、数が多いため登録しきれなかったも

III 検出遺構

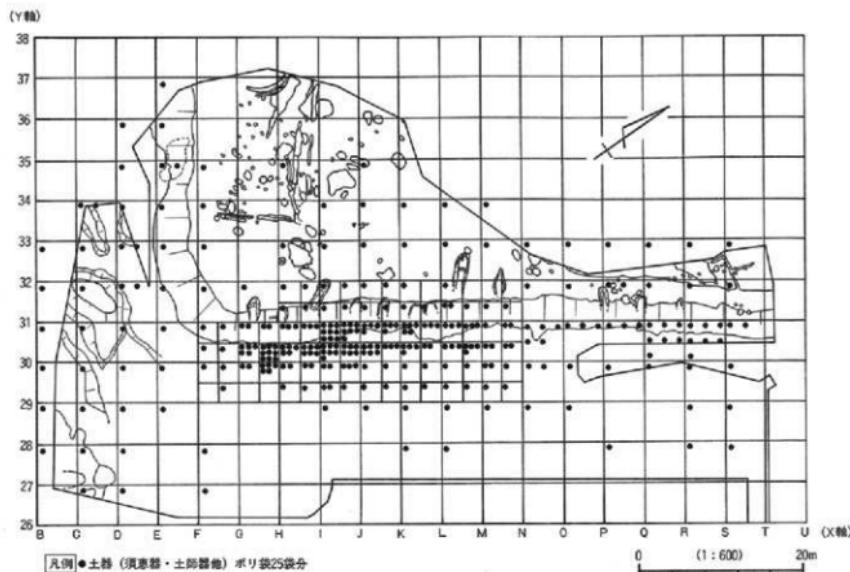
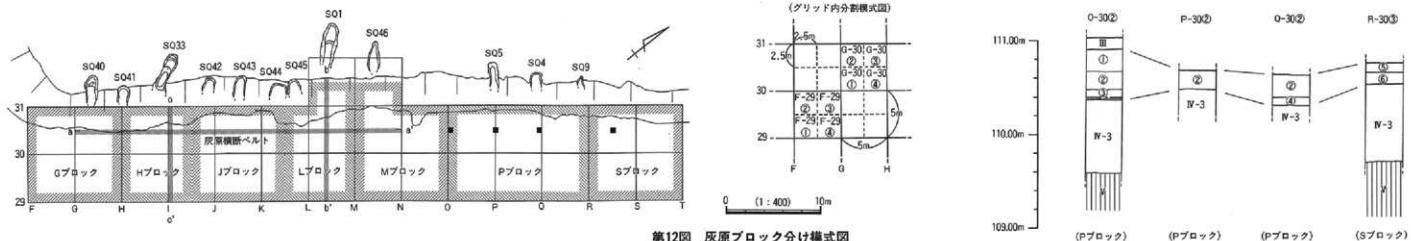


表1 窯跡計測表 第11図 グリット別土器出土量図

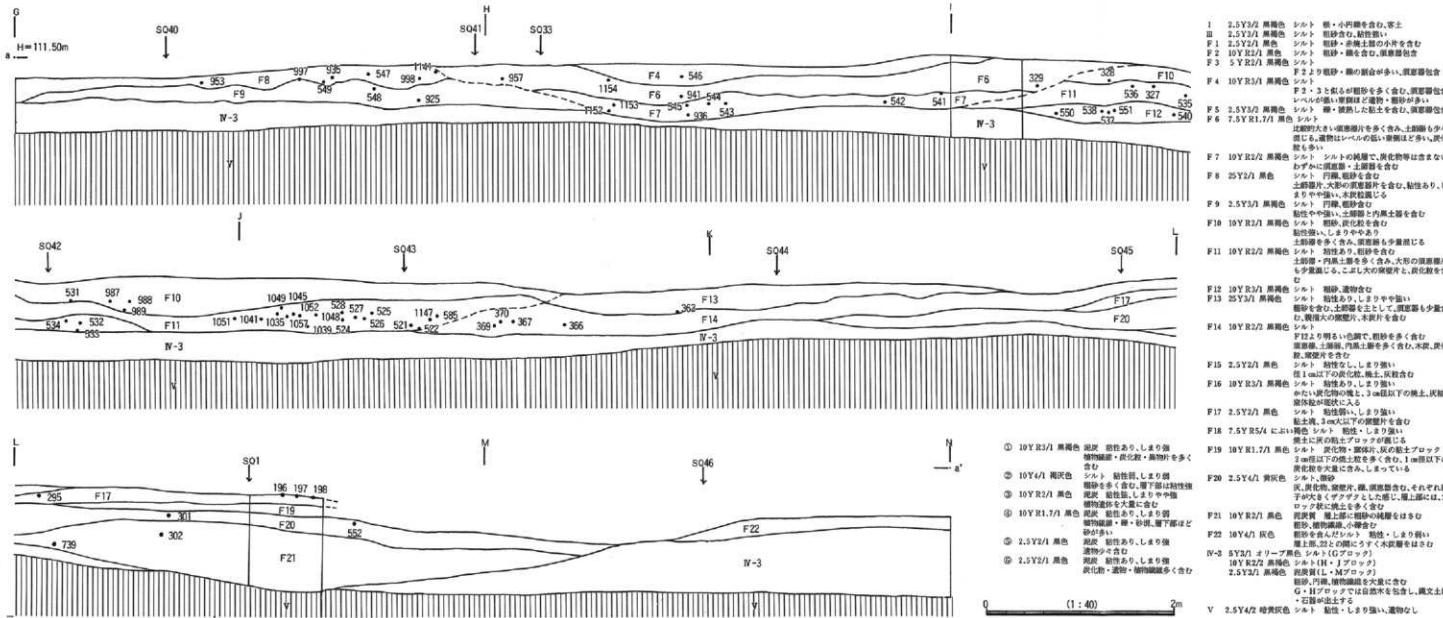
遺構番号	検出地区	中軸方向(°)	全長(m) (水平残長)	最大幅(m)	壁高(m)	勾配(°) (焼成部)	遺存状態	灰原 プロフ	掲回頁	遺物掲回番号	
S Q 1	L - 32 - 33	N - 45° - W	4.30	1.27 : 1.46 : 1.51	0.47	18	△	L	P 11	33 - 1 ~ 10	
S Q 4	P - 31	N - 54° - W	1.71	- : 1.19	-	0.19	20	△	P	P 12	33 - 11 ~ 12
S Q 5	O - 31	N - 59° - W	2.94	- : 1.02	-	0.13	21	△	P	P 12	33 - 13 ~ 15 ~ 16 ~ 19
S Q 40	G - 31	N - 54° - W	3.00	- : 1.40	-	0.31	22	△	G	P 13	37 - 1 ~ 2
S Q 46	M - 31 - 32	N - 58° - W	2.42	- : 1.24	-	0.11	5	△	M	P 13	37 - 3 ~ 8
S Q 33	H - I - 31 - 32	N - 32° - W	4.53	1.70 : 1.42 : 1.58	0.92	25	○	H	P 15 - 16	34 - 1 ~ 36 - 7	
S Q 9	Q - 31	N - 61° - W	0.97	- : 0.58	-	-	×	P	-	33 - 14 ~ 17 ~ 18	
S Q 41	G - H - 31	N - 51° - W	1.85	- : 1.22	-	0.10	16	×	G	-	-
S Q 42	I - 31	N - 39° - W	1.12	- : 1.13	-	0.08	19	×	J	-	-
S Q 43	J - 31	N - 46° - W	1.90	- : 1.12	-	0.14	21	×	J	-	-
S Q 44	K - 31	N - 43° - W	1.05	- : 1.75	-	0.24	18	×	J	-	-
S Q 45	K - 31	N - 68° - W	1.13	- : 1.34	-	0.28	20	×	J	-	-

表2 遺構計測表

遺構番号	検出地区	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考	掲回頁
E U 30	西区 P - 30	0.94	-	0.09	平面橢円形 壁・环同士の合口	P 24
S K 50	西区 M - N - 32	0.81	0.70	0.37	-	P 24
S P 57	西区 G - 34	0.59	0.50	0.32	クロビットカ 石組	P 24
S P 65	西区 H - 34	0.49	0.49	0.29	クロビットカ 石組	P 24
S P 84	西区 G - H - 32	0.84	0.62	0.79	クロビットカ	P 24
S X 6	西区 R - S - 31 - 32	4.78	2.75	-	石組遺構	P 25
S G 31	南区 B - E - 28 ~ 36	50.00	18.60	0.92	西から流れる旧河道	P 26
E L 2	南区 B - 31 (S G 31)	1.03	0.62	-	石組炉・中央部被熱	P 28
E L 3	南区 C - 31 (S G 31)	0.65	-	-	石組炉・抜取痕不明	P 28
S K 67	西区 F - 34	0.64	0.40	0.15	焼土遺構	-
S K 68	西区 F - 33	1.08	0.78	0.18	焼土遺構	-
S X 70	西区 H - 32	3.72	2.55	0.22	粘土探査坑	-

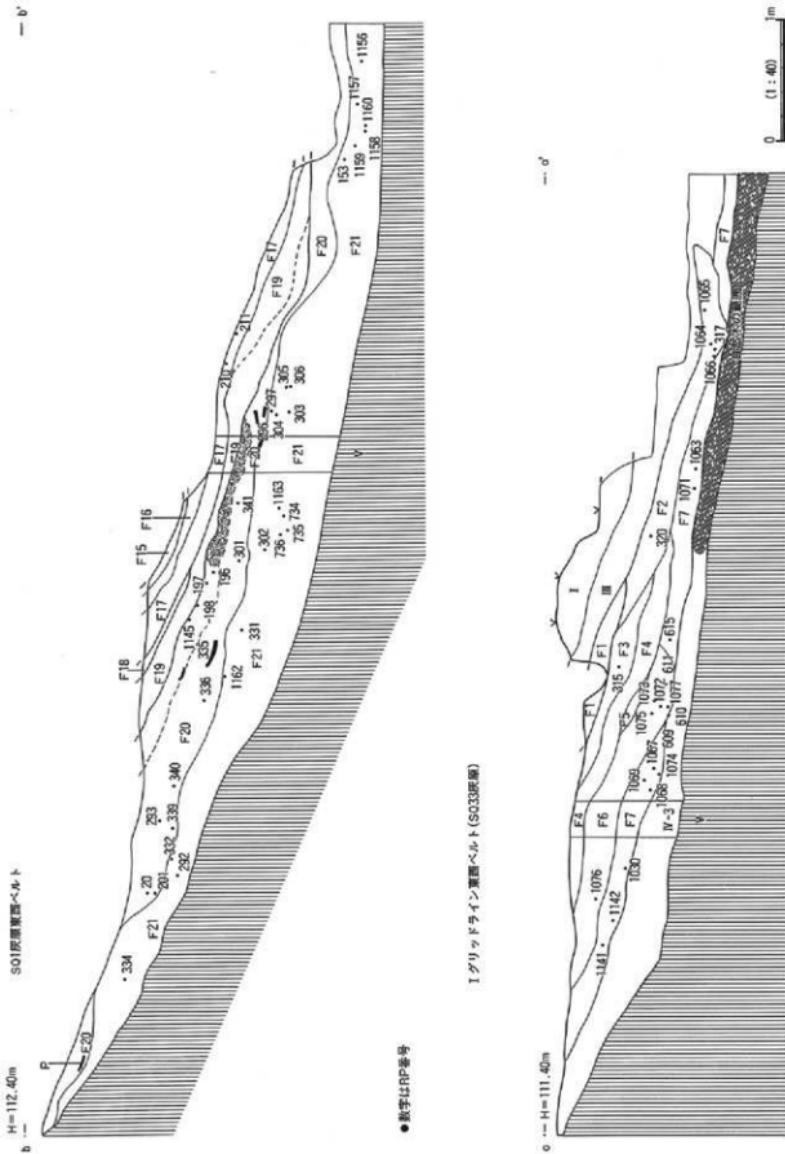


第12図 灰原プロック分け模式図



第13図 斜面横断面土壁図

第14圖 灰原綫斷面圖



のは5mグリッドを4分の1に細分し、2.5m四方の単位で取り上げを行っている（第12図）。遺物では須恵器が圧倒的に多く、そのほとんどが亀裂・ゆがみ・火膨れ・癪着などの見られる破損品である。部分的に土師器もかなり含まれており、特に壊が多い。黒色土器がまとまって出土した箇所もあり、窯の性格を探る上で見逃がせないものと考えられる。

今回の調査では残念ながら灰原の広がりを平面かつ断面的にきちんと把握することが出来なかつた。その理由として灰原の覆土がIV層泥炭中にあって土質がIV層と非常に似かよっているために面的な広がりとして捉えるのが非常に困難だったこと、それぞれの窯が近接しており灰原同士の切り合いが甚だしかったこと、覆土・IV層共にかなり軟弱で、地下水浸透による斜面の崩落や、遺物の沈み込みも見られたことなどが挙げられる。

そこで次善の策として、代表する窯を基準に灰原をブロック化して検討し、そこから何か見えてくるものがないか探ることにした。まず窯跡自体もしっかりと置いて灰原の分布が比較的捉えやすかったSQ1とSQ33を抜き出し、灰原の分布を便宜上グリッドの区切りによってブロック化した。これによりSQ1・SQ33灰原の両脇のブロックが分断される。ブロック名はそれぞれの中心を成すグリッド名から取った。灰原と対応する窯跡はGブロック（SQ40・41）／H（SQ33）／J（SQ42～45）／L（SQ1）／M（SQ46）となる。その北のP・S（SQ4・5・9）ブロックは、工事の行程上先行して調査したためにG～Mブロックのような通し断面は取っていないが、土層や登録遺物の分布状況から同様のブロック分けが出来ると判断した。各ブロック毎の特徴をあげるとGブロックは比較的層が薄く、Hブロックでは焚き口に向かって右下斜面上に比較的遺物が集中している。Jブロックはさらに南と北に別けられる可能性があり、特に南側から土師器の無台环がまとまって出土した。しかしここは窯との明確な対応関係は見られず、むしろHとLの緩衝地帯の様相を呈する。Lブロックは面積・深さとも最も規模が大きく、焼土や窯体片も分厚く堆積しているため堅い。Mブロック内の66-8は遺物の希薄部に直立して見つかった須恵器の大壺で、この中から須恵器の壊（65-1）と壺の頸部（66-7）も出土した。掘り方などは確認されなかつたが、何らかの意図によってここに据えられた可能性がある。P・Sブロックでは現水田の用水路を確保しておく必要性があつたために、灰原の一部が調査出来なかつた。Sブロックでは対応する窯跡が見られないのに他ブロックと同じ密度で遺物が出土していることから、近辺にまだ未確認の窯跡の存在する可能性も考えられる。

なお、巻末の付図は登録した遺物（RP）の分布状況を各灰原ブロックのまとまり毎にくくつたものである。

(3) その他の遺構

須恵器生産に関連する遺構としては、ロクロピットと思われる石組のピットと粘土塊が出土した土坑があげられる。また粘土探掘坑の可能性も考えられる不整形の土坑、覆土に焼土を伴う土坑など、工房との関連を思わせる遺構もあるが確証は得られなかつた。ピットは多数見つかったが、掘立柱建物跡を構成すると思われるものは確認できなかつた。他に土坑、溝跡、畝跡、風倒木痕などがある。また、縄文時代の石器が出土した遺構も認められる。

E U30埋設遺構（第15図、図版12）

西区北側のP-30に位置する。標高約110.5m、段丘の傾斜変換点からやや下った湿地に位置し、S Q 4の中軸ベルト上で見つかった。灰原上面を掘込んで土器を埋設している。上部は削平され東西94cm、深さ9cmのみが確認された。土坑のほぼ中央にロクロ土師器の壺が2点（72-3・4）、その北西側に隣り合わせて須恵器と土師器の壺2点（72-1・2）が、それぞれ口縁部を合わせた横位の「合口」状態で埋設されていた。壺の方はどちらもつぶれた状態で見つかっている。

甕棺の可能性も考え、壺と甕内部の土壤分析を行ったが、人骨およびリン酸は検出されなかった。段丘縁辺部の湿地内に単独で出土したことから、むしろ何らかの祭祀的遺構の可能性のほうが高いと思われる。

S K50（第15図、図版13）

西区中央M・N-32に位置する。東向きの小段差を利用して造られている。規模は81×70cm、深さ37cmの小規模な土坑である。断面形は2段状、西側に一部袋状に掘込まれた箇所がみられる。土坑底面の一一番奥から径20~30cm程の粘土塊2点が出土し、その上部には礫2点があった。覆土からは土師器片が出土した。この粘土塊は黄灰色で堅くしまっているが、爪で押すと圧痕がつくぐらいの堅さである。採取した粘土を手頃な大きさにまとめて貯蔵していた可能性が考えられる。この周辺にはS K50とよく似た形態を持つ土坑が數基隣接しており、それぞれの覆土中からは粘土塊などは発見されなかったものの、同様の機能を持っていたと考えられる。

S P57・65・84（第15図、図版13）

西区南側に位置する。3基とも中央に小さく深いピットがあり、2段になった断面形を示す。S P57はG-34にあり規模59×50cmのほぼ円形を呈する。一段下がったところに約6~12cm内外の円礫8点が中央ピットを取り囲むように組まれている。径9cmのピットはほぼ垂直に落ち込んでおり、深さは32cmある。ピット底部分は概して堅くしまっている。

S P65はH-34に位置し、S P57同様、内部に約6~17cmの円礫を組んだピットである。規模は径49cmとやや小ぶりで、ほぼ円形を呈する。内部中央ピット径12cm、深さは29cmである。この2基の石組のピットは2.6mの間隔を持ち、どちらも覆土に土師器小片を含む。

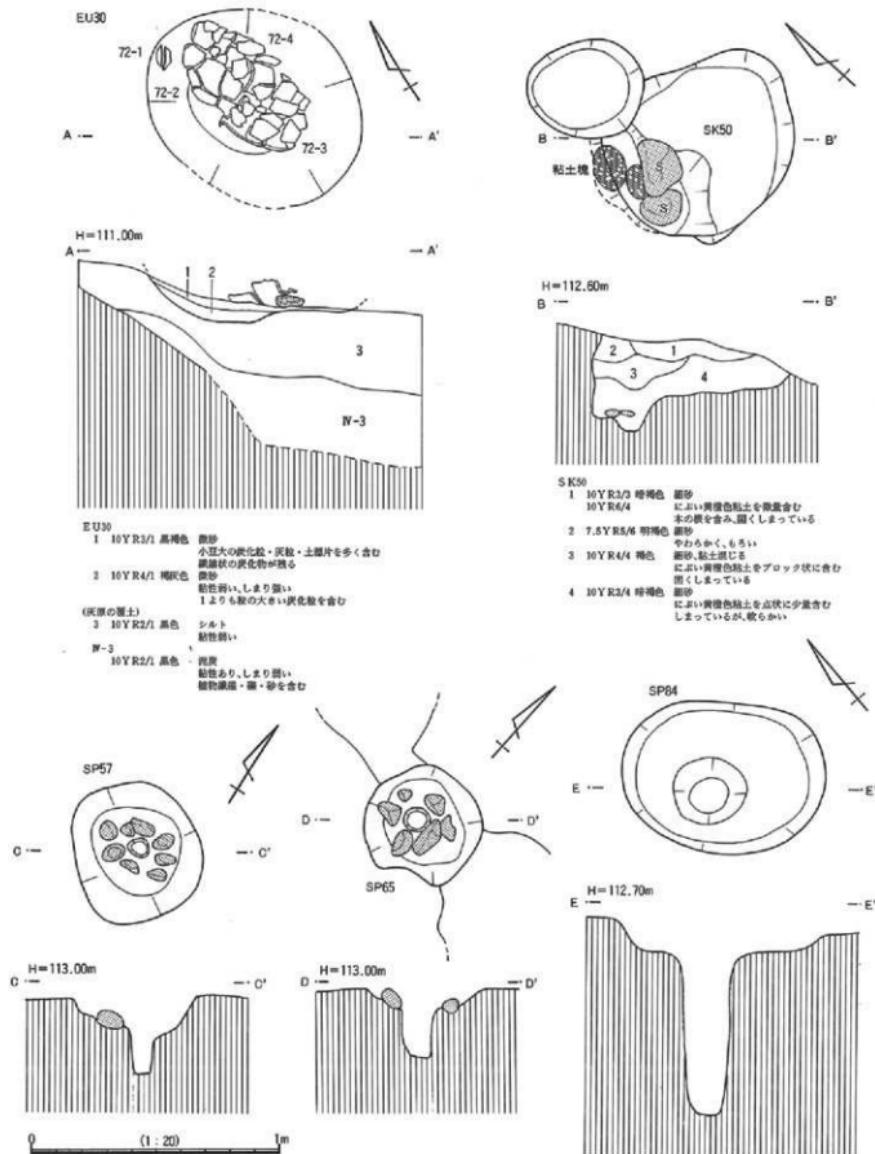
S P84はG・H-32に位置する。規模は84×62cmの楕円形を呈し、中央ピットの径20cm、深さ79cmと、前述の石組ピットより規模が大きい。壁面・底面ともかなり堅くしまっている。重複関係はない。これら3基の相互関係および上屋の存在は不明である。

S X 6（第16図、図版12）

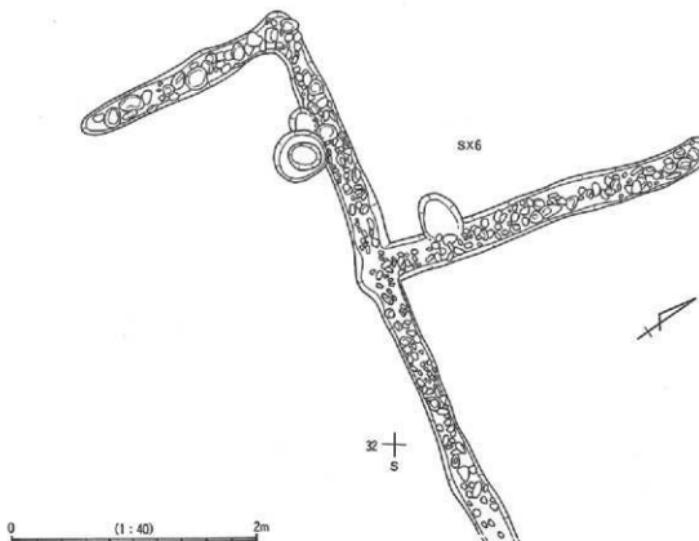
西区北側のR・S-31・32内に検出された変形カギ型の平面形をもつ石組遺構である。規模は東西の4.78mを主軸として、西端から南へ1.70mと、中央付近から北側に2.75mがほぼ直角に突き出している。東端は遺存していない。20~32cmの幅の中に5~20cm大ほどの円礫が堅くぎっしりと埋めこまれている。礫の隙間に須恵器・土師器片が混入している。

この周囲には、南側および北東側にピットの並んだ状態がみられ、S X 6に付随した建物跡の存在も考えられたが、はっきりと確認は出来なかった。

III 検出遺構



第15図 EU30・SK50・SP57・65・84



2 南区

第16図 S X6

S G31河跡（第17図、図版16）

南区北半のB～E-28～36グリッド内に検出された旧河川跡である。西区の段丘崖を北岸として、やや北西寄りから東へ向かって流れている。南側の岸（立ち上がり）は調査区外のため河川幅は不明だが、確認された部分では幅18.60m、検出長約50m、深さは最大で92cmであった。覆土は自然堆積で5層に分かれており、4層下部と基本層序V層の上面との間に特に遺物が多い。平安時代の土師器・須恵器・木製品および石器が植物遺存体と混在した状態で大量に出土した。V層上面が河底であるが、その形状は平らではなく島状に約30cm程高くなった微高地が3ヶ所ある。その間を深さ13～24cm程の小河川が溝状に4条流れしており、登録遺物はこれらの内部に多い。下流部分は南から流れ込んだ別の旧河道で切られていたようである。

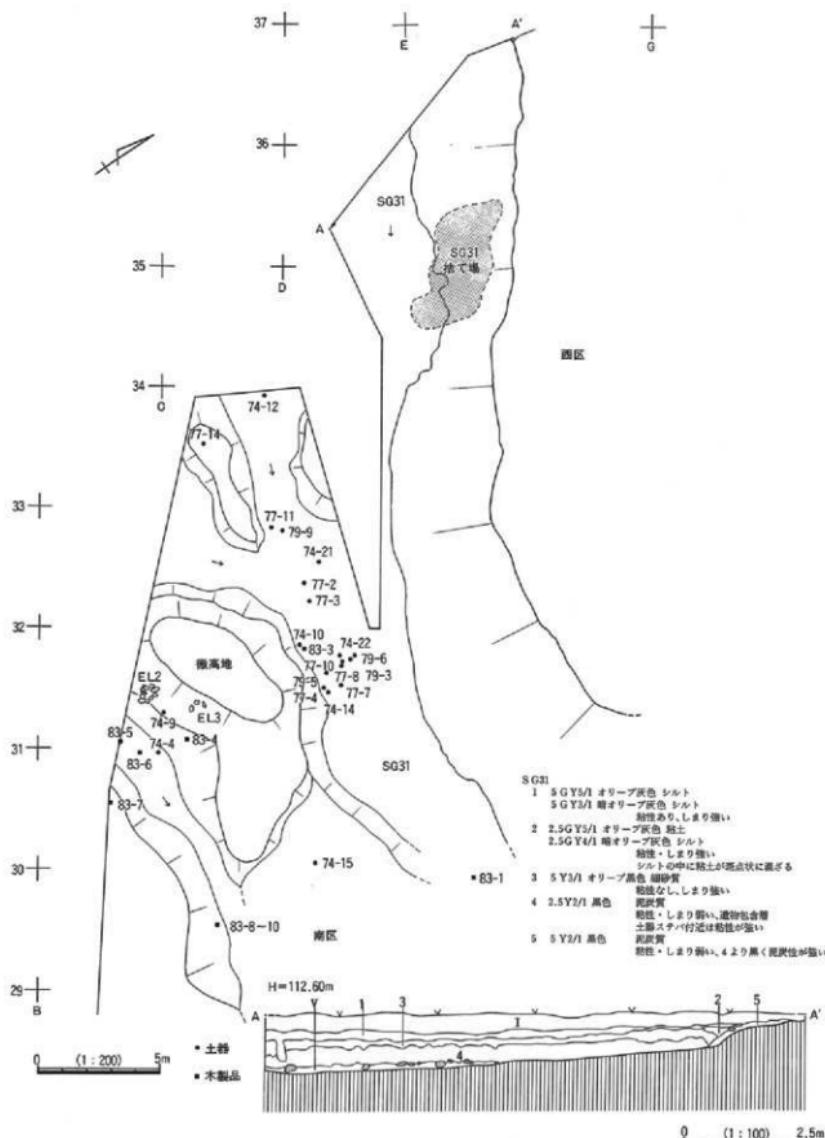
S G31捨て場（第18図、図版14）

南区北西端の、E-34・35に位置する。これはS G31の北岸寄りの南斜面上に出来た土師器・須恵器などの遺物の集合体である。遺物は北岸からは南に約1m以上4m以内の範囲におさまっており、集中地域は東西5m×南北2.6mほどの不整形を成す。最大厚は約80cmである。主軸はS G31の北岸に対して約15度程北に振れている。

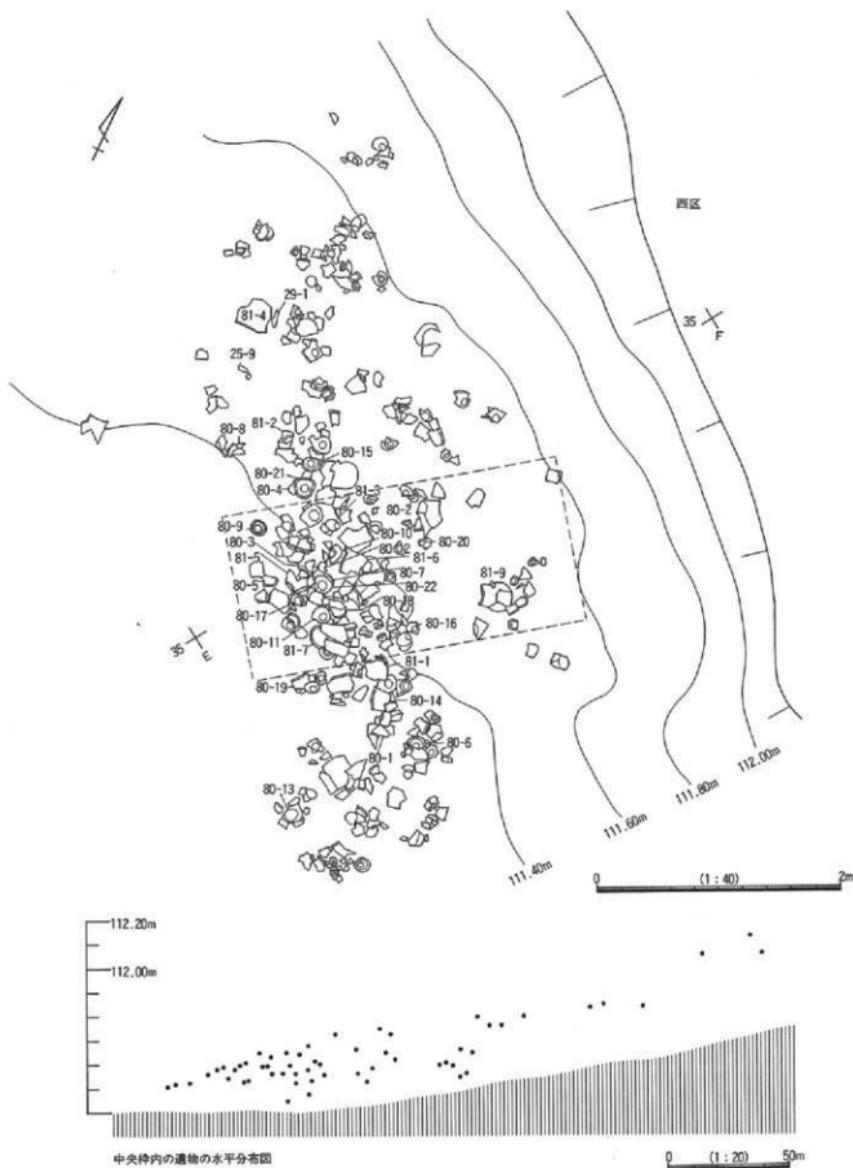
最も遺物が集中している部分の水平分布を、等高線に直交する方向で図化するとS G31の南斜面上にレンズ状を成す。河の深い方へ行くほど厚く堆積している。

遺物のほとんどは覆土4層内におさまっている。須恵器よりもロクロ使用の土師器や黒色土

III 検出遺構



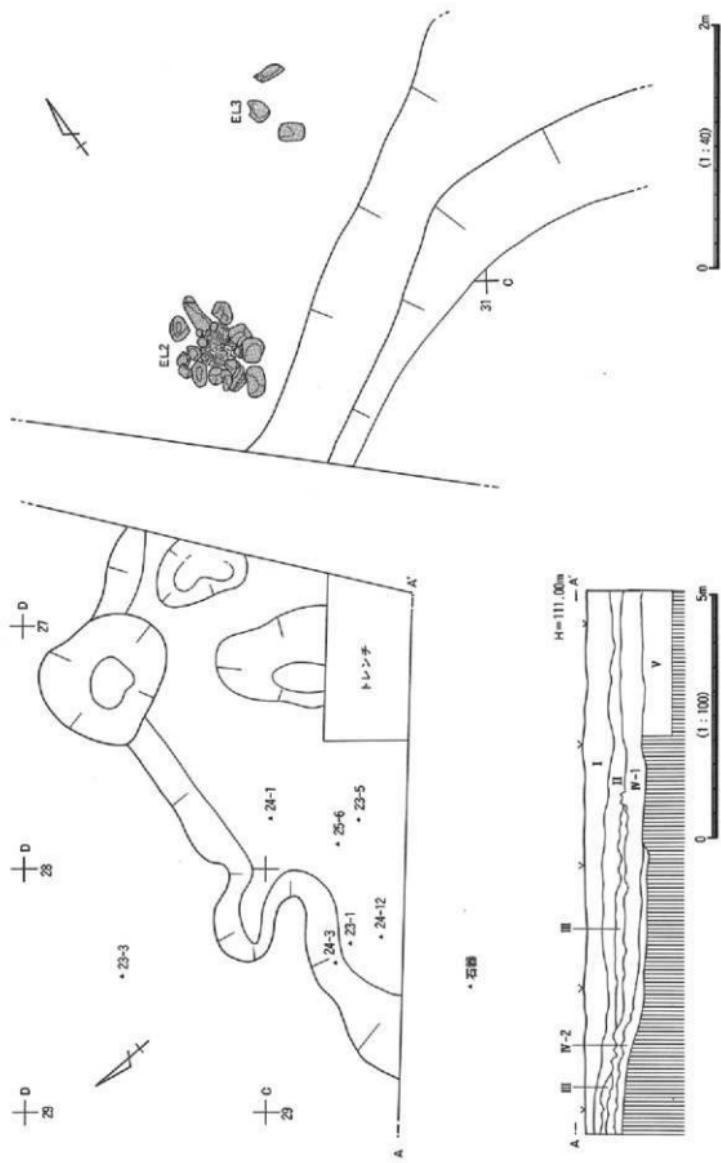
第17図 SG31河跡



中央枠内の遺物の水平分布図

第18図 SG31捨て場

III 検出遺構



第20図 南区石器出土地点

第19図 EL2・3炉跡

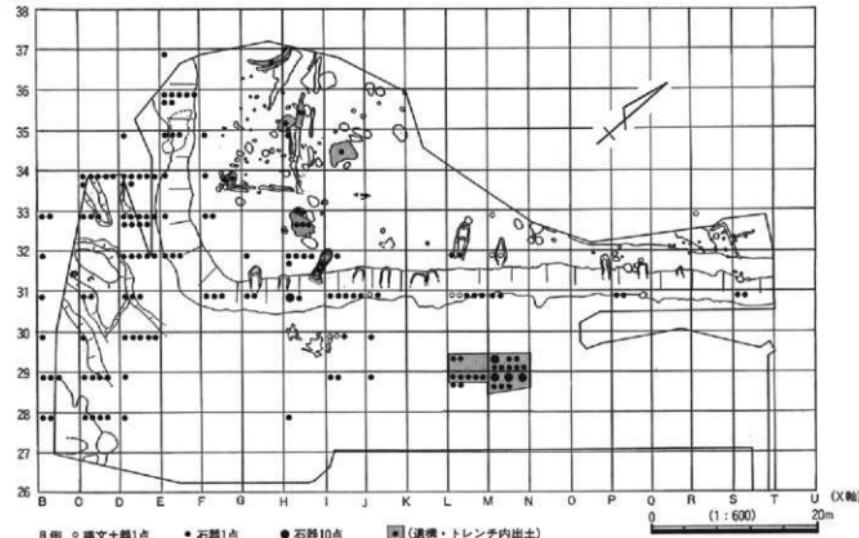
器の比率が高い。煤の付いた土師器壺や石器も混じっているが、比較的短期間に廃棄されたものとみられる。近くにある焼土遺構（S K67・68）との関連も考えられるが、具体的にはつかめなかった。ここは土器が廃棄された時期以降にSG31の洪水の流れにさらされたと考えられ、SG31全体の遺物にもこの捨て場から流されたものが含まれているとみられる。

EL2・3炉跡 (第19~21図、図版15)

EL2はB-31、EL3はC-31グリッド内に約1.40m離れて検出された石組の炉跡である。SG31河底の島状の微高地上に立地する。V層を掘込んで造られており縄文時代の所産とみられる。EL2は約10~32cmの円礫を10数点用いており、規模1.03m×62cmのやや角張った楕円形を成す。その内側は被熱して堅くなり、一部火はねした礫もみられる。EL3の石組みは細長い礫3点のみが遺存しているが、他には遺構は認められない。B・C-25~27グリッドの落ち込み付近よりローリング痕のない石匙・石鎧などが出土しており、また炉跡の遺存状態も良かったことから、洪水時の土砂によってパックされた状態にあったものと思われる。

この炉跡のあるSG31河跡では、V層上面の河底一帯より縄文時代の遺物が数多く出土した(第21図)。出土した遺物は磨滅した土器片と石器である。石器は搔器・石鎧などの加工工具がほとんどで、狩猟具は石鏃が皆無で、尖頭器は1点のみであった。付近には住居跡などの遺構は確認されず、第1次調査の際にやや離れた段丘の縁辺に陥し穴列が見つかっていることなどを考え合わせると、ここは狩猟や生活の場というよりも水辺を利用した作業場的な空間であったと推定される。

(Y軸)



第21図 グリッド別石器出土量図

IV 出土遺物

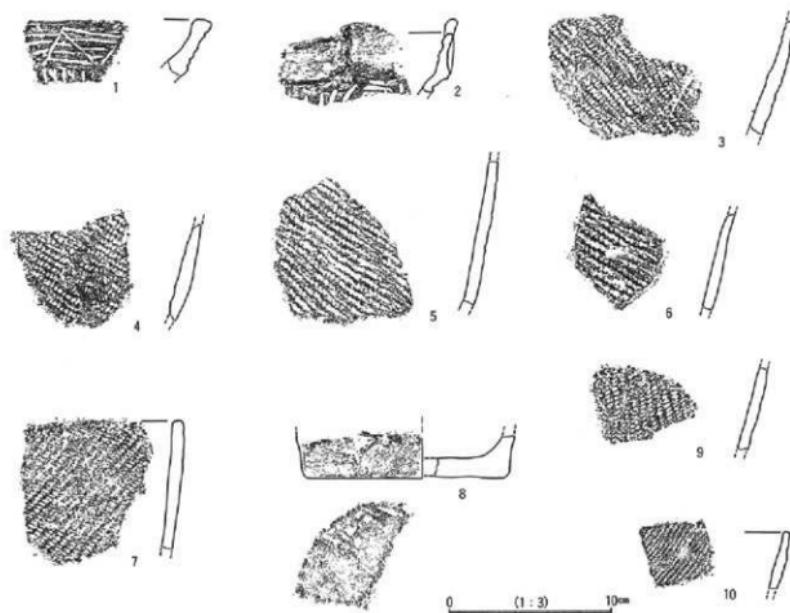
1 繩文時代の遺物

(1) 繩文土器 (第22図、図版65)

繩文時代土器は、西区から東区にかけての斜面のIV層を主に10点出土している。いずれも小片で、全体の器形が知れるものはない。

1は浅鉢の口縁部で、口縁部に横走する多条沈線とそれを区画する山形の沈線文、頸部に縱方向の短い刺突文が施されている。胎土には纖維を含んでいる。2は深鉢の口縁部で、波状口縁に隆帯による長梢円形の区画文、体部上半に多条沈線による渦巻文が施されている。胎土には石英と長石を多く含んでいる。3～6は深鉢の体部片で、外面にLRないしRLの単節縄文が施されている。いずれも器厚が厚く、胎土には石英と長石を含んでいる。7は深鉢の口縁部で、平坦な口縁を有し、外面にLRの単節縄文が施されている。9は深鉢の体部片で、外面にRLの単節縄文が施されている。7と9は磨滅が著しいが、胎土が緻密で長石を含んでいる。8は深鉢の底部で、底部外面に経縫とも一本越え・一本潜りの網代痕が一部残っている。10は鉢形土器の口縁部で、平坦な口縁を有し、外面にLRの単節縄文が施されている。器厚が薄く、胎土が緻密で長石を含んでいる。

資料が少ないので時期の限定は困難であるが、1は繩文時代前期後半、2は同後期前半、10は同晚期頃と推定される。



(2) 石 器 (第23~30図、図版65~73)

縄文時代の石器は、南区と東区および西区から東区にかけての斜面のV層からやまとまつて出土している。さらに西区遺構の覆土からも出土する。器種は、剝片を素材とするものに尖頭器・石匙・石対・搔器・削器、それに剝片の縁辺に簡単な調整加工あるいは使用の際の刃こぼれがみられるものがある。石材はほとんどが頁岩である。また、石核と磨製石斧も微量出土している。つぎに各器種毎の分類を主にその概要を述べる。

①尖頭器 (第23図1)

両面加工によって尖った先端部を作り出した石器を尖頭器とした。1は両面に丁寧な押圧剝離が施されている。基部は一次調整面を少し残し、丸味をもっている。

②石匙 (第23図2~9)

相対する二つのノッチを入れることによって作出されたつまみをもつ石器を石匙とした。8点出土しているが、基部の形態によりさらに4類に分けられる。

a類はつまみを上方に置いたときに側縁が刃部となる縦形のもので、左右がほぼ対称形となるものである(2・3)。2点とも正面を主に調整加工が施され、背面は一次剥離面を残した右側縁に調整がある。9もつまみ部が欠損しているが、本類に入る可能性がある。

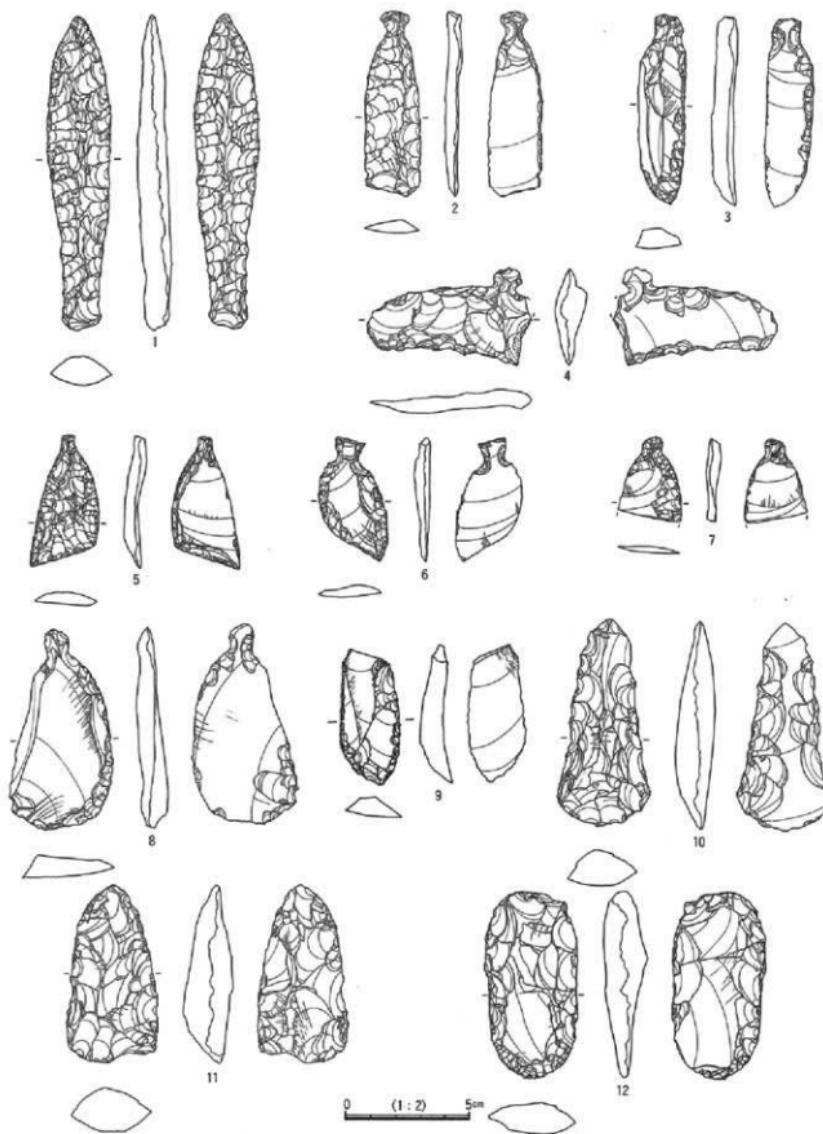
b類は縦形の石匙で、左右が非対称形となるものである(5~7)。3点とも正面を主に調整加工が施されている。c類は縦形の石匙であるが、幅広の形態となるものである(8)。正面右側縁に調整があり、背面は一次調整時の打面を残している。d類はつまみを上方に置いたときに下縁が刃部となる横形のものである(4)。刃部は両面から粗い調整加工が施されている。

③石対 (第23図10~12、第24図1~12、第25図1・3・4)

素材となる剝片の背面と主要剥離面(正面)の両面に加工され、その長軸の末端が刃部になると考えられる一群、また背面側だけの加工であっても、刃部と考えられる末端の刃角が小さく搔器とはなり得ないものをここで扱う。18点出土しているが、これらは平面形、刃部の形態、加工部位の相違によってつぎの6類に分けられる。

a類は楔形で刃部が片刃状となり、素材の両面ほぼ全体に調整加工が施されるものである(23-10・11、25-4)。24-7は基部が欠損しているが、本類に入る可能性がある。b類は楔形で刃部が両刃状となり、素材の両面ほぼ全体に調整加工が施されるものである(23-12、24-12)。

c類は短冊形で刃部が片刃状となり、素材の両面ほぼ全体に調整加工が施されるものである(24-3~5)。d類は短冊形で刃部が両刃状となり、素材の両面ほぼ全体に調整加工が施されるものである(24-1)。e類は正面全体と背面の側縁に調整加工が施され楔形の形態となるが、刃部が背面の素材剥離面を生かした片刃となるものである(24-2・6・9~11、25-3)。刃部はほぼ直線様になる。f類は両面加工で楔形の形態となるが、刃部ないし基部が欠損しているものである(24-8、25-1)。



第23図 石器 (1)



第24図 石器 (2)

④搔器（第25図2・5～9、第26図2・3・5～9、第27図1～4）

急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を搔器とした。素材は縦長剝片が多く用いられ、長軸端に刃部が作出される。これらは平面形と刃部の位置によって、つぎの5類に分けられる。

a類は縦長剝片の長軸先端部に、急角度の直線的な刃部を作出するものである（25-6・8、26-2）。b類は縦長剝片の長軸先端部に、半円形の刃部を作出するものである（25-2・7・9）。c類は横長剝片の短軸先端部に、急角度の直線的な刃部を作出するものである（26-6・7・9、27-3）。

d類は横長剝片の短軸先端部に、半円形の急角度の刃部を作出するものである（26-3・5・8）。e類は不定形剝片の先端部に半円形の急角度の刃部を作出するものである（27-1・2・4）。

⑤削器（第26図1・4、第27図5～8、第28図1～3・5～8、第29図1、第30図2）

剝片の縁辺に連続的な調整加工を施して、刃部を作出した石器を削器とした。素材のかたちを大きく変えることがないため不定形である。これらは刃部の作出方法と位置関係の相違により、つぎの3類に分けられる。

a類は縦長剝片の両側縁から先端に調整加工を施し、先端部が尖った形態となるものである（26-1・4、27-5～8、28-1）。b類は縦長剝片の両側縁ないし片側縁に調整加工が施されるものである（28-2・5・7・8、30-2）。c類は横長剝片の両側縁ないし片側縁に調整加工が施されるものである（28-3・6、29-1）。

⑥ピエス・エスキュ（第29図9・11）

ハンマーによる加撃と台石などの対象物からの衝撃による剥離痕が認められる石器である。いずれも断面形は凸レンズ状となる。

⑦加工痕ないし使用痕のある剝片（第28図4、第29図2～8・10、第30図1）

剝片に二次調整を施しながらも、刃部を形成するような連続した加工とはなっていないものおよび使用痕のある剝片を本器種に一括する。素材として縦長剝片を用いたもの（28-4、29-2・4～8）と、横長剝片を用いたもの（29-3・10、30-1）がある。

⑧石核（第30図3・4）

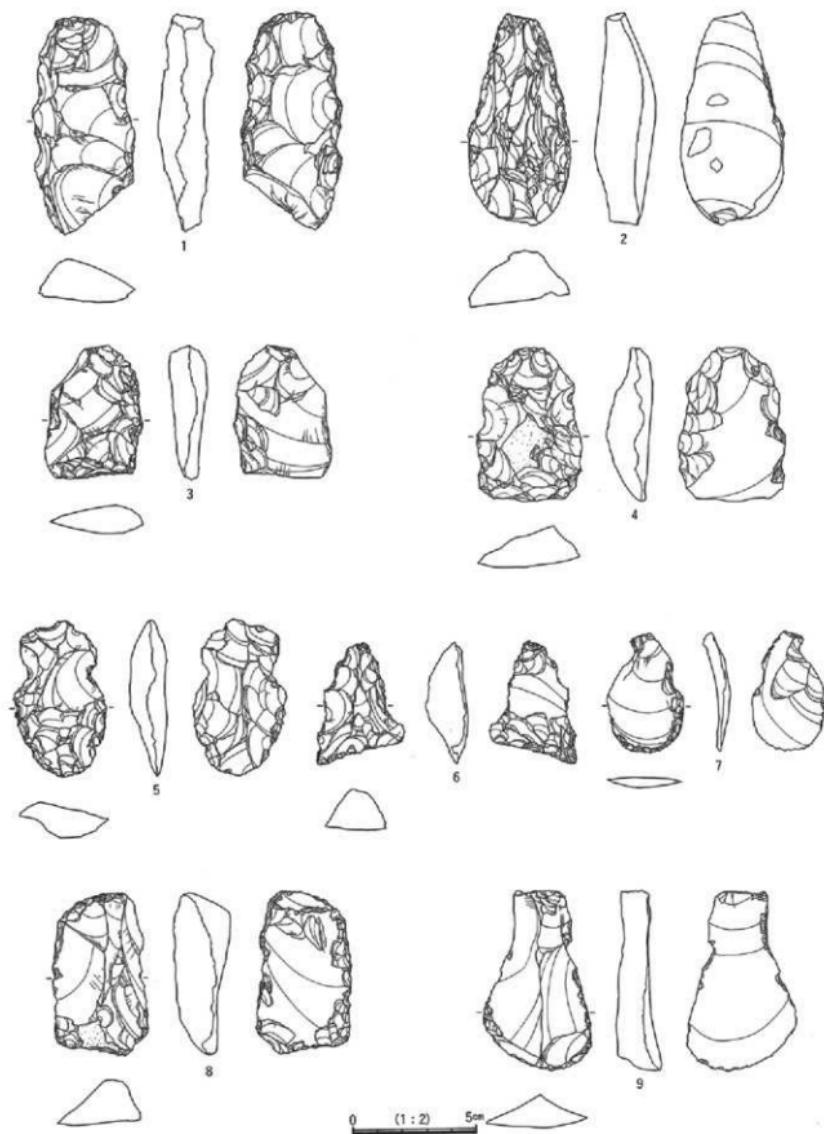
剝片石器の製作において、母岩からの剝片剝離工程の最終段階で放棄された残骸である。30-3は、正面からの加撃が上面からの加撃より新しい。4は上面を打面として剝片を何回か製作している。

⑨磨製石斧（第30図5）

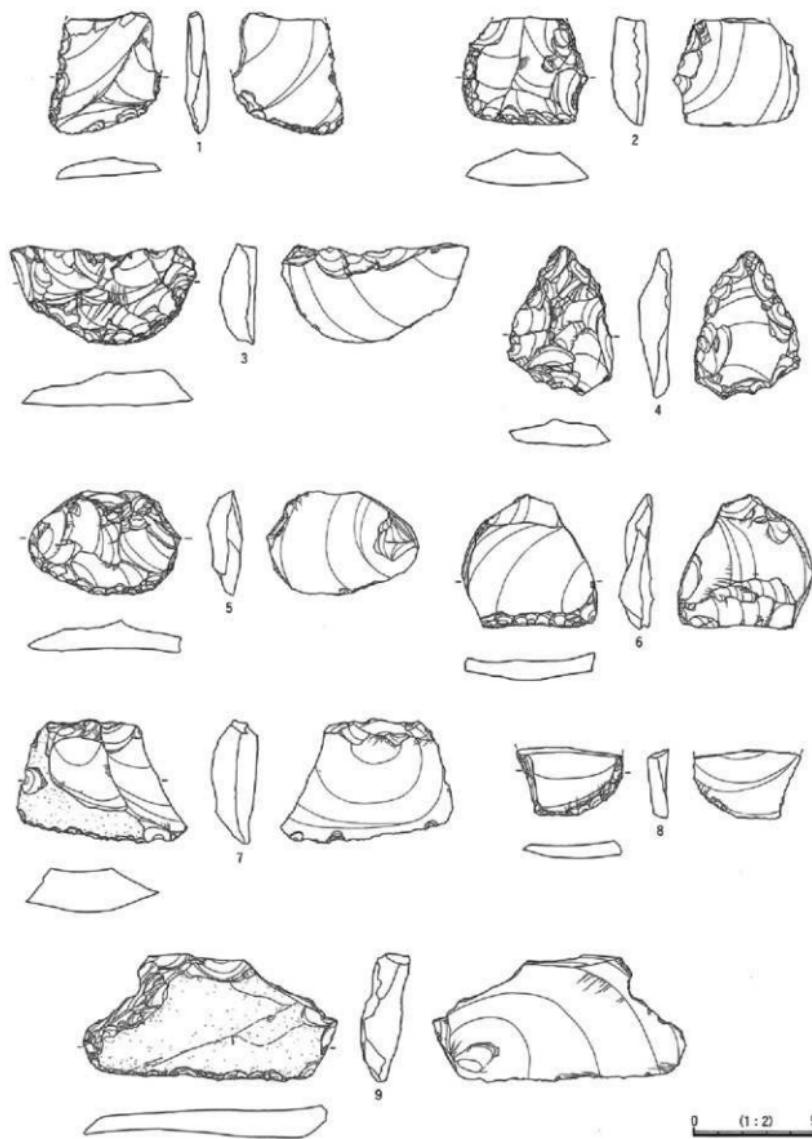
30-5は磨製石斧の刃部で、基部が欠損している。断面形が蒲鉾形を呈する定角型の石斧で、石材は緑泥片岩と思われる。

⑩その他（第30図6・7）

東区北端（7）と西区東端（6）から砥石が2点出土した。形態からみて時期は奈良～平安時代に属するものと思われるが、便宜的に本節で紹介する。



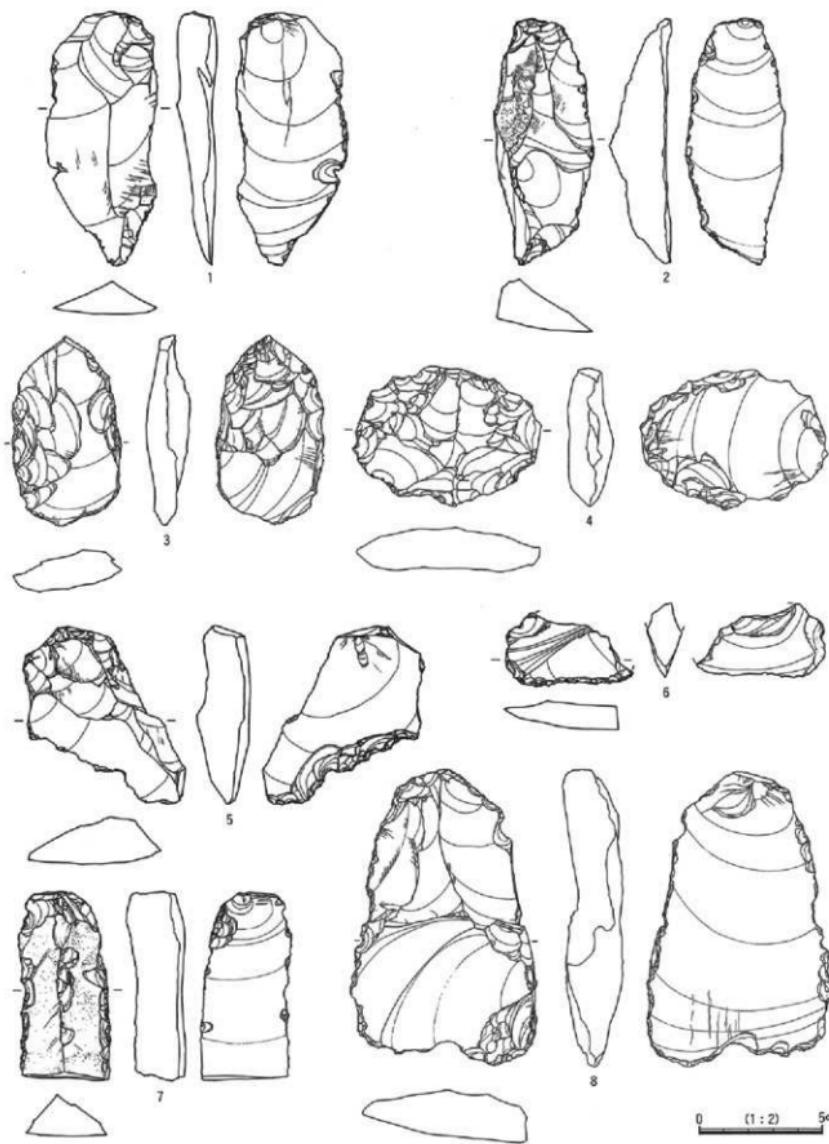
第25図 石器(3)



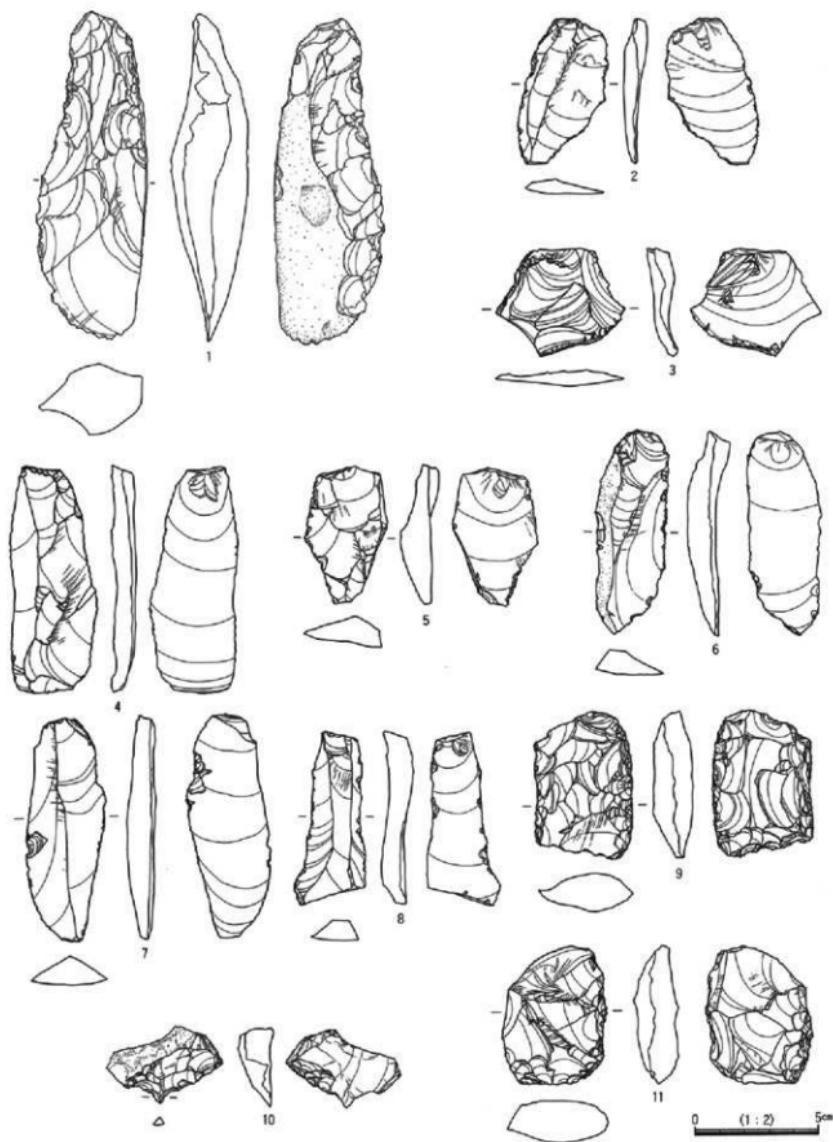
第26図 石器 (4)



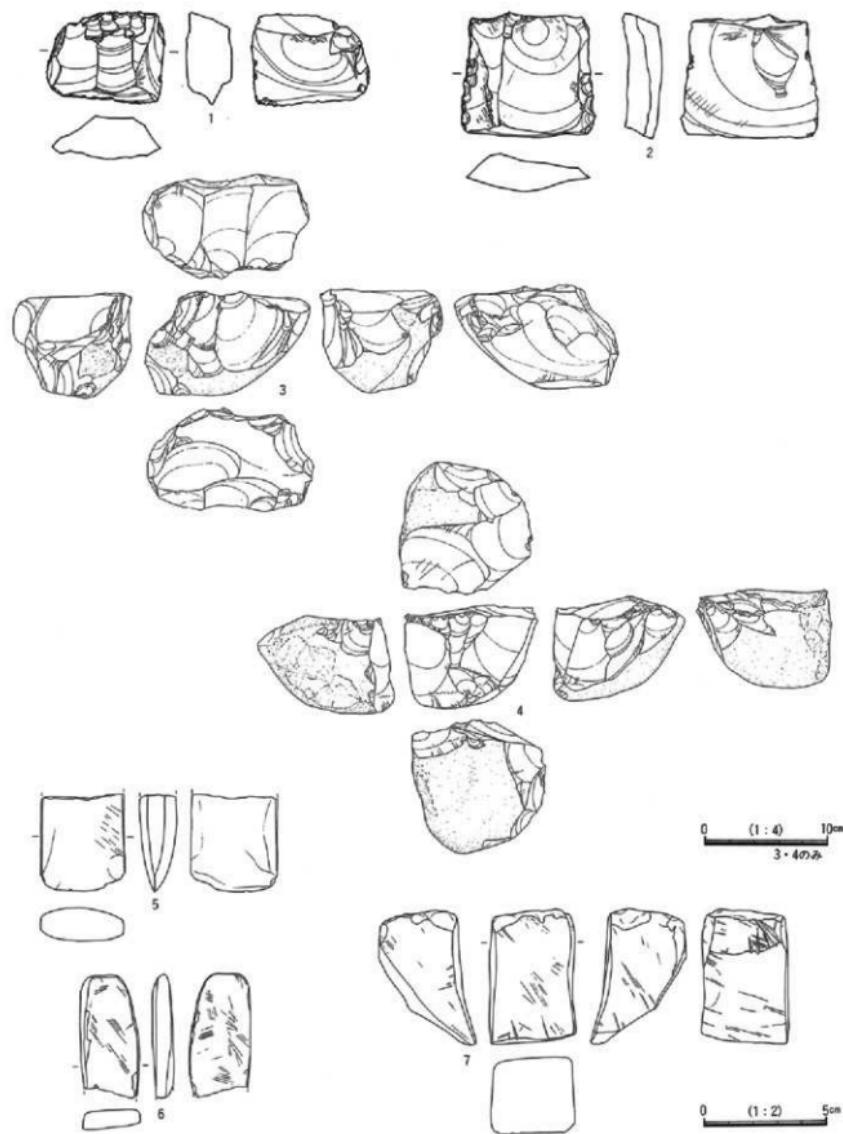
第27図 石器 (5)



第28図 石器 (6)



第29図 石器 (7)



第30図 石器 (8)

2 奈良・平安時代の遺物

平野山古窯跡第12地点遺跡の第2次調査では、窯体内およびその下の灰原などから、奈良・平安時代の遺物が整理箱にして約750箱分出土している。各窯体内や灰原ブロック出土の遺物の説明に入る前に、奈良・平安時代の土器の分類基準について述べておく。

(1) 奈良・平安時代の土器分類（第31・32図、表3）

奈良・平安時代の土器は、大きく須恵器と土師器に分けられる。一般に、須恵器はロクロ調整のち構築的な窯を用いて還元焰焼成されたもので、土師器はロクロを使わず野焼きや穴窯などを用いて酸化焰焼成されたものと理解されている。しかし、東北地方における当該期の土器はそう単純ではない。小井川和夫氏の言うように「平安時代に入ると、それまで須恵器製作に特徴的に用いられていたロクロ使用などの技術が酸化焰焼成の土器の製作にも及び、土師器は長胴形の壺、环類の内面のヘラミガキ・黒色化処理手法など旧来の伝統的な器形・技法を残しながら、大半のものはロクロ技術を用いて製作されるようになった。」のである（文献6）。

また桑原滋郎氏は多賀城跡の資料をもとに、土師器環の大きな特徴である内黒手法が施されず、回転糸切り無調整で赤褐色を呈する硬質の土器を、土師器ではなく須恵器の系統を引くものと理解すべきとして「須恵系土器」と呼んだ（文献3）。桑原氏の論の根底には、この種の环が多賀城周辺では須恵器に後続するもの（10世紀後半以降？）という認識があるようである。

その後東北地方では「須恵系土器」類似の土器群に対し、「赤焼土器」、「赤褐色土器」、「土師質土器」などと呼称したり、あるいは土師器として扱かおうとするなど各様の対応が行なわれている。その範囲も环類などの食膳具に限定する考え方と、煮沸具の壺類も含む考え方があり、出現時期もヘラ調整の环や壺類まで入れれば8世紀末ないし9世紀初めまで遡りえる。

かって佐藤は、ロクロを使用した硬質の土器を在来の土師器と区分し、そこに歴史的な意味を求めるとする観点から、庄内地方における「赤焼土器」を「ロクロや叩きによる整形など技術的に須恵器の技法を用いながら意図的に酸化焰焼成を行っているもの」とし、その器種に供膳形態の环・皿、煮沸の鍋・壺・羽釜、貯蔵形態の小壺を幅広く包括した（文献7）。宮城県上新田遺跡の土器焼成施設から、ロクロ使用による酸化焰焼成のタタキをもつ壺と环類が同時に出土したこと、両者が同一工人による製作であったことを示している（文献6）。

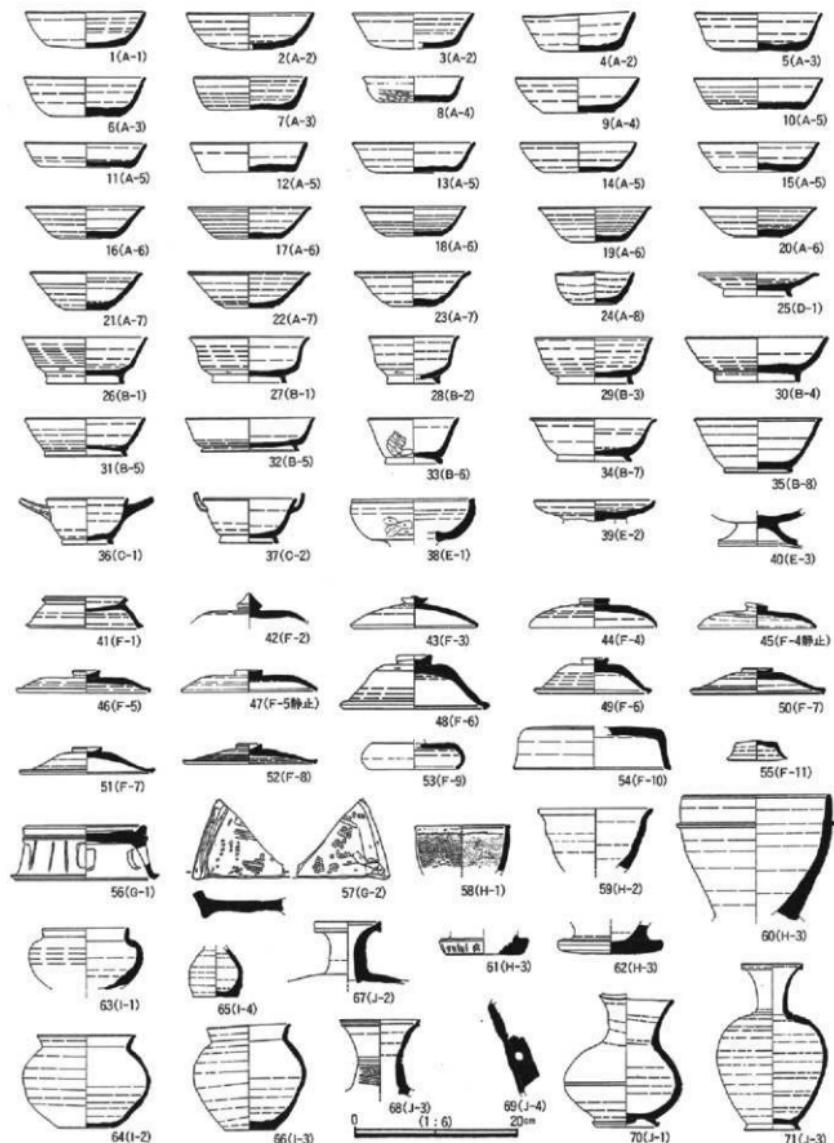
しかし同じ山形県内でも、丸底長胴壺や鍋など北陸地方との関連が強い庄内地方と、平底長胴壺や甌など陸奥国との関連が強い内陸地方では土器の様相が異なっており、内陸は「赤焼土器」の比率が少ない。さらに本遺跡では窯跡という特殊性から、灰色系の須恵器の他に焼きムラなどで生じた赤褐色系の須恵器も存在するため、「赤焼土器」との識別が困難なものも多い。

以上のことから本報告書では、土器を須恵器と土師器に大別し、従来の「赤焼土器」という用語はあえて使わず、土師器の範疇の中で分類することとした。ただし器種や焼成・胎土などで従来の「赤焼土器」に相当すると思われるものは、器種毎の分類の中に各々分けて表示したつもりである。なお土師器のうち内・外外面にヘラミガキのち黒色化処理を施してあるものについては、土器群全体の理解を図るうえから便宜上「土師器B-黒色土器」として区分した。

表3 土器分類表(1)

(注) 底部切り離し、aは回転ヘラ切り、bは静止糸切り、cは回転糸切りを示す。

土器 区分	器種 分類	ロクロ 使用	口縁部～体部形態	外 面			底 部	分類因 番 号
				調 整	調 整	底 部 形 態		
I 無台 环	A	1 使 用	底部全面に回転ヘラ削り調整があり、底部が丸みをもつ	削り	ロクロ	丸底風	?→削り	1
		2 使 用	底部外周にヘラ削り調整があり、底部が丸みをもつ	削り	ロクロ	丸底風	a→ナデ	2~4
		3 使 用	身が深く、体部が直線的に立ち上がる	ナデ	ロクロ	平 底	a	5~7
		4 使 用	静止糸ないし板状工具による切り離しで、体部下端が丸みをもつ	ロクロ	ロクロ	平 底	b・?	8~9
		5 使 用	底径が大きく、縁形が遊苔形を呈する	ロクロ	ロクロ	平 底	a	10~15
		6 使 用	器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反	ロクロ	ロクロ	平 底	c	16~20
		7 使 用	器底が高く、底径がやや小さい底径で、体部が直線的に外反	ロクロ	ロクロ	平 底	c	21~23
		8 使 用	口径と底径がやや小さく、橢形を呈する	ロクロ	ロクロ	平 底	c	24
II 須 恵 器	B	1 使 用	口径が大きく、縁をもつ	削り?	ロクロ	付高台	a	26~27
		2 使 用	口径・器高が小さく、軽い接をもつ	削り?	ロクロ	付高台	a	28
		3 使 用	身が深く、体部が直線的に立ち上がる	ロクロ	ロクロ	付高台	a	29
		4 使 用	静止糸切り離しで、体部がやや丸みをもって立ち上がる	ロクロ	ロクロ	付高台	b	30
		5 使 用	底径が大きく、体部が直線的に立ち上がる	ロクロ	ロクロ	付高台	a	31~32
		6 使 用	口径が小さく、体部が直線的に外反する双耳环類似のもの	ロクロ	ロクロ	付高台	c	33
		7 使 用	器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反	ロクロ	ロクロ	付高台	c	34
		8 使 用	器高が高く、小さい底から体部が直線的に外反	ロクロ	ロクロ	付高台	c	35
C 双 耳环	1 使 用	口径の小さい有台環の両側に、斜方向の把手が付く	ロクロ	ロクロ	付高台	c	36	
	2 使 用	口径の小さい有台環の両側に、L字状の把手が付く	ロクロ	ロクロ	付高台	c	37	
D 殷皿	1 使 用	器高が低く、体部が大きく外反し、口唇部が屈曲	ロクロ	ロクロ	付高台	c	25	
E 高 环	1 使 用	口縁部端が平坦で、体部が丸みをもつ	ロクロ	ロクロ	不 明	不 明	38	
	2 使 用	口縁部端が丸みをもち、偏平面体部が付く	ロクロ	ロクロ	不 明	不 明	39	
	3 使 用	丸みをもつ体部に、脚がつく	ロクロ	ロクロ	付高台	不 明	40	
F 蓝	1 使 用	平坦な頂部に、垂直に近い縁部が付く	ロクロ	ロクロ		アーモガキ	41	
	2 使 用	宝珠形のつまみをもち、天井がほぼ平盤なもの	ロクロ	ロクロ		a	42	
	3 使 用	宝珠珠形のつまみをもち、天井が丸く、口縁部端がやや内傾	ロクロ	ロクロ		不 明	43	
	4 使 用	器高が高く、天井部が丸みをもち、口縁部端が軽く直立	削り?	ロクロ		a・b	44~45	
	5 使 用	天井全部に回転ヘラ削りがあり、器高がやや低い	削り?	ロクロ		a・b	46~47	
	6 使 用	器高が高く、天井と体部の境が角をなし、口縁部端が屈曲	ロクロ	ロクロ		c	48~49	
	7 使 用	器高がやや高く、天井と体部の境が不明瞭で、口縁部端が屈曲	ロクロ	ロクロ		c	50~51	
	8 使 用	器高が低く、天井と体部の境が不明瞭で、口縁部端が屈曲	ロクロ	ロクロ		c	52	
	9 使 用	天井部がほぼ平盤で、体部大きく湾曲	ロクロ	ロクロ		不 明	53	
	10 使 用	大型でつまみがなく、平盤な天井部に、垂直に近い縁部が付く	ロクロ	ロクロ		?→削り	54	
	11 使 用	小型でつまみがなく、ほぼ平らな天井部に、斜めの縁部が付く	ロクロ	ロクロ		不 明	55	
H 鉢	1 使 用	口縁部がほぼ直立し、体部上半に波状沈線をもつ	ロクロ	ロクロ	不 明	不 明	58	
	2 使 用	口縁部が外反し、体部がすぼまるこね鉢	ロクロ	ロクロ	丸底風	不 明	59	
	3 使 用	口縁部に脚が付き、底部が丸くなるこね鉢	ロクロ	ロクロ	丸底風	(刺突文)	60~62	
I 短 縄 査	1 使 用	短い口縁部が直立し、体部が丸みをもつ	ロクロ	ロクロ	平 底	不 明	63	
	2 使 用	短い口縁部が外反し、体部が丸みをもつ	ロクロ	ロクロ	平 底	c	64	
	3 使 用	短い口縁部が直立ののち外反し、体部がやや長く丸みをもつ	ロクロ	ロクロ	平 底	c	65	
	4 使 用	小型で、体部が下膨らみになる	ロクロ	ロクロ	平 底	c	65	
J 長 縄 査	1 使 用	口縁部が長く外反し、体部上中位に最大径をもつ	ロクロ	ロクロ	付高台	?→ナデ	70	
	2 使 用	やや長い口縁部が直立ののち外反し、体部上半に最大径をもつ	ロクロ	ロクロ	付高台?	不 明	67	
	3 使 用	長い口縁部が直立ののち外反し、体部上半に最大径をもつ	ロクロ	ロクロ	付高台?	c	68~71	
	4 使 用	壺の体部上半に2個1対の有孔突起をもつ	ロクロ	ロクロ	付高台?	?→ナデ	69	
G 陶 瓶	1 使 用	平坦な頸部に、透かし窓のある脚部が付く円面瓶	ロクロ	削り	付高台		56	
	2 使 用	短い台壠が付く風字瓶	ロクロ	削り	付高台		57	

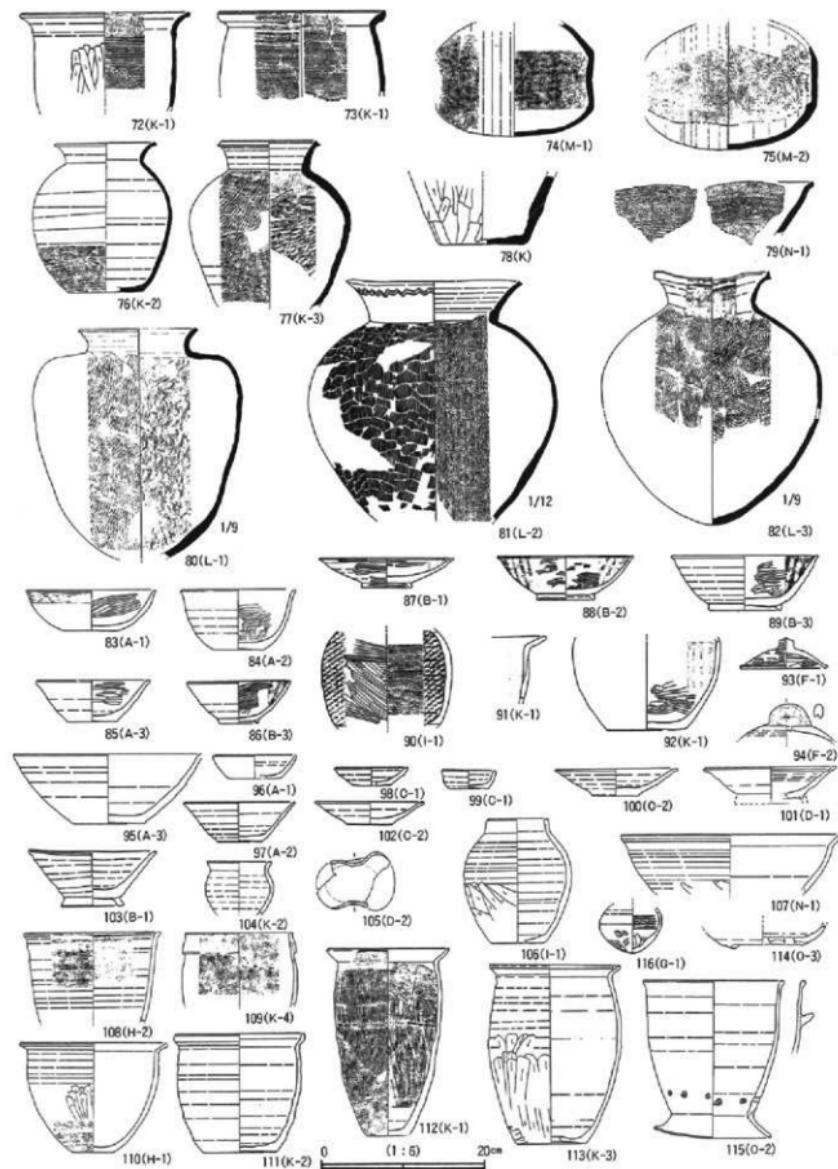


第31図 土器分類図(1)

表3 土器分類表(2)

(注) 底部切り離し、aは回転ヘラ切り、bは静止糸切り、cは回転糸切りを示す。

土器区分	器種	分類	ロクロ 使 用	口縁部～体部形態		外 製 調 整	内 製 調 整	底 部 形態	底 部 切り離し	分類番号
				調 整	調 整					
須恵器	K 瓢	1 使 用	口縁部が外反し、体部が直線的に立ち上がる	ロクロ	ミガキ	平 底		c	72・73	
		2 使 用	口縁部が外反し、丸みをもつ体部中位に最大径	ロクロ	ロクロ	平 底		c	76	
		3 使 用	口縁部が直立のもの外反し、丸みをもつ体部上半に最大径	削り	ロクロ	平 底		?→削り	77	
	L 大型甌	1 使 用	口縁部が外反し、体部上半に最大径をもつ	タタキメ	アテメ	丸 底		叩き出し	80	
		2 使 用	口縁部が外反し、体部中位に最大径をもつ	タタキメ	アテメ	丸底?		叩き出し	81	
		3 使 用	口縁部が直立のもの外反し、丸みをもつ体部中位に最大径	タタキメ	アテメ	丸 底		叩き出し	82	
	M 横瓶	1 使 用	短い口縁部に、横に長いやや角張った体部が付ぐ瓶	タタキメ	アテメ	丸 底			74	
		2 使 用	短い口縁部に、横に細長い体部が付ぐ瓶	タタキメ	カキメ	丸 底			75	
	N 瓶	1 使 用	体部と口縁部の境が明瞭でなく、口唇部が外傾	タタキメ	カキメ	丸 底			79	
土師器	A 無台坏	1 使 用	器高が低く、体部が直線的に立ち上がる。外面に彩色あり	ロクロ	ロクロ	平 底		c	96	
		2 使 用	底径が小さく、体部が直線的に立ち上がる	ロクロ	ロクロ	平 底		c	97	
		3 使 用	口径と器高が大きく、体部が直線的に立ち上がる	ロクロ	ロクロ	平 底		c	95	
	B 有台环	1 使 用	器高が高く、体部が直線的に立ち上がる	ロクロ	ロクロ	付高台		c	103	
		2 使 用	口径と器高が大きく、体部下半がやや丸みをもつ	ロクロ	ロクロ	付高台		c		
	C 盆	1 使 用	口径が小さく、器高が低いもの	ロクロ	ロクロ	平 底		c	98・99	
		2 使 用	口径がやや大きく、器高が低いもの	ロクロ	ロクロ	平 底		c	100・102	
	D 台付皿	1 使 用	器高が低く、口縁部が強く外反	ロクロ	ロクロ	付高台		c	101	
		2 使 用	口縁部の凹側を内側に折り込む耳皿	ロクロ	ロクロ	付高台		c	105	
その他の器	E 高脚	1 使 用	口縁部が外反し、体部に数個の孔をもつ环部	ロクロ	ロクロ	付高台?				
	F 薙	1 使 用	リング状のつまみをもち、天井部と体部の境が不明瞭	削り	ロクロ			?		
	2 使 用	丸い有孔のつまみをもち、天井部が丸みをなす	ロクロ	ロクロ				94		
	G 丸底	1 不使用	丸底の小型特殊造形土器	タタキ	ナデ	丸 底			116	
	2 不使用	口縁部がほぼ直立する小型特殊造形土器	削り	ナデ	丸 底					
	H 鉢	1 使 用	体部が丸みをもち、口縁部が強く外反	削り	ロクロ	平 底			110	
	2 使 用	体部がほぼ直立する大型のもの	カキメ	ナデ	不 明				108	
	A I 短腹壺	1 使 用	体部が丸みをもち、口縁部が内傾する	削り	ロクロ	平 底		不 明	106	
土師器	K 見	1 不使用	体部が細長く、口縁部が強く外反する	ハケメ	ハケメ	平 底		?→削り	112	
	2 使 用	器高がやや低く、口縁部が内窪する中型のもの	ロクロ	ロクロ	平 底		c	111		
	3 使 用	器高が高く、口縁部が内窪する大型のもの	削り	ロクロ	平 底		?→削り	113		
	4 使 用	折り返し口縁をもち、口縁が内傾するもの	タタキ	カキメ	不 明			109		
	5 使 用	高台を有する台付壺	ロクロ	ナデ	付高台					
	N 鉢	1 使 用	体部と口縁部の境が緩やかに屈曲し、口唇部が外傾	削り	ロクロ	丸 底			107	
	2 使 用	体部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反	削り	ロクロ	平 底		不 明			
	O 甌	1 使 用	体部下半がややすぼまる無底式の甌	タタキ	削り	無 底			115	
	2 使 用	底部附近に2個3個の通し穴を有する底、2個の把手あり	ロクロ	ロクロ	無 底				114	
土師器(黒色)	A 桶	1 使 用	体部が丸みをもち、口唇部がやや外反	ロクロ	黒色化	平 底		?→ナデ	83	
	2 使 用	器高が高く、体部が丸みをもち、口唇部が外反	ロクロ	黒色化	平 底		c	84		
	3 使 用	底径が小さく、体部が直線的に立ち上がる	ロクロ	ミガキ	平 底		c	85		
	B 有台桶	1 使用?	器高が低く皿形で、体部が直線的に外反	黒色化	黒色化	付高台		c	87	
	2 使用?	器高がやや高く、体部が丸みをもち、口唇部が外反	ロクロ	黒色化	付高台		c	88		
	3 使用?	器高がやや高く、体部が直線的に外反	ロクロ	黒色化	付高台		c	86・89		
	F 蓋	1 使用?	疑宝珠形のつまみをもち、天井部と体部の境が不明瞭	ミガキ	ミガキ				93	
	I 壺	1 使用?	体部がやや丸みをもち、体部中位に最大径	ミガキ	ミガキ	平 底		不 明	90	
	K 瓢	1 使 用	口縁部が外反し、体部上半に最大径	ロクロ	黒色化	不 明		不 明	91	
	1 使用?	体部がやや丸みをもち、体部上半に最大径	削り	黒色化	平 底		?→ナデ	92		



第32図 土器分類図(2)

3 遺構および灰原出土の遺物

(1) 窯体内出土の遺物（第33～37図、図版17～20）

平野山古窯跡群第12地点遺跡の第2次調査では、須恵器の窯跡が部分的な検出も含めて、12基確認されている。ただ台地の東下斜面に分布する多くの窯跡は、後世の削平が著しく、窯跡の底面の痕跡を残すだけで、遺物もほとんど認められない。比較的良好に残っているのは台地に東端に分布するS Q 1 窯跡と S Q 33 窯跡で、次いで窯跡の上端部が辛うじて残っているのが S Q 40・46 窯跡と S Q 4・5・9 窯跡である。以下に、各窯体内の出土遺物について述べる。

① S Q 1 窯跡（第33図）

S Q 1 窯体内の底面からは、須恵器の环・有台环・环蓋・甕が少量出土している。环は底部の切り離しがヘラ切りで、口径が大きく器形が逆台形のA-5類（33-2～4・6・7）が主体を占める。底部の切り離しはすべてヘラ切りで、削りなどの再調整は認められない。色調は明るい灰褐色のものが多いが、4は暗い青褐色で火跳ねの痕がみられことから、焼成の際の焼き台に用いられたものと思われる。また底部外周に手持ちヘラ削り調整が施されるA-2類（同1）も1点出土している。有台环は、底部の切り離しがヘラ切りで、口径が無台环より一通り大きく、环部の器形が逆台形を呈するB-5類（33-5）が1点出土している。台部が欠損し体部下端がやや丸みをもつが、削りなどの再調整は認められない。

环蓋は1点出土している（33-8）。天井部外周に回転ヘラ削り調整が施されている。破片資料のため全体の器形がよくわからないが、器高が高く天井部が丸みをもつF-4類に近い。このほか、甕の体部片（同9・10）も微量出土している。

② S Q 4・5・9 窯跡（第33図）

S Q 4 窯体内の底面からは、甕の口縁部（33-11）と体部片（同12）が2点出土している。外面には平行線のタキメ、内面には同心円のアテメが施されている。

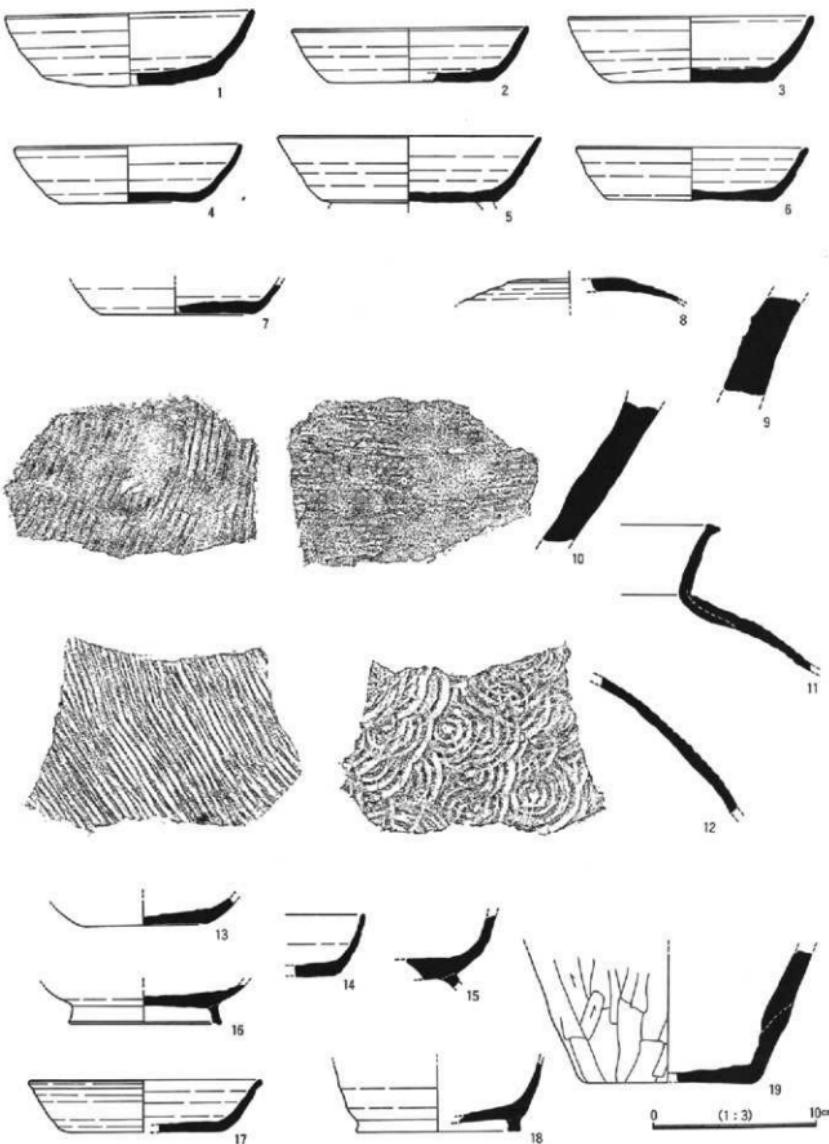
S Q 5 窯体内の覆土上層からは、須恵器の环（33-13）・有台环（同16）・壺（同15）・甕（同19）が微量出土している。いずれも小片であるが、13は底部の切り離しが回転糸切り無調整、16は底部の切り離しがヘラ切りのちナデ調整されている。19は体部下半から底部にかけてヘラ削り調整がほどこされている。

S Q 9 窯体内の覆土上層からは、須恵器の环（33-14・17）と有台环（同18）が出土している。环は底部の切り離しがヘラ切りで、器形が逆台形のA-5類に属する。

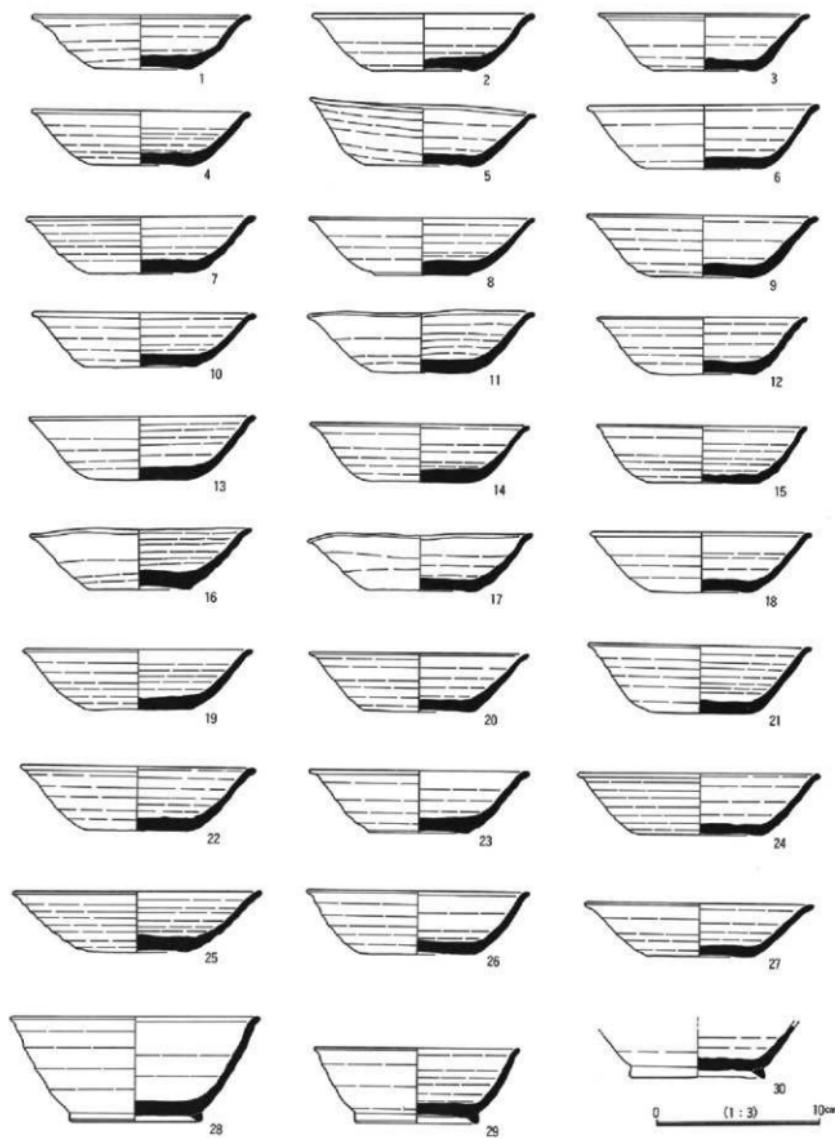
③ S Q 33 窯跡（第34～36図）

S Q 33 窯体内の底面からは、須恵器の环・有台环・蓋・壺・甕・鍋などが多く出土している。环は、底部の切り離しが回転糸切り無調整で、器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反するA-6類がほとんどを占める（34-1～27）。本類はさらに、口径が(a)14.5cm前後と大きいもの（同24など）と、(b)13.5cm前後とやや小さいもの（同23など）に分けられる。

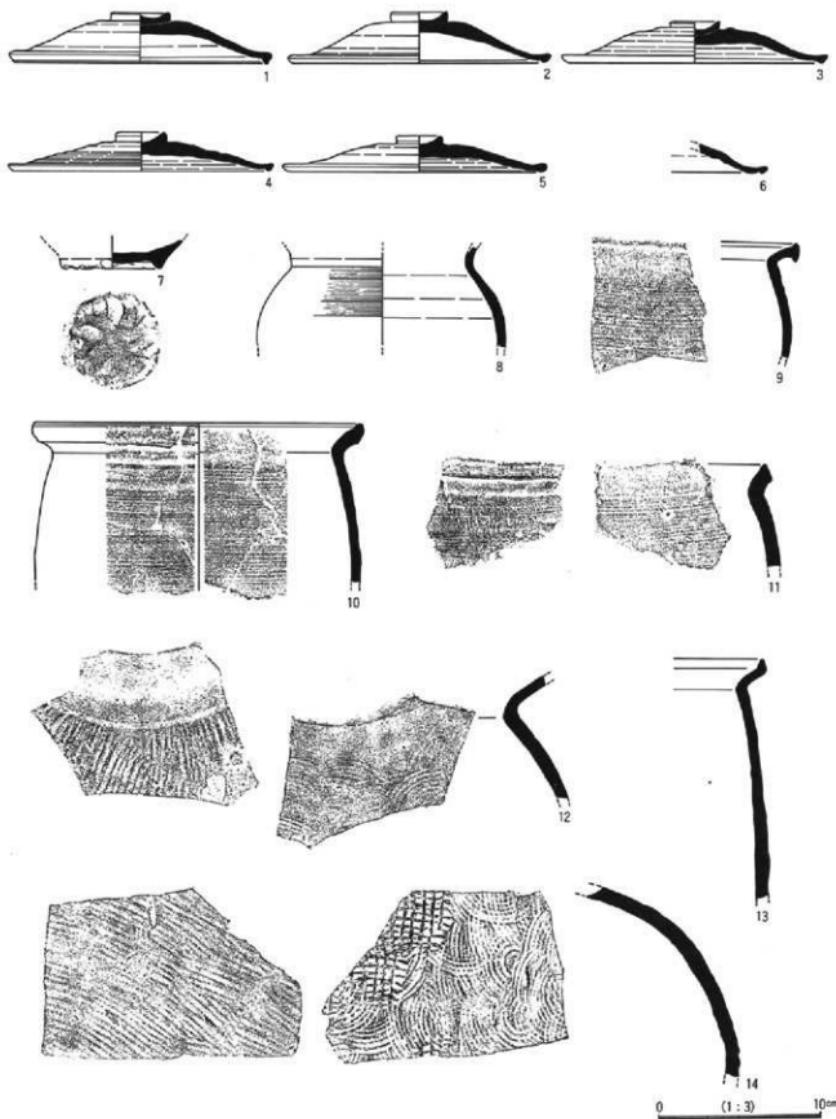
有台环は無台环に比べて量が少ないが、器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反する



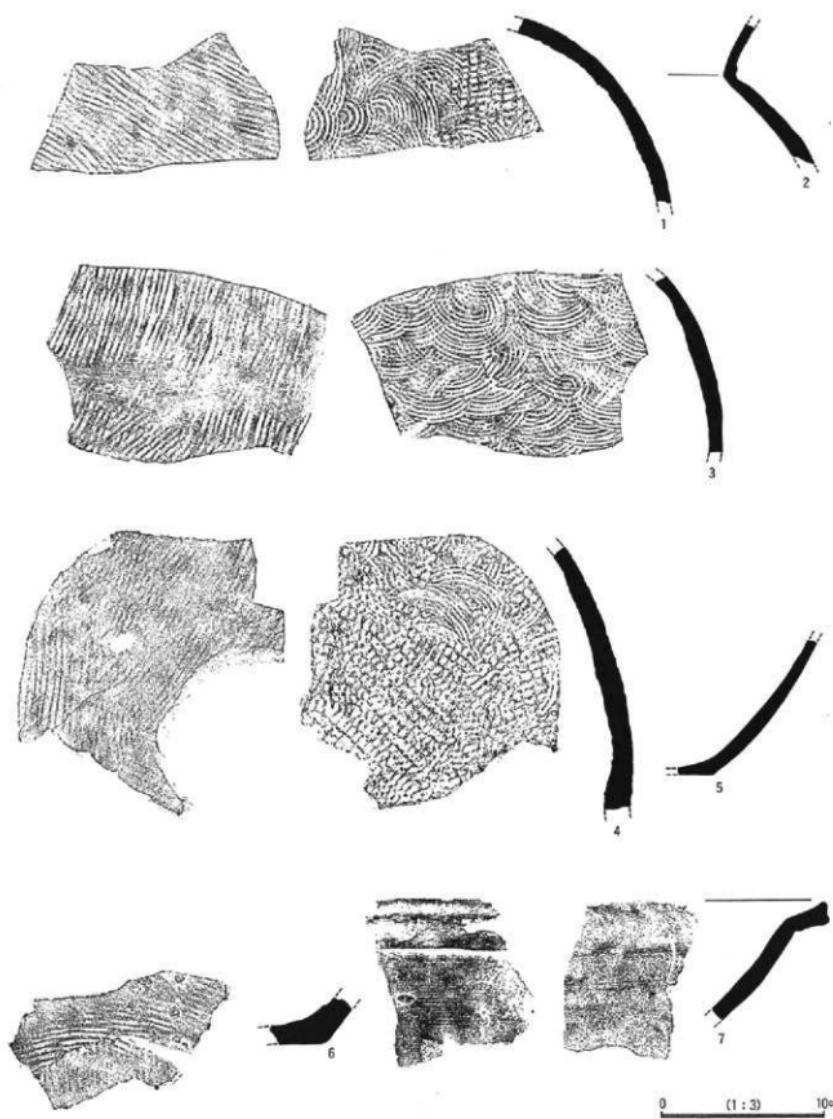
第33図 痛体内出土遺物 S Q 1・4・5・9



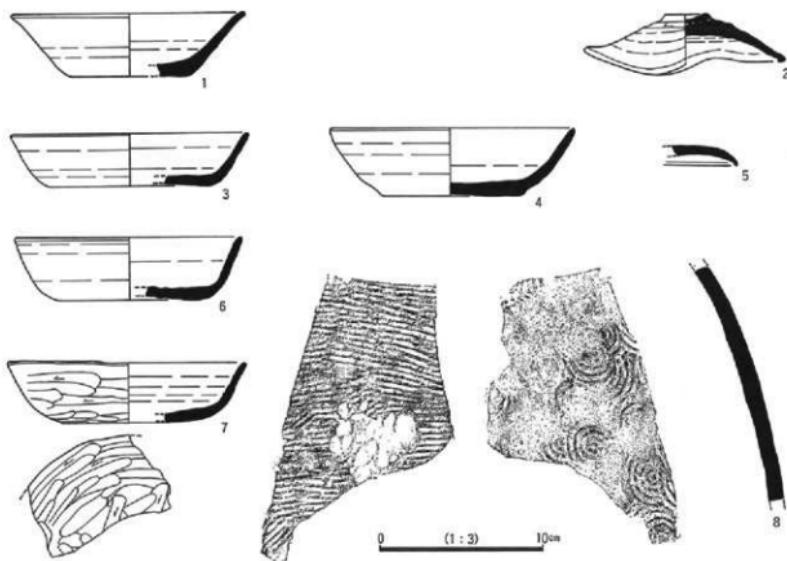
第34図 痛体内出土遺物 S Q33 (1)



第35図 墓体内出土遺物 S Q33 (2)



第36図 窯体内出土遺物 S Q33 (3)



第37図 窯体内出土遺物 S Q 40・46

B-7類(34-29)と、器高が高くやや小さい底部をもち、体部が直線的に外反するB-8類(同28)の二種類がある。底部の切り離しは、両方とも回転糸切り無調整である。

环蓋は、器高がやや高く、天井部と体部の境が不明瞭なF-7類(35-1~3)と、器高が低く偏平で、天井部と体部の境が不明瞭なF-8類(同4・5)の二種類がある。2~5の天井部の切り離しは回転糸切りで、その後に回転ないし手持ちのヘラ削り調整を有する。

壺は短い口縁部が外反し、体部が丸みをもつI-2類(35-8)、甕は口縁部が外反し、体部が直線的に立ち上がるK-1類(同9~11・13)、大型甕L類(36-1~4)がある。35-14は横瓶M類、36-7は口縁部が強く外反する鍋N類である。35-10と36-7は還元焰焼成であるが、胎土や調整技法などから土師器の焼き損じか焼き台に二次転用された可能性が高い。

④ S Q 40・46窯跡(第37図)

S Q 40窯体内の覆土からは、須恵器の环(37-1)と环蓋(同2)が出土している。环は底部の切り離しが静止糸切りで体部下端が丸みをもつA-4類、蓋は天井部が回転ヘラ削りされ、器高が高く天井部が丸みをもつF-4類に属する。

S Q 46窯体内の覆土からは、須恵器の环と环蓋(37-5)、甕(同8)が出土している。环は、底部が丸みをもち体部から底部のほぼ全面に手持ちヘラ削りをもつA-2類(同7)、身が深く体部外周にヘラ削りをもつA-3類(同4・6)、器形が逆台形のA-5類(同3)がある。环蓋は天井部が回転ヘラ削りされ、器高が低いもので、F-4類に類似する。

(2) 灰原Gブロック出土の遺物(第38~41図、図版20~23)

S Q40・41窯跡の東下斜面にあたる灰原Gブロックからは、須恵器の环・蓋・壺・甕・横瓶と、土師器の环・有台环・皿・蓋・甕、黒色土器の椀・有台椀・甕などが出土している。

須恵器の环は、底部の切り離しが回転糸切り無調整で、器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反するA-6類がほとんどを占める(38-1~15)。本類はさらに(a)口径が14.5cm前後と大きいもの(同5など)と、(b)口径が13.5cm前後とやや小さいもの(同3など)に分けられる。37-17~19の环の底部外面には、「田丸」などのヘラ書き文字が刻まれている。

有台环は、量が少ないが、器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反するB-7類(38-16)と、器高が高くやや小さい底部をもち、体部が直線的に外反するB-8類(同20)がある。底部の切り離しは、回転糸切りで、16には回転ヘラ削り調整がみられる。38-21・22は双耳环で、斜方向の把手が付くC-1類に属する。底部の切り離しは、回転糸切りである。

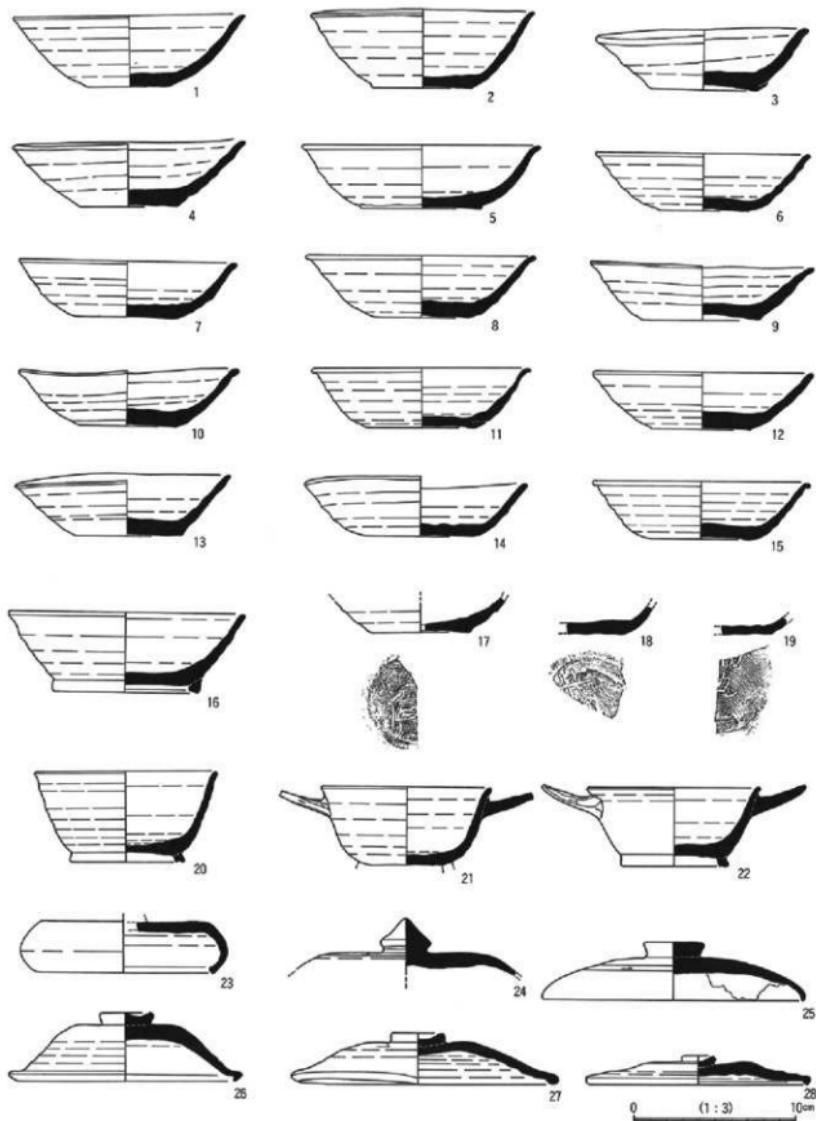
須恵器蓋は器形が多様で、天井部がほぼ平坦なF-2類(38-24)と、天井部が回転ヘラ削りされ、器高が高く天井部が丸みをもつF-4類(同25)、天井部の切り離しが回転糸切りのちヘラ削りされ、器高が高く天井部と体部の境が明瞭なF-6類(同26)、天井部と体部の境が不明瞭で器高が高いF-7類(同27)、器高が低く偏平なF-8類(同28)の环蓋と、天井部が平坦で体部が大きく湾曲する壺などの蓋を使うF-9類(同23)の各種がある。

壺は、小型で体部が下膨らみになる短頸壺I-4類(39-3)と、やや長い口縁部が直立のち外反し、体部上半に最大径をもつ甕K-3類(同5)、長い口縁部が直立のち外反し、体部上半に最大径をもつ長頸壺J-3類(同1)がある。2は口縁部が欠損しているが、J-3類に近い器形になるものと思われる。1は体部の大半を作ったのち円板で蓋をし、その中心部分に穴を穿って、別に作った頸部を貼付けしている。2にも同様な痕跡が認められる。39-6は、短い口縁部に横に長く長梢円形の体部がつく横瓶M-2類で、体部の両側を円盤状の粘土を接合することによって閉塞している。4は横瓶M-2類の口縁部と思われる。

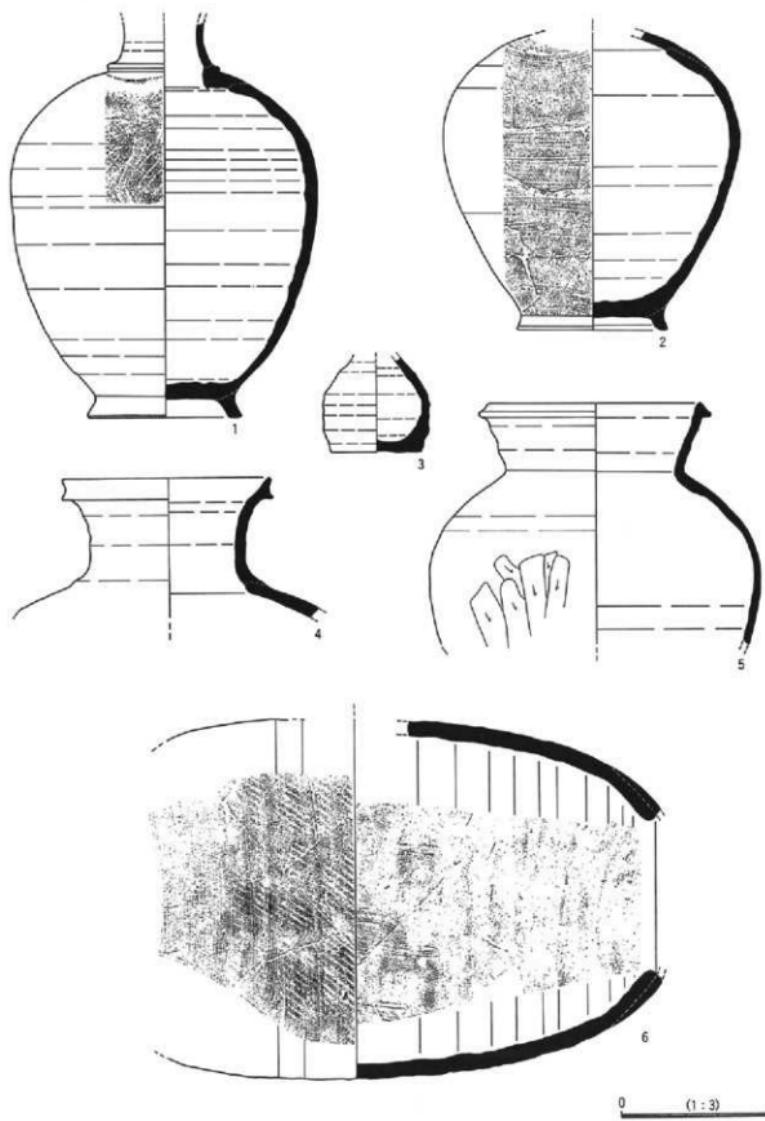
土師器は环・有台环・皿・蓋・甕の器種がある。环はロクロを使用し酸化焰焼成で、底径が小さく体部が直線的に立ち上がるA-2類(40-1~12)と、同様の作りながら口径と器高が大きいA-3類(40-16)がある。有台环はロクロを使用し酸化焰焼成で、器高が高く体部が直線的に立ち上がるB-1類(同13~15・17)がある。41-3は耳皿D-2類である。蓋は丸い有孔のつまみをもち、天井部と体部の境が明瞭なF-2類(同2)がある。甕はロクロを使用し酸化焰焼成で、中型のK-2類(40-18)と、大型のK-3類(40-19、41-1)がある。

土師器のうち黒色土器は椀・有台椀・甕の器種がある。椀は、体部が丸みをもち口唇部がやや外反するA-1類(41-4)と、器高が高く、体部が丸みをもち口唇部がやや外反するA-2類(同6)の二種がある。底部の切り離しはともに回転糸切りである。有台椀は器高がやや高く体部が丸みをもつB-2類(41-9)と、器高がやや高く体部が直線的に外反するB-3類(同7・8)がある。内面にミガキをもち黒色化が明瞭でない41-5・13もB-2類に含める。甕K類(同13)は、口縁部が「く」字状に外反し内面にヘラミガキと黒色化処理を有する。

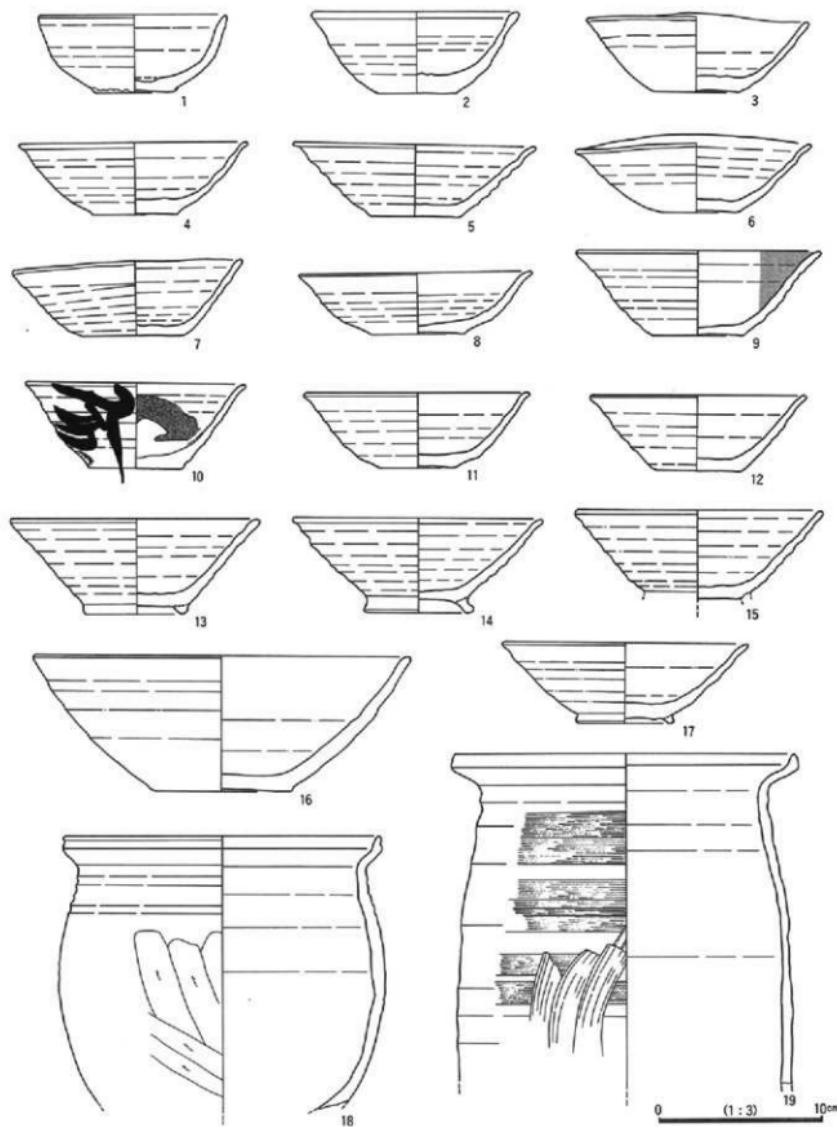
このほかGブロックの上層から瀬戸焼の碗(41-14)が1点出土している。



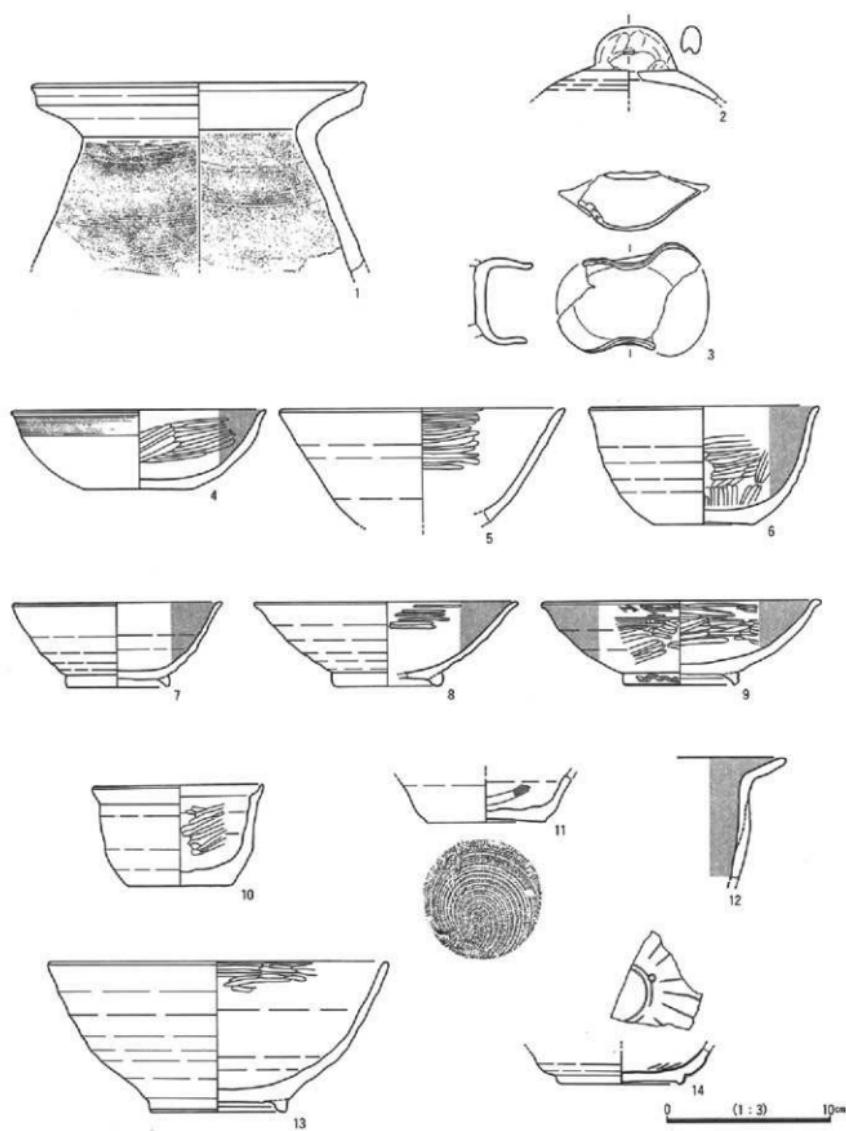
第38図 Gブロック出土遺物 須恵器 (1)



第39図 Gブロック出土遺物 須恵器(2)



第40図 Gブロック出土遺物 土篩器(1)



第41図 Gブロック出土遺物 土器器(2)

(3) 灰原Hブロック出土の遺物(第42~49図、図版23~32)

S Q33窯跡の東下斜面にあたる灰原Hブロックからは、須恵器の壺類・蓋・壺・甕と、土師器の壺・皿・甕・甌、陶硯、黒色土器の椀・有台椀・壺などが出土している。

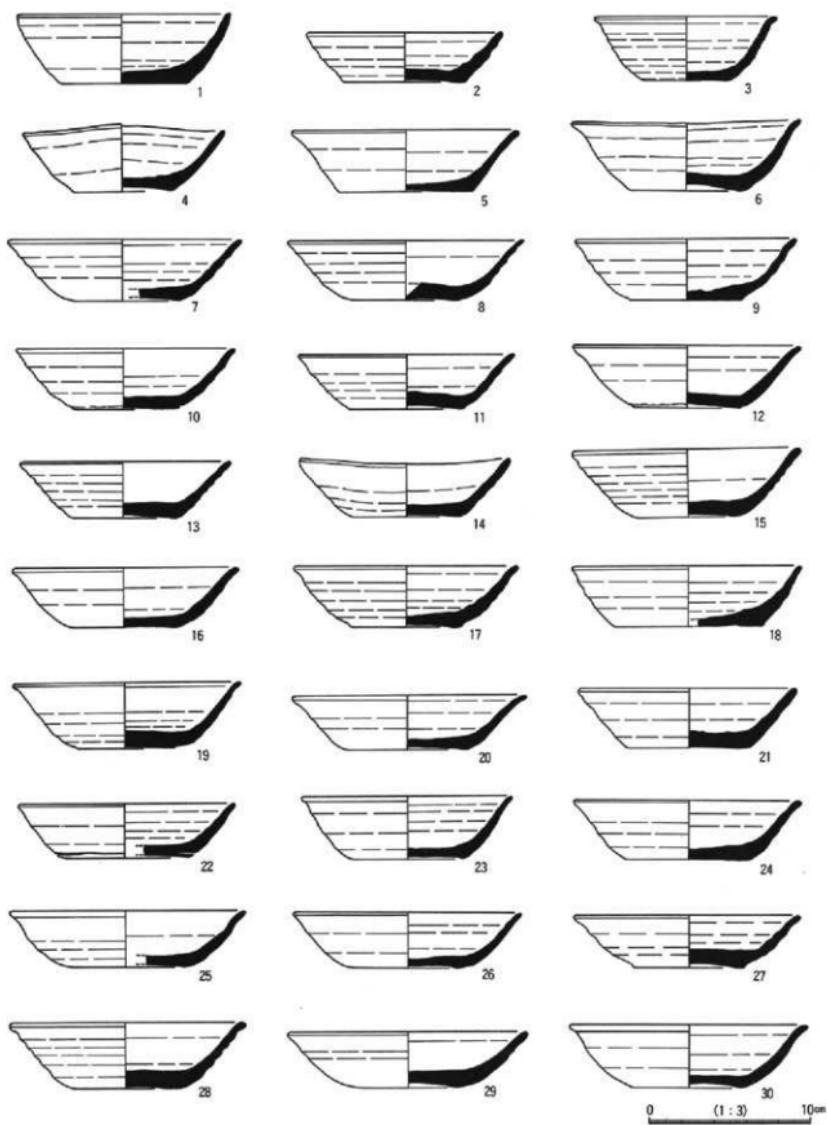
須恵器の壺は、底部の切り離しが回転糸切り無調整で、器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反するA-6類がほとんどを占める(42図、43図、44-1~21)。本類はさらに、(a)口径が14.5cm前後と大きいもの(43-19など)と、(b)口径が13.5cm前後とやや小さいもの(44-4など)、(c)口径が10cm前後とやや小さいもの(43-2・3など)に分けられる。43-7や45-2などの壺の底部外面には、「大」、「キ」などのヘラ描き文字が刻まれている。

有台壺は、無台壺に比べて量が少ないが、器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反するB-7類(44-24、45-3・4)と、器高が高くやや小さい底部をもち、体部が直線的に外反するB-8類(44-25・27)がある。底部の切り離しは、回転糸切りで、45-4には回転ヘラ削り調整がみられる。有台壺の両側に把手が付く双耳壺が多いこともHブロックの特徴で、斜方向の把手が付くC-1類(45-7~9・11)と、L字状の把手が付くC-2類(45-13)がある。底部の切り離しは、すべて回転糸切りである。

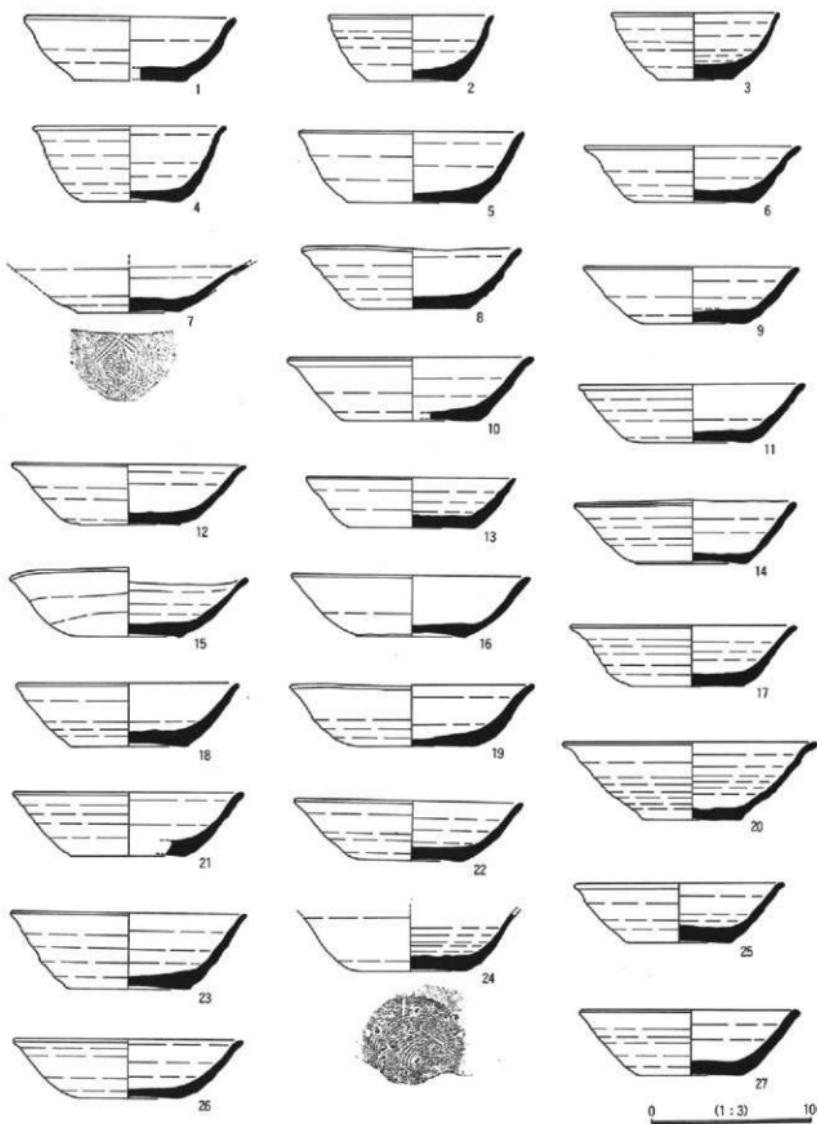
Hブロックからは須恵器壺蓋が多量に出土している。凝宝珠形のつまみをもつもの(46-18・33)も少量存在するが、主体を占めるのはF-6~8類、とくに天井部の切り離しが回転糸切りののちほぼ全面ないし外周がヘラ削りされ、器高が高く天井部と体部の境が不明瞭なF-7類(45-20、46-7・12・21・31・32など)である。次いで天井部の切り離しが回転糸切りののちヘラ削りされ、器高が高く天井部と体部の境が明瞭なF-6類(46-10・13~16など)が多く、天井部の切り離しが回転糸切りで、器高が低く偏平で天井部と体部の境が不明瞭なF-8類(同45-28、46-4~6など)も一定量存在する。49-1は、短い台部が付く風字硯で、G-2類に属する。

壺は、短い口縁部が直立ののち外反し体部がやや丸みをもつ短頸壺I-3類(47-4・6、48-2)と、長い口縁部が直立ののち外反し、体部上半に最大径をもつ長頸壺J-3類(47-1・2)がある。3は口縁部が欠損しているが、J-3類に近い器形になるものと思われる。47-2は、前述した39-1と同様の作り方をしている。3にも同じ痕跡が認められる。甕には、長胴甕K-1類(48-3)、体部上半に最大径をもつK-3類(47-5)、口縁部が直立のち外反し、底部が丸底となる大型甕L-3類(48-8)などがある。48-8は、底部の外面のタタキメおよび内面のアテメが体部下半のそれらを切り込んでおり、底部付近断面の膨らみも加味すると、須恵器の叩き出しによる丸底の製作法をとったと思われる(文献28)。

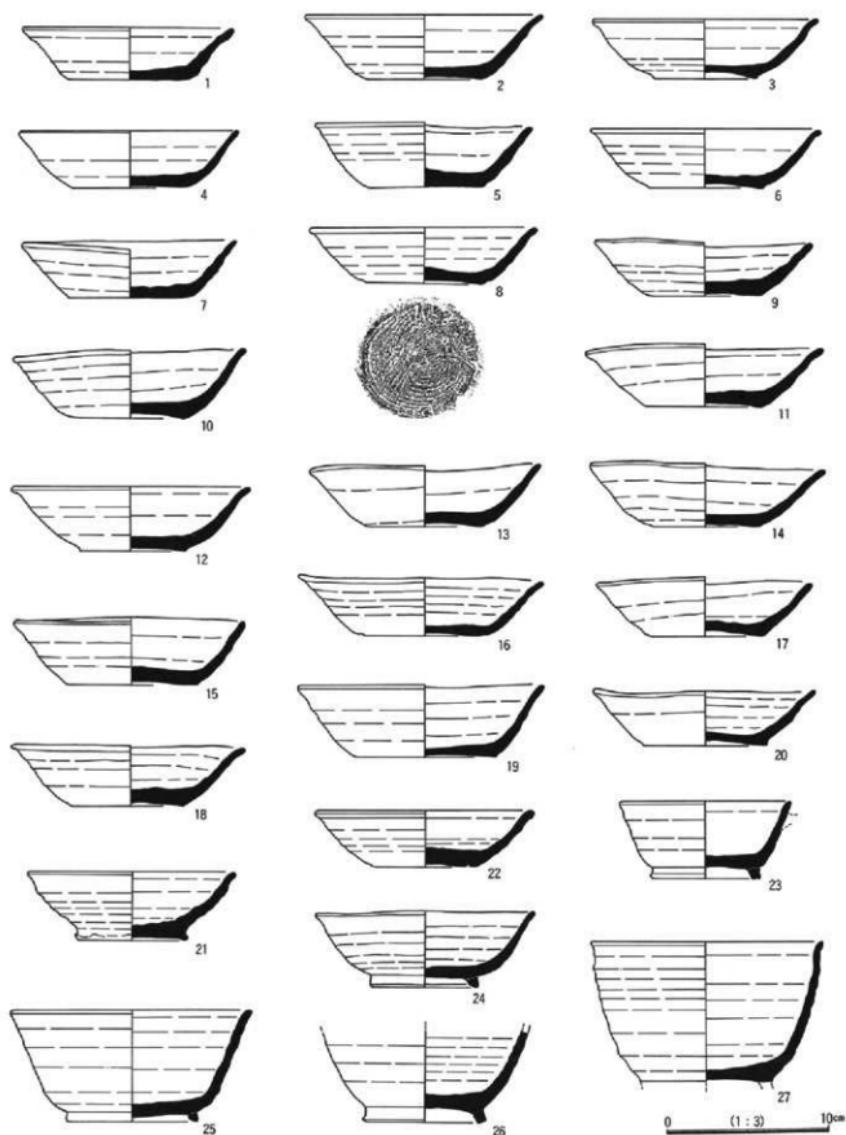
土師器は壺・皿・鉢・甕・甌の器種がある。壺はすべてロクロを使用し酸化焰焼成で、底径が小さく体部が直線的に立ち上がるA-2類(49-2~8・10)である。皿は口径が小さいC-1類(同13)と、口径の大きいC-2類(同12)がある。9・11は無底式の甕O-1類である。黒色土器は、椀・有台椀・壺の器種がある。壺は、体部がやや丸みをもつ(49-14)。有台椀は器高がやや高く体部が直線的に外反するB-3類(同15・16)がある。壺I類(同17)は、体部が丸みをもち体部中位に最大径がある。内外面にヘラミガキと黑色化処理を有する。



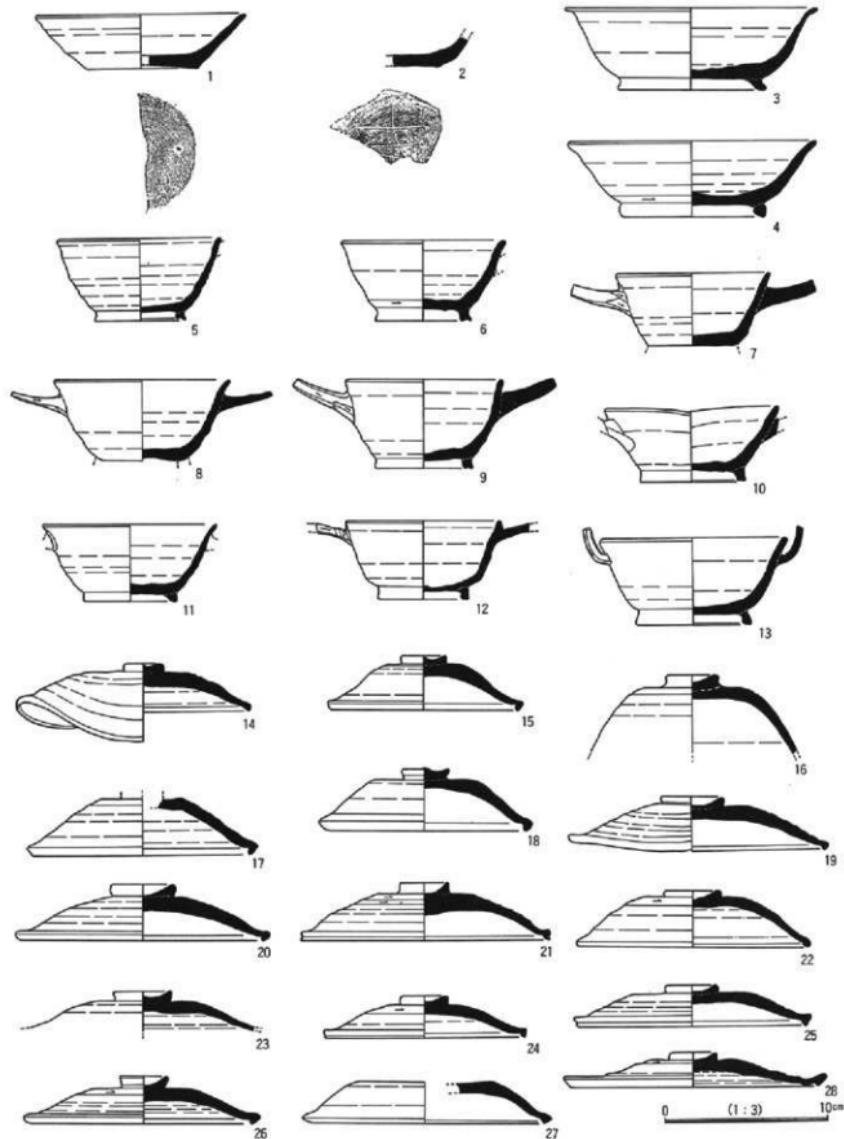
第42図 Hブロック出土遺物 須恵器 (1)



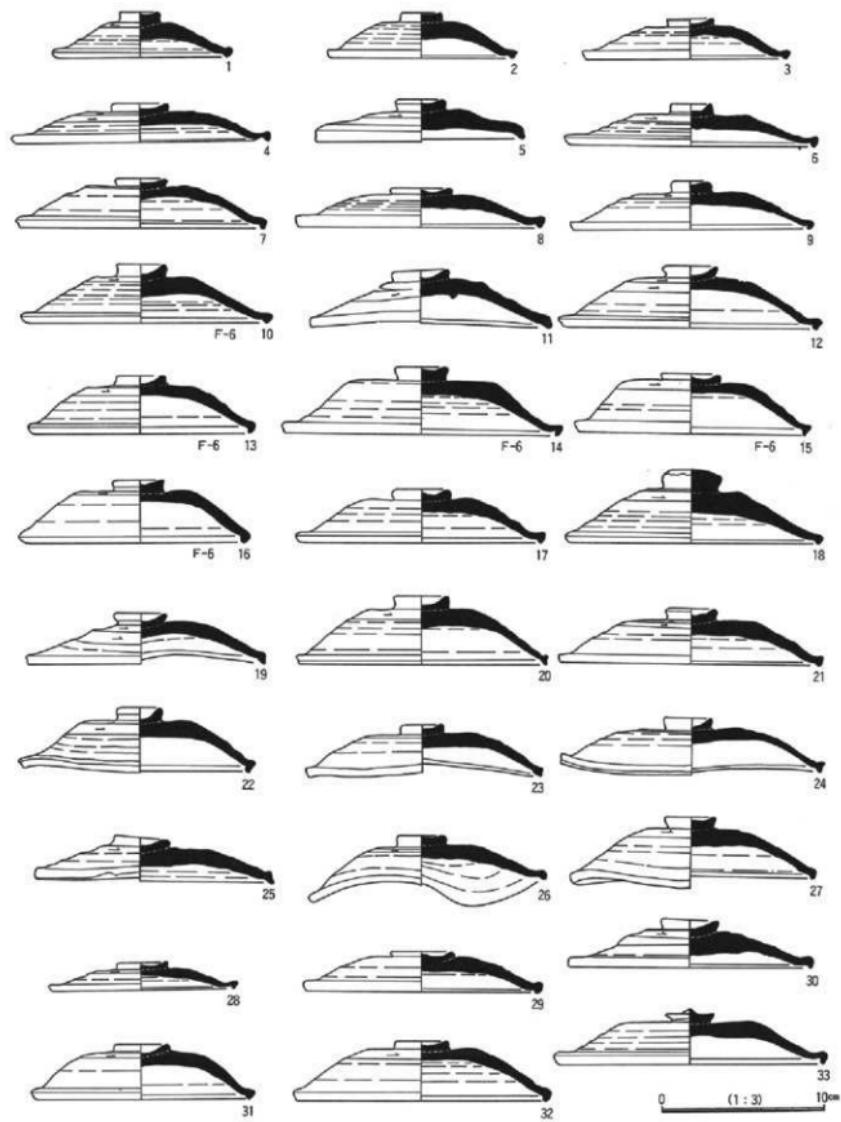
第43図 Hブロック出土遺物 須恵器 (2)



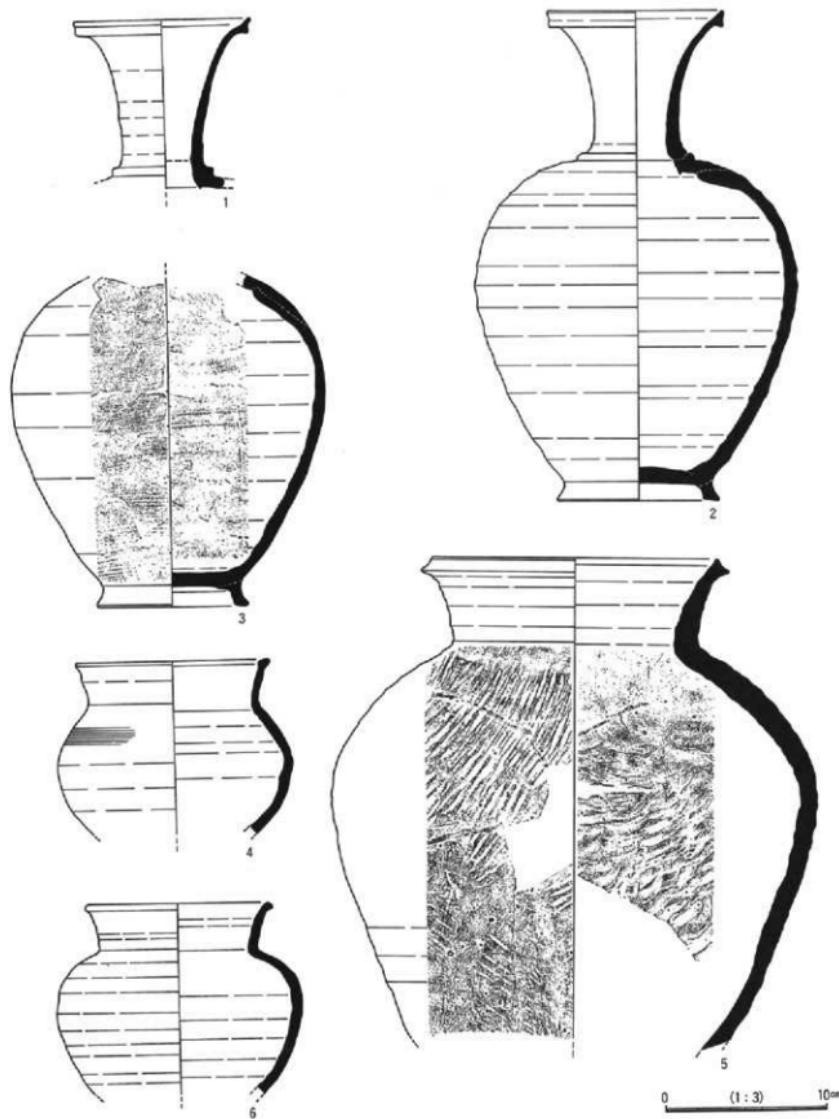
第44図 Hブロック出土遺物 須恵器 (3)



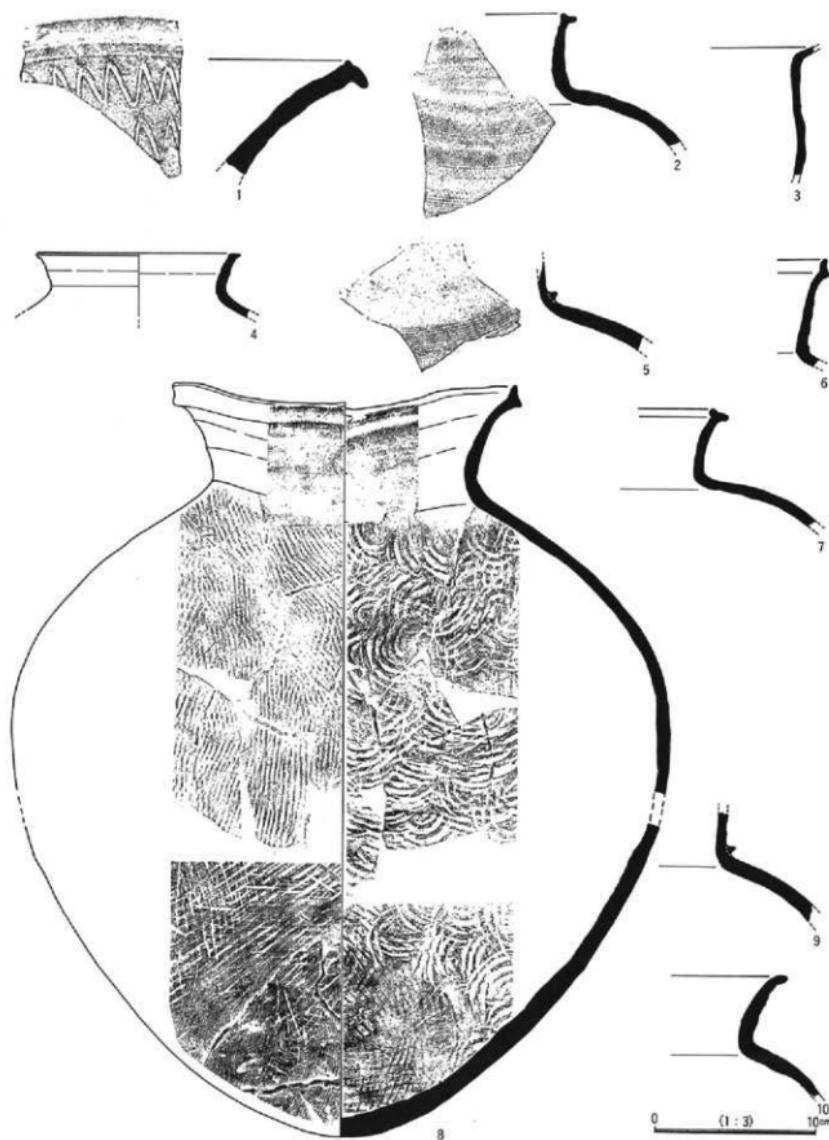
第45図 Hブロック出土遺物 須恵器(4)



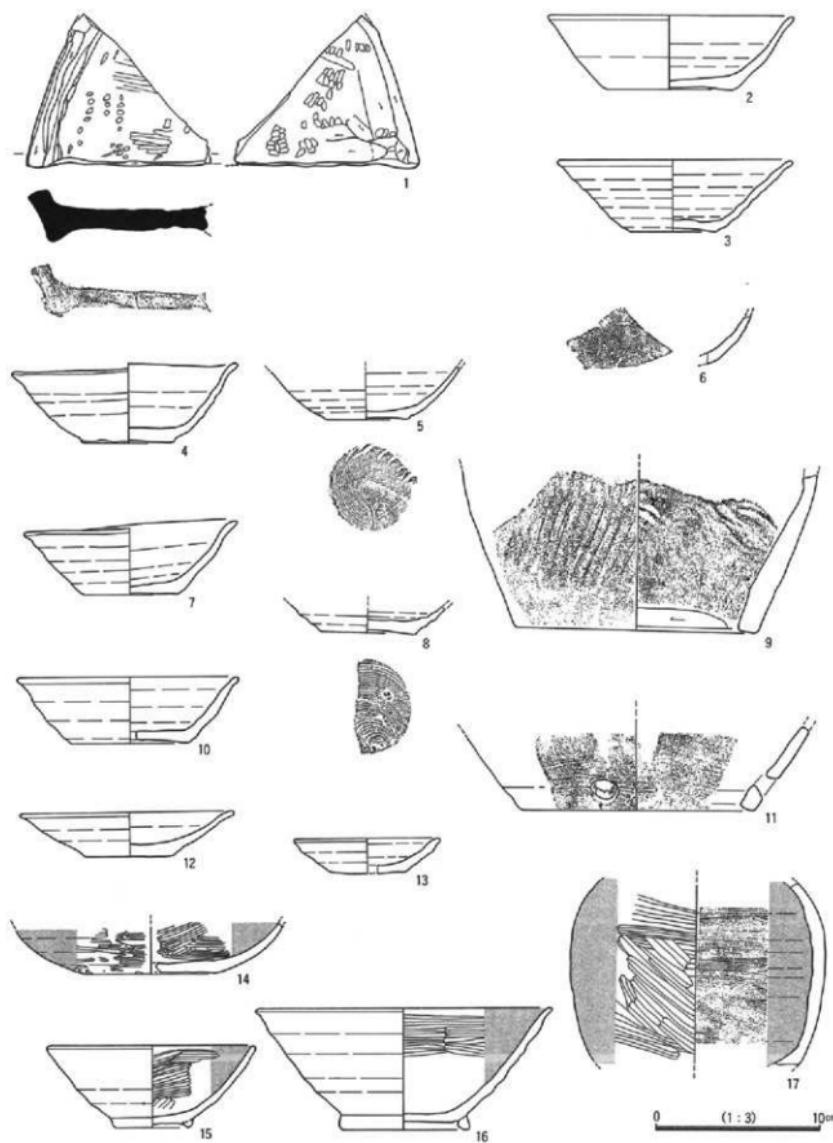
第46図 Hブロック出土遺物 須恵器(5)



第47図 Hブロック出土遺物 須恵器 (6)



第48図 Hブロック出土遺物 須恵器 (7)



第49図 Hブロック出土遺物 陶器・土器

(4) 灰原Jブロック出土の遺物(第50~58図、図版32~40)

S Q42~45窓跡の東下斜面にあたる灰原Jブロックからは、須恵器の壺類・皿・蓋・壺・甕と、土師器の壺・皿・蓋・鉢・甕・甌、黒色土器の椀・有台椀・蓋などが出土している。

須恵器の壺は、底部の切り離しが回転糸切り無調整で、器高と底径がやや小さく、体部が直線的に外反するA-6類が主体を占める(50-1~27)。このほか、ヘラ切りで器形が逆台形のA-5類(50-28~30・51-1)、底部外周に手持ちヘラ削り調整が施されるA-2類(51-3)、身が深く体部が直線的に立ち上がるA-3類(51-8)、底部の切り離しが静止糸切りのA-4類(同6)も少量出土している。

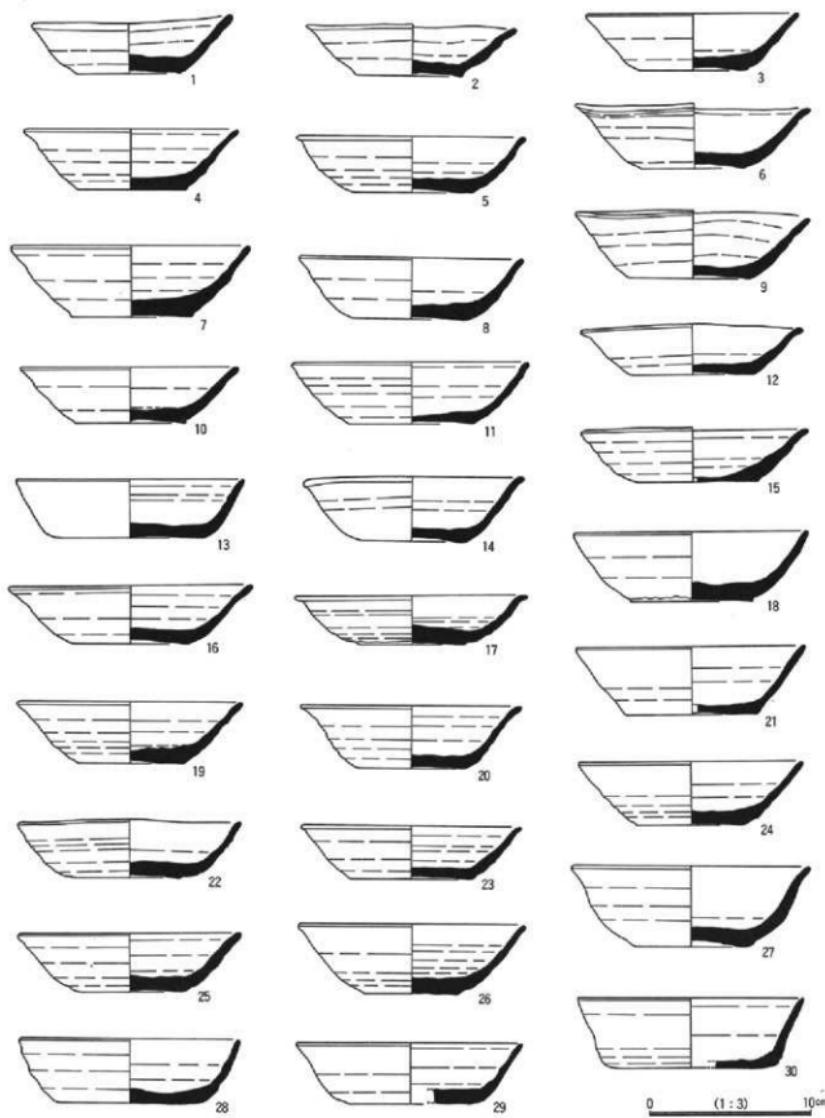
有台壺は量が少ないが、底部の切り離しが回転糸切りで、器高と底径がやや小さく体部が直線的に外反するB-7類(51-13・18・20)と、器高が高くやや小さい底部をもち、体部が直線的に外反するB-8類(同17・21)が主である。このほか底部の切り離しが静止糸切りで体部下半がやや丸みをもつB-4類(同14)、ヘラ切りで壺部の器形が逆台形を呈するB-5類(同15・19)、双耳壺(同16)も少量出土している。52-20・21は、器高が低く体部が大きく外反する段皿D類で、底部の切り離しが回転糸切りで、色調は暗赤褐色を呈する。52-19は、口縁部が丸みをもち偏平なものある。台部は不明だが、一応高壺E-2類として分類しておく。

須恵器蓋は、F-6~8類の壺蓋が主体を占める。F-6類(52-4・5・11・12・14)は、天井部の切り離しが回転糸切りのちヘラ削りされ、器高が高く天井部と体部の境が明瞭なものである。F-7類(同2・3・6~8・10)は、器高が高く天井部と体部の境が不明瞭なものである。F-8類(同1・9・13)は器高が低く偏平で天井部と体部の境が不明瞭なものである。このほか平坦な頂部に垂直に近い縁部が付くF-1類(52-17・18)と、天井部のほぼ全面が回転ヘラ削りされ、器高が高く天井部が丸みをもつ口縁端が内湾するF-4類(同15・16)も少量存在する。15の天井部の切り離しは静止糸切りである。

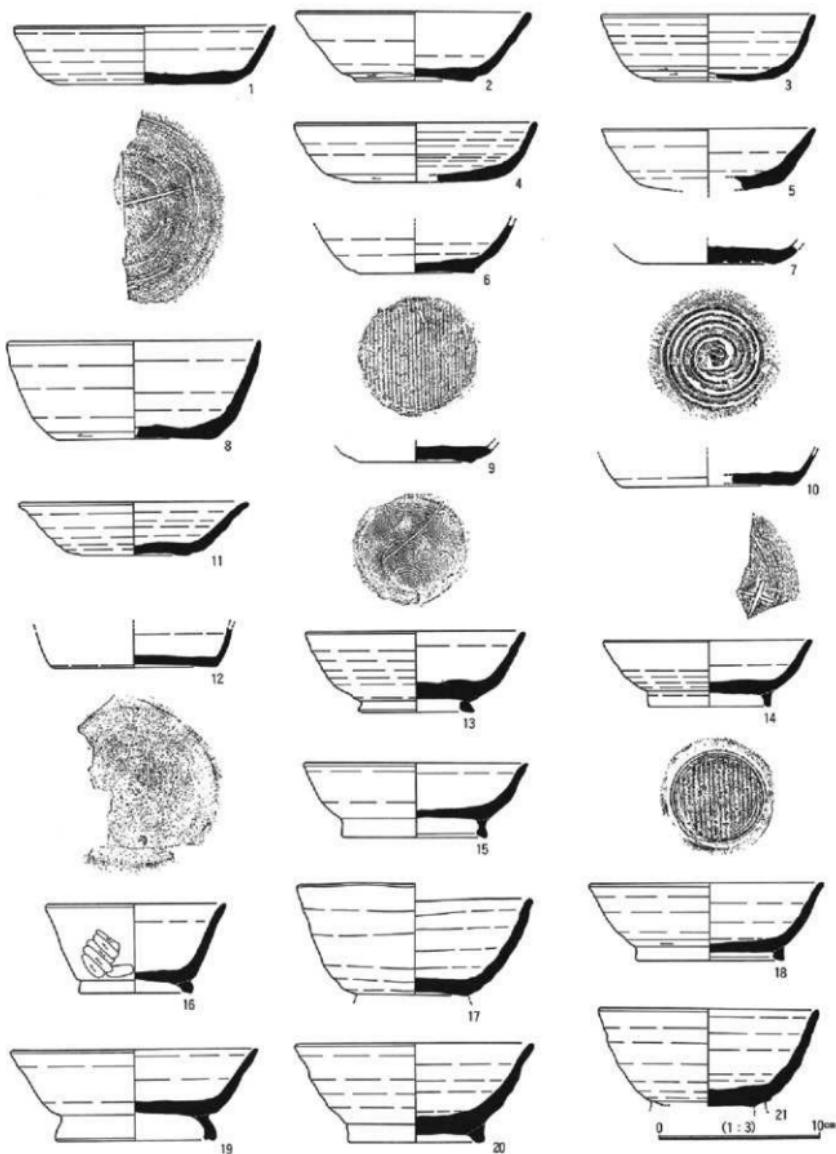
壺は、短い口縁部が直立し体部が丸みをもつ短頸壺I-1類(53-3)と、口縁部が外反し体部が丸みをもつI-2類(52-22)、体部がやや長く丸みをもつI-3類(53-1)がある。甕は、体部中位に最大径をもつ長胴甕K-2類(53-2)と、体部上半に最大径をもつK-3類(53-4~6・54-2)、口縁部が直立ののち外反し体部上半に最大径をもつ大型甕L-1類(55-1)、口縁部が強く外反し体部中位に最大径をもつL-2類(54-1)がある。

土師器は壺・皿・蓋・鉢・甕・甌などの器種がある。壺類はすべてロクロを使用し酸化焰焼成で、器高が低く体部が直線的に立ち上がる無台壺A-1類(58-4・5)と、底径が小さく体部が直線的に立ち上がる同A-2類(56-1~22)、有台壺B-1類(56-23~25)がある。皿は口径の小さいC-1類(56-26)と、口径の大きいC-2類(57-5)がある。鉢は体部が丸みをもつH-1類(57-14)、甕は中型のK-2類(同8~12)と折り返し口縁をもつK-4類(13)がある。58-1は、底部中央に2個以上の穴をもつ多孔式の甌O-3類に相当する。

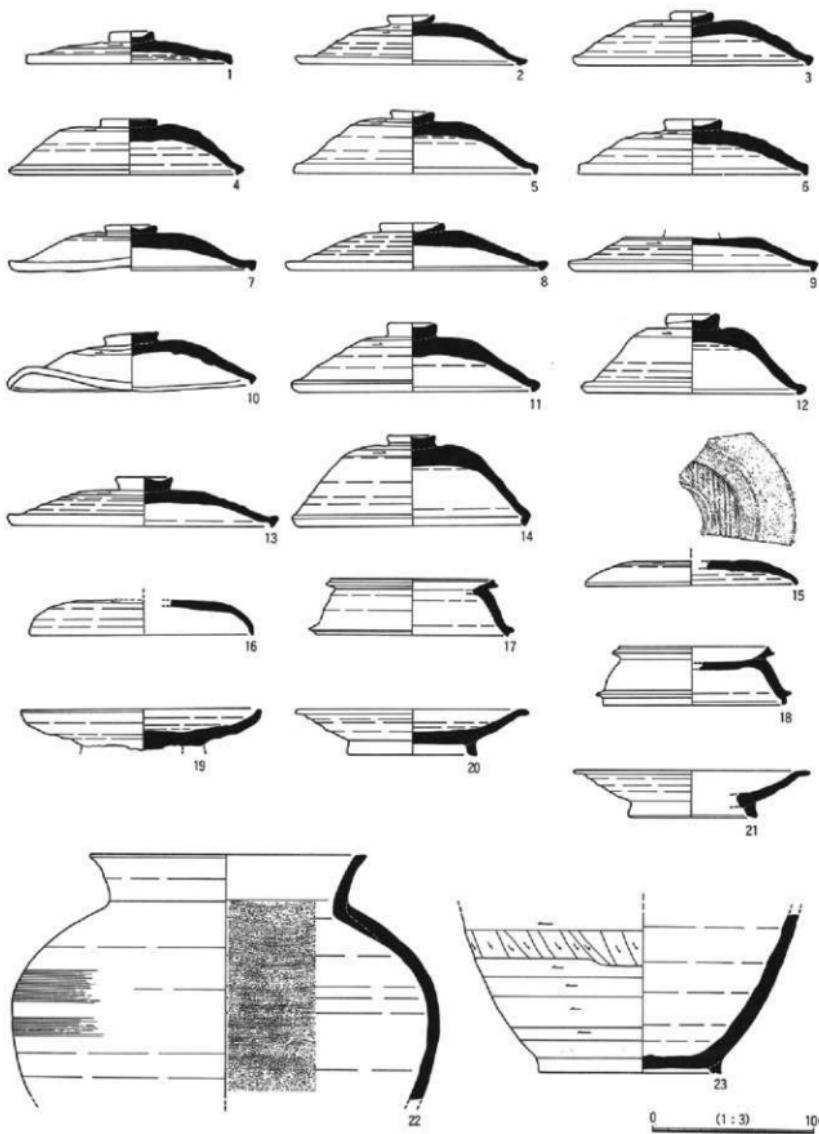
黒色土器のうち椀は、平底で体部が直線的に立ち上がるA-3類(58-7)、有台椀は器高が低く体部が直線的に外反する皿形のB-1類(同12)、器高がやや高く体部が直線的に外反するB-3類(同8~11・13)がある。14は宝珠形のつまみをもち天井部が丸みをもつ蓋F類である。



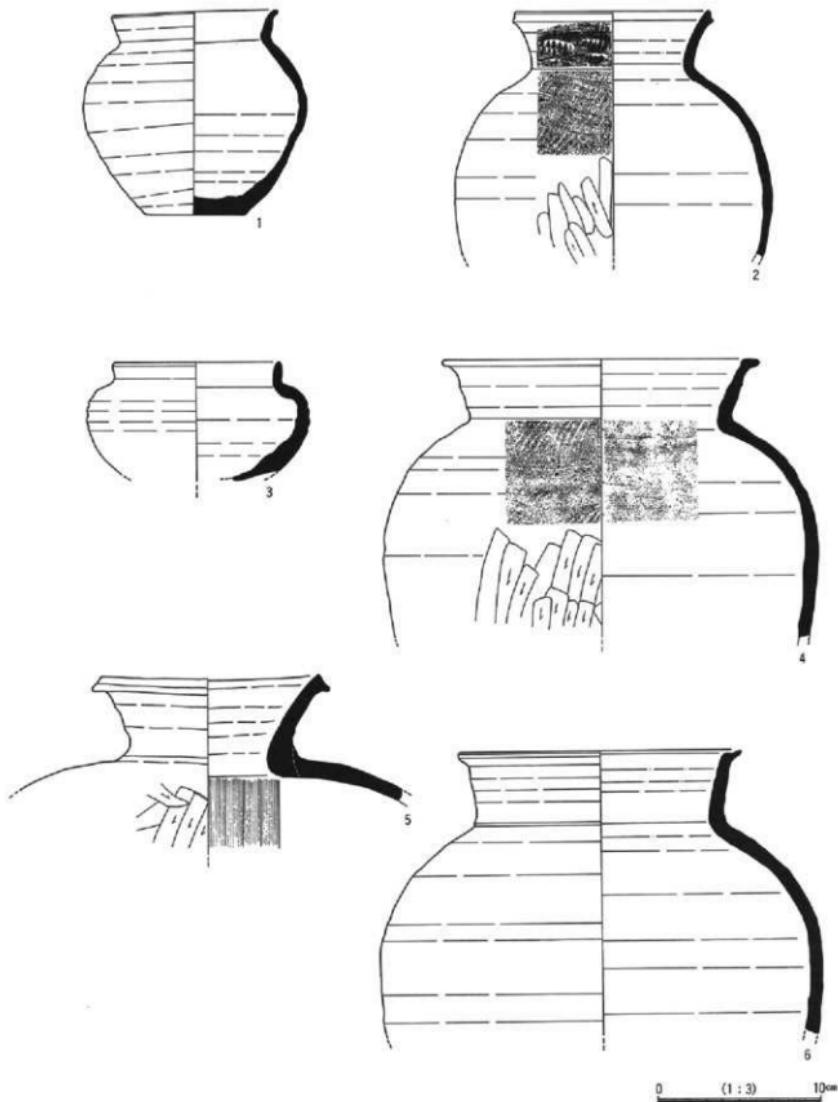
第50図 Jブロック出土遺物 須恵器 (1)



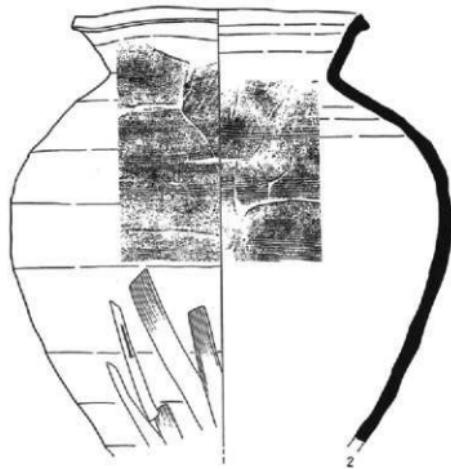
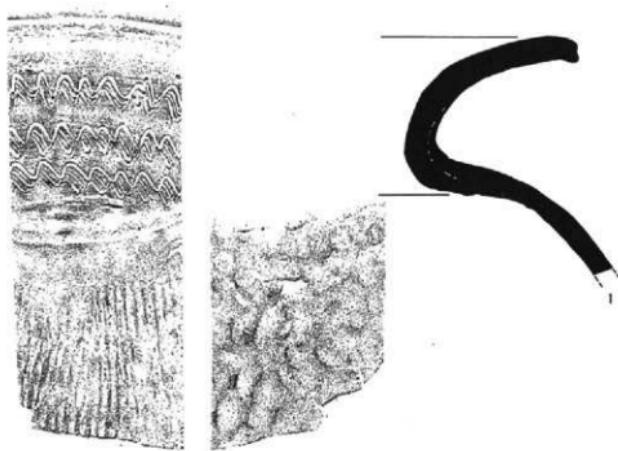
第51図 Jブロック出土遺物 須恵器 (2)



第52図 Jブロック出土遺物 須恵器 (3)

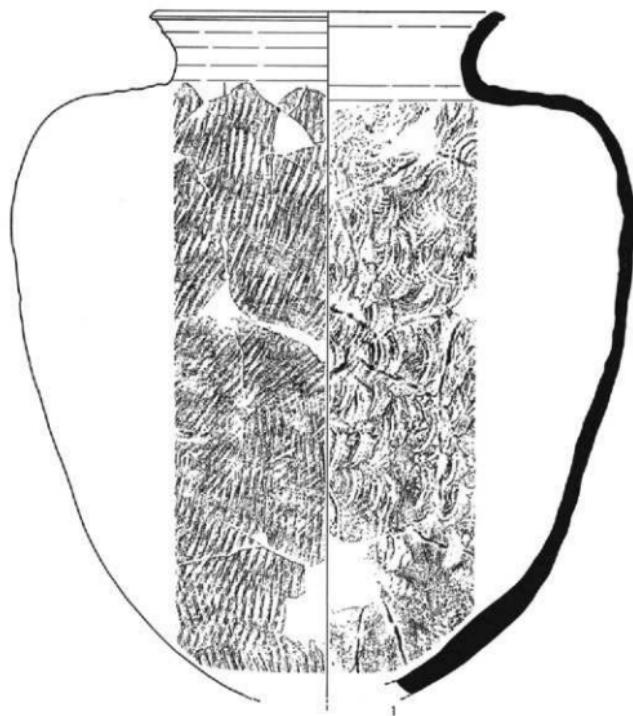


第53図 Jブロック出土遺物 須恵器 (4)

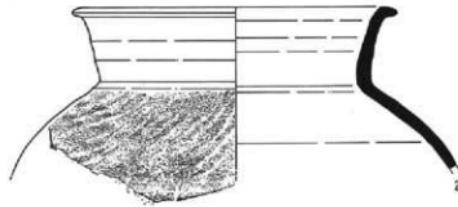


0 (1 : 3) 10cm

第54図 Jブロック出土遺物 須恵器 (5)



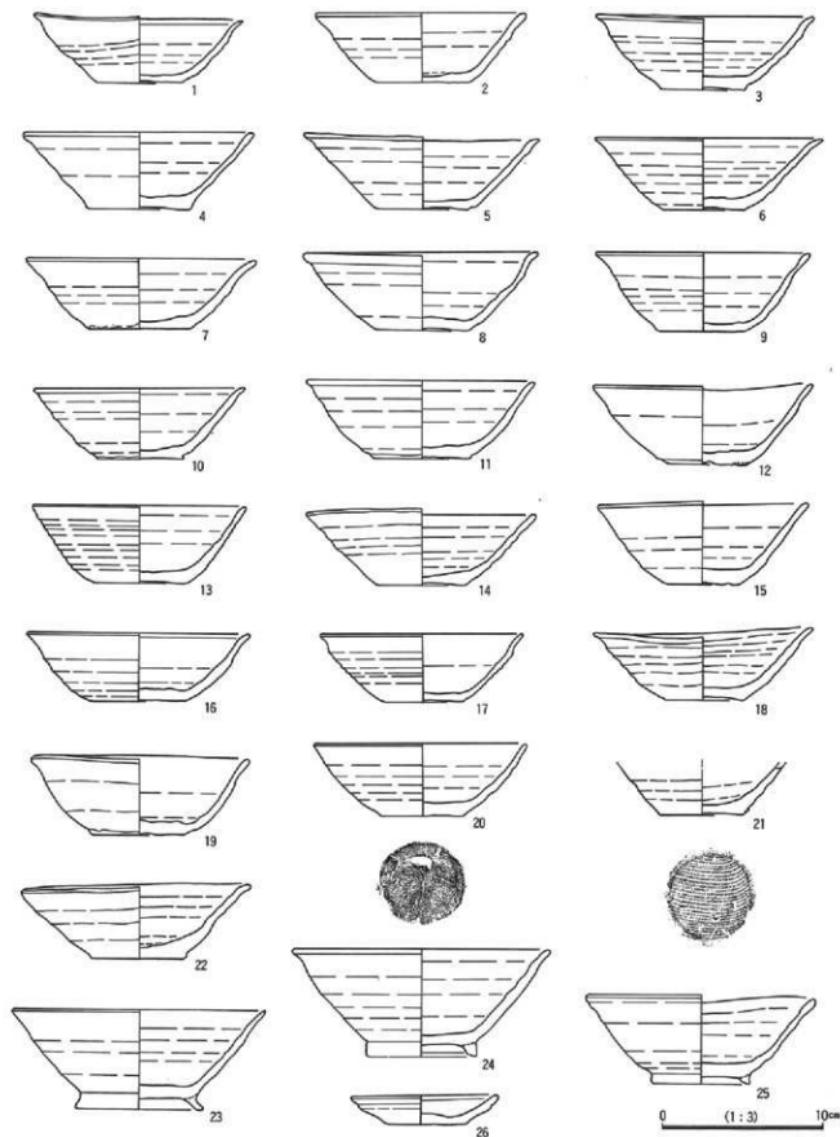
1



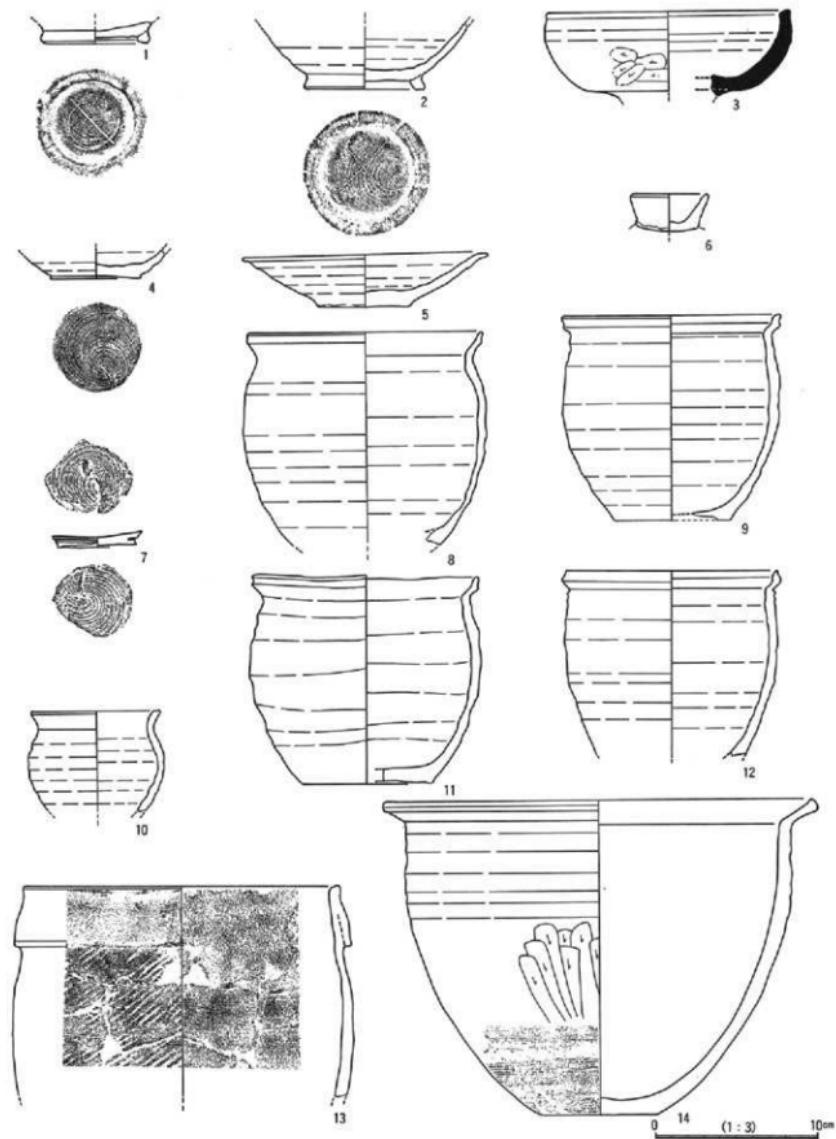
2

0 (1 : 3) 10cm

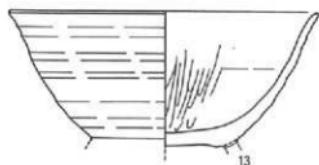
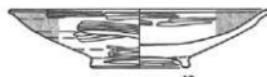
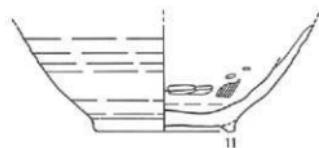
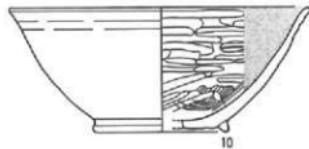
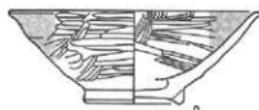
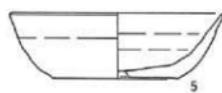
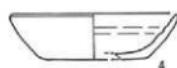
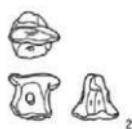
第55図 Jブロック出土遺物 須恵器 (6)



第56図 Jブロック出土遺物 土師器 (1)



第577図 Jブロック出土遺物 土師器(2)



0 (1 : 3) 10cm

第58図 Jブロック出土遺物 土師器(3)

(5) 灰原Lブロック出土の遺物 (第59~64図、図版40~46)

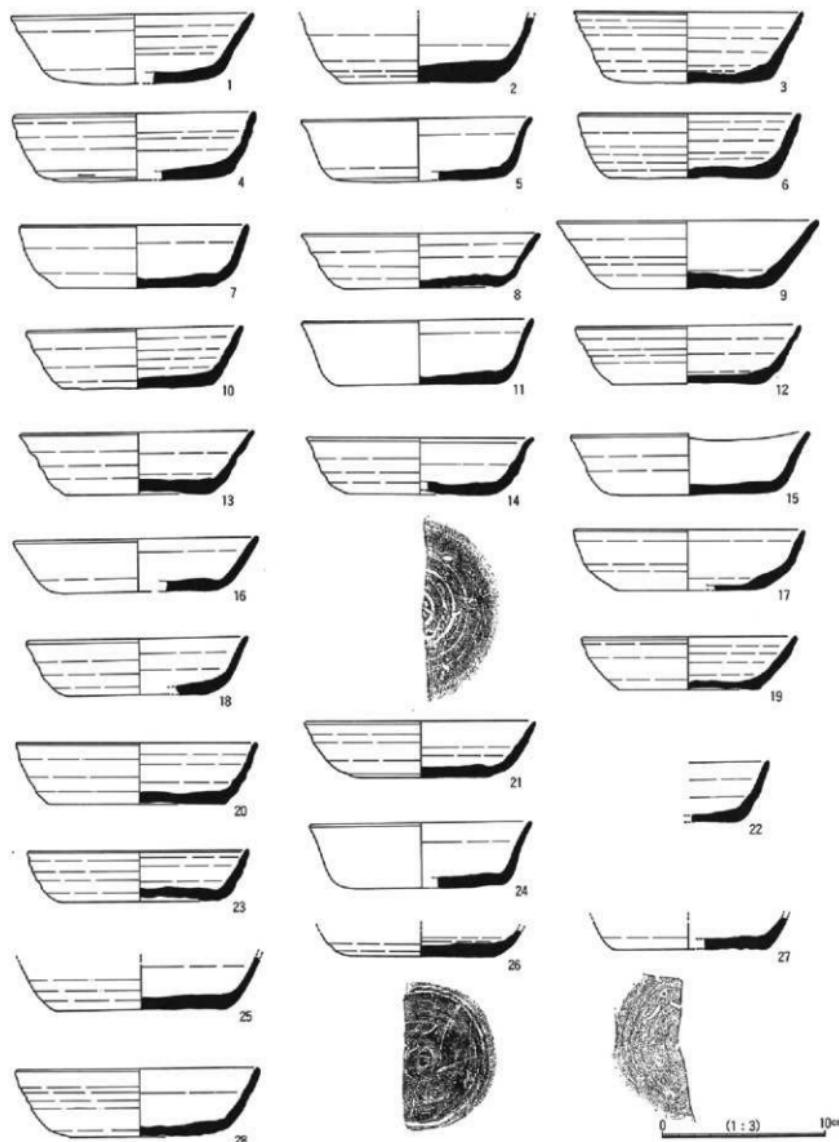
S Q 1 窯跡の東下斜面にあたる灰原Lブロックからは、須恵器の壺・有台壺・高壺・蓋・壺・壺・横瓶と、土師器の壺および黒色土器の有台碗などが出土地している。

須恵器の壺は、底部の切り離しがヘラ切りで、器形が逆台形のA-5類 (59-8・10~16・19~27、60-9~22、61-1) が主である。さらに底部外周に手持ちヘラ削り調整が施されるA-2類 (59-1・18) や身が深く体部が直線的に立ち上がるA-3類 (59-2~4・6・7・28、60-1~5) がある。60-4は、底部の切り離しに板状の工具を使用している。このほか底部の切り離しが回転糸切りの壺 (60-23~27) も少量あるが、24と26を除いては出土層位が明かでない。壺の底部外面には、「郡」(59-26) や「八」(同27) などのヘラ書き文字が刻まれている。

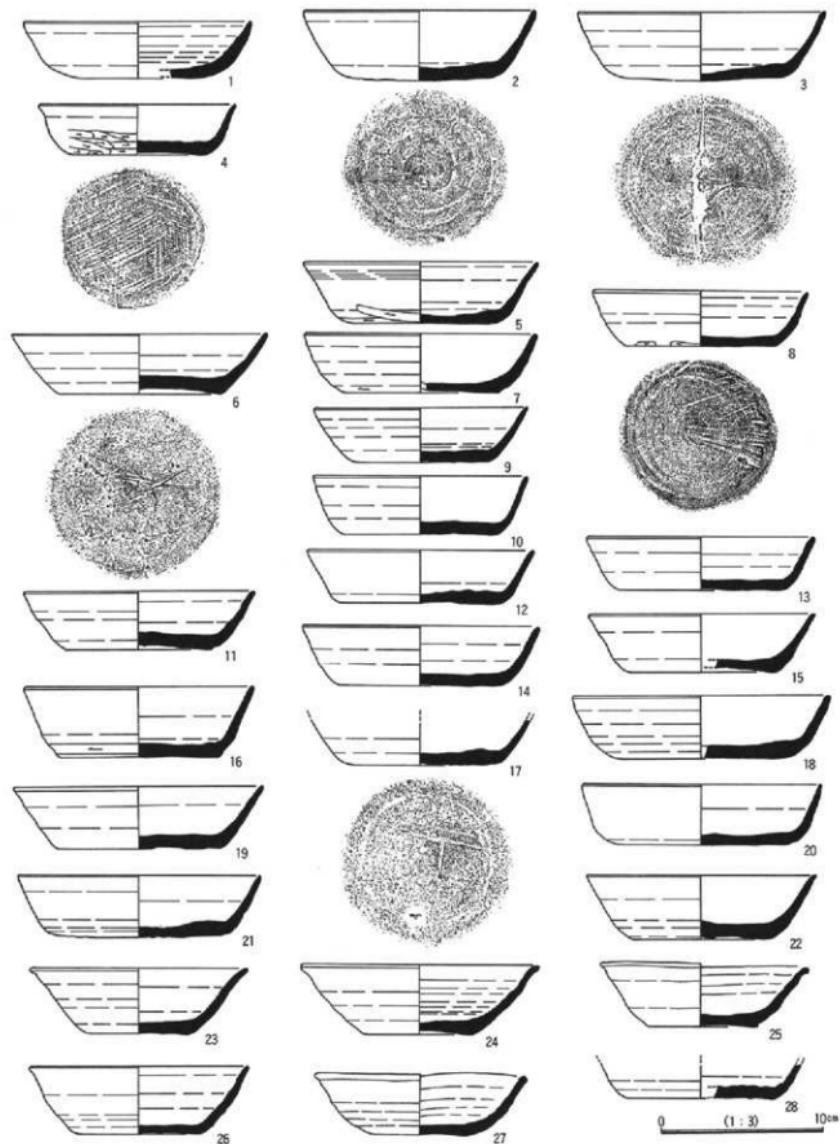
有台壺は、底部の切り離しがヘラ切りで、口径が無台壺より一廻り大きく、壺部の器形が逆台形を呈するB-5類が特徴的である。本類には(a)口縁部がやや外反ないし体部がやや丸みをもつもの (61-5・17~21) と、(b)口縁部から体部にかけて直線的に立ち上がるもの (61-6・8~14・16・22~29、62-1) の二つが含まれる。稜椀タイプのB-1類はなく、身の深いB-2類もほとんど認められない。このほか、底部の切り離しが静止糸切りで体部下半がやや丸みをもつB-4類 (61-15) も少量存在する。底部の切り離しが回転糸切りで、器高が高く小さい底から体部が直線的に立ち上がるB-8類 (62-2) が1点出土しているが、層位が明らかでなく、混入の可能性もある。高台壺の底部外面にも、「郡」(62-3) や「蔭ガ」(同4) などのヘラ書き文字が刻まれている。

須恵器蓋は、平坦な頂部に垂直に近い縁部が付くF-1類 (62-6) と、疑宝珠形のつまみをもち天井部が丸みをもつF-3類 (62-8)、器高が高く天井部が丸みをもつF-4類 (62-9・13・15)、天井部がほぼ平坦で器高がやや低いF-5類 (同14・17・19) の壺蓋と、つまみがなく、ほぼ平坦な頂部に斜めに近い縁部がつくのF-11類 (同11)、の五種がある。いずれも口縁端部の返りは顕著でない。また天井部の切り離しが静止糸切りによるものが、F-4類 (62-15) とF-5類 (62-17) に各1点認められた。灰原Lブロックにおける蓋の器形は多様であるが、つまみ部の欠損している蓋も加味すれば、器高が高く天井部が丸みをもつF-4類が比較的多いようである。蓋の天井部外面にも、「郡」(62-12) や「物」(同14) などのヘラ書き文字が刻まれている。高壺の脚部と思われる資料が1点 (63-1) 出土しているが、詳細は不明である。一応E-3類に仮分類しておく。

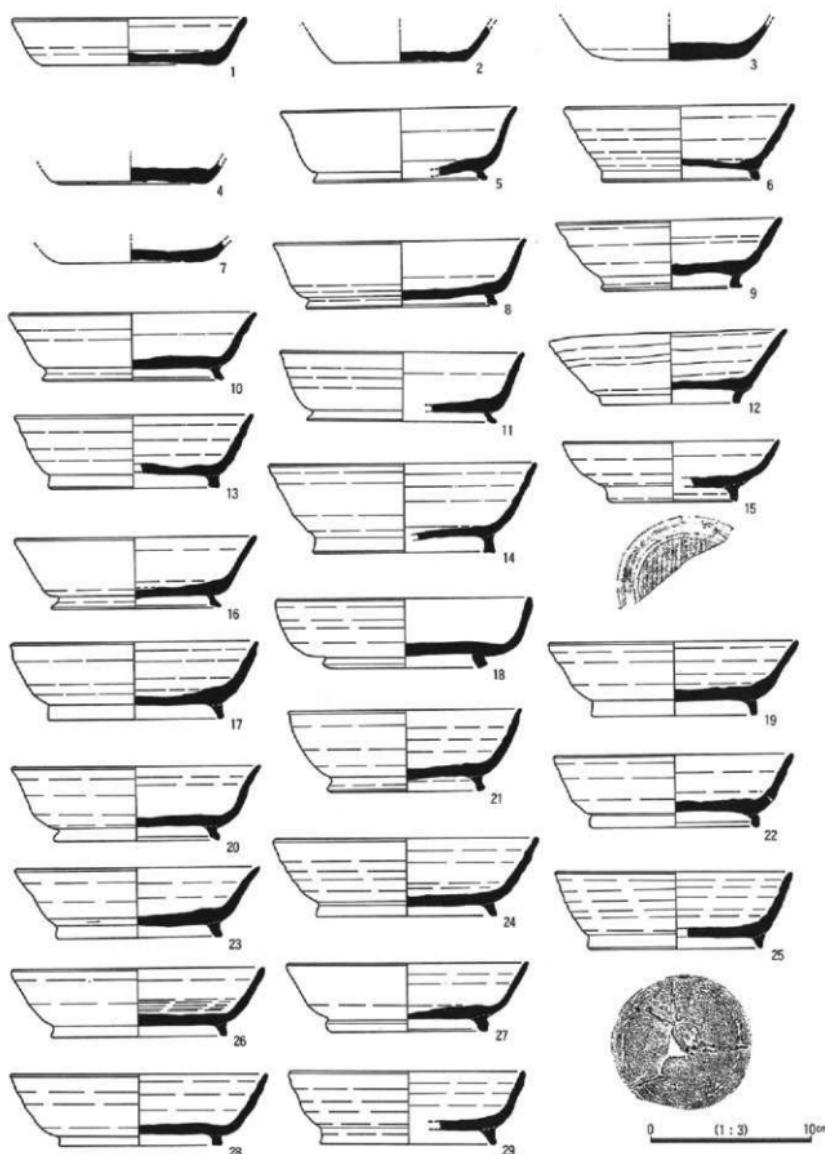
短頸壺は、短い口縁部が直立し体部が丸みをもつI-1類 (63-9) と、短い口縁部が外反し体部が丸みをもつI-2類 (63-2・4) がある。長頸壺は、壺の体部上半に2個一対の有孔突起をもつJ-4類 (63-5・6) の破片が2点出土している。64-1は、口縁部が外反し体部がやすぼまる壺K-1類にあたる。64-4は口縁部が外反する大型壺L-2類に属するもので、頸部に二段の波状沈線文が施されている。63-10は、短い口縁部に横に長くやや角張った体部がつく横瓶M-1類で、体部の両側を円盤状の粘土を接合することによって閉塞している。63-3・8は横瓶の口縁部と思われる。



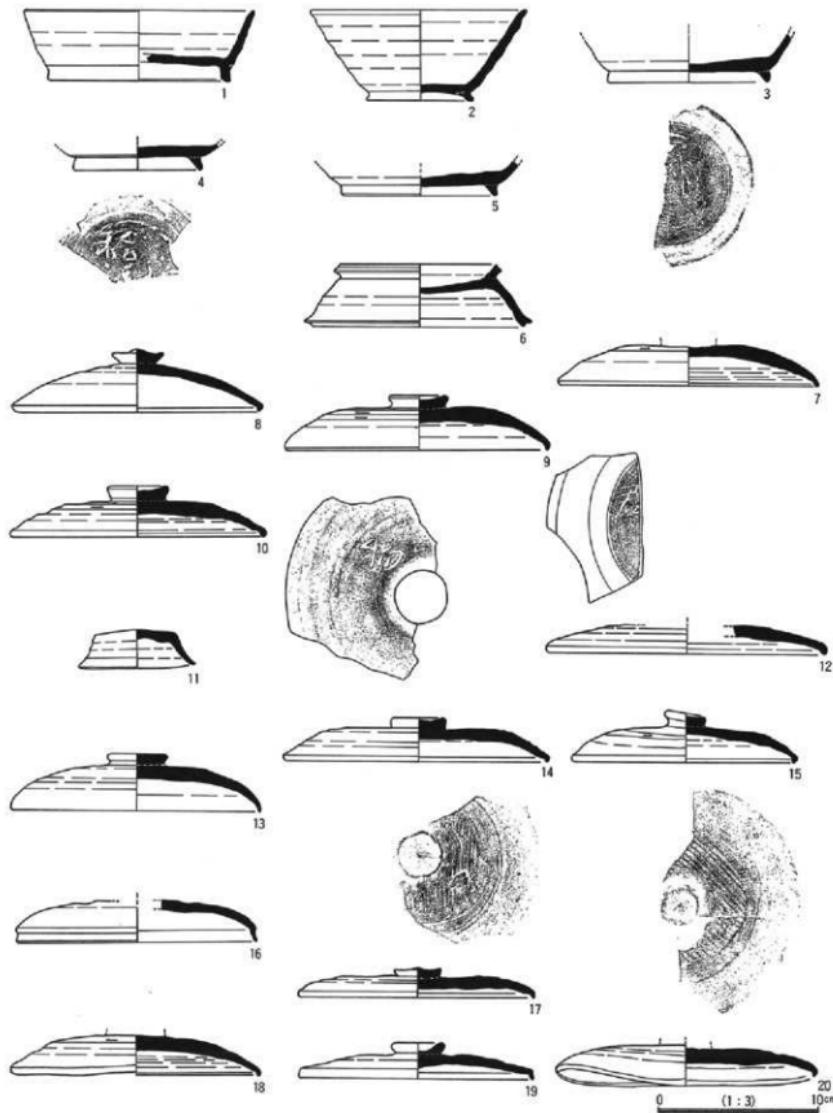
第59図 Lブロック出土遺物 須恵器(1)



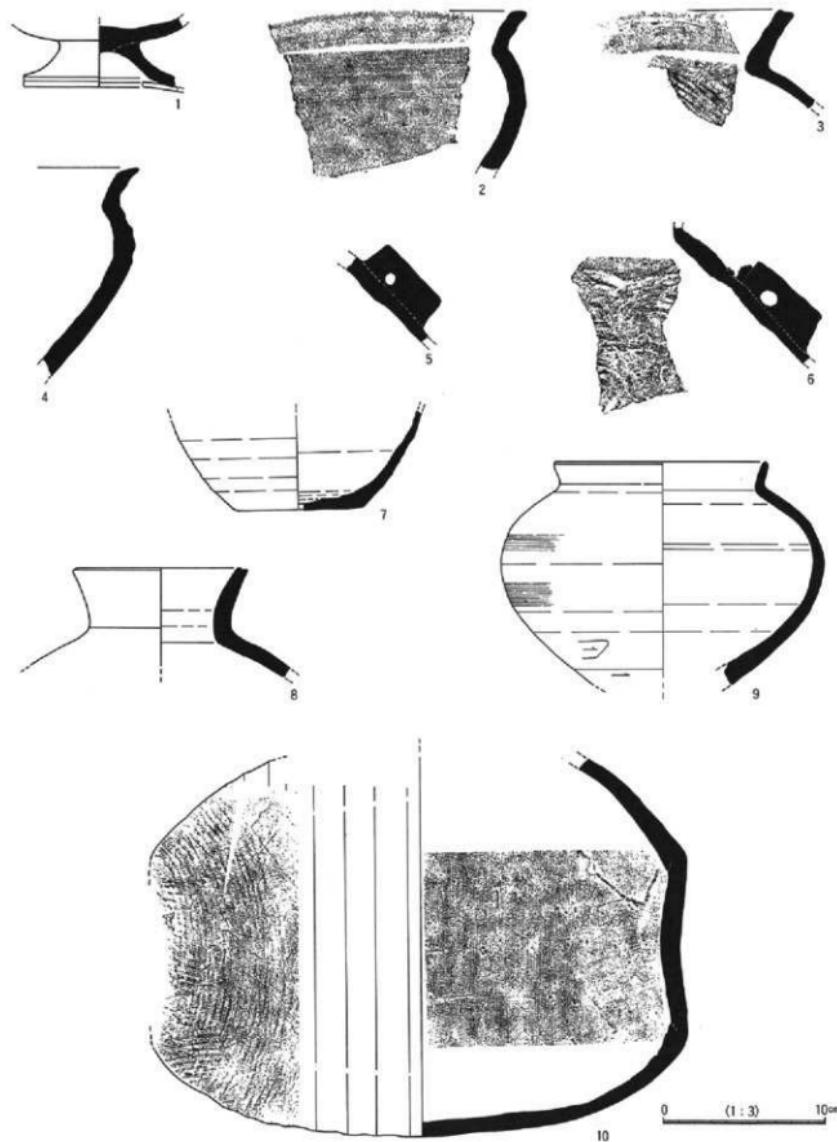
第60図 Lブロック出土遺物 須恵器(2)



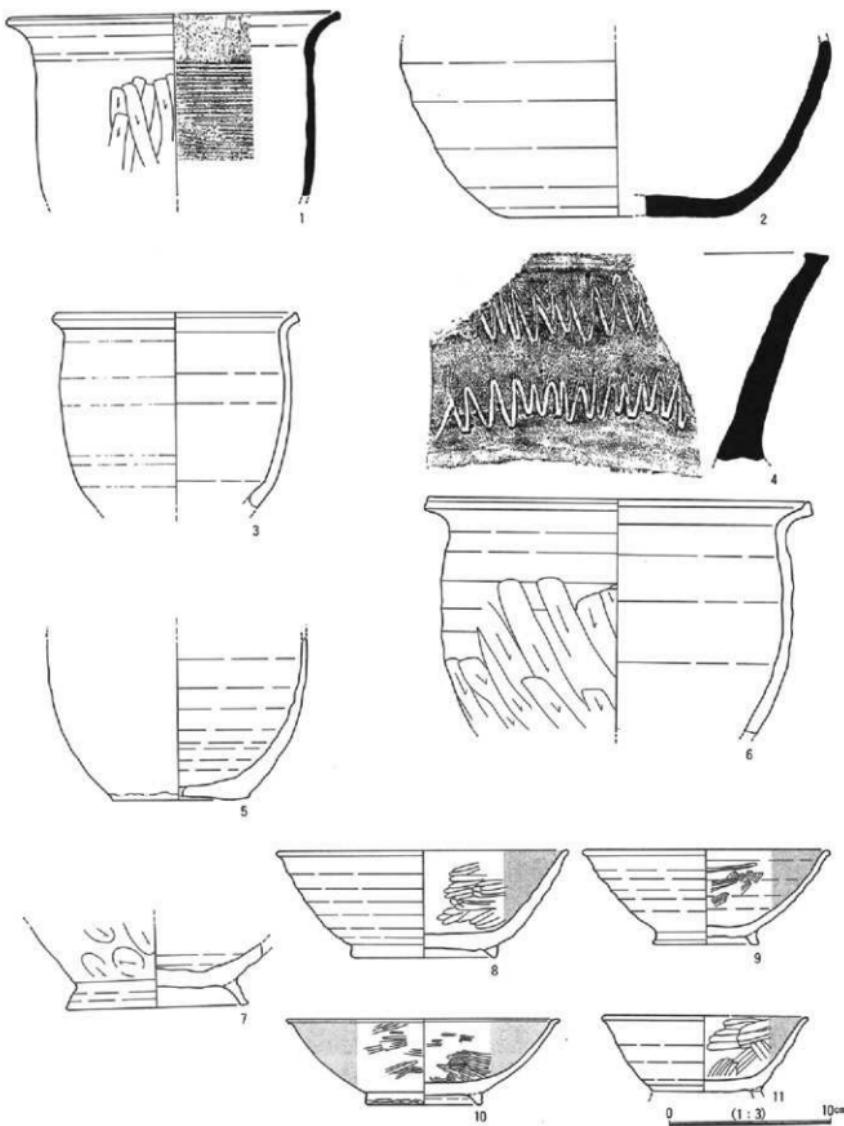
第61図 Lブロック出土遺物 須恵器(3)



第62図 Lブロック出土遺物 須恵器(4)



第63図 Lブロック出土遺物 須恵器(5)



第64図 Lブロック出土遺物 須恵器(6)・土師器

灰原Lブロックから出土した土師器Aの器種は、壺のみである。壺は器高がやや低い中型のK-2類（同3・5）と、器高が高く口縁部が外反のち軽く直立する大型のK-3類（同6）の二種がある。なお64-1は還元焰焼成であるが、胎土や調整技法などから土師器の焼き損じないし焼き台に二次転用された可能性がある。64-7は、高台を有する壺ないし壺と思われる。

土師器Bの黒色土器は、底部の切り離しが回転糸切りで、内黒ないし両黒の有台椀が4点出土している。器高がやや高く体部が丸みをもつB-2類（64-10）と、器高がやや高く体部が直線的に外反するB-3類（同8・9・11）の二種がある。

（6）灰原Mブロック出土の遺物（第65・66図、図版46～48）

S Q46窓跡の東下斜面にあたる灰原Mブロックからは、須恵器の壺・有台壺・蓋・壺・横瓶と、土師器の壺・有台壺・蓋、黒色土器の有台椀および陶硯などが出土している。

須恵器の壺は、底部の切り離しがヘラ切りで、器形が逆台形のA-5類（65-3・6～11・14）が主であるが、身が深く体部が直線的に立ち上がるA-3類（同1・2・4・5）も目立つ。さらに底部が丸みをもち全面に回転ヘラ削り調整が施されるA-1類（同13）や、底部の切り離しが静止糸切りで、体部下端が丸みをもつA-4類（同16）も出土している。底部の切り離しが回転糸切りの壺（同15）も少量出土している。

有台壺は、底部の切り離しがヘラ切りで、口径が大きく壺部の器形が逆台形を呈するB-5類が出土している。65-18は、口縁部がやや外反ないし体部がやや丸みをもつ。

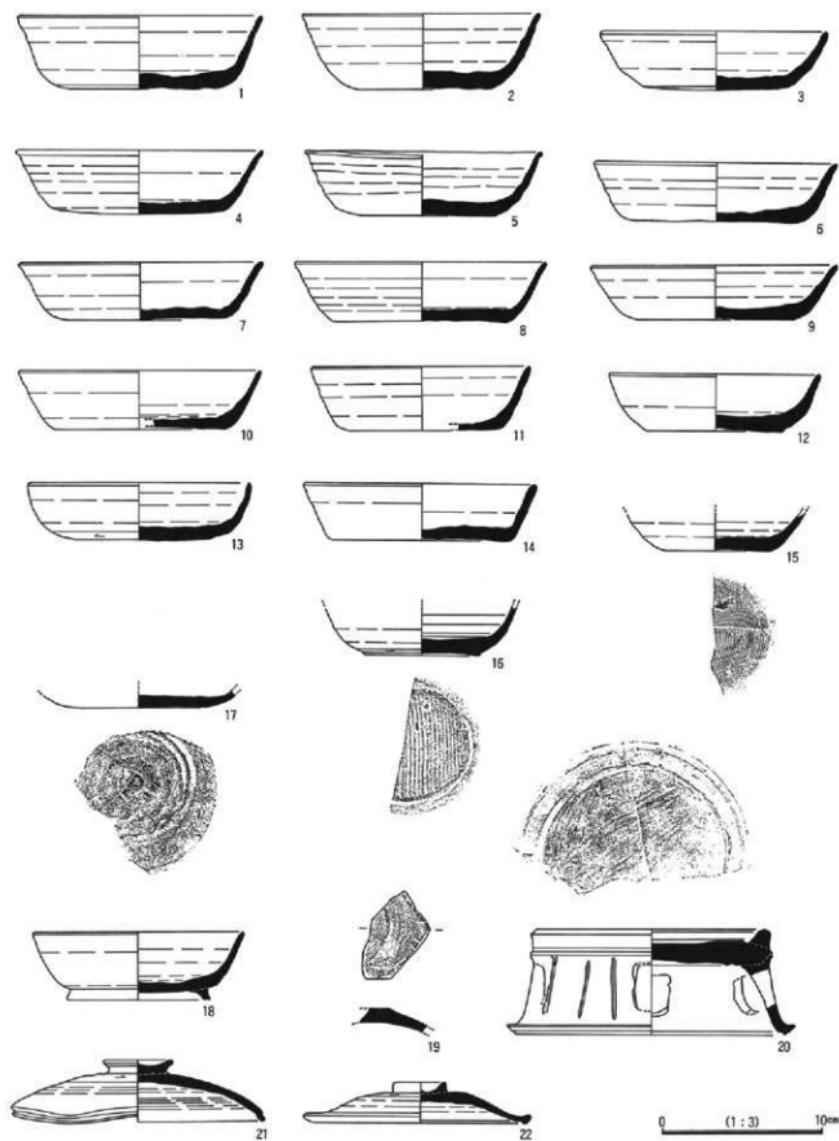
須恵器壺蓋は、器高が高く天井部が丸みをもつF-4類（65-21）と、天井部の切り離しが回転糸切りで、器高が低く天井部と体部の境が不明瞭なF-7類（同22）の二種がある。65-19の蓋の天井部外面には、「口仁大カ」のヘラ書き文字が刻まれている。

65-20は、直徑が約14cmを測るG-1類の円面硯で、脚部には5～6単位の透し窓と縦方向の三本の沈線が施されている。

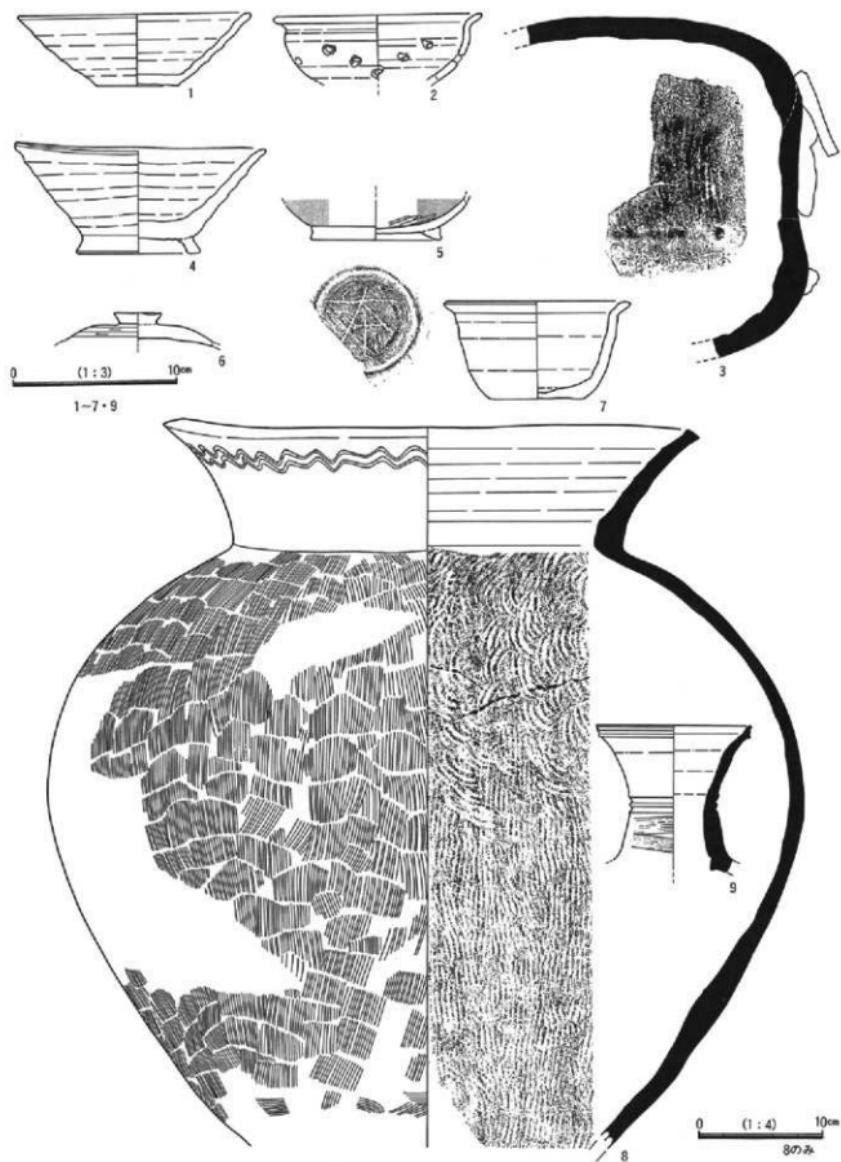
壺は、口縁部片のみ1点（66-9）出土している。頸部中位に二本の沈線、同下半にカキメが施されている。口縁部の器形から長頸壺J-3類に相当するものと思われ、66-8の大壺の中に入った状態で出土している。66-8は口縁部が強く外反し、体部中位に最大径をもつ大型壺のL-2類に属するもので、頸部に二段の波状沈線文が施されている。66-3は、短い口縁部に横に長くやや角張った体部がつく横瓶M-1類で、体部の両側を円盤状の粘土を接合することによって閉塞している。外面に自然釉がかかり、側面には須恵器片と粘土が付着している。

土師器Aには壺と有台壺、蓋などの器種がある。壺はロクロを使用した酸化焰焼成で、底径が小さく体部が直線的に立ち上がるA-2類（66-1）のものである。有台壺もロクロを使用した酸化焰焼成で、器高が高く体部が直線的に立ち上がるB-1類（同4）である。蓋は凝宝珠形のつまみをもち、天井部と体部の境が明瞭なF-1類（同6）で、天井部外周にヘラ削りがみられる。66-2は体部に三個4単位の穿孔がみられる壺類で、脚部が付く可能性もある。

黒色土器は、底部の切り離しが回転糸切りで、両黒の有台椀（66-5）が1点出土している。有台椀の底部外面には、「本カ」のヘラ書き文字が刻まれている。



第65図 Mブロック出土遺物 須恵器(1)・陶硯



第66図 Mブロック出土遺物 須恵器(2)・土師器

(7) 灰原Pブロック出土の遺物（第67～70図、図版48～51）

SQ 4・5・9窯跡の東下斜面にあたる灰原Pブロックからは、須恵器の环・有台环・蓋・鉢・壺・甕・鍋と、土師器の环・甕および黒色土器の有台椀などが出土している。

須恵器の环は、底部の切り離しがヘラ切りで、器形が逆台形のA-5類（67-5～11）が主である。さらに底部が丸みをもち全面に回転ヘラ削り調整が施されるA-1類（同1）や外周に手持ちヘラ削り調整が施されるA-2類（同2）、身が深く体部が直線的に立ち上がるA-3類（同3・4）も出土している。このほか底部の切り離しが回転糸切りの环（同12～14）も少量あるが、これらは上部のⅢ層から出土したものである。

有台环は、口径が大きく体部下半に稜をもつB-1類が特徴的である。本類には(a)回転ヘラ削りによる明確な稜をもつもの（67-17～20、68-1）と、(b)稜はもつが削りの痕がはっきりしないもの（67-15・16、68-3・4）の二つが含まれる。底部の切り離しがヘラ切りで、口径が小さく器高が高いB-2類も1類に次いで多い。本類には(a)回転ヘラ削りによる明確な稜をもつもの（67-21・22）と、(b)稜がなく体部が直線的に立ち上がるもの（同23～26）の二つが含まれる。灰原SブロックのB-2類似品はほとんど双耳环となるが、本類には耳の痕は認められない。このほかヘラ切りで身の深いB-3類（68-5・8）や、底部の切り離しが静止糸切りのB-4類（68-7）も少量存在する。段Ⅲ（68-21）はⅢ層からの出土である。

須恵器环蓋は、天井部全面に回転ヘラ削り調整が施され、器高がやや低いF-5類（同14～16）が主であるが、天井部が丸みをもつもの（68-17）もある。

鉢は、口縁部がほぼ直立し体部上半に二段の波状沈線文がみられるH-1類（69-1）と、底部が丸くなるこね鉢のH-3類（68-18・20）底部がある。長頸壺は、口縁部が長く外反し体部中位に最大径をもつJ-1類（69-3）と、やや長い口縁部が直立のち外反するJ-2類（同2）がある。69-6は口縁部が強く外反し、体部中位に最大径をもつ大型甕L-2類に属するものである。鍋N-1類も1点（70-2）出土している。胎土は脆いが青灰色を呈する。

土師器Aには环と甕の器種がある。环はロクロを使用した酸化焰焼成で、底径が小さく体部が直線的に立ち上がるA-2類（同1・4）のものである。甕は基本的にロクロを用いず、内外面にハケメ調整が施されるK-1類（70-5～7）に属する。

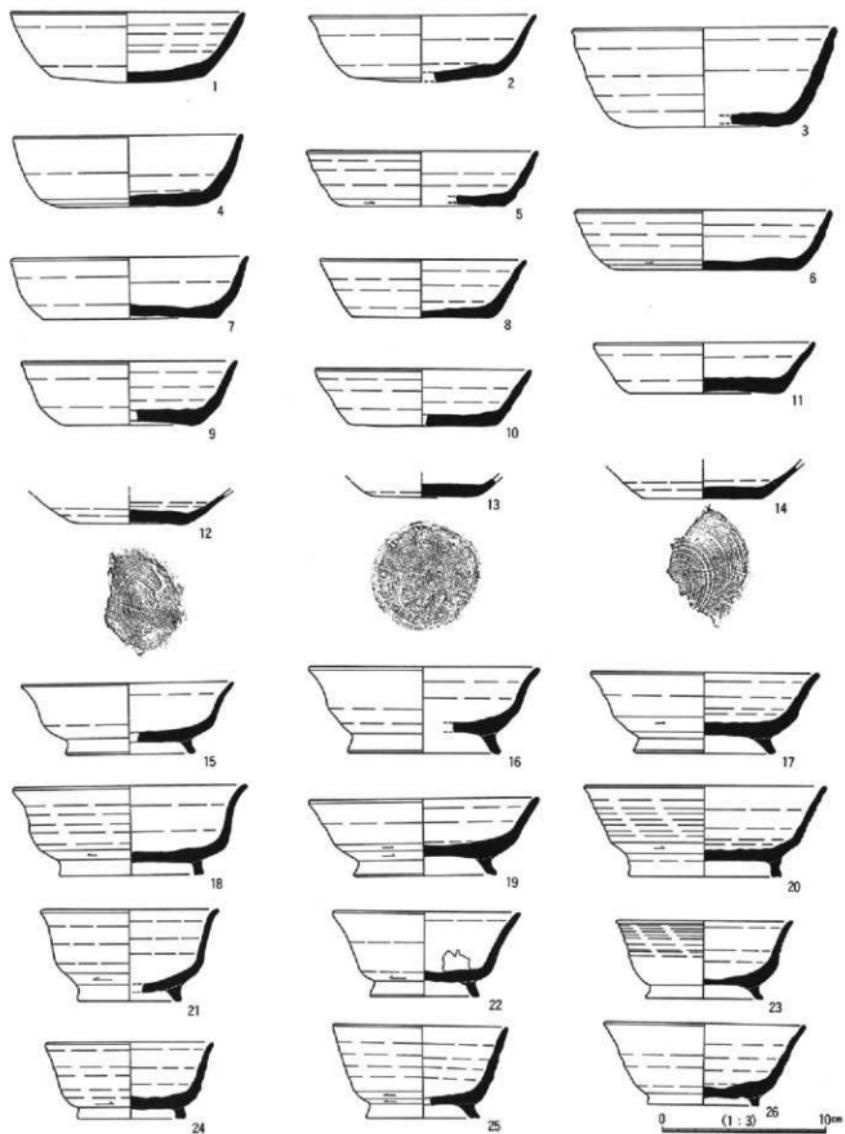
黒色土器は、底部の切り離しが回転糸切りで、内黒の有台椀（70-3）が1点出土している。

(8) 灰原Sブロック出土の遺物（第71図、図版51・52）

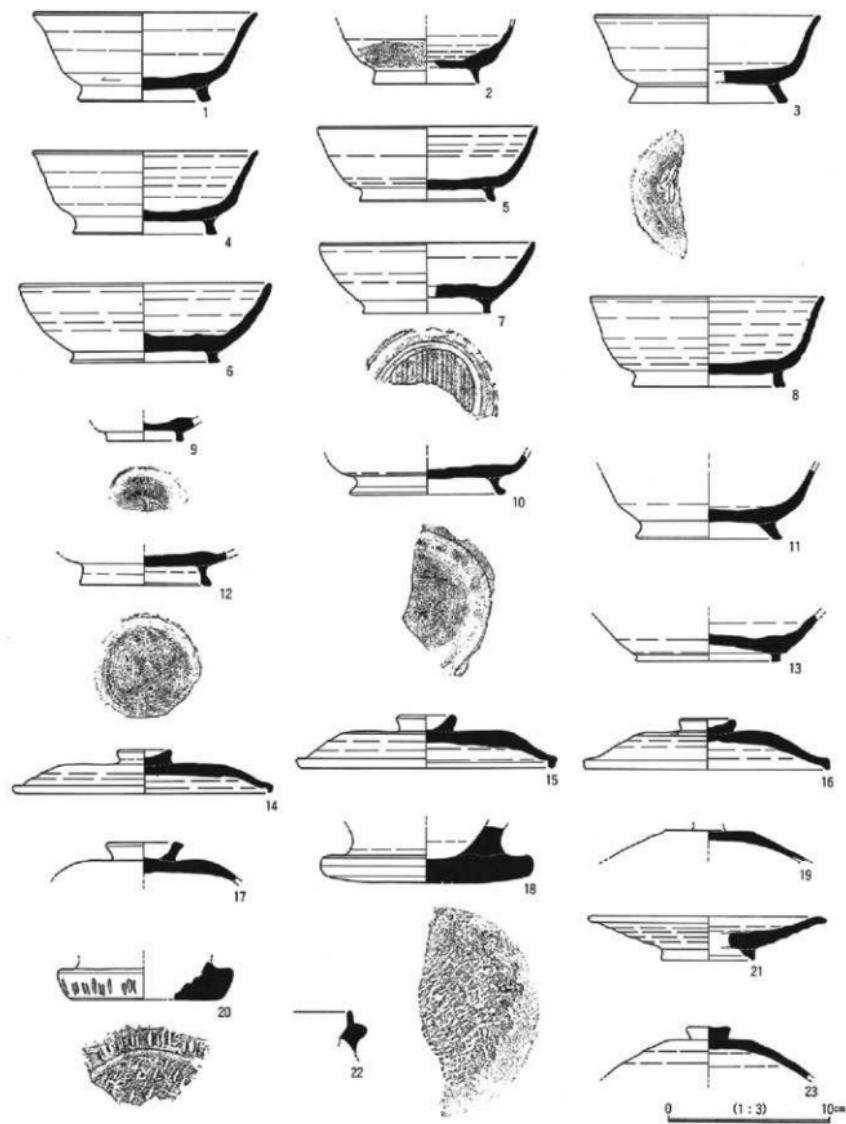
灰原Sブロックは灰原Pブロックの北側に隣接しており、器種の構成や製作技法はPブロックに共通する点が多い。

須恵器环は、A-1類（71-1・2）とA-2類（同3～6）の二種のみが出土している。有台环は、B-1類a（71-15）と同類b（同7）、ヘラ切りで身の深いB-3類（同8～12・14）がある。B-2類似の器形2点（同13・21）は、すべてC類の双耳环となる。

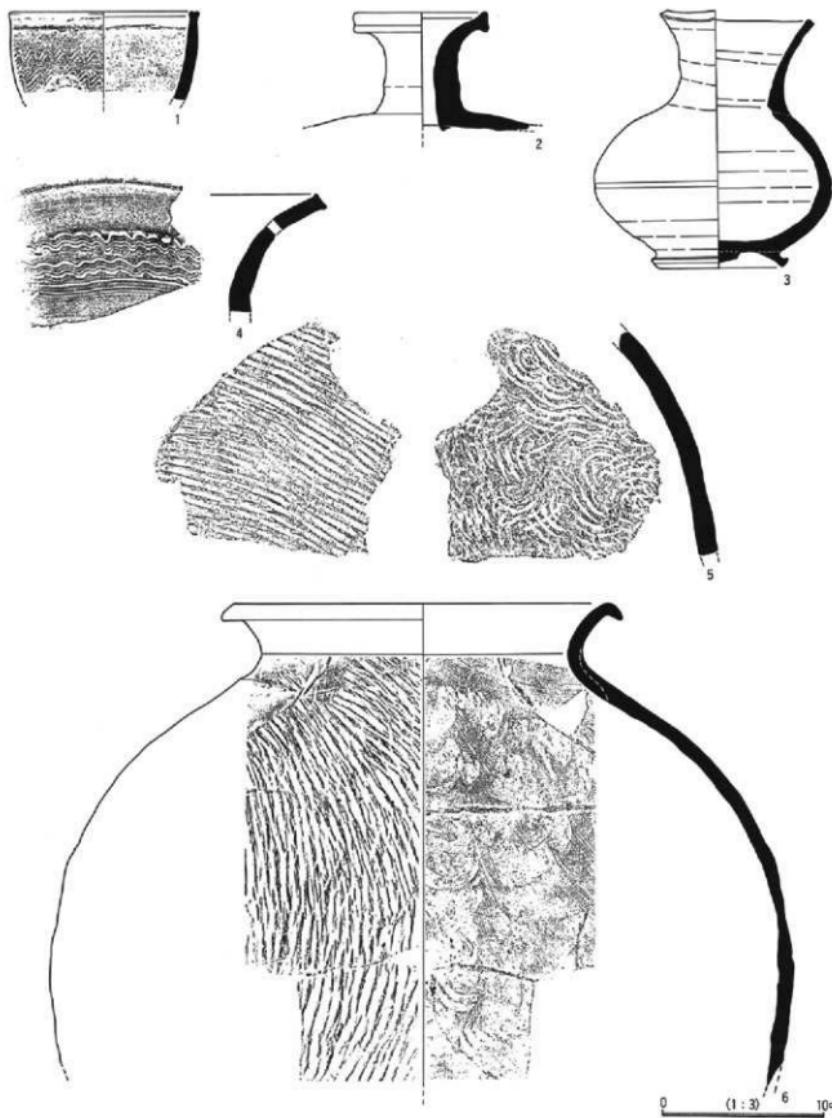
环蓋は、F-4類（71-16・17）とF-5類（同18～20）の二種がある。このほか内面にカキメを有する短頸壺I-1類（同22）も1点出土している。



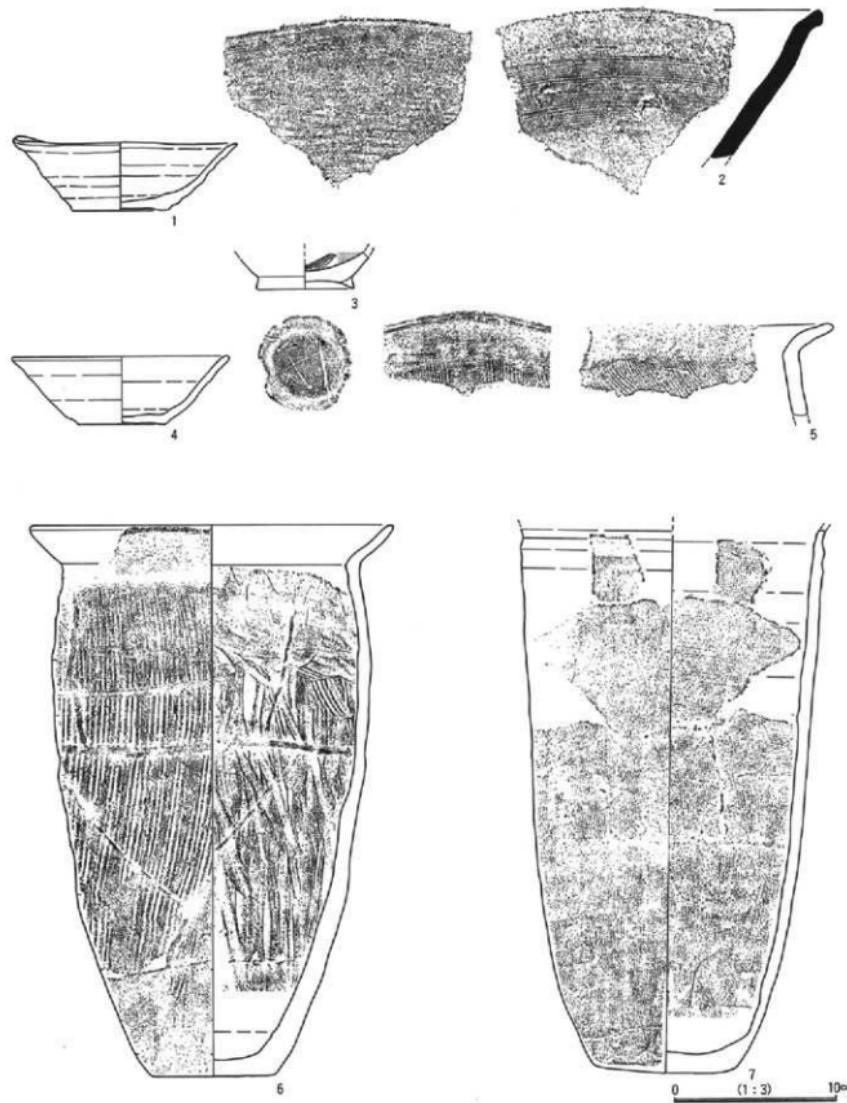
第67図 Pブロック出土遺物 須恵器(1)



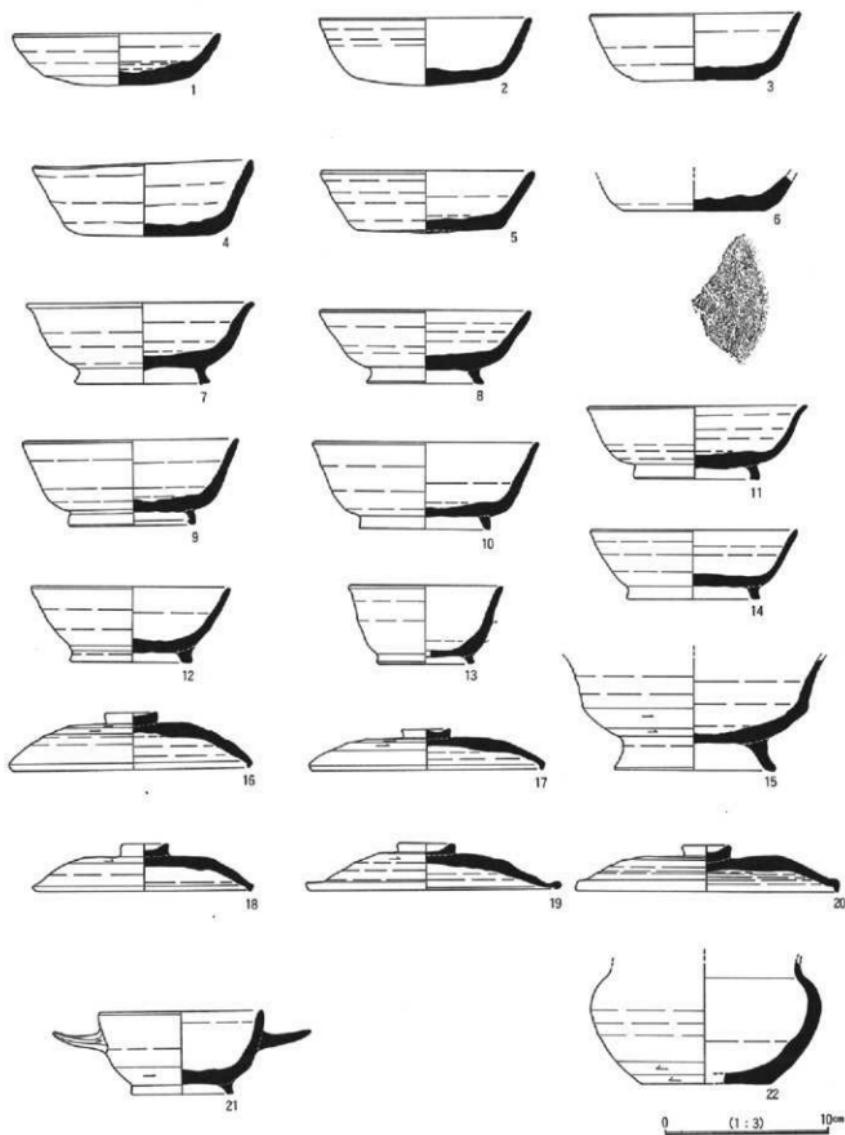
第68図 Pブロック出土遺物 須恵器(2)



第69図 Pブロック出土遺物 須恵器(3)



第70図 Pブロック出土遺物 土器他



第71図 Sブロック出土遺物 須恵器

(9) その他の遺構出土の遺物 (第72・73図、図版52~54)

調査区西側の台地（西区）には、土坑や溝などの遺構がまばらにみられる。本節では、これらの遺構および周辺から出土した遺物について順次説明する。

① E U30埋設土器 (第72図1~4、図版53)

調査区北側の東斜面にあたるP-30グリッドから出土した合口の甕などである。72-3・4はロクロを使用し、酸化焰焼成されている大型の土師器長胴甕である。いずれも器高が高く、平底で穿孔があり、体部下半がヘラ削り調整されている。口縁部が「く」字状に外反するもの（同3）と、外反のち軽く直立するもの（同4）があるが、両方もともK-3類に含められる。

合口甕に接して、器高が高く底径が小さい須恵器坏A-7類（同1）と、酸化焰焼成で底径が小さく体部が直線的に立ち上がる土師器坏A-2類（同2）が口を合わせた状態で出土している。土器群の共存関係を把握する上で、好資料となろう。

② S K34・47~49・53土坑 (第72図5~13、図版52)

S K34土坑からは、天井部がヘラ削りされ、器高が高く天井部と体部の境が不明瞭な須恵器坏蓋F-7類（72-5・6）、S K47土坑からは、天井部がヘラ削りされている須恵器坏蓋（同7）、S K48土坑からは、土師器付甕の脚部（同8）と天井部が回転糸切りのちヘラ削りされている須恵器坏蓋（同9）が出土している。またS K49土坑からは、底部の切り離しがヘラ切りで器形が逆台形の須恵器坏A-5類（同13）と、底部の切り離しがヘラ切りで口径が大きく坏部の器形が逆台形を呈する有台坏B-5類（同11）、S K53土坑からは、須恵器坏A-5類（同12）と、天井部のほぼ全面が回転ヘラ削りされ、天井部が丸みをもつ坏蓋F-4類（同10）が出土している。

③ S K54・56・64・87・土坑 (第73図1~3・9、図版53・54)

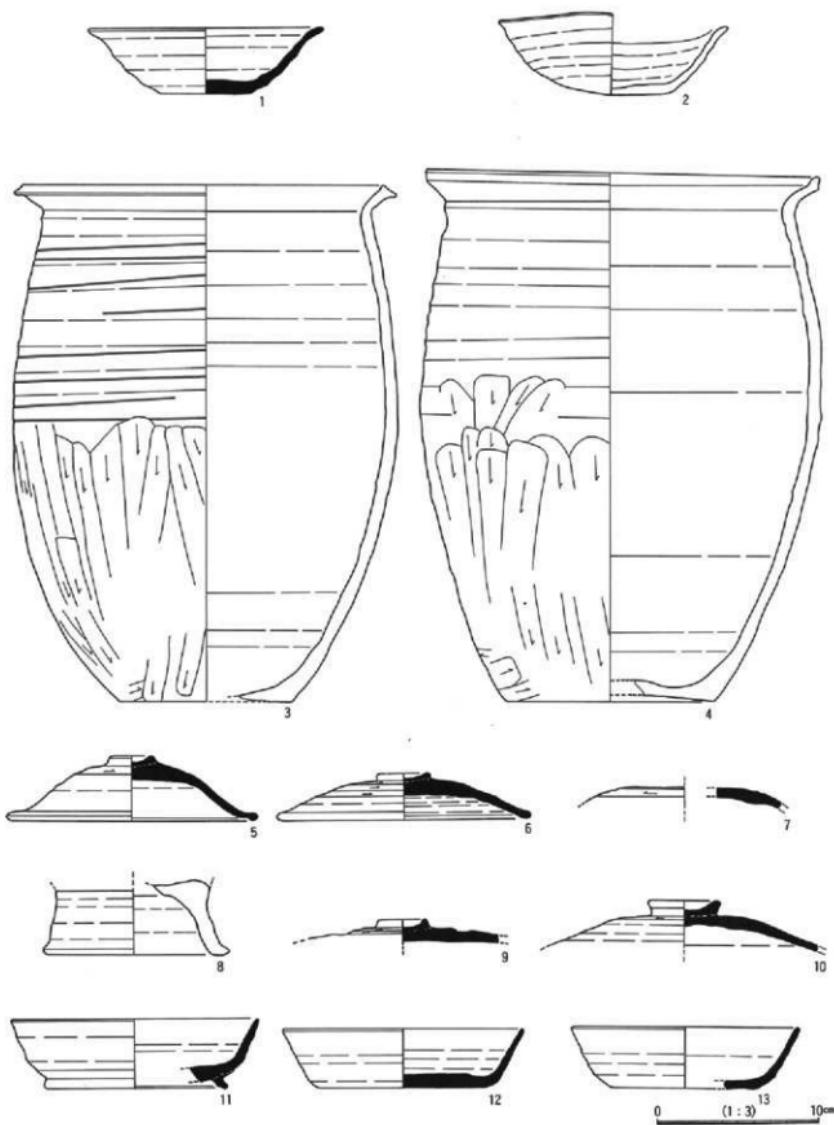
S K54土坑からは、酸化焰焼成で底径が小さく体部が直線的に立ち上がる土師器坏A-2類（73-1）、S K56土坑からは、同じ土師器坏A-2類（同2）、S K64土坑からは、器高がやや高く体部が直線的に外反する黒色土器有台椀B-3類（同3）、S K87土坑からは、平行線のタタキメとアテメをもつ須恵器甕片（同9）が出土している。

④ S X70、S P73柱穴 (第73図4~8、図版53・54)

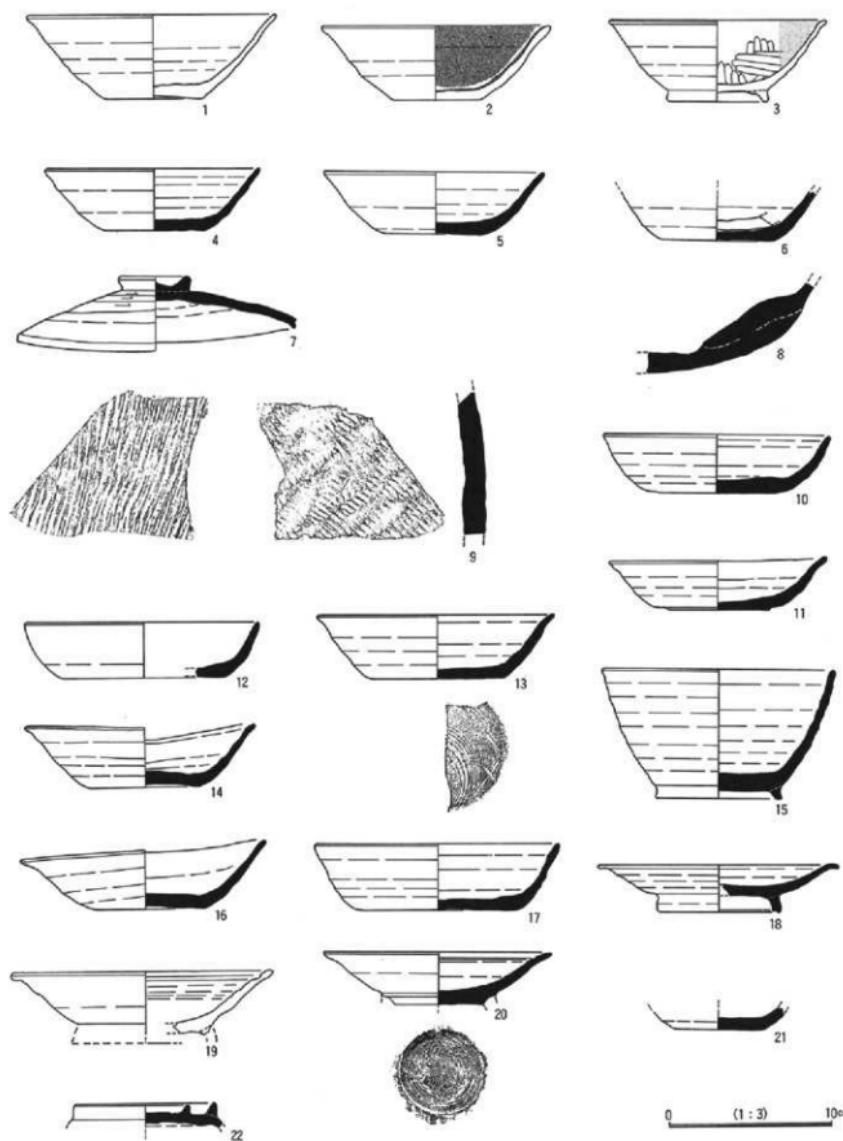
S X70からは、底部が回転糸切りで、器高と底径がやや小さく体部が直線的に外反する須恵器坏A-6類（同4~6）、S P73柱穴からは、天井部のほぼ全面が回転ヘラ削りされ天井部が丸みをもつ須恵器蓋F-4類（同7）と丸底整形の際の皺を残す同甕底部（同8）が出土している。

⑤ 西区包含層 (第73図10~22、図版54)

西区の遺構周辺の包含層からは、須恵器を主に少量の遺物が出土している。須恵器坏は、底部の切り離しがヘラ切りで器形が逆台形の須恵器坏A-5類（73-10・12・17）と、器高と底径がやや小さく体部が直線的に外反する須恵器坏A-6類（同11・13・14・16）がある。有台坏は器高が高くやや小さい底部をもち、体部が直線的に外反するB-8類（同15）、段皿は器高が低く体部が大きく外反するD-1類（同18・20）が出土している。台付皿には酸化焰焼成の土師器D-1類（同19）もあるが、やや器形が異なる。22は円面鏡G-1類の本体部である。



第72図 その他の遺構出土遺物 (1)



第73図 その他の造構出土遺物 (2)

(10) S G 31河跡出土の遺物 (第74~79図、図版54~60)

台地の南下斜面にあたるS G 31河跡の中・下層からは、須恵器の壺類・蓋・鉢・壺・横瓶・壺と、土師器の壺・有台壺・皿・蓋・鉢・壺・鍋、黒色土器の有台椀などが出土している。

須恵器の壺は、底部の切り離しが回転糸切り無調整で、器高と底径がやや小さく体部が直線的に外反するA-6類(74-4~9・11)が主体を占め、器高が高く底径が小さいA-7類(同10・12)も存在する。このほか底部外周にヘラ削り調整が施されるA-2類(同19~20)や、身が深く体部が直線的に立ち上がるA-3類(79-8)、底部の切り離しがヘラ切りで器形が逆台形のA-5類(74-1~3)も下層から出土している。

有台壺は量が少ないが、底部の切り離しが回転糸切りで、器高と底径がやや小さく体部が直線的に外反するB-7類(74-18・22)と、器高が高くやや小さい底部をもち、体部が直線的に外反するB-8類(同14~17・21)が主である。このほか体部下半に稜をもち、削りの痕がはっきりしないB-1(b)類(同13)も、下層から1点出土している。

須恵器蓋は量が少ないので多様で、天井部のほぼ全面が回転ヘラ削りされ、器高が高く天井部が丸みをもち口縁端が内湾するF-4類(75-2)、天井部全面に回転ヘラ削り調整が施され、器高がやや低いF-5類(同4)、天井部の切り離しが回転糸切りのちヘラ削りされ、器高が高く天井部と体部の境が不明瞭なF-7類(同3・5)、大型でつまみがなく、平坦な天井部に垂直に近い縁部が付くF-10類(同7)などがある。

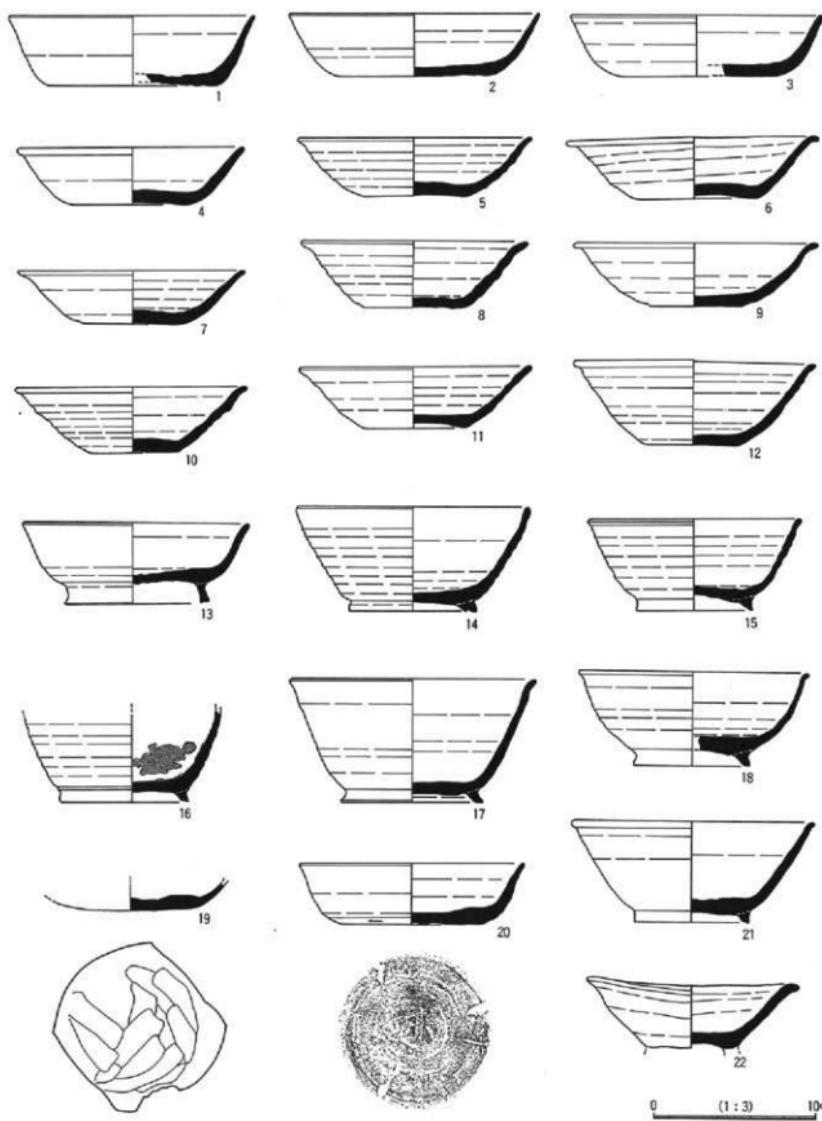
鉢はいずれもこね鉢と思われるもので、口縁部が外反し体部がすぼまるH-2類(76-5)と、口縁部に鋸が付き体部がやや長く丸みをもつH-3類(75-12)がある。

壺は、短い口縁部が外反し体部が丸みをもつ短頸壺I-2類(75-11)と、長い口縁部が直立のち外反する長頸壺J-3(同9)などがある。甕は、口縁部が外反し体部が直線的に立ち上がる長胴甕K-1類(75-8、76-4)と、口縁部が外反し体部中位に最大径をもつ長胴甕K-2類(75-13)、口縁部が直立のち外反し、丸みをもつ体部中位に最大径をもつ大型甕L-3類(76-1)、口縁部に三段の波状沈線文をもつ大型甕L-2~3類(同2・3)がある。76-6は、短い口縁部に横に長く長梢円形の体部がつく横瓶M-2類で、体部の両側を円盤状の粘土を接合することによって閉塞している。

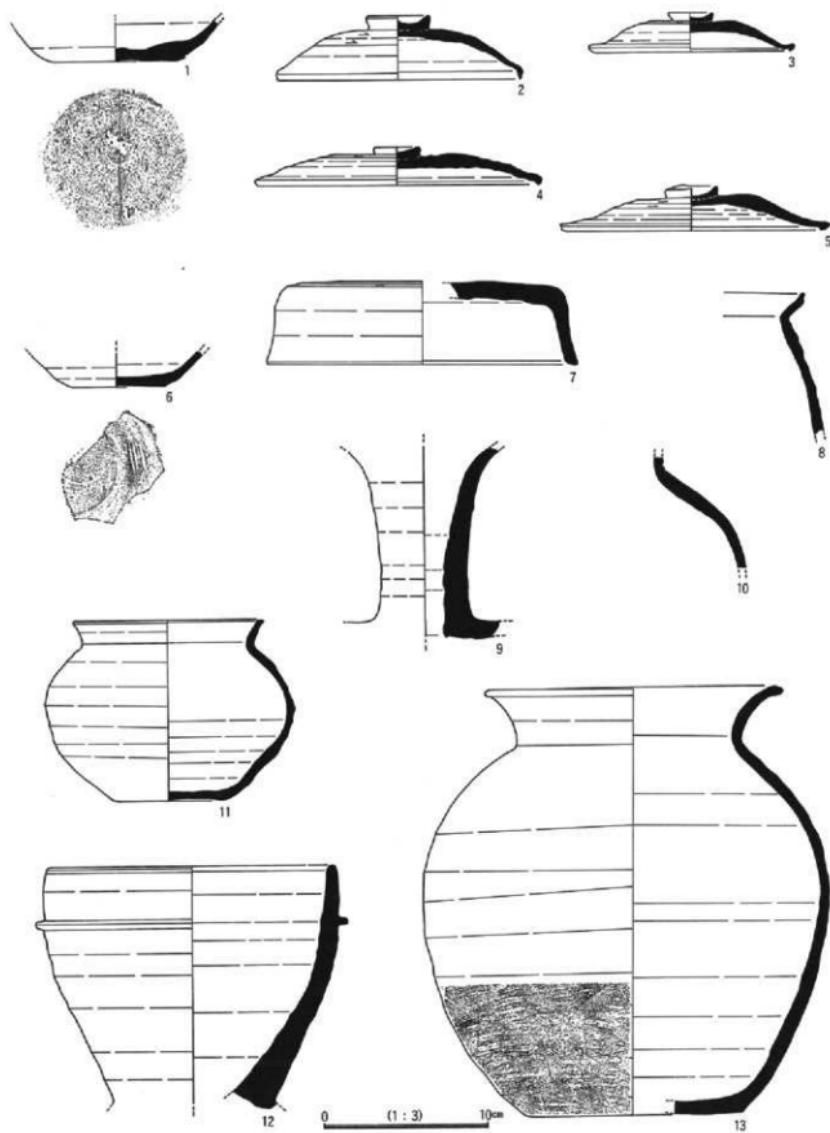
土師器は壺・有台壺・皿・蓋・鉢・壺・鍋などの器種がある。壺類はすべてロクロを使用し酸化焰焼成である。壺は底径が小さく体部が直線的に立ち上がるA-2類(77-1~10、79-3)が主体を占める。有台壺は器高が高く体部が直線的に立ち上がるB-1類(77-11・12)がある。12は口径が17.6cmと大きい。皿は、口径の小さいC-1類(79-11)と口径が26.8cmと大きいC-2類(同2)がある。鉢は体部が丸みをもつ口縁部が外反するH-1類(79-4)と体部がほぼ直立するH-2類(78-1)がある。土鈴も2点(79-10・12)出土している。

壺は体部が丸みをもち口縁部が内傾する短頸壺I類(77-15)がある。甕は中型のK-2類(78-2・4・7)と大型のK-3類(同6)がある。鍋は体部が丸みをもって立ち上がるN-1類(79-1)と、体部が直線的に立ち上がるN-2類(78-8)がある。

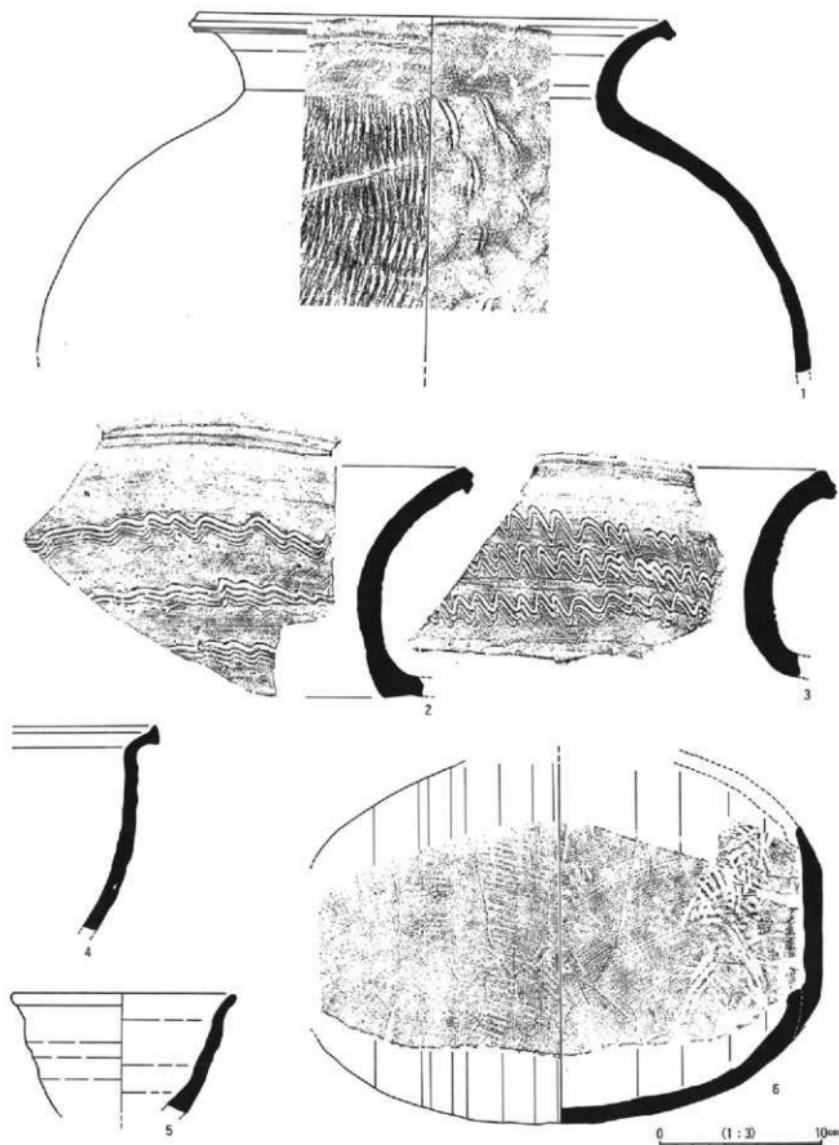
黒色土器は、器高がやや高く体部が直線的に外反するB-3類(79-6・7・9)がある。



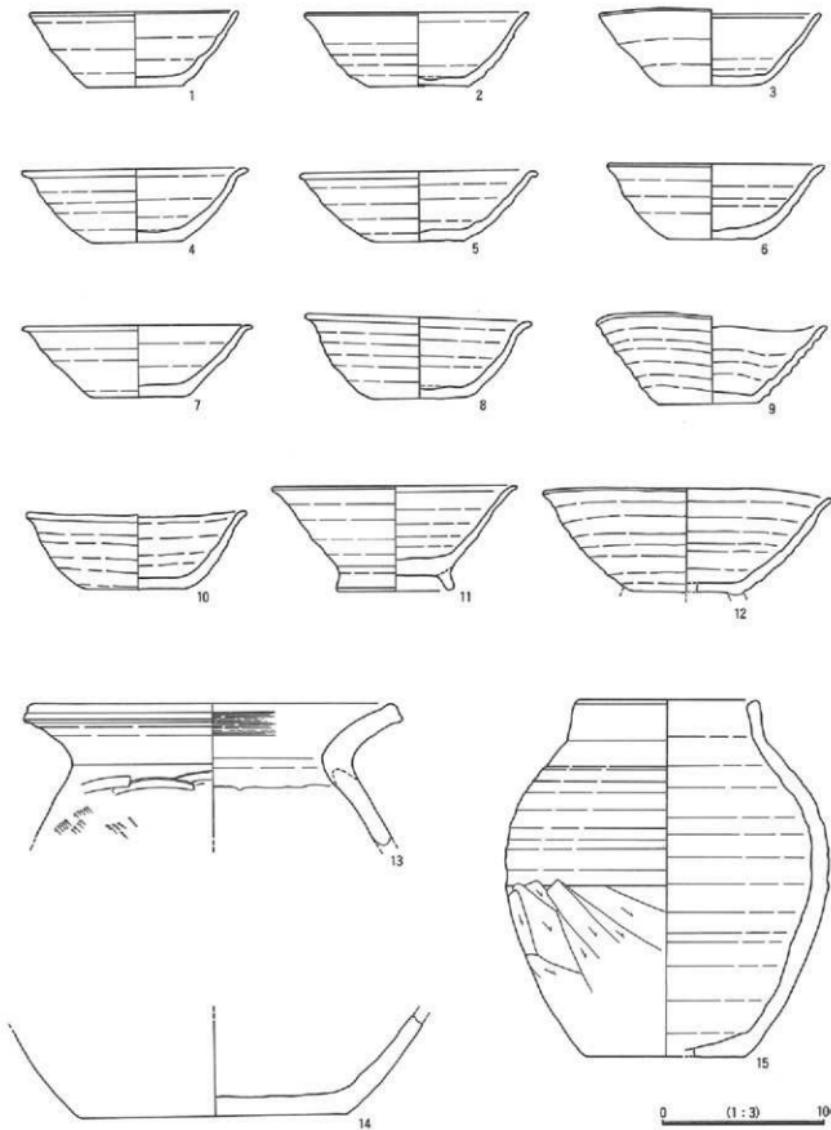
第74図 SG31河跡出土遺物 須恵器(1)



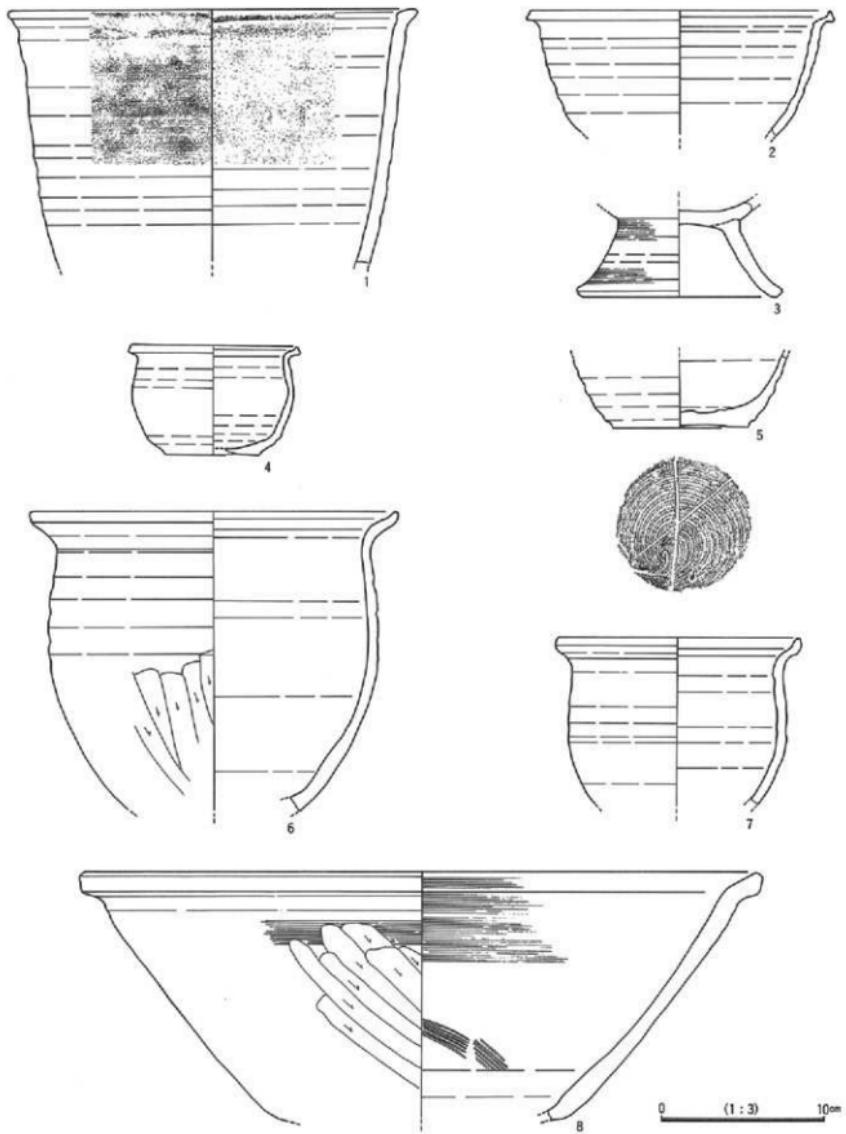
第75図 SG 31河跡出土遺物 須恵器 (2)



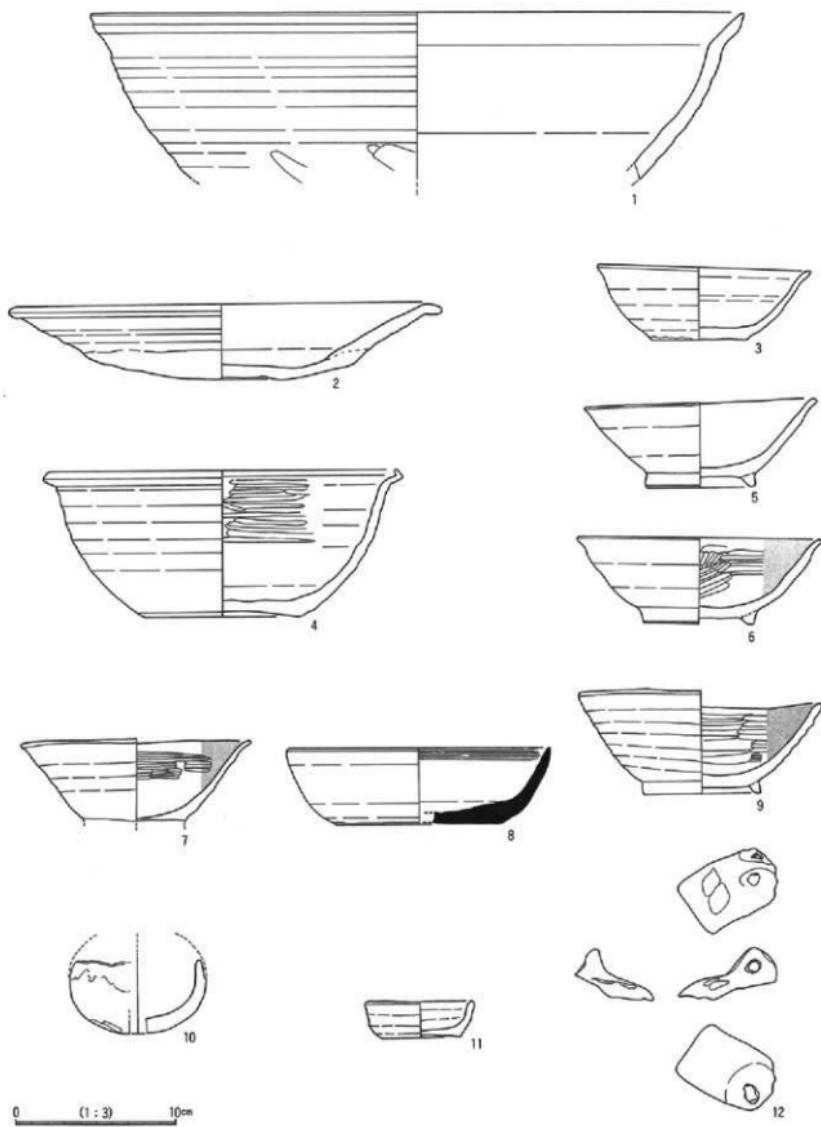
第76図 SG31河跡出土遺物 須恵器(3)



第77図 SG31河跡出土遺物 土器 (1)



第78図 S G31河跡出土遺物 土師器 (2)



第79図 SG31河跡出土遺物 土師器(3) 他

(11) S G31捨て場出土の遺物 (第80・81図、図版61~63)

S G31河跡が台地の西側と接する部分の覆土4層からは、ロクロ使用の酸化焰焼成土器を主に、遺物が廃棄された状態でまとまって出土している。

須恵器は、壺と壺の器種がある。壺は、底部の切り離しが回転糸切り無調整で、器高が高く小さい底径で体部が直線的に立ち上がるA-7類(80-1~6・16)が主体を占め、口径と器高が小さく体部が直線的に立ち上がるA-8類(同7)も存在する。壺は、長頸壺J-3類に属すると思われる口縁部(同9)と体部下半(同10・13)が出土している。

土筋器Aは、壺・壺・甕・甌などの器種がある。壺はロクロを使用し酸化焰焼成によるもので、すべて底径が小さく体部が直線的に立ち上がるA-2類(80-14・15・17~22)である。口径は13.8cmのものが多い。80-12は丸底の小型壺と思われるもので、外面に平行線のタタキメ、内面にヘラナデ調整が施されている。日常の雑器というよりは特殊な用途が想定される。

甕は、器高がやや高く口縁部が内湾する中型のK-2類(81-1~5・7)がほとんどである。平底で底部が回転糸切りによって切り離され、器高が口径よりやや小さい。口径がやや大きい4・5の体部下半には手持ちのヘラ削りがみられる。外面に煤が付着しているものもある。器高と口径が多く大型のK-3類(同6)も少量認められる。甌(81-9)は口縁部がほぼ直立し、底が大きく開く無底式のもので、底部に6個三対の棒状用具の通し穴が穿たれている。

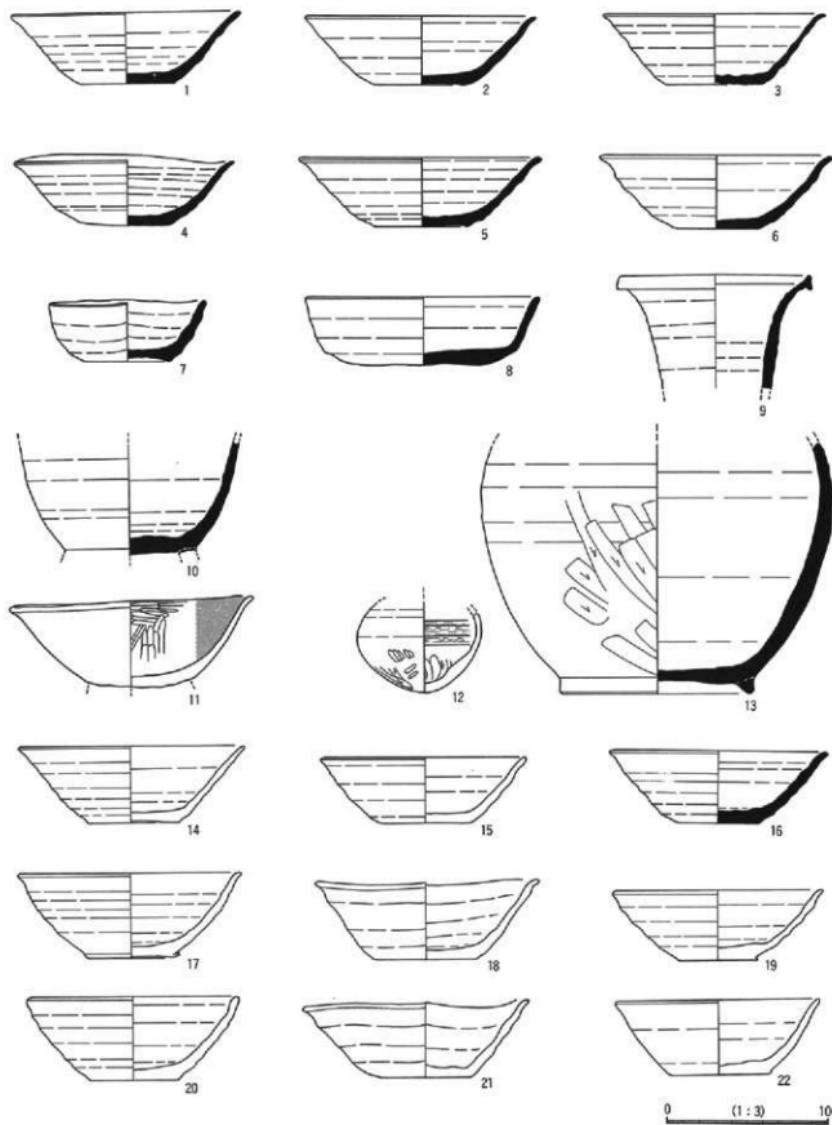
黒色土器は、器高がやや高く体部がやや丸みをもつ有台椀B-2類(80-11)と、口縁部が欠損しているが、体部がやや丸みをもち上半に最大径をもつ内黒の甌K類(81-8)がある。

(12) ヘラ描き文字について (第82図、図版64)

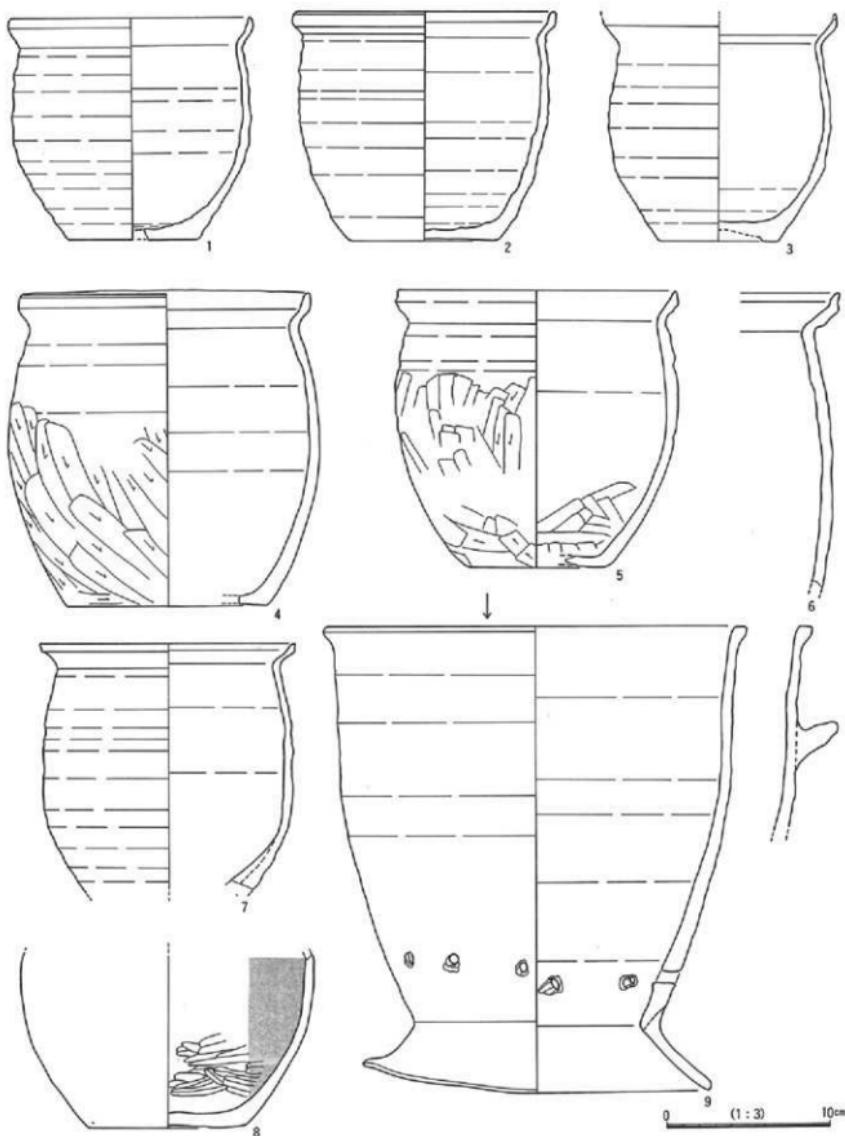
須恵器の壺類や蓋には、ヘラ描きの記号を記したもののが何点かみられる。それらは大きく、①「一」、「二」、「三」、「八」、「九」、「×」、「≠」などの簡単な数字や記号が刻まれているものと、②「郡」、「万」、「物」などの文字が刻まれているもの、とに分けられる。②には一つの文字だけでなく、二文字や三文字が記されているものもある。

前者は「ヘラ記号」ないし「窯じるし」と呼ばれているもので、第82図や図版64に掲載した19点以外にも、小破片の資料がいくつか認められる。窯体内を除く各地点から出土しているが、灰原Lブロックから出土したものがほぼ半数を占める。これらは從来窯単位に付けられた「窯じるし」と考えられてきたが、近年は大阪府陶邑窯跡群の検討などにより、窯内の「窯詰め」や「窯出し」の段階に、他の工人との混乱を避けるために用いられた記号であるという説が有力になっている(文献10)。

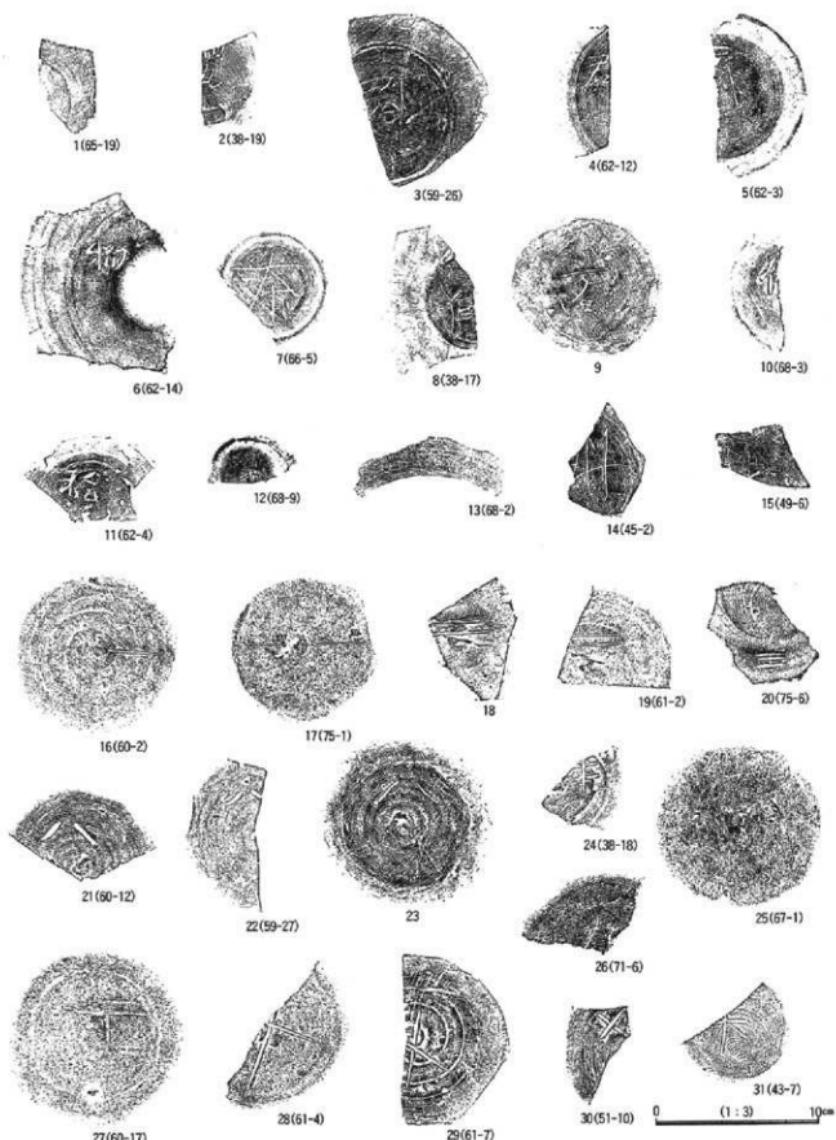
後者のヘラ描き文字には、「郡」、「万」、「物」のほかに、解読が困難であるが「本」、「口仁大カ」、「田丸カ」などもみられる。特に注目されるのは「郡」の文字で、灰原Lブロックからのみ4点出土している。灰原Lブロック土器群の時期は、ヘラ描き文字が刻まれている須恵器を含めて、8世紀後葉頃に比定されることから、時期的限定の可能性も考えられる。なお、平成6年8月に実施された本遺跡の分布調査でも、「郡」と読めるヘラ描き文字をもつ須恵器有台壺が1点出土している(文献24)。



第80図 SG31捨て場出土遺物 (1)



第81図 SG31捨て場出土遺物 (2)



4 木製品その他

(1) 木製品 (第83図、図版73)

木製品は、南区と東区から出土している。ほとんどが南区 S G31河跡の底面付近から発見されたものである。

木製品の器種には、下駄・田下駄・曲物などがある。1は、長楕円形を呈する連齒下駄の左半分である。前歯は10cm程の厚さで残っているが、後歯は後台裏面との段差がないくらいかなり掠り減っている。前鼻緒の穴が小さいが、主穴があってそれを補助するものかもしれない。後鼻緒から後端までの長さはやや短い。

2は、隅丸長方形を呈する田下駄である。長さ約492mm、幅91mmを測り、表面を主に火で焦がした痕がある。また、表面前端右側が欠けているが、前端と跡端に両側から一対に切り込んだ縄掛け穴が認められる。

3は、つまみ部を略六角形に削り、先端部を長楕円状に平たく整えた樅状の木製品である。両端が欠損しているが、残存長619mmを測る。

4は、曲物の底板、5・6は曲物の側板である。4の側縁部は丁寧に削られているが、木釘穴などは認められない。5・6は比較的小型の曲物側板で、5の内面には列状、6の内面には格子目状のケビキが認められる。

7は、筭状の木製品である。平坦な木材の先端部に刃先のような削り出し調整が施してある。基部が欠損しており、残存長112mmを測る。

8～10は、樅状の木製品である。8は断面が長方形を呈し、上下端とも切断部が残っている。9は両端が欠損しており、箸になるかもしれない。

木製品の時期は、木製品の形態や同じ層から出土している土器の分析から、平安時代9世紀中葉を中心とするものと思われるが、一部の木製品は中世以降の新しい時期に入る可能性も有する。

(2) 近世陶磁器 (第41図)

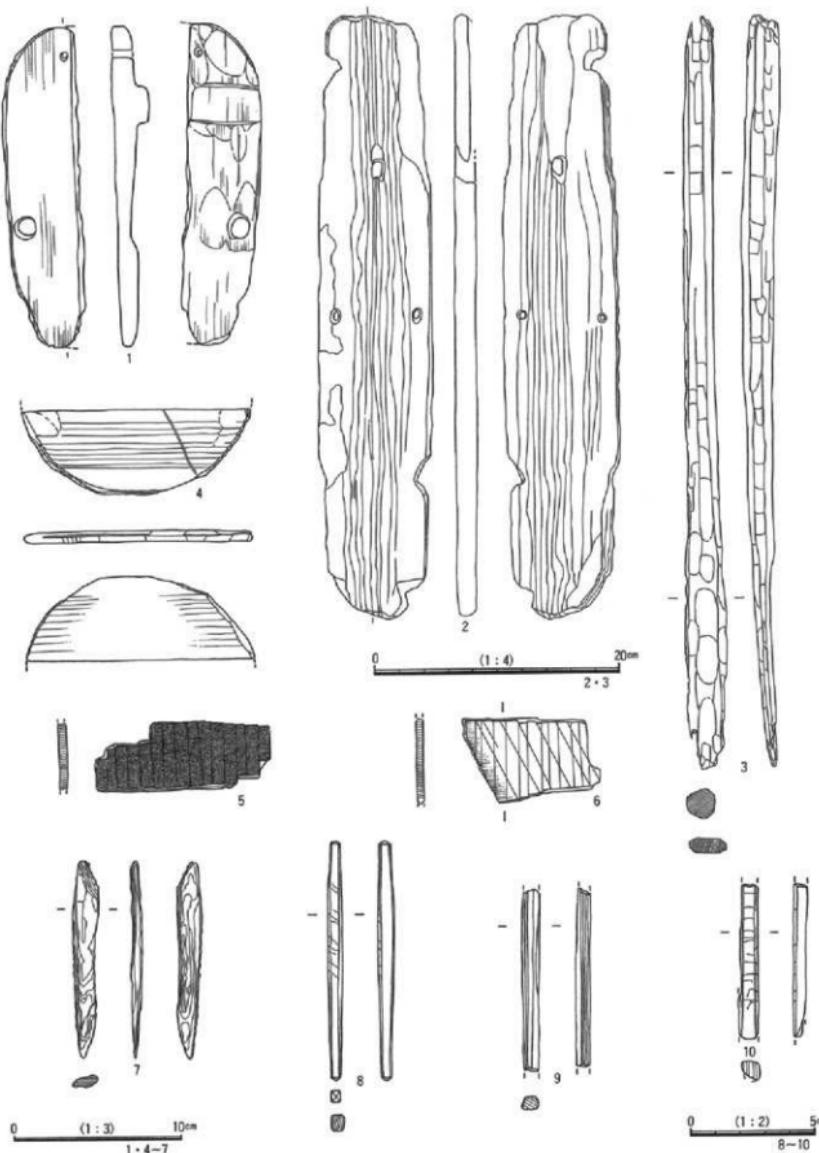
東区西端から陶磁器が2点出土している。41-14は瀬戸の皿で、内面の見込みに円形の沈線と焼き台の痕、側面に輪花状の凹凸がみられる。もう1点は近世磁器の盤で、内面に肥前系の染め付けがみられる。

(3) 金属製品

明確に金属製品と認定できるものは出土していない。西区北東端から1点腐食した鉄製品様のものが出土しているが、内容はよくわからない。

(4) 自然遺物

東区I-29のIV層下面から、炭化したトチの実が5点出土している。表皮と実がそのまま残っているものが3点あり、大きさはそれぞれ直径19mm・24mm・33mmを測る。



第83図 木製品

表4 石器計測表(1)

擇回	番号	器種分類	出土地点	登録No.(RQ)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)
23	1	尖頭器	南区 B-2-8 V層上	127	131.0	27.0	12.0	41.7
	2	石匙-a	南区 E-3-3 V層上	372	77.0	23.0	5.5	10.3
	3	石匙-a	南区 C-2-8 V層上	130	78.5	20.0	8.5	18.4
	4	石匙-d	南区 B-3-0 IV層中	10	40.0	68.0	9.5	22.2
	5	石匙-b	南区 B-2-7 V層上	125	55.0	28.0	5.5	9.1
	6	石匙-b	西区 L-3-1④ IV層上	337	51.0	27.0	5.0	6.4
	7	石匙-b	東区 L-2-8③ IV層下	245	35.0	26.0	3.0	3.6
	8	石匙-c	南区 C-2-8 IV層中	13	83.0	43.5	9.0	32.1
	9	石匙-a?	南区 D-3-2 V層上		57.0	24.0	9.0	12.2
	10	石寬-a	南区 B-3-1 V層上	115	86.0	38.0	15.0	40.9
	11	石寬-a	南区 C-3-3 IV層上	1	74.0	37.0	18.5	48.0
	12	石寬-b	西区 I-3-0③ IV層上	356	77.0	39.0	13.0	51.4
24	1	石寬-d	南区 C-2-7 V層上	124	97.0	39.0	15.0	59.2
	2	石寬-e	南区 C-3-0		51.0	33.0	7.5	10.2
	3	石寬-c	南区 B-2-8 V層上	128	78.0	34.0	14.0	43.3
	4	石寬-c	南区 B-2-9 V層上	4	82.0	45.0	17.5	67.9
	5	石寬-c	東区 P-2-7 IV層中	41	66.0	58.0	18.0	80.3
	6	石寬-e	西区 S-P 5-5 F		43.0	21.0	6.0	6.6
	7	石寬-a?	西区 H-3-0④ IV層上		51.5	36.0	13.0	24.5
	8	石寬-f	西区 M-3-0③		68.0	34.0	11.0	29.5
	9	石寬-e	南区 D-3-2 IV層中		89.0	37.5	19.0	61.4
	10	石寬-e	東区 L-2-8③ IV層下	245	64.0	32.5	10.5	25.9
	11	石寬-e	南区 D-3-0 IV層下		70.0	37.0	10.5	31.7
	12	石寬-b	南区 B-2-8 V層上	129	68.5	37.0	16.0	42.0
25	1	石寬-f	西区 H-3-0② IV層中		89.5	41.0	18.0	81.9
	2	振器-b	南区 C-3-3 IV層下		88.0	43.0	23.0	83.3
	3	石寬-e	東区 M-2-8② IV層下	255	55.5	41.0	11.5	31.5
	4	石寬-a	東区 M-2-9① IV層下	230	63.5	44.0	17.0	46.1
	5	振器-d	西区 I-3-0③ IV層上	314	65.0	38.0	15.0	28.8
	6	振器-a	南区 B-2-7 V層上	126	50.0	36.0	17.0	21.0
	7	振器-b	東区 M-2-9① IV層下	263	49.0	31.0	4.5	8.5
	8	振器-a	南区 C-3-3 IV層下		66.0	39.0	19.0	54.9
	9	振器-b	南区 E-3-5	502	75.0	45.0	14.0	40.8
26	1	削器-a	南区 C-3-3 IV層中		51.0	46.0	9.0	18.8
	2	振器-a	南区 C-3-2 IV層中		45.0	52.0	15.0	36.9
	3	振器-d	西区 I-3-0① IV層上	313	42.0	47.0	15.0	44.5
	4	削器-a	南区 D-3-3 IV層下		61.0	44.0	11.0	29.5
	5	振器-d	西区 H-3-1④ IV層上		62.5	43.5	14.0	36.4
	6	振器-c	南区 E-3-5 IV層中		55.0	56.0	12.0	32.2
	7	振器-c	西区 SX 8-2 F		51.0	70.0	18.0	58.7
	8	振器-d	南区 C-3-2 IV層下		29.0	44.0	7.0	11.3
	9	振器-c	西区 P-3-0 V層上	142	53.0	104.0	103.0	70.8
27	1	振器-e	南区 D-3-3 VI層上		69.0	52.0	22.0	64.7
	2	振器-e	南区 D-3-2 V層上		47.0	35.5	14.0	93.4
	3	振器-c	南区 D-3-2 IV層下		43.0	96.0	14.0	38.9
	4	振器-e	南区 C-3-3 IV層中		35.0	40.0	12.0	16.6
	5	削器-a	西区 F-3-0④ V層上		91.0	68.0	13.0	73.0
	6	削器-a	南区 E-3-5 IV層下		65.0	64.0	15.5	57.8
	7	削器-a	南区 C-2-8 V層上		111.0	63.0	21.5	119.6
	8	削器-a	南区 E-3-5 IV層中		115.0	61.0	20.0	118.1

表4 石器計測表(2)

擇図	番号	種類分類	出土地点	登録No.(RQ)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)
28	1	削器-a	南区 E-3 4 IV層中		105.0	44.5	14.0	52.0
	2	削器-b	東区 H-2 7 V層上	384	102.0	40.0	22.0	65.3
	3	削器-c	南区 D-3 1 IV層中		78.0	45.0	17.0	54.2
	4	剥片	東区 M-2 9 ④ IV層下	162	76.0	58.5	18.3	74.4
	5	削器-b	南区 E-3 1 V層上	383	74.0	66.0	19.5	76.7
	6	削器-c	西区 H-3 0 ③ IV層中		30.5	53.0	12.0	16.2
	7	削器-b	西区 H-3 0 ③ IV層中		78.0	38.0	7.0	71.1
	8	削器-b	西区 G-3 0 ④ IV層中		123.0	76.0	22.5	198.3
29	1	削器-c	南区 E-3 5	501	136.0	46.0	30.0	152.8
	2	剥片	南区 D-2 8 V層上		61.0	37.5	6.5	14.0
	3	剥片	西区 F-3 3 VI層上		45.0	53.0	7.0	16.7
	4	剥片	X-0		94.0	34.5	7.0	31.0
	5	剥片	東区 J-2 8 V層上	375	57.0	35.0	13.0	19.9
	6	剥片	南区 D-3 3 IV層下		84.5	30.0	11.0	28.2
	7	剥片	南区 D-3 3 IV層中		92.0	32.0	12.0	29.4
	8	剥片	東区 I-2 8 V層上	377	72.0	29.5	8.5	19.4
	9	ビエス・エスキュー	西区 H-3 1 V層上		60.5	40.5	16.0	47.2
	10	剥片	東区 M-2 8 ② IV層下	225	32.0	48.0	3.5	14.0
	11	ビエス・エスキュー	西区 G-3 1 ④ IV層上		57.0	44.0	17.5	45.8
30	1	剥片	南区 C-2 7 IV層下		38.0	48.5	18.0	35.5
	2	削器-b	南区 E-3 5 IV層中		51.5	56.0	15.0	42.3
	3	石核	南区 D-3 3 IV層下		86.5	134.0	87.5	1187.1
	4	石核	南区 D-2 7 V層上		81.5	110.0	86.0	1141.8
	5	磨製石斧	西区 H-3 4 V層上	168	59.0	52.0	20.0	120.3
	6	砥石	西区 J-3 0 ④ IV層下		75.0	37.0	12.0	53.8
	7	砥石	東区 S-2 7 IV層中		82.0	54.0	47.0	320.4

表5 木製品計測表

擇図 番号	種別	出土地点	登録No. (RW)	計測値 (mm)			備考
				長	幅	厚	
83 1	下駄	S G31 E-29 V下	-	197	(46)	14	右半欠損 連齒
2	田下駄	東区 P-26 IV中	42	492	91	18	一部炭化
3	柾状木製品	S G31 D-31 IV下	118	(619)	33	26	両端欠損
4	曲物 底板	S G31 C-31 IV下	112	138	(52)	7	半損
5	曲物 側板	S G31 B-31 IV下	5	(108)	(42)	5	一部 内面漆塗りか
6	曲物 側板	S G31 B-30 IV下	113	(83)	(52)	4	一部
7	柾状木製品	S G31 B-30 IV下	3	(112)	16	7	基部欠損
8	柾状木製品	S G31 C-29 IV下	82	98	6	6	完形
9	柾状木製品	S G31 C-29 IV下	82	(75)	7	6	折損 端
10	柾状木製品	S G31 C-29 IV下	82	(63)	8	5	折損

表 6 土器観察表(1)

件番号	出土遺物 灰原ブロック 灰原層序	グリッド層序 灰原層序	種別 器種	RP%	口径 底径	器高 厚さ	頸部 肩部	外傾度(°) 現存	胎土 陶成	外面 内面	(II) ()内は既存値又は推定値、計測単位 mm	
											底・天井部切削 切削後成形	器号
33 1	SQ1 Y		直腹器 坪	854	(154) (02)	44 5.5		36 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ナデ西脇	
2	SQ1 Y		直腹器 坪	855	(146) (00)	33 4		31 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ナデ	ヘラ括き「×」
3	SQ1 Y		直腹器 坪	385	151 98	42 5		25 1/2以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
4	SQ1 Y		直腹器 坪	853	(140) (06)	35 3		35 1/2以上	粗砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	火拂 施さ苔
5	SQ1 Y		直腹器 荷台坪	857	(160) (06)	41 4		29 1/2以上	粗砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ナデ	直腹器針 小根筋
6	SQ1 Y		直腹器 坪		(140) (06)	32.5 4		28 1/4以下	粗砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
7	SQ1 Y		直腹器 坪		(183) (04)	3		1/4以下	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部 重み
8	SQ1 Y		直腹器 坪底		(14)			粗砂質 良	ロクロ目 粗粒・ラケヅリ ロクロ底			
9	SQ1 Y		直腹器 底		(62)	22		破片	粗砂質 良	クタキ 不明		
10	SQ1 Y		直腹器 底		(80)	19		破片	粗砂質 良	クタキ アテ底		外面 灰塵り
11	SQ4 F2		直腹器 底	21	(31)	6		1/4以下	粗砂質 良	ロクロ目 タタキ ロクロ底 アテ底		火拂れ
12	SQ4 F2		直腹器 底	21	(77)	6		破片	粗砂質 良	ロクロ目 タタキ ロクロ底 アテ底		
13	SQ5 F1		直腹器 坪		(16)	5		底部のみ	擦痕 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
14	SQ8 F1		直腹器 坪		38	3		1/4以下	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
15	SQ8 F1		直腹器 底		(44)	5		1/4以下	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	?	
16	SQ8 F1		直腹器 荷台坪		(23)			露窓	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り 直腹器針		
17	SQ9 F		直腹器 坪		(146) (06)	32 4		1/4以下	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ナデ	
18	SQ9 F		直腹器 荷台坪		(41)	5		1/4以下	粗砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	?	青苔斑
19	SQ5 F1		直腹器 底		(80)	19		1/4以下	粗砂質 良	ヘラ削り		外側内面 物 火ハネ
34 1	SQ33 F		直腹器 坪	826	132 37	34 3		48 1/2以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
2	SQ33 Y		直腹器 坪	1083	(134) 69	35 3		40 3/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
3	SQ33 Y		直腹器 坪	1125	(126) 62	35 4		39 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
4	SQ33 Y		直腹器 坪	1092	(132)	34 56		39 1/2以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
5	SQ33 F		直腹器 坪	848	156	41		31	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
6	SQ33 Y		直腹器 坪	1098	140	49		36 3/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	

表6 土器觀察表(2)

計測単位 mm

探査番号	出土遺物	グリッド層序 灰原層序	種類	R P %	口径 底径	側高 側厚	脚径 脚高	外傾度(°) 残存	胎土 焼成	外側 内側	窓・天井部切跡 切削法或形	備考
34 7	S Q33 F		須恵器 环	830	138 62	35 3.5		40 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
8	S Q33 Y		須恵器 环	1109	(142) (98)	35 4		41 1/4以上	織密	クロ目 クロ底	回転余切り	
9	S Q33 Y		須恵器 环	149	38 62	41 4		41 3/4以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
10	S Q33 F		須恵器 环	823	135 66	34.5 4		36 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
11	S Q33 F		須恵器 环	845	127 58	39 4		47 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
12	S Q33 Y		須恵器 环	127	35 60	38 4		38 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
13	S Q33 Y		須恵器 环	1088	137 61	40 4		40 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
14	S Q33 Y		須恵器 环	1133	133 66	36 4		39 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	重ね焼き灰
15	S Q33 F		須恵器 环	824	(129) 66	35 3.5		32 1/4以上	織密	クロ目 クロ底	回転余切り	
16	S Q33 F		須恵器 环	842	134 62	38 4		41 3/4以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
17	S Q33 Y		須恵器 环	1069	136 69	35 4		48 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
18	S Q33 F		須恵器 环	1119	(132) 58	37 3.5		41 1/4以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
19	S Q33 Y		須恵器 环	813	(139) 62	37 4		39 1/4以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
20	S Q33 Y		須恵器 环	1096	(132) 64	35 4		41 1/2以上	織密	クロ目 クロ底	回転余切り	
21	S Q33 Y		須恵器 环	1131	125 66	42 4		35 3/4以上	織密	クロ目 クロ底	回転余切り	重ね焼き灰 粘土付着
22	S Q33 F		須恵器 环	849	(142) 64	40 3		39 3/4以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	丸腰
23	S Q33 Y		須恵器 环	814	133 61	38 4		38 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
24	S Q33 Y		須恵器 环	1130	(147) 70	38 3.5		40 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
25	S Q33 F		須恵器 环	1106	(150) 62	37 3.5		45 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
26	S Q33 Y		須恵器 环	1360	39 (69)	39 4		35 1/4以下	織密	クロ目 クロ底	回転余切り	
27	S Q33 Y		須恵器 环	1107	(138) 60	33 3.5		47 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
28	S Q33 F		須恵器 有台环	(154) 82	54 4	28 1/4以上		28 1/4以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	二次加熱
29	S Q33 F		須恵器 有台环	839	(124) 72	45 4		28 1/2以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	
30	S Q33 F		須恵器 有台环	847	(32) 81	31 4		1/4以上	細砂混 灰	クロ目 クロ底	回転余切り	外輪 灰被り
35 1	S Q33 F		須恵器 环		(160)	31 5		1/2以上	織密	クロ目 クロ底		

表6 土器觀察表(3)

計測単位 mm

探査番号	出土遺物	グリッド座標	標高	R.P%	口径	深高	頸径	外側腰(△)	肚	外壁	底・天井留痕	切端後成形	備考
		底面順序			底径	壁厚	側径	残存	瓶底	内面			
35	2 SQ33 Y		遺意器 耳皿	1095	(160) 6			1／2以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	外面 二次加熱 裏ね附き底	
3	3 SQ33 Y		遺意器 耳皿		160	26.5			細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
4	4 SQ33 Y		遺意器 耳皿		(160) 5			1／4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
5	5 SQ33 Y		遺意器 耳皿	811	160 4.5	22		1／4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
6	6 SQ33 Y		遺意器 耳皿			(160) 3.5		1／4以下	細密 良	ロクロ目 ロクロ底		火化層	
7	7 SQ33 Y		遺意器 不明			(17) (6)		1／6以下	細砂質 良		回転余切り	指紋あり(底部、 火切端し後) 高台付	
8	8 SQ33 Y		遺意器 蓋			(87) 6.5	(110) (150)	1／4以下	細砂質 良	カキメ カキメ			
9	9 SQ33 F		遺意器 蓋			(71) 5		口縁部のみ	細砂質 良	ロクロ目 カキメ			
10	10 SQ33 Y		遺意器 ? 蓋	(200) 97	(97) 7	(176)		1／6以下	細砂質 不良	カキメ カキメ			
11	11 SQ33 Y		遺意器 蓋			(62) 7.5		1／4以下	細砂質 良	ロクロ目 カキメ			
12	12 SQ33 Y		遺意器 蓋	1103	(76) 8			1／4以下	細密 良	タタキ アラ底			
13	13 SQ33 F		遺意器 蓋			(148) 6		1／4以下	細砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底		外側内面 灰被り 土印跡(元燒成)	
14	14 SQ33 Y		遺意器 模様			(112) 8		缺底	粗密 良	タタキ アラ底		外側 反張り	
36	1 SQ33 Y		遺意器 蓋		(215) 9		破片		細密 不良	タタキ アラ底			
2	2 SQ33 Y		遺意器 蓋		(85) 8		破片		細密 良	ロクロ目 ロクロ底		京葉片付器 外側内面 灰被り 焼き台 #	
3	3 SQ33 Y		遺意器 蓋		(106) 10		破片		細密 良	タタキ ハケメ アラ底			
4	4 SQ33 Y		遺意器 蓋		(161) 13		破片		細砂質 良	タタキ アラ底		火はね 外側 灰被り	
5	5 SQ33 F		遺意器 蓋		(82) 6		破片	1／4以下	粗砂質 良	柄り ハケメ			
6	6 SQ33 Y		遺意器 蓋		(28) 12.5		破片		粗砂質 不良	タタキ アラ底		外側内面 灰被り 開れ口にも灰が残 る	
7	7 SQ33 F		遺意器 ? 鍋		(87) 10		破片	1／4以下	粗砂質 不良	カキメ ロクロ底	ナヂ	焼き台 # 土印跡(元燒成)	
37	1 SQ46 F2		遺意器 耳	362	(138) (700	39 4.5		40	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	唇止余切り		
2	2 SQ46 F2		遺意器 耳皿	390	(123) (106)	31 3.5		3／4以上	細砂質 良	ロクロ目 カズリ ロクロ底	ヘラ削り		
3	3 SQ46 F5		遺意器 耳	222	(146) (106)	42 3.5		27	細砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
4	4 SQ46 F5		遺意器 耳	218	(169) (86)	42 5		30	細砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ削り		
5	5 SQ46 F5		遺意器 耳皿	221		(12)		1／4以下	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ削り	外側内面 火ハネ	

表6 土器観察表(4)

計測単位 mm

探査番号	出土遺物 灰原プロット 灰原順序	種別 器種	R.P%	C面 底面	基高 基厚	頭頂 胸頂	外傾度(°) 残存	胎土 焼成	外観 内面	底・尖部切削 切削法成形	備考
37	6 S Q46 F5	圓底盤 环	219	(130) (26)	38 5	21 1/4以上	細砂面 良	クロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	7 S Q46 F5	圓底盤 环	219	(140) (26)	37 4	26 1/4以下	細砂面 不良	削り ロクロ底		火痕れ	
	8 S Q46 F5	圓底盤 环	220	(144)	10	細片	細砂面 不良	タクキ アヌ板		火はね痕	
38	1 灰原 G	F-36④ IV 圓底盤 环	149	44	36	細密	クロ目	細軸余切り			
	2 灰原 G	G-36① IV 圓底盤 环	694	133	49.5	34	細砂面 良	クロ目 ロクロ底	細軸余切り		
	3 灰原 G	G-36② IV 圓底盤 环	719	126	27	46	細砂面 良	クロ目 ロクロ底	細軸余切り	切り落しの跡の 第二層あり	
4	灰原 G	G-36③ IV 圓底盤 环	622	141	49	43	細砂面 良	クロ目 ロクロ底	細軸余切り		
	5 灰原 G	G-36④ IV 圓底盤 环	(144)	39	33	細砂面 良	クロ目	細軸余切り	にぶい褐色		
	6 灰原 G	G-36⑤ IV 圓底盤 环	(122)	4	1/2以上	細砂面 良	クロ目 ロクロ底	細軸余切り			
7	灰原 G	G-39② IV 圓底盤 环	(130)	35	34	細密	クロ目	細軸余切り			
	8 灰原 G	G-39③ IV 圓底盤 环	(146)	38	39	細密	クロ目 ロクロ底	細軸余切り			
	9 灰原 G	I-39① IV 圓底盤 环	667	134	35	34	細砂面 良	クロ目 ロクロ底	細軸余切り		
10	灰原 G	F-39① IV 圓底盤 环	133	36	38	細砂面 良	クロ目	細軸余切り	小標識 地皮		
	11 灰原 G	G-39④ IV F8 圓底盤 环	547	(133)	36	34	細砂面 良	クロ目 ロクロ底	細軸余切り	余切り失敗の痕	
	12 灰原 G	F-39③ IV 圓底盤 环	134	35	40	細砂面 良	クロ目	細軸余切り			
13	灰原 G	G-39② IV 圓底盤 环	130	48	44	細砂面 良	クロ目	細軸余切り	亀裂		
	14 灰原 G	F-39③ IV 圓底盤 环	134	27	38	細砂面 良	クロ目	細軸余切り			
	15 灰原 G	G-39③ IV 圓底盤 环	(130)	35	35	細砂面 良	クロ目	細軸余切り			
16	灰原 G	G-39② IV 圓底盤 育耳环	(145)	49	30	細砂面 不良	クロ目 ロクロ底	細軸余切り	海綿骨片		
	17 灰原 G	G-39③ IV 圓底盤 环	(130)	3.5	1/2以上	細砂面 良	クロ目 ヘラリゲ	細軸余切り	底部へ接ぎ		
	18 灰原 G	F-39 V 圓底盤 环	(17)	4	1/4以下	細砂面 良	クロ目	細軸余切り	底部へ接ぎ		
19	灰原 G	G-29③ IV 圓底盤 环	(11)	5	1/4以下	細密	クロ目	細軸余切り	底面へ接ぎ 「山瓦」		
	20 灰原 G	G-39① IV 育耳环	679	(111)	55	20	細密	クロ目	細軸余切り	物	
	21 灰原 G	G-39④ IV 圓底盤 双耳环	(102)	(46)	16	細砂面 不良	削り ロクロ底	細軸余切り			
22	灰原 G	G-39⑤ IV 圓底盤 双耳环	(56)	4	1/2以上	細砂面 不良	クロ目 ロクロ底	細軸余切り			
			64	5	1/2以上	細砂面 良	クロ目 ロクロ底				

表6 土器観察表(5)

調査番号	出土遺物	グリッド順序 灰原ブロック 灰原順序	種別 断面	RPNo.	口径 底径	高さ 厚さ	断面 形状	外側面 J 残存	施土 施成	外面 内面	計測単位		備考	
											高さ 厚さ	外側面 J 残存	施土 施成	
38 23	灰原 G	G-30③ IV	直壁器 直壁		(106)	31.5 3.5		1/2以上	細砂質 堅	ロクロ目 ロクロ底				外面 灰原 外側面 灰原
24	灰原 G	G-30③ IV	直壁器 直壁		(122)	35 8		1/2以上	直壁	ロクロ目 ロクロ底				陶器骨針多々
25	灰原 G	F-29② IV	直壁器 直壁		(169)	35.5 7		1/2以上	細砂質 堅	ロクロ目 ロクロ底				内部 灰原 灰原台 2つある上部が平坦
26	灰原 G	G-30③ IV	直壁器 直壁	785	149	42 5		3/4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面 黒ねじき模		
27	灰原 G	G-30③ IV	直壁器 直壁		162	32 5		ほぼ完形	細砂質 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転余切り	色調暗赤褐色		
28	灰原 G	G-30③ IV	直壁器 直壁		(136)	18 6		1/2以上	細砂質 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底				
39	1	灰原 G	G-29③ IV G-30③ IV	直壁器 直壁		(244) 92	(48) 7	3/4以上	細密 堅	ロクロ目 ロクロ底				
	2	灰原 G	F-30① IV	直壁器 直壁	389	(56) 55	4.5 66	3/4以上	細密 良	カキメ 削り ロクロ底				ナデ
	3	灰原 G	G-29③ G-30③	直壁器 直壁		(185) 90	7 180	3/4以上	細密 堅	ロクロ目 カキメ ロクロ底				ヘラ切り 陶製
	4	灰原 G	G-30③ IV	直壁器 直壁	126	(87) 7	(94) 7	口縁部のみ	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底 ヘラナープ				
	5	灰原 G	G-30③	直壁器 直壁	(128)	(148) 4	(106) (202)	1/4以上	細砂質 良	ロクロ目 指付カキメ ロクロ底				外側 灰原
	6	灰原 G	G-30④	直壁器 直壁		(215) 9	(215) 1	1/4以下	細密 堅	カキメ クラキ ロクロ底 ハケメ				
40	1	灰原 G	G-30①	土師器 坪		(114) (86)	48 5	20	細密 良	ロクロ目 ロクロ底 ナデ	回転余切り	石英斑		
	2	灰原 G	G-30③ IV	土師器 坪		(126)	50.5	29	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	3	灰原 G	G-29③ IV	土師器 坪		135 53	48 4	ほぼ完形	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面 黒		
	4	灰原 G	G-30③ IV	土師器 坪		(138)	44.5	38	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	5	灰原 G	G-30④	土師器 坪	782	(166) 53	45 5	1/2以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	6	灰原 G	G-30④ IV	土師器 坪		142 48	48 3	44 3/4以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	重み		
	7	灰原 G	G-30③④⑤ IV	土師器 坪		149 62	57 3.5	40 1/2以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	8	灰原 G	G-30①	土師器 坪		(140) 56	48 4	38 1/2以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面 黒		
	9	灰原 G	G-30③	黑色土器 碗		148 57	52 3.5	37 3/4以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面		
	10	灰原 G	G-30③ IV	土師器 坪		(136)	52 50	34 4	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	外側 墓室天井 内面		
	11	灰原 G	G-30①	土師器 坪	628	(138)	47 48	36 3.5	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	12	灰原 G	G-30③	土師器 坪	629	(133)	47 54	38 4	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	小鉢底		
	13	灰原 G	G-30③ IV	土師器 青苔坪		(152)	58 62	39 4	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	台部が角張る		

表6 土器観察表(6)

計測単位 mm

探査番号	出土遺構 灰原ブロック	グリット層序 灰原層序	鉢割 形種	RPNs	口径 底径	高 底厚	縁径 網目	外側度(°) 残存	胎土 施成	外型 内面	底・天井部切削 切離後成形	備考
40	14 灰原 G	G-380①	土師器 有台环	681	(182) 67 (67) 5	40 1/2以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	15 灰原 G	G-380②	土師器 有台环	664	(150) 55 (62) 4	37 1/4以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	實母底		
	16 灰原 G	G-380③	土師器 环	631	(227) 84 88 8	34 1/2以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	17 灰原 G	G-380④	土師器 有台环	150	49.5 60 4.5	41 3/4以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	18 灰原 G	G-380⑤ IV	土師器 圓	(190)	(163) (173) 6 (195)	41 1/4以上	粗砂底 良	削り ロクロ底				
	19 灰原 G	G-380⑥ IV	土師器 圓	(210)	(180) (173) 6 (203)	37 1/4以下	粗砂底 良	削り ロクロ底 カキメ			保存着	
	20 灰原 G	G-380⑦ IV	土師器 圓	741	(209) (115) 9	37 1/4以上	粗砂底 良	ロクロ目 ロクロ底				
	21 灰原 G	G-380⑧	土師器 圓	1079	(51) 4.5	37 1/4以上	粗砂底 良	ロクロ目 ロクロ底			取手付蓋 中央に孔	
	22 灰原 G	G-380⑨ IV	土師器 耳環		(35) (43) 5	37 1/2以上	細密 良	ロクロ目 ナゲ	回転余切り			
41	1 灰原 G	G-290① IV	土師器 圓	752	(156) 46 66 5.5	30 1/2以上	細密 良	ナゲ ミガキ	?	ナゲ	内周 金網器なし	
	2 灰原 G	G-290② IV	黑色土器 耳環	(172)	(70) 5	37 1/2以上	細密 良	ロクロ目 ミガキ			黑色處理なし	
	3 灰原 G	F-290③ IV	黑色土器 耳環	(142)	72 (60) 5	17 1/2以上	粗砂底 良	ロクロ目 ミガキ	回転余切り	内周		
	4 灰原 G	G-290④ IV	黑色土器 耳環	(160)	52 (66) 4	31 1/4以上	粗砂底 良	ロクロ目 ミガキ	回転余切り	内周		
	5 灰原 G	G-290⑤ IV H-290⑤ IV	土師器 耳環	(172)	(70) 5	37 1/2以上	細密 良	ロクロ目 ミガキ	回転余切り	内周		
	6 灰原 G	F-290⑥ IV	黑色土器 耳環	(142)	72 (60) 5	17 1/2以上	粗砂底 良	ロクロ目 ミガキ	回転余切り	内周		
	7 灰原 G	G-300① IV	黑色土器 背台碗	660	(130) 52 64 4.5	31 1/4以上	粗砂底 良	ロクロ目 ナゲ	回転余切り	内周		
	8 灰原 G	G-300② IV	黑色土器 耳環	(160)	52 (66) 4	42 1/4以上	細密 良	ロクロ目 ミガキ	回転余切り	内周		
	9 灰原 G	G-300③ IV F-300③ IV	黑色土器 耳環	(172)	51 71 5	37 1/4以上	粗砂底 良	ロクロ目 ミガキ ロクロ底 ミガキ	回転余切り	内周 高台外周に剥肉痕		
	10 灰原 G	G-300④ IV	土師器 小柄鑊	742	163 63 62 5 95	95 3/4以上	粗砂底 良	ロクロ目 ロクロ底 ミガキ	回転余切り	實母底		
	11 灰原 G	G-290⑤ IV	土師器 鑊		(280) 70 5	37 1/4以下	粗砂底 良	ロクロ目 ロクロ底 ハケ目	回転余切り	外周 僅 底面へラ鉢形「X」 蓋母底		
	12 灰原 G	F-290⑥ IV上	黑色土器 鑊		(74) 7	37 口縁部のみ	粗砂底 良	ケツリ ミガキ		内周		
	13 灰原 G	G-290⑦ IV- H-290⑦ IV- IV	土師器 背台碗	266	90 83 5	37 1/4以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底 ミガキ	回転余切り	外周 僅 底面 蓋母底		
	14 灰原 G	G-30	櫛戸 カ 鏡		(22) (76) 7	37 1/4以下	細密 良	ロクロ目 ロクロ底		實母文 外・内面に施		
42	1 灰原 H	H-200①	須恵器 耳環	(126)	42 76 5.5	25 1/4以上	粗砂底 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	2 灰原 H	I-280② IV中	須恵器 耳環	316	(118) 39 74 6.5	34 1/2以上	粗砂底 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	3 灰原 H	I-280③	須恵器 耳環	(112)	39 (53) 4.5	29 1/4以上	細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			
	4 灰原 H		須恵器 耳環	(122)	36 (62) 5.5	35 1/2以上	粗砂底 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	灰被り		
	5 灰原 H	I-280④	須恵器 耳環	(124)	37 80 3.5	37 1/4以上	粗砂底 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り			

表 6 土器観察表(7)

計測単位 mm

同番号	出土遺物	グリッド層序 試験層序	種別 形態	R P%	口径 口径	脚厚 脚径	底径 脚柱	外傾度(°) 残存	胎土 焼成	外面 内面	底・天井部切削 切削後成形	備考
42	6 沢原 H	H-30④ IV	直腹器 环	142 71	44 5			37 1/2以上	粗砂面 不規	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	薄縁骨針
7	沢原 H	I-30①	直腹器 环	(144) (62)	37 4			30 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
8	沢原 H	I-30②	直腹器 环	(146) (63)	36 3			40 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
9	沢原 H	I-30③	直腹器 环	136 68	27 4			36 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
10	沢原 H	I-30④	直腹器 环	1080 64	11340 4.5			37 1/2以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
11	沢原 H	I-30⑤	直腹器 环	(137) 68	33 3.5			37 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
12	沢原 H	I-30⑥	直腹器 环	(146) (66)	38 6			39 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
13	沢原 H	I-30⑦	直腹器 环	(128) (66)	34 4.5			42 1/2以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	底付片付管
14	沢原 H	I-29②	直腹器 环	1071 66	128 5.5			38 3/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	切り落し不規
15	沢原 H	I-30⑧	直腹器 环	(149) 66	41 4.5			37 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
16	沢原 H	I-30⑨	直腹器 环	(149) (66)	36 5			38 1/2以上	粗砂面 不規	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
17	沢原 H	I-30⑩	直腹器 环	(139) (66)	37 4.5			37 1/4以上	直腹 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	薄縁骨針
18	沢原 H	I-29③	直腹器 环	(147) (69)	36.5 5			29 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
19	沢原 H	I-30⑪	直腹器 环	140 60	39.5 4			39 1/2以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
20	沢原 H	H-30②	直腹器 环	(140) (70)	33 4			41 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
21	沢原 H	H-30③	直腹器 环	(139) (70)	36 5			38 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
22	沢原 H	I-30⑫	直腹器 环	(150) (70)	35 4.5			35 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	余切り失敗の底
23	沢原 H	I-29⑬	直腹器 环	(129) 68	39 4			34 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	火ぶくれ
24	沢原 H	I-30⑭	直腹器 环	(149) 76	36 5			37 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
25	沢原 H	I-30⑮	直腹器 环	(144) (70)	34 5			38 1/2以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
26	沢原 H	I-30⑯	直腹器 环	(140) (66)	33.5 4			39 1/2以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
27	沢原 H	I-29⑰ IV中	直腹器 环	319 68	138 4			43 3/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	底部に亀裂
28	沢原 H	I-30⑱	直腹器 环	1076 64	49 5			39 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
29	沢原 H	I-30⑲	直腹器 环	1069 62	34 6.5			42 3/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	
30	沢原 H	I-30⑳	直腹器 环	(145) (70)	39 5.5			36 1/2以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	

表6 土器観察表(8)

計測単位 mm

擇目番号	出土遺物 洪原ブロック 洪原層序	種別 器種	R P%	口径 底径 側径 頂径 側径 頂径	外側底() 液存	胎土 焼成	外周 内面	底・天井部切縁 切削状況	備考	
43 1	洪原 H	I-30D II	調査器 耳	(130) (68) 39 6		30 1/4以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	
2 洪原 H	H-30D IV	調査器 耳	100 55 40.5 4		23 1/2以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	歪みあり	
3 洪原 H	H-30D IV	調査器 耳	103 45 41 3		28 3/4以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	火照れ	
4 洪原 H	H-30D II	調査器 耳	620 58 46.5 3.5		24 1/2以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り		
5 洪原 H	I-30D IV	調査器 耳	913 78 (138) 34 4		37 1/2以上	粗砂質 平底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り		
6 洪原 H	I-30D IV	調査器 耳	(131) 70 34.8 4		36 1/2以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	火照 鉄錆跡	
7 洪原 H	I-29D II	調査器 耳	(140) (64) (28) 3 92			粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	表面へラ抜き 外周火はね	
8 洪原 H	H-31 V	調査器 耳	133 66 37 4		36 研磨充想	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り		
9 洪原 H	I-30D II	調査器 耳	132 66 35 4		40 3/4以上	緻密 不直	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	表面骨針少々	
10 洪原 H	H-30D II	調査器 耳	(150) (82) 39 4.5		37 1/4以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	石英混	
11 洪原 H	H-30D IV	調査器 耳	(138) 72 36 4		38 1/3以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り		
12 洪原 H	I-30D IV	調査器 耳	141 63 39 3		38 1/2以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	表面骨針少々	
13 洪原 H	I-30D IV	調査器 耳	(129) 76 31 6		36 1/2以上	緻密 不直	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	表面骨針少々	
14 洪原 H	I-30D IV	調査器 耳	136 70 39.5 4		38 3/4以上	緻密 不直	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り		
15 洪原 H	H-30D II	調査器 耳	144 63 42 4		36 3/4以上	粗砂質 不直	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	表面骨針 電気	
16 洪原 H	I-30D II	調査器 耳	(144) 66 36 4		38 3/4以上	緻密 不直	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り		
17 洪原 H	H-30D IV	調査器 耳	138 65 38 3.5		35 1/2以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	電源	
18 洪原 H	I-30D II	調査器 耳	(135) 70 39 4		36 1/2以上	緻密 不直	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	火照れ	
19 洪原 H	I-30D II	調査器 耳	150 74 38 6		33 3/4以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	表面骨針 生焼け	
20 洪原 H	H-30D IV	調査器 耳	(150) 62 48 3.5		42 1/2以上	緻密 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り		
21 洪原 H	H-30D II	調査器 耳	(140) 68 39 4		36 1/4以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	火照れ	
22 洪原 H	I-30D II	調査器 耳	643 64 138 3.5		42 3/4以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	表面に電源	
23 洪原 H	H-30D IV	調査器 耳	(162) 74 47 4.5		30 1/2以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り		
24 洪原 H	H-30D IV	調査器 耳	(35) (64) 37.5 3.5		36 1/4以下	緻密 不直	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	底部へラ抜き	
25 洪原 H	H-30D F6	調査器 耳	957 64 (128) 37.5 3.5		35 3/4以上	粗砂質 底	ロクロ目 良 ロクロ底	回転余切り	底部に電源	

表6 土器観察表(9)

探査番号	出土遺物 灰原ブロック	グリッド層序 灰原層序	種別 破片	R.P%	口径 底径	断面 断面	断面 断面	外傾度(°) 現存	胎土 焼成	外側 内側	計測単位 mm		備考	
											底面	底面	底面	
43	26 灰原 H	H-30①D	直腹器 环	937	(140) 60	36 4	39 1/2以上	細砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
27	灰原 H	I-30②D F7	直腹器 环	1142	136 66	46 6	32 3/4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	直腹断状底 底面・合併あり			
44	1 灰原 H	H-29① IV中	直腹器 环	317	(120) G0	32 6	41 1/2以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
2	灰原 H	I-30②D	直腹器 环		(140) 60	39 5	40 1/2以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
3	灰原 H	I-30③D	直腹器 环		(140) 66	36 4	37 1/2以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
4	灰原 H	I-30④D	直腹器 环		134 70	35 4		細砂 不良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	脚跡骨付			
5	灰原 H	I-30⑤D F11	直腹器 环	536	130 70	40 6	32 3/4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
6	灰原 H	I-30⑥D IV	直腹器 环	684	(139) 69	36.5 5	35 3/4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
7	灰原 H	H-30①D	直腹器 环	776	128 73	39 4.5	39 3/4以上	緻密 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	脚跡骨付			
8	灰原 H	I-30⑦D	直腹器 环	1002	127 70	34.5 4.5	39 3/4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	外側、内側に火尋 底面へク書き			
9	灰原 H	I-30⑧D IV	直腹器 环	912	122 68	33 4	39 ほぼ完形	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
10	灰原 H	I-30⑨D	直腹器 环	1012	148 68	41.5 4	39 3/4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
11	灰原 H	I-30⑩D	直腹器 环	992	144.5 70	37 5	45 ほぼ完形	細砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
12	灰原 H	I-30⑪D IV	直腹器 环	906	144 64	49 5	41 1/2以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	脚跡骨付			
13	灰原 H	H-30⑫D	直腹器 环	934	146 68	37 5	39 12.5以上形	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
14	灰原 H	H-30⑬D	直腹器 环	722	142 63	29 4	37 12.5以上形	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	火ぶくれ			
15	灰原 H	I-30⑭D	直腹器 环	966	139 78	29 4.5	34 ほぼ完形	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	底部に丸窓			
16	灰原 H	I-30⑮D	直腹器 环	966	149 65	36 3.5	40 ほぼ完形	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
17	灰原 H	I-30⑯D IV F	直腹器 环	131	26 68	40 35	39 ほぼ完形	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	脚跡骨付 電線			
18	灰原 H	I-30⑰D	直腹器 环	1002	141 67	27 4	37 3/4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	底面に丸窓 脚跡骨付			
19	灰原 H	I-30⑱D IV	直腹器 环	914	145 85	44.5 4	33 3/4以上	細砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	二次焼成を受けらい			
20	灰原 H	I-30⑲D IV F	直腹器 环	688	135 75	34 4	39 ほぼ完形	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
21	灰原 H	I-30⑳D	直腹器 环		126 66	41.5 5.5	34 1/2以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	底部が黒様			
22	灰原 H	I-30㉑D IV	直腹器 环		(132) 62	35 4	40 1/2以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				
23	灰原 H	I-30㉒D	直腹器 双耳环	1065	0.06 66	47 4	22 3/4以上	細砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り				

表6 土器観察表(10)

計測単位 mm

探査番号	出土遺物 灰原ブロック 灰原順序	縦列 番号	R P N	口径 底径	器高	縁径	縁柱	外傾度(°) 残存	胎土 造成	外面 内面	施・天井部切跡 削離後成形	番号
44	24 灰原 H I-30②	復原器 有台环	1078	133 66	47 5			33 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
	25 灰原 H H-30②	復原器 有台环		(140)	67.5			33 3/4以上	粗砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	火ぶくれ
	26 灰原 H H-30② IV	復原器 蓋		(56)				1/2以上	粗密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
	27 灰原 H H-30② IV	復原器 有台环		(142)	86			1/2以上	粗密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
45	1 灰原 H I-29② IV	復原器 耳	(126)	33.5 (70)	38			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	磨研骨針少々	
	2 灰原 H I-30② IV F	復原器 耳		(18)				粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面へラ削り	
	3 灰原 H I-30② IV	復原器 有台环	154 90	33 4	27			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
	4 灰原 H H-29② IV	復原器 有台环	(150)	48.5	34			粗砂質 良	ロクロ目 剥り	回転余切り	石芯・荷持骨針根 色調に沿う複色	
	5 灰原 H I-30②	復原器 双耳环	(100) (57)	50 3.5	19			粗密 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	瓦部欠損	
	6 灰原 H I-30②	復原器 双耳环	1072	100 60	49 4.5	22		粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	瓦部欠損	
	7 灰原 H H-30② F6	復原器 双耳环	541 (94)	(45) (55)	18 3	1/4以上		粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
	8 灰原 H H-29② F7	復原器 双耳环	618 (107)	(50) 56	21 4	1/2以上		粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
	9 灰原 H H-30②	復原器 双耳环	924 (96)	55	14			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
	10 灰原 H I-30	復原器 双耳环	775 (94)	104 64	47 6	25		粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	磨研骨針	
	11 灰原 H H-30②	復原器 双耳环	107 (58)	48 3	23			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
	12 灰原 H I-30②	復原器 双耳环	(90) (58)	(48) 4	19			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
	13 灰原 H H-30② IV	復原器 双耳环	(133)	54	26			粗密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り		
	14 灰原 H I-30② F6	復原器 耳環	1073	145 7	29			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	歩がみ大きい	
	15 灰原 H H-30② F6	復原器 耳環	1154 (120)	33 7	3/4以上			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面へラ削り	
	16 灰原 H I-30②	復原器 耳環		(48) 5	1/4以下			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面へラ削り	
	17 灰原 H I-30②	復原器 耳環	(132) (35)					粗密 良	ロクロ目 ロクロ底	?	火耕れ	
	18 灰原 H H-30②	土師器 耳環	621	129 5.5	39			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面・外面 耳は剥き質 並み 土面付着	
	19 灰原 H H-30②	復原器 耳環	626	158	34.5			粗密 良	ロクロ目 ロクロ底			
	20 灰原 H H-30②	復原器 耳環	1155 (150)	34	1/2以上			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転へラ削り	煮ね焼き痕	
	21 灰原 H I-30②	復原器 耳環	1074	154	36			粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	回転へラ削り		

表6 土器観察表(11)

測定番号	出土遺物	グリッド順序 灰原ブロック	種別 器種	RP%	口径 底径	壁高 底厚	肩径 胴径	外傾度(°) 斜率	胎土 焼成	計測単位 mm		
										底・天津鉢切離 切離後成形	備考	
45	22 灰原 H	H-36③	直腹器 平底		(140) 34 6			3/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転ヘラ削り	
23	灰原 H	I-36②	直腹器 平底		(24) 4			1/4以下	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転ヘラ削り	
24	灰原 H	H-36②	直腹器 平底		(136) 24 5			1/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転ヘラ削り	
25	灰原 H	I-36②	直腹器 平底	1000	(145) 25 7			3/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転ヘラ削り	火摩・重ね焼き痕
26	灰原 H	I-36①	直腹器 平底		(145) 29 3.5			1/2以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転ヘラ削り	得跡骨針
27	灰原 H	I-39①	直腹器 平底		(149) 26 4			1/4以下	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転ヘラ削り	
28	灰原 H	I-29	直腹器 平底		(162) 21 4			1/2以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転ヘタ削り	
46	1 灰原 H	I-39②	直腹器 平底	1011	108 4	39			粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転ヘラ削り	
2	灰原 H	H-29③ IV	直腹器 平底		114 7	28		1/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底		外側 回転 骨針
3	灰原 H	H-39④	直腹器 平底	620	125 4.5	25			粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転水切り	得跡骨針
4	灰原 H	H-39③ IV	直腹器 平底		154 4.5	24		1/4以上	微窪 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転ヘラ削り	
5	灰原 H	I-39③ IV	直腹器 平底	695	128 7	26			微窪 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	外側 重ね焼き痕 骨針 小標記
6	灰原 H	H-29③	直腹器 平底	746	(154) 26.5 6	25			粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	内面 重ね焼き痕
7	灰原 H	H-36④	直腹器 平底	940	(145) 31 5			1/4以上	粗砂混 不良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	色面に赤色
8	灰原 H	I-36③ IV	直腹器 平底	697	(152) 24 7			1/4以上	微窪 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	内面 重ね焼き痕
9	灰原 H	I-36②	直腹器 平底	991	(146) 30 7			1/2以上	粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転ヘラ削り	
10	灰原 H	I-36③ IV	直腹器 平底	686	152 4	26			粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	
11	灰原 H	I-36③ IV	直腹器 平底	919	146 5	25			粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	丸背 小標記 内面 重ね焼き痕
12	灰原 H	I-36②	直腹器 平底	798	160 4	38			粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	
13	灰原 H	I-36① P6	直腹器 平底	329	(149) 35 7.5			1/2以上	粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底		豆かき？ 重ね焼き痕
14	灰原 H	H-36①	直腹器 平底	929	(170) 42 5			3/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転水切り	内面 重ね焼き痕 小標記 大割れ
15	灰原 H	H-36② P7	直腹器 平底	609	144 6	37			粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	内面 重ね焼き痕
16	灰原 H	I-36① P12	直腹器 平底	537	142 7	42.5			粗砂混 不良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	内面 重ね焼き痕 大割れ
17	灰原 H	I-36③ IV	直腹器 平底	693	156 5	33			粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	丸背
18	灰原 H	H-36②	直腹器 平底	728	155 5	46			3/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	外側 重ね焼き痕 つまみ目、ロクロ底

表6 土器観察表(12)

探査番号	出土遺物 灰原ブロック 灰原層序	種別 器種	R P No.	口径 底径	断面 断厚	頸径 胴径	外輪底△ 保存	胎土 施成	外側 内側	計測単位 mm		
46	19 灰原 H	H-30① IV	灰原器 灰原		145	31		3／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	面縫骨針 小縫混
	20 灰原 H	H-30②	灰原器 灰原	612	153	42		1／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	面縫骨針
	21 灰原 H	H-30③	灰原器 灰原		160	34		3／4以上	粗密	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	面縫骨針
	22 灰原 H	I-30②	灰原器 灰原	990	145	40		3／4以上	粗密	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	内腹 重ね焼き灰 灰原土
	23 灰原 H	I-30③ IV	灰原器 灰原	692	143	38		6	粗密	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	
	24 灰原 H	H-30④ IV上	灰原器 灰原		160	35		1／2以上	粗密 不直	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	
	25 灰原 H	I-30④ IV	灰原器 灰原	772	145	38			粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	小縫混
	26 武原 H	H-30⑤ PI	灰原器 灰原	542	145	43			粗砂混	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	歪み
	27 灰原 H	H-30⑥ IV下	灰原器 灰原	544	148	37		3／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転水切り	内腹 外腹 灰原
	28 灰原 H	I-30⑥ IV	灰原器 灰原		(136)	16.5		3	粗砂混	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	小型
	29 灰原 H	I-30⑦ IV	灰原器 灰原		146	35			粗砂混 黏	ロクロ目 ロクロ底	回転水切り	丸原
	30 灰原 H	I-30⑧ IV下	灰原器 灰原		148	29		1／2以上	粗砂混	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	小縫原 丸原
	31 灰原 H	I-30⑨ IV	灰原器 灰原		(134)	34		1／2以上	粗砂混 黏	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	面縫骨針
	32 灰原 H	H-30⑩ IV	灰原器 灰原		156	47		1／2以上	粗砂混 不直	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	?	色調にぶい後色
	33 灰原 H	H-30⑪ IV	灰原器 灰原		(160)	34		1／2以上	粗密	ロクロ目 ロクロ底	回転水切り	
47	1 灰原 H	I-30⑫	灰原器 灰原		106	(104)	48		粗砂混 良	ロクロ目		リング状凸唇
	2 灰原 H	H-30⑬ IV I-30⑭ IV	灰原器 灰原		105	304	52		粗密	ロクロ目	?	翼け
				96	8	194		3／4以上	良	ロクロ底	ナデ	リング状凸唇
	3 灰原 H	I-30⑮ 他	灰原器 灰原	910	(200)	6	(190)	1／2以上	粗砂混	ロクロ目	開削水切り?	翼け
	4 灰原 H	H-30⑯	灰原器 灰原		(117)	(107)	(103)	1／4以下	粗砂混	ロクロ目 カキメ		内腹 灰原 火照れ
	5 灰原 H	I-30⑰ ⑯IV	灰原器 灰原		(172)	(304)	(149)	1／2以上	粗砂混 形	ロクロ目 タタキ ロクロ底 アケ底		火ぶくれ
	6 灰原 H	H-30⑱ IV上 I-30⑲	灰原器 灰原		(92)	(94)			粗密	ロクロ目		外腹 自然釉
				5.5	148	1／4以下			粗砂混 形	ロクロ底		
48	1 灰原 H	I-29⑯	灰原器 灰原		(72)				粗砂混 形	ロクロ目 ロクロ底		波状状縫文
	2 灰原 H	I-30⑯	灰原器 灰原		(83)			1／4以下	粗砂混 形	ロクロ目 カキメ		
	3 灰原 H	I-30⑯	灰原器 灰原		(7.8)			1／4以下	粗砂混 良	ロクロ目 カキメ		
	4 灰原 H	I-30	灰原器 灰原		(124)	(40)		1／4以下	粗砂混 形	ロクロ目 ロクロ底		外腹 灰原 内腹 釉

表6 土器観察表(13)

計測単位 mm

探査番号	出土遺物	グリッド層序 汎原ブロック	種別 特徴	R P%	口径 底径	基高 頂高	頸径 胴径	外傾度(°) 直立	胎土 焼成	外縁 内縁	底・外底部切幅 切縫状況	計測単位 mm
48 5	汎原 H	I-29②	直腹器 直		(36) 8			1/4以下	直 底	ロクロ目 ロクロ底 カキメ		
6	汎原 H	I-30②	直腹器 直		(66) 5			1/4以下	直 不直	ロクロ目 カキメ ロクロ底	脚跡骨針	
7	汎原 H	I-30③	直腹器 直		(71) 5			1/4以下	直砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底		
8	汎原 H	I-29③ H-35 IV 直	直腹器 直	232	(446) 8 (404)	(162) 404		3/4以上	直砂渦 良	ロクロ目 ナタキ ロクロ底 アテ底	張み 丸底	
9	汎原 H	I-29③	直腹器 直		(65) 8			1/4以下	直砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底 ハケメ		
10	汎原 H	I-30③	直腹器 直		(74) 6			1/4以下	直 良	ロクロ目 ロクロ底	外縁 汎原り	
49 1	汎原 H	H-29③ IV H-35 IV上	陶器 異字彌		(21) (12)			1/4以上	細砂渦 良	ケズリ クラキ ミガキ	脚1個残存	
2	汎原 H	I-30③ IV	土範器 坏	(149) 70	46 3.5		32		直 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	管足底
3	汎原 H	I-30③ IV	土範器 坏	162 51.5	44 4		42 3/4以上		直 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	管足わざに墨
4	汎原 H	I-30①	土範器 坏	696	137 49 49	49 44 44	37 18度充形		直 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
5	汎原 H	H-30④ IV上	土範器 坏		(32) 52			1/4以下	直 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	底部 線状压痕 3
6	汎原 H	H-30④ IV	土範器 坏?		(27) 6			1/4以下	直 良	ハゲメ		外縁 ヘラ擦き 横線
7	汎原 H	I-30③ IV	土範器 坏	129 56	41 5		39 18度充形		直砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
8	汎原 H	I-30③ IV	土範器 坏	(17) 68	3		直砂渦 良		直砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	面面へラ擦き「×」
9	汎原 H	H-30③ IV	土範器 底	(98) (48)	12			1/4以下	直砂渦 良	ダタキ アテ底 剥り		管帶底 脚跡骨針
10	汎原 H	H-30④ IV	土範器 坏	(34) (29)	41 6		31		直 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
11	汎原 H	I-30③ IV	土範器 底	(144) 7	51			1/4以下	直砂渦 良	ロクロ目 ハケメ ハテメ		
12	汎原 H	I-30③ IV	土範器 底	130 54	27 4		27 1/2以上		直 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	盤台の墨 管足底
13	汎原 H	I-30③ IV	土範器 底	(99) (65)	21 5			1/4以上	直 不直	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
14	汎原 H	I-30③ IV下	黑色土器 焼		(31) (30)			1/4以下	直 良	ロクロ目 ミガキ 剥り ミガキ	回転余切り?	肩周
15	汎原 H	I-29③ IV中	黑色土器 青苔柄	352	(128) 48	52 4	31 1/2以上		直砂渦 良	ロクロ目 ミガキ	回転余切り	内底
16	汎原 H	I-30③ IV	黑色土器 青苔柄	(189) (66)	74 5.5		35 1/2以上		直 良	ロクロ目 ミガキ	回転余切り	内底
17	汎原 H	I-30③ IV上	黑色土器 變		(116) (187)			1/4以上	直砂渦 良	ミガキ ロクロ底 ハケメ		肩周

表6 土器観察表(14)

計画単位

標印番号	出土遺物 灰原ブロック	グリッド層序 灰原層序	種別 器種	R P %	口径 直径	縦高 縦厚	横径 横径	外傾度(°) 残存	胎土 焼成	外面 内面	底・天部切削 切削洗浄形	備考
56	1 灰原 J	I-30④ F11	調査器 环	601	122 64	36 5		33 珪砂充形	緻密 堅	クロ目 ロクロ底	回転余切り	内面部 大溝
2	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	711	121 63	32 5		42 3/4以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
3	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	711	125 65	35 3.5		38 3/4以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
4	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	702	128 65	37 5		35 1/4以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
5	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	708	(130)	34.8		35 1/2以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
6	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	705	141 62	40 4		38 珪砂充形	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底		口部に亀裂
7	灰原 J	J-30⑤	調査器 环	968	(144)	44		37 1/2以上	粗砂混 不良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
8	灰原 J	I-30④	調査器 环	756	(136)	36		32	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
9	灰原 J	J-30④	調査器 环	962	141 73	41 5		35 珪砂充形	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	亀裂
10	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	132	35 65	40 5		30 3/4以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	肉縫合多い
11	灰原 J	J-30④	調査器 环	1061	144 75	38 3		35 珪砂充形	粗砂混 不良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
12	灰原 J	J-30④	調査器 环	(134)	31 74	31 3.5		43 1/2以上	粗砂混 堅	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
13	灰原 J	K-32② IV	調査器 环	(130)	36			25 1/2以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	~ラ切り	
14	灰原 J	I-30④ IV下	調査器 环	700	126 64	41 3.5		35 珪砂充形	粗砂混 平良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
15	灰原 J	J-30④	調査器 环	128	32			35 3/4以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
16	灰原 J	I-30④	調査器 环	759	148 72	35.5 3		44 1/2以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	小細溝
17	灰原 J	J-30④ IV	調査器 环	(146)	30 65	30 4		46 1/4以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	外縫 火葬 色調赤褐色
18	灰原 J	K-30②	調査器 环	349	(142)	43 14		30 1/4以上	粗砂混 不良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
19	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	630	38 64	38 3		38 1/2以上	粗砂混 堅	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
20	灰原 J	I-30④	調査器 环	630	39 64	36 2.5		36 1/2以上	緻密 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	肉縫合針
21	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	(130)	42 69			33 1/4以上	粗砂混 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	肉縫合針 亀裂
22	灰原 J	I-30④ IV	調査器 环	(135)	36 64			34 1/3以上	粗砂混 堅	クロ目 ロクロ底	回転余切り	
23	灰原 J	I-30④	調査器 环	(132)	43 (74)			36 1/4以上	緻密 堅	クロ目 ロクロ底	回転余切り	小細溝
24	灰原 J	J-30④	調査器 环	(130)	39 65			38 1/2以上	緻密 良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	火葬れ
25	灰原 J	J-30④	調査器 环	136	36 76			37 1/2以上	粗砂混 平良	クロ目 ロクロ底	回転余切り	

表6 土器観察表(15)

擇回番号	出土遺物 灰原ブロック	グリッド順序 灰原順序	断面 断面	RP%	口徑 底径	高さ 厚さ	頸径 胴径	外傾度(°) 既存	胎土 焼成	外側 内側	計測単位 mm		備考
											底・天井部の縫 知離後成形	回転余切り 手削ヘタ削り	
50	灰原 J	G-30② IV	直腹器 耳		(138) 58	43 4	35 1/2以上	粗砂混 不均	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	粗砂骨付 色調に沿う褐色		
27	灰原 J	I-30② IV	直腹器 耳		(144) (60)	50 5	26 1/2以上	粗砂混 不均	ロクロ目 ナダ ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	粗砂余切り 色調に沿う褐色 小跡底		
28	灰原 J	K-30② IV中	直腹器 耳		(132.5) (60)	49 4.5	23 1/4以下	粗砂混 不均	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	石漠混 生焼け		
29	灰原 J	K-30②	直腹器 耳	296	(140) (60)	37 4	32 1/4以下	粗砂混 不均	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り	小跡底	
30	灰原 J	K-30② IV	直腹器 耳		(138) (60)	45 4.5	19 1/4以上	粗砂混 不均	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り	良	
51	灰原 J	K-30② IV	直腹器 耳		(160) (110)	36 4	24 1/4以上	粗砂混 不均	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り	粗砂へタ削き「×」 豊原	
2	灰原 J	I-30② IV下	直腹器 耳	641	142 71	43 4	33 1/4以上	粗砂混 底は完形	ロクロ目 良	ロクロ目 ロクロ底	粗砂余切り 手削ヘタ削り	豊原に急凹 粗砂骨付	
3	灰原 J	K-30② IV	直腹器 耳		(130) (60)	41 3	22 1/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 剥り 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り		
4	灰原 J	K-30② IV	直腹器 耳		(160) (110)	37 3.5	27 1/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 剥り ロクロ底	ロクロ目 剥り ロクロ底	ヘタ切り		
5	灰原 J	K-30② IV上	直腹器 耳		130 88	38 6	30 1/4以上	粗砂混 不均	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り	色調暗赤褐色	
6	灰原 J	K-30② IV	直腹器 耳			(25) 71	4.5 直面のみ	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	静止余切り	粗砂骨付	
7	灰原 J	J-30②	直腹器 耳		(10) 86	5 直面のみ		粗砂混 不均	ロクロ目 ロクロ底			直面にロクロ使用 の工具跡に沿う褐色	
8	灰原 J	K-30② IV	直腹器 耳		(150) (92)	61 5	17 1/4以上	粗砂混 底	ロクロ目 剥り ロクロ底	ロクロ目 剥り ロクロ底	ヘタ切り		
9	灰原 J	J-30②	直腹器 耳			(16) 67	8 直面のみ	歯密 良	ロクロ底		両輪余切り	直面へタ削き「×」 小跡底	
10	灰原 J	J-30② IV	直腹器 耳			(15) (160)	3 1/4以下	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	両輪余切り	直面へタ削き「×」 小跡底	
11	灰原 J	J-29②	直腹器 耳	965	148 61	33 4	42 底は完形	粗密 良	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	両輪余切り		
12	灰原 J	K-30② IV	直腹器 耳			(22) 106	3 1/4以下	粗砂混 底	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り	直面へタ削き「×」	
13	灰原 J	I-30② IV下	直腹器 有台耳	701	132 70	56 4	36 底は完形	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り		
14	灰原 J	K-30②	直腹器 耳		(129) 76	48.5 5	39 1/2以上	粗砂混 底	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	静止余切り	直面 プレ底 ×	
15	灰原 J	K-30② IV上	直腹器 有台耳		(136) 86	45 6	26 1/2以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り		
16	灰原 J	J-30②	直腹器 有台耳		(110) 68	55 4	20 1/2以上	粗砂混 良	ロクロ目 剥り ロクロ底	ロクロ目 剥り ロクロ底	両輪余切り	直面骨付	
17	灰原 J	I-30② IV	直腹器 有台耳	763	(142) (69)	58 6	20 3/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	両輪余切り	直面骨付	
18	灰原 J	I-30② IV	直腹器 有台耳		142 90	47.8 5	28 3/4以上	粗砂混 底	ロクロ目 剥り ロクロ底	ロクロ目 剥り ロクロ底	両輪余切り 両輪へタ削り	直面骨付 色調を示す褐色	
19	灰原 J	K-30② IV	直腹器 有台耳		(150) (98)	56 4	29 1/2以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	ヘタ切り	直面・小跡底	
20	灰原 J	I-30②	直腹器 有台耳	721	(144) 83	61 6	27 3/4以上	粗砂混 不均	ロクロ目 ロクロ底	ロクロ目 ロクロ底	両輪余切り	丸削れ 丸底、直面	

表6 土器観察表(16)

計測単位 mm

標印番号	出土遺物	グリッド番号	縦底 灰原ブロック	縦底 灰原層序	縦底 器種	R P No	口径 底径	器高 器厚	頸径 胴径	外底部() 残存	胎土 焼成	外表面	底・天井部切削 切削後底形	備考
61 21	灰原 J	I-390②	IV	縦底層 有台耳	763	132 (65)	560 5		22 3/4以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	西縫骨付 小縫底	
62 1	灰原 J	I-390③		縦底層 灰原	1065	125	29.5 5.5		3/4以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	?		
2	灰原 J	I-390④	IV下	縦底層 灰原	140	90.3			ほぼ完形	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	?		
3	灰原 J	I-390⑤		縦底層 灰原	1016	(140)	33		1/4以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り	秀面ヘラ削りハジキ	
4	灰原 J	I-390⑥		縦底層 灰原	1149	(142)	34		1/4以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	?		
5	灰原 J	I-390⑦		縦底層 灰原	756	(147)	39		3/4以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り	丸底	
6	灰原 J	I-390⑧		縦底層 灰原	1161	138	34		ほぼ完形	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り	小縫底	
7	灰原 J	I-390⑨	IV	縦底層 灰原	771	150	28		3/4以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	?		
8	灰原 J	I-390⑩	IV	縦底層 灰原	768	158	29		ほぼ完形	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り		
9	灰原 J	I-390⑪	IV	縦底層 灰原	762	151	30		1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り	内面 灰被り つまみ部分欠損	
10	灰原 J	K-300① 中		縦底層 灰原	348	152	36		ほぼ完形	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り	内面 变ね底き痕、 火附れ	
11	灰原 J	I-390⑫	IV	縦底層 灰原	773	(150)	43		1/4以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り		
12	灰原 J	I-390⑬		縦底層 灰原		(136)	49		1/4以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	?	火附れ 混み	
13	灰原 J	J-390⑭		縦底層 灰原	1069	(165)	38		1/3以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	?	内面 变ね底き痕	
14	灰原 J	I-390⑮	IV	縦底層 灰原	772	(144)	56		1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り	内面 变ね底き痕 火附れ	
15	灰原 J	K-300⑯ IV		縦底層 灰原		(131)	115		1/4以下	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	圓盤余切り		
16	灰原 J	K-300⑯ IV上		縦底層 灰原		(136)	32		1/4以上	細砂混 良	ロクロ目 圓盤ヘラ削り ロクロ底	?		
17	灰原 J	K-300⑯ IV下		縦底層 灰原		(100) (118)	34 5		1/4以下	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	?	外側 灰被り	
18	灰原 J	K-300⑯ IV		縦底層 灰原		(117)	36		1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	?		
19	灰原 J	I-390⑯ IV		縦底層 灰原 夷杆		158	(24)		1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	?	台脚欠損	
20	灰原 J	J-390⑯ IV		縦底層 灰原 底足	584	(142)	28		1/2以上	細砂混 不規	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	色脚端赤褐色	
21	灰原 J	J-390⑯ IV		縦底層 底足		(144) (76)	29 3.5		1/4以上	細砂混 不規	ロクロ目 ロクロ底	?	色脚端赤褐色	
22	灰原 J	J-390⑯ IV下		縦底層 底足		(169)	(150) (260)	(146) 137	1/4以下	細砂混 良	ロクロ目 カキメ ロクロ底 カキメ	?	外側 变被り 騎士付腰 小縫底	
23	灰原 J	I-390⑯ IV		縦底層 底足		(113)	8		1/4以下	細砂混 良	ロクロ目 刻り ロクロ底	?	小縫底	
53 1	灰原 J	J-390⑯ IV		縦底層 底足	591	103	125	93	ほぼ完形	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	灰被り 張状化繊文	

表6 土器観察表(17)

探査番号	出土遺物	グリッド番号 灰原ブロック 灰原順序	種別 器種	RP%	口径 底径	縦高 厚	横径 幅	外傾度(°) 直存	胎土 焼成	外側 内面	計測単位 mm		備考	
											底・天部切削 知能性成形	外側		
53 2	灰原 J	J-300③④	直筒器 盤		(021)	(169)	(160)		細密 堅	タクキ 刨り ロクロ直				
3	灰原 J	J-300③ IV	直筒器 小腰盤		(009)	(23)	(102)	1/4以上	細密 堅	ロクロ目 刨り ロクロ直		外面 二次加熱		
4	灰原 J	I-300③	直筒器 盤	1150	(094)	(170)	6.5		細密 良	タクキ 刨り ロクロ直 カキメ				
5	灰原 J	I-300③ IV	直筒器 横腹	534	134	(097)	101		細砂腹 堅	ロクロ目 刨り 良				
6	灰原 J	I-300③ F12	直筒器 盤		(174)	(175)	152		細密 堅	ロクロ目 タクキ ロクロ直 カキメ		表面に點状付着		
54 1	灰原 J	J-300③ IV上 大腰	直筒器 盤		(147)				細砂腹 良	タクキ アラ直		波状沈殿文 小円錐状の押え目		
2	灰原 J	J-300③ IV I-300③	直筒器 盤	173	(260)	145	8	266	3/4以上	細密 堅	カキメ 刨り ロクロ直 カキメ			
55 1	灰原 J	I-300③ IV	直筒器 盤		(210)	(418)	(182)		細砂腹 良	ロクロ目 タクキ ロクロ直 アラ直				
2	灰原 J	J-300③	直筒器 盤	298	(191)	166	6.5		細砂腹 良	ロクロ目 タクキ ロクロ直				
56 1	灰原 J	I-300③ F7	土器器 耳	988	124	41	38		粗砂腹 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り	丸窓 内外面 坚		
2	灰原 J	J-300③ IV	土器器 耳		58	4			粗砂腹 良	ロクロ直	圓軸み切り	黒底		
3	灰原 J	K-300①	土器器 耳	877	123	46	35		粗密 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り	黒底		
4	灰原 J	J-300③	土器器 耳		53	4			粗砂腹 良	ロクロ直				
5	灰原 J	I-300④ IV	土器器 耳	142	45	41			粗砂腹 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り			
6	灰原 J	I-300③ IV	土器器 耳		56	4			粗砂腹 良	ロクロ直 ロクロ直	圓軸み切り	黒底		
7	灰原 J	I-300③	土器器 耳	635	128	44	33		粗密 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り	黒底		
8	灰原 J	I-300③ IV	土器器 耳		56	4			粗砂腹 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り	黒底		
9	灰原 J	I-300③ IV	土器器 耳		64	5			粗砂腹 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り	黒底		
10	灰原 J	I-300③ F7	土器器 耳	987	128	44	36		粗砂腹 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り			
11	灰原 J	J-300①	土器器 耳	1048	128	48	33		粗砂腹 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り			
12	灰原 J	J-300③ IV	土器器 耳		56	4.5			粗密 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り	糸切り尖歯の痕		
13	灰原 J	J-300③ IV	土器器 耳		50	4			粗密 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り			
14	灰原 J	I-300③	土器器 耳	636	142	47.5	43		粗密 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り			
15	灰原 J	J-300③ IV	土器器 耳		55	4.5			粗砂腹 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り	黒底		
16	灰原 J	J-300③ IV中	土器器 耳	521	127	41.5	32		粗密 良	ロクロ目 ロクロ直	圓軸み切り	外輪 備・二次加熱 内面 二重底 外山		

表6 土器観察表(18)

調査番号	出土遺物	グリッド番号 灰原ブロック 灰原層序	断面 形態	R/P%	口徑 底径	器高 器厚	断面 形状	外傾度(°) 残存	胎土 焼成	外側 内面	計測単位		備考
											直・ 円筒形切削 切削後成形	直・ 円筒形	
56	17 灰原 J	I-30③ F10	土師器 环	988	(133) (47)	42 3		37 1／2以上	緻密 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	内外層 係	
18	灰原 J	I-30④	土師器 环	596	134	39		41	緻密 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	小腹壁 厚度	
19	灰原 J	J-30①	土師器 环	1040	131	48		32	粗砂面 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	兔唇 厚度	
20	灰原 J	J-30③ IV	土師器 环		(138)	45		35	緻密 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	底部へラ筋付×J	
21	灰原 J	1-30③ IV上	土師器 环			(14)			粗砂面 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	静止水切り	
22	灰原 J	J-30③ IV	土師器 环	367	140	45		44	粗砂面 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り		
23	灰原 J	I-30③ IV下	土師器 环		(153)	61.5		37	緻密 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り		
24	灰原 J	J-30③	土師器 有台环	1045	(158)	66		38	粗砂面 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	管母地	
25	灰原 J	J-30④	土師器 有台环	579	149	55		37	粗砂面 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り		
26	灰原 J	J-29③ IV上	土師器 皿		(87)	(17)			粗砂面 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	打明田 内面に油塗	
57	1 灰原 J	J-30③ IV下	土師器 有台环			(13)			粗砂面 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	底部へラ筋付×J	
2	灰原 J	J-30③	土師器 有台环	971		(40.5)			緻密 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	底部 ハク筋付×J	
3	灰原 J	J-30③ IV下	質地器 高环2		(150)	(53)			緻密 良	クロ目 ロクロ底		外側に低、二次加熱 脚付き	
4	灰原 J	J-30④ IV上	土師器 环			(17)			緻密 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	底部へラ筋付×J	
5	灰原 J	J-30①	土師器 皿	1040	147	44			緻密 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	脚台の組	
6	灰原 J	1-30③ IV	土師器 皿		48	(23)			粗砂面 良	クロ目 ロクロ底		蓋のつまみ	
7	灰原 J	J-30③ IV F	土師器 その他			5 6			粗砂面 良		断面余切り	底部を斜めで切 り削したもの	
8	灰原 J	J-30 IV下	土師器 皿		(142)	(132)	130		粗砂面 良	クロ目 ロクロ底		内側に低 黒斑	
9	灰原 J	J-30③	土師器 皿	587	(135) (72)	125 6			粗砂面 良	クロ目 ロクロ底		底部に穿孔 跡	
10	灰原 J	1-30③ IV	土師器 小盤蓋		(73)	(62)	(70)		粗砂面 良	クロ目 ロクロ底			
11	灰原 J	L-30③ IV中	土師器 皿	582	137	127	126		緻密 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	畔窓	
12	灰原 J	J-30③	土師器 皿	592	145	(103)	(138)		粗砂面 良	クロ目 ロクロ底		管母地 附着	
13	灰原 J	J-30③	土師器 皿	190	(136)	196			粗砂面 良	タタキ カキメ		管母 - 石英面	
14	灰原 J	J-30③ IV	土師器 皿	269	191	(236)			粗砂面 良	カキメ 刃 ハケメ ナダ	ヘラ筋付		
58	1 灰原 J	J-30③ IV	土師器 皿		(25)				粗砂面 良	クロ目 ロクロ底	断面余切り	底部に2列共存 多孔式の底	

表6 土器観察表(19)

探査番号	出土遺物 灰原ブロック	グリッド番号 灰原番号	種別 器種	RP%	口径 底径	壁高 盤厚	断面 形状	外傾度(°) 残存	胎土 焼成	外因 内因	計測単位 mm		備考	
											直径 底径	壁高 盤厚		
58 2	灰原 J	I-30③ IV	土器品 土鉢 カ			(27) (17)		1/4以下	綈密 不規	雨り				本体部欠損
3	灰原 J	J-30③	土器品 小鉢皿		(38)	(54) 10		1/4以上	綈密 良	雨り ナダ				
4	灰原 J	K-30③	土器品 环	(10)	28 (6)	4	1/4以上		綈密 良	ロクロ直	回転余切り	外周 直角、内周骨付		
5	灰原 J	I-30③ IV	土器品 环	(136)	41 (76)	6	1/4以下		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	回転余切り			
6	灰原 J	J-30③	土器品 环	(143)	49.5 66	4	1/2以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	回転余切り	陶輪音付		
7	灰原 J	J-30③	黑色土器カ 板	583	135 58	50 5	3/4以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直 ミガキ	回転余切り	陶輪音付、黒母垢		
8	灰原 J	J-30③ IV	黑色土器カ 板白模	145	60 62	55 5	3/4以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直 ミガキ	回転余切り	陶輪音付 風呂		
9	灰原 J	I-30③ IV	黑色土器 板白模	156	56 (63)	6	1/4以上		綈密 良	ミガキ ミガキ	回転余切り	回転		
10	灰原 J	I-30③	黑色土器 板白模	322	(182) (82)	77 7	1/4以上		綈密 良	ロクロ直 ミガキ	回転余切り	内周		
11	灰原 J	J-30③	黑色土器カ 板	539	(37)	84	1/2以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直 ミガキ	回転余切り			
12	灰原 J	I-30③	黑色土器カ 板白模	330	(188) (88)	69.0 4.5	1/2以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直 ミガキ	回転余切り	陶輪音付 開口直		
13	灰原 J	I-30③ IV	黑色土器 板白模	161	(35) 60	41 4	1/4以上		綈密 良	ロクロ直 ミガキ ミガキ	回転余切り	質物零し 開口		
14	灰原 J	I-30③ IV上	黑色土器 蓋	326	106 4	36 1/4以上			綈密 良	ロクロ直 ミガキ ロクロ直 ミガキ		質物零し 開口		
59	1 灰原 L	K-30③	裏窓器 环	288	(150) (194)	42 4.5	29 1/4以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り	面部ヘラ削り		
	2 灰原 L	L-30③	裏窓器 环			(29)	22		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り			
	3 灰原 L	L-30③ F21	裏窓器 环	264	(146) (92)	43 4.5	26 1/2以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り	口縁部欠損		
	4 灰原 L	L-30③	裏窓器 环	148	41 (106)	5	1/2以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り	回転ヘラ削り		
	5 灰原 L	L-30	裏窓器 环	(146)	38 (104)	5	1/4以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り			
	6 灰原 L	K-30③	裏窓器 环	309	(146) 194	36 6	1/4以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り			
	7 灰原 L	K-30③	裏窓器 环	300	139 98	29 4	1/2以上		綈密 不規	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り			
	8 灰原 L	L-30③ F21	裏窓器 环	1162	146 101	34 3	29 3/4以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り			
	9 灰原 L	K-30③	裏窓器 环	283	(160) 94	41.5 5	34 1/2以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り	回転ヘラ削り		
	10 灰原 L	K-31③	裏窓器 环	299	(134) (54)	36 4	30 1/4以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り			
	11 灰原 L	L-30③	裏窓器 环	(142)	39 102	29 4.5	29 1/2以上		綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り	丸窓		
	12 灰原 L	L-30	裏窓器 环	(136) (90)	35 5	25 1/4以上			綈密 良	ロクロ直 ロクロ直	ヘラ切り			

表6 土器観察表(20)

計測単位 =

開拓番号	出土遺物 灰原ブロック	グリット層序 灰原層序	断面 断続	R P No	口径 断続	壁高 断続	腰径 断続	外傾度(°) 残存	鉢土 鉢底	外側 内面	底・天井部切削 切削後成形	備考
99	13 灰原 L	L-30②	直底盤 环	1145	146 95	36 4	31 1/2以上	粗砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	14 灰原 L	L-30②	直底盤 环	(140)	34 (86)	6.5	25 1/2以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	15 灰原 L	L-30	直底盤 环	(147)	37 166	6	26 3/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	16 灰原 L	L-30②	直底盤 环	294	(150) (96)	22 4	31 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	17 灰原 L	L-30②	直底盤 环	(140)	37 (96)	4	21 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り 細軸ヘラ削り		
	18 灰原 L	L-30②	直底盤 环	(136)	24 (85)	4.5	24 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り 細軸ヘラ削り		
	19 灰原 L	K-30②	直底盤 环	285	132 88	32 5	30 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	20 灰原 L	L-30②	直底盤 环	(148)	37 (110)	50	23 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	21 灰原 L	L-29②	直底盤 环	(142)	34 (85)	5	29 1/2以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	丸窓	
	22 灰原 L	L-30	直底盤 环			37 7.5	21 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	23 灰原 L	L-30①	直底盤 环	296	(138)	31 100	22 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	24 灰原 L	L-30①	直底盤 环	(139)	39 (109)	4.5	20 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	口縁部欠損	
	25 灰原 L	L-30③ F21	直底盤 环	734	(31)	27 105	27 1/2以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ヘラ削り		
	26 灰原 L	L-30④ IV	直底盤 环		(16)	3.5	1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	ヘラ削き「部」	
	27 灰原 L	K-31④	直底盤 环	299	(18)	3	1/4以下	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部ヘラ削き「八」	
	28 灰原 L	L-30② F20	直底盤 环	293	(150)	41 86	25 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
69	1 灰原 L	L-30④ IV中	直底盤 环	(139)	35 96	5	24 1/4以下	粗砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	2 灰原 L	L-30④ IV中	直底盤 环	(142)	43 86	4	26 1/2以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部ヘラ削き「一」	
	3 灰原 L	L-30④	直底盤 环	1163	(154)	43 94	25 3/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部ヘラ削き「×」 電鋸 茎み 小細孔	
	4 灰原 L	L-30④ IV中	直底盤 环	(122)	31 80	4	18 1/2以上	粗砂質 不良	ロクロ目 ロクロ底	手持工具削り	底部ヘラ削き「×」	
	5 灰原 L	L-30④	直底盤 环	343	144 96	38 3	29 3/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り 手持ヘラ削り	丸窓	
	6 灰原 L	K-30④	直底盤 环	717	(156)	37 106	32 1/2以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部ヘラ削き「×」 茎み	
	7 灰原 L	L-30④ IV	直底盤 环	(140)	36 (94)	5.5	21 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
	8 灰原 L	L-30④ IV上	直底盤 环	131	34.5 90	4	28 3/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ヘラナデ		
	9 灰原 L	L-31④ IV上	直底盤 环	205	(136)	34 (86)	30 1/4以上	粗砂質 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		

表6 土器観察表(21)

計測単位 mm

件名番号	出土遺物	グリッド編番 灰原ブロック 灰原順序	断面 詳細	R P%	口径 直径	底 底厚	側壁 斜傾	外側底(△) 残存	胎土 構成	外観 内面	底・天井部凹凸 切削鉄痕形	備考
60 10	灰原 L	K-30③	直底器 耳		(159) 95	36.5 3	17 1/2以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	外観 細	
11	灰原 L	K-30④	直底器 耳	736	(149) 96	36.5 4	39 1/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
12	灰原 L	K-30⑤ IV上	直底器 耳		(138) (96)	32.5 3	29 1/4以上	粗密 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	表面 ヘラ削き「八」	
13	灰原 L	K-30⑥ IV	直底器 耳		139 100	32.7 3.5	23 3/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
14	灰原 L	L-30② F21	直底器 耳	735 736	144	37	24	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部 龜裂	
15	灰原 L	L-30③ F26	直底器 耳	197	(138) (93)	36 3.5	18 1/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
16	灰原 L	K-29② IV	直底器 耳		(149) 100	43.5 3.5	20 3/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 剥り ロクロ底	ヘラ切り	倒状正規 石尚面	
17	灰原 L	K-30② IV	直底器 耳		(27) 94		1/2以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	表面 ヘラ削き「一」 倒状正規	
18	灰原 L	L-30③	直底器 耳		(157) (110)	39.5 4.5	21 1/4以下	粗密 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
19	灰原 L	L-30④ F21	直底器 耳	736	152 96	38 4	33 3/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
20	灰原 L	L-30⑤	直底器 耳	291	(145) (102)	37 4	18 1/2以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	内腹外縁 灰瓦張 底面 ヘラ削き「一」 背面 施土付帯 焼き台 3	
21	灰原 L	L-30⑥ IV上	直底器 耳		(149.5) (113)	38 4	25 1/2以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部 ヘラ削き「X」	
22	灰原 L	K-31④ IV上	直底器 耳	217	(149) (83)	40 5	28 1/2以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
23	灰原 L	L-30⑤ F21	直底器 耳		76	10 5	1/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	表面 ヘラ削き「八」	
24	灰原 L	L-29③ IV	直底器 耳	1160	(134) 66	41 4	35 1/2以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	粗軸余切り		
25	灰原 L	L-29④ F21	直底器 耳	1157	128 66	38 4	36 1/2以上	粗密 質	ロクロ目 ロクロ底	粗軸余切り	龜裂	
26	灰原 L	K-30④ IV中	直底器 耳	307	(134) 74	42 4.5	28 1/4以上	粗密 質	ロクロ目 ロクロ底	粗軸余切り		
27	灰原 L	L-29⑤ F21	直底器 耳	1157	130 (60)	37 5	33 1/2以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	粗軸余切り		
28	灰原 L	K-30⑤ IV	直底器 耳		(21) (96)		1/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	表面 ヘラ削き「八」	
61 1	灰原 L	L-29⑥ IV上	直底器 耳		(142) 106	29 4	25 1/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
2	灰原 L	L-30③ IV上	直底器 耳		(21) (80)	3	1/4以下	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	内腹 灰瓦張 表面 ヘラ削き「一」	
3	灰原 L	K-30③ IV下	直底器 耳		(22) (88)	3.5	1/4以下	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	色調にいわゆる	
4	灰原 L	K-30④ IV上	直底器 耳		(122) (90)	3.5	1/4以下	粗砂質 質	ロクロ目 剥り ロクロ底	ヘラ切り	表面 ヘラ削き「X」 盛み	
5	灰原 L	L-30	直底器 有耳环		(140) (104)	43 5.5	22 1/4以上	粗砂質 質	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		

表6 土器観察表(22)

計測基盤

件番番号	出土遺物 灰原ブロック	グリッド順序 灰原順序	種別 器種	R P No.	口径 底径	高 厚	頸径 胴径	外側(△) 残存	胎土 焼成	外側 内面	底・天井部切削 切削後焼形	備考
61 6	灰原 L	K-30②	須恵器 有台耳	284	(149) (97)	45.5 5		30 1/4以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	陶器骨針
7	灰原 L	L-30③ IV	須恵器 耳			(11)		1/4以下	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	直部、ヘラ接着「X」 小破損
8	灰原 L	L-30③	須恵器 有台耳	(154) (116)	49 4.5			22 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
9	灰原 L	L-30③	須恵器 有台耳	(138) (98)	42 8			31 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
10	灰原 L	L-30③	須恵器 有台耳	(182) (116)	41 6.5			27 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
11	灰原 L	L-30③	須恵器 有台耳	(190) (116)	42 6			19 1/4以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
12	灰原 L	L-30③ F21	須恵器 有台耳	297	144 84	43 4.5		29 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
13	灰原 L	L-30③	須恵器 有台耳	(209) (163)	44 4.5			24 1/4以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
14	灰原 L	L-30③ F26	須恵器 有台耳	301	(160) (111)	54 3		27 1/4以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	陶器骨針
15	灰原 L	L-30③ IV F	須恵器 有台耳	(133.5)	37			28 1/4以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	野口余切?	
16	灰原 L	L-30	須恵器 有台耳	(159) (104)	43 50			29 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
17	灰原 L	L-30③ F21	須恵器 有台耳	334	(152) (107)	(47) 5		20 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	色調灰白色
18	灰原 L	L-30③ IV F	須恵器 有台耳	(184) (90)	43 4			20 1/4以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
19	灰原 L	K-30③	須恵器 有台耳	1630	152 100	46 5		30 1/2以上	細密 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
20	灰原 L	K-30③ IV	須恵器 有台耳	(151.5) (101)	45.5 4			23 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
21	灰原 L	K-30③ IV F	須恵器 有台耳	(140) (94)	50 4			20 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	火照れ
22	灰原 L	K-30③	須恵器 有台耳	1029	145 102	45 4.5		22 はがき形	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	陶器骨針 魚頭
23	灰原 L	K-30③	須恵器 有台耳	148	43			39 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ケツメイ ロクロ底	ヘラ切り	陶器骨針
24	灰原 L	K-30③	須恵器 有台耳	1033	158 108	47 4.5		28 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
25	灰原 L	K-30③ IV	須恵器 有台耳		145 106	47 4.5		21 はがき形	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	外腹自然縫 底部裏面内側に火照
26	灰原 L	L-30③ IV中	須恵器 有台耳	338	(154) (105)	43 5		29 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
27	灰原 L	K-30③	須恵器 有台耳		(146) 96	42 3		28 1/2以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
28	灰原 L	L-30③ IV中	須恵器 有台耳	553	155 96	44 4.5		27 はがき形	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	電扇
29	灰原 L	K-30③	須恵器 有台耳	1031	(145) (105)	49.5 5		18 1/4以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
62 1	灰原 L	K-30③ IV上	須恵器 有台耳	213	(149) (110)	44 5		17 1/4以上	粗砂渦 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	陶器骨針

表6 土器観察表(23)

計測単位 mm

探査番号	出土遺物 灰原ブロック	グリッド順序 灰原層序	種別 縦縫	R P%	口径 縦縫	壁厚 縦縫	裏面 刺性	外傾度(C°) 既存	底土 焼成	外観 内面	底・天井部切削 切離後式形	備考	
62 2	灰原 L	L-29② F21	直腹器 背台耳	1158	(130) (65)	56 5		31 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓弧斜切り		
3	灰原 L	L-30② IV中	直腹器 背台耳		(29)			33	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	直部へクサ形「原」 の一部	
4	灰原 L	L-30③ IV上	直腹器 背台耳		(15)			粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	直部へクサ形「原」#		
5	灰原 L	L-30③ F21	直腹器 背台耳	332	(21)			粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	ヘラ鋸き「原」#		
6	灰原 L	K-30①	直腹器 底面	738	(139)	38		粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	?			
7	灰原 L	K-30②	直腹器 底面	1024	166	(23.5) 7		粗砂面 不良	ロクロ目 圓弧へクサ割り ロクロ底		外周に擦紋		
8	灰原 L	L-30③	直腹器 底面		(156)	38 5.5		粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底				
9	灰原 L	K-30③	直腹器 底面	1025	(61)	34		粗砂面 良	ロクロ目 圓弧へクサ割り ロクロ底	?	海膽骨針		
10	灰原 L	K-30③	直腹器 底面	1027	157	31 9		細密 不良	ロクロ目 圓弧へクサ割り ロクロ底 剥り	?			
11	灰原 L	L-30③ IV上	直腹器 底面		(76)	24 3.5		細密 良	ロクロ目 ロクロ底	?	外周 底面 剥き台		
12	灰原 L	K-30③ IV	直腹器 底面		86	(17)		粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	?	直部へクサ形「原」#		
13	灰原 L	L-30③ IV下	直腹器 底面		152	36 5		粗砂面 良	ロクロ目 圓弧へクサ割り ロクロ底	?	内面 ヘラ鋸き「原」#		
14	灰原 L	L-30③	直腹器 底面		(164)	22 5.5		粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底 海ナデ	?	直部へクサ形「原」#		
15	灰原 L	L-30③ IV中	直腹器 底面		138.5	32 5		粗砂面 良	ロクロ目 圓弧へクサ割り ロクロ底	?			
16	灰原 L	L-30③	直腹器 底面		(148)	(25) 4		粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	?			
17	灰原 L	L-30③	直腹器 底面		(144)	19 6		粗砂面 良	ロクロ目 圓弧へクサ割り ロクロ底	?	直部へクサ形「原」#		
18	灰原 L	K-30③	直腹器 底面	1028	152	(24) 8		3/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 圓弧へクサ割り ロクロ底	?	海膽骨針 灰原	
19	灰原 L	L-30③	直腹器 底面		(146)	22 6.5		1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	?	底面 剥き台	
20	灰原 L	K-30③	直腹器 底面	1032	168	(18) 7		3/4以上	粗砂面 不良	ロクロ目 圓弧へクサ割り ロクロ底	?	電気 印がみ	
63 1	灰原 L	K-30③ IV	直腹器 高环		(37)				粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	?	円柱形 内面 二本足・底面 剥き台	
2	灰原 L	L-30③ IV下	直腹器 底		(96)				粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底			
3	灰原 J	K-30	直腹器 縫隙		(61)			1/4以下	粗砂面 良	ロクロ目 タタキ ロクロ底	?	灰原#	
4	灰原 L	L-30③	直腹器 底		(129)			1/4以下	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底			
5	灰原 L	K-30③ IV下	直腹器 底		(63)			1/4以下	粗砂面 良	アカ底		外周に底面 剥き台	
6	灰原 L	L-30③	直腹器 底		(97)			1/4以上	粗砂面 良	タタキ アカ底			

表 6 土器観察表(24)

計測単位 mm

井戸番号	出土遺物 灰瓦ブロック	グリッド順序 灰瓦順序	種別 御器	R P N _b	口徑 底径	器高 標準	頸径 胸径	外傾度(°) 後存	胎土 構成	外面 内面	底・天井部切削 切離後成形	備考
63	7 灰原 L	L-30①	御器部 蓋		(80)	(59)		1／4以下	粗砂陶 質	ロクロ目 ロクロ底	圓盤余切り	内面 灰張り 袋
	8 灰原 L	L-30②	御器部 模倣		(106)	(67)	(86)	1／4以下	粗砂陶 質	ロクロ目 ロクロ底		外腹 灰張り
	9 灰原 L	K-30③ IV上	御器部 蓋		(120)	138	(126)		粗砂陶 質	カキメ 剥り ロクロ底 カキメ		
	10 灰原 L	I-30③④	御器部 模倣		(240)	9	(194)		粗砂陶 質	アタキ 剥り ロクロ底 カキメ		剥け
64	1 灰原 L	L-30⑤ IV上	御器部 ? 蓋	200	(112)			1／4以下	粗砂陶 質	雨引 ナデ ロクロ底 カキメ		土鍋の底江切削
	2 灰原 L	L-30⑥	御器部 蓋		(134)	9		1／4以下	粗砂陶 質	ロクロ目 雨引 ナデ		
	3 灰原 L	L-29⑦	赤桃土器 蓋		(150)	(121)	(130)	1／4以下	粗砂陶 質	ロクロ目 ロクロ底		青母瓦
	4 灰原 L	L-30⑦	御器部 蓋			(125)		1／4以下	粗砂陶 質	ロクロ目 ロクロ底		波状比縫文
	5 灰原 L	L-29	土鉢型 蓋		(197)	82	7	1／4以上	粗砂陶 質	ナデ ロクロ底	圓盤余切り	青母瓦
	6 灰原 L	L-29⑧	土鉢型 蓋		(230)	(14.5)	6	1／2以上	粗砂陶 質	ロクロ目 剥り ロクロ底 カキメ		
	7 灰原 L	K-30⑨ IV	土鉢型 台付蓋		(32)	(110)	7	1／4以下	粗砂陶 質	ロクロ目 剥り ロクロ底	?	
	8 灰原 L	L-29⑩	黒色土器 有台碗	161	(178)	65	32		粗砂陶 質	ロクロ目 ミガキ ロクロ底 ミガキ	圓盤余切り	内黑
	9 灰原 L	L-29⑪	黒色土器 有台碗		(148)	58.5	36		織密 質	ロクロ目 ミガキ ロクロ底 ミガキ	圓盤余切り	内黑
	10 灰原 L	L-30⑪ + K-29⑪	黒色土器 有台碗		(164)	53	39		織密 質	ロクロ目 ミガキ ロクロ底 ミガキ	圓盤余切り	内黑
	11 灰原 L	L-29⑫ F21	黒色土器 有台碗	153	126	(46)	27		粗砂陶 質	ロクロ目 ミガキ	圓盤余切り	内黑

表 6 土器観察表(25)

揭露番号	出土場所 灰原ブロック	グリット層序 灰原層序	概測 断面	R P %	口径 底径	壁高 厚	側径 調査	外傾度(°) 残存	胎土 構成	計画単位		備考
										底・天井部切跡 切削後削形	底	
65	1 灰原 M	M-30③	直底器 环	1143	(150) 45 640 4			26 1/2以上	粗砂混 及	ロクロ目	ヘラ切り	
	2 灰原 M	M-30③ IV下	直底器 环	558	(145) 46 680 5			24 1/4以上	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り 手持へタ削り	色調明赤褐色
	3 灰原 M	N-31③ IV中	直底器 环	151	(135) 34 609 5			29 1/2以上	粗砂混 及	ロクロ目	ヘラ切り	
	4 灰原 M	M-30 IV	直底器 环		(150) 46 (104) 3			24 1/2以上	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
	5 灰原 M	M-30③ IV下	直底器 环	555	146 40 95 4			24 3/4以上	細密 及	ロクロ目	ヘラ切り	
	6 灰原 M	M-30 IV	直底器 环		147 36 105 4			23 1/2以上	細密 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ナデ	
	7 灰原 M	M-30③ IV下	直底器 环	557	(150) 35 114 3.5			29 1/2以上	粗砂混 及	ロクロ目 ナデ ロクロ底	ヘラ切り ナデ	
	8 灰原 M	M-30③ IV下	直底器 环	558	(154) 36 106 3.5			30 1/2以上	粗砂混 及	ロクロ目	ヘラ切り	雨縫骨附
	9 灰原 M	M-30③ IV	直底器 环		(150) 3.5 95 4			29 1/4以上	粗砂混 及	ロクロ目	ヘラ切り	物語骨附 「Q13」灰原体内の环 と見ている
	10 灰原 M	M-30	直底器 环		(148) 36 104 4			26 1/4以下	細密 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ナデ	
	11 灰原 M	M-30	直底器 环		(152) 39 (100) 4			21 1/4以下	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	小縫混
	12 灰原 M	N-30 IV	直底器 环		(130) 35 98 5			22 1/4以下	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	雨縫骨附
	13 灰原 M	M-30③ IV	直底器 环	555	(134) 35 77 4.5			19 1/2以上	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ナデ	において黄褐色
	14 灰原 M	N-29 IV	直底器 环		(140) 36 (106) 5			22 1/2以上	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り ナデ	火照れ
	15 灰原 M	N-29 IV	直底器 环		(23) 4			22 1/4以下	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	底部 ヘタ括き「×」
	16 灰原 M	N-29 IV	直底器 环		(29) 4			22 1/4以上	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	静止余切り	
	17 灰原 M	N-29 IV	直底器 环		(10) 3.5			粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部 ヘタ括き「×」	
	18 灰原 M	N-29 IV	直底器 青白台		(120) 42 86 3			20 1/2以上	粗砂混 及	ロクロ目 ナデ ロクロ底	ヘラ切り ナデ	
	19 灰原	N-29 IV	直底器 环底		(14) 3.5			1/4以下	粗砂混 及	ロクロ目	回転余切り	ヘタ括き「青口大」#
	20 灰原 M	M-30 IV M-30③ IV	圓筒 円筒器		(140) 64 9.5			26 1/2以上	細密 及	ロクロ目	回転余切り ミガキ	長方形の透かし
	21 灰原 M	M-30③ IV下	直底器 环底	559	154 48.5 4			26 ほぼ完形	粗砂混 及	ロクロ目 回転へタ削り ロクロ底		内面 実ねぬき灰
	22 灰原 M	M-29 IV	直底器 环底		136 24.5 5			23 3/4以上	粗砂混 及	ロクロ目 回転へタ削り ロクロ底	回転余切り	
66	1 灰原 M	M-29③ IV下	土罐器 环		140 45 49 4			45 ほぼ完形	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	晶斑
	2 灰原 M	M-29 IV	土罐器 高环付		(127) 140 5			26 1/4以上	細密 及	ロクロ目 ロクロ底		3ヶザツ、4単位の 穿孔あり
	3 灰原 M	N-29 IV N-M-30	直底器 横底		(110) 12			26 1/4以上	粗砂混 及	ロクロ目 ロクロ底		自然剥 土根片と粘土付着

表6 土器観察表(26)

件名番号	出土遺物 泥原ブロック	グリッド層序 泥原層序	種別 器種	R P%	口径 底径	縦高 組厚	横径 側径	外傾度(°) 斜存	歯土 形成	外周 内面	底・天井部切削 切削後成形	備考
66 4	泥原 M	M-29②	土師器 有台环	718	155 75	63 5.5		35	細砂渦 底	クロ目 クロ底	圓軸赤り	小環風 底足
5	泥原 M	N-30 IV	黑色土器 有台碗		(126)	5		1／4以上	底走	クロ目 ミガキ	圓軸赤り	底足ヘラ括き付 内品
6	泥原 M	N-30 IV	須恵器 环底		(120)	9		1／4以上	細砂渦 底	クロ目 クロ底	圓軸赤色	須恵器 白調輪灰色
7	泥原 M	N-30 IV	土師器 环	(113)	61 58	(100) 6	(98)	1／2以上	細砂渦	クロ目 クロ底	圓軸赤り	
8	泥原 M	M-30	須恵器 大盤	1143	429	(590)	306		細砂渦	タキ アテ底		埋設？
9	泥原 M	M-30③	須恵器 盤	1143	(96)	(93)	54		細砂渦	クロ目 クロ底	カキメ	須恵器 底板に枕縫
67 1	泥原 P	Q-30③ IV下	須恵器 耳	72	(143) 96	43 5	27		細砂渦 底	クロ目 クロ底	ヘラ切り	底部ヘラ括き付
2	泥原 P	O-31 IV下	須恵器 耳	146	(129)	(41)	27		細砂渦	クロ目 クロ底	ヘラ切り	ナゲ
3	泥原 P	P-31	須恵器 耳		(160)	61.5	17		細砂渦	クロ目 クロ底	ヘラ切り	小環風
4	泥原 P	Q-30 III	須恵器 耳		(128)	44	16		細砂渦	クロ目 不真	ヘラ切り	海綿骨針
5	泥原 P	P-31	須恵器 耳		(140)	34	24		細砂渦	クロ目 クロ底	ヘラ切り	海綿骨針
6	泥原 P	O-30 IV中	須恵器 耳	144	(154) 116	37 4	21 3／4以上		細砂渦	クロ目 クロ底	ヘラ切り	海綿骨針
7	泥原 P	P-31 III	須恵器 耳		(144)	26	17		細砂渦	クロ目 クロ底	ヘラ切り	
8	泥原 P	Q-31 IV中	須恵器 耳	27	(126) (84)	36 4.5	27 1／4以上		細砂渦	クロ目 クロ底	ヘラ切り	
9	泥原 P	O-30 IV中	須恵器 耳	145	133 94	41 3.5	33 ほぼ同じ		細砂渦	クロ目 クロ底	ヘラ切り	
10	泥原 P	P-30	須恵器 耳	73	130 84	39 4.5	20 1／4以上		細砂渦	クロ目 クロ底	ヘラ切り	
11	泥原 P	Q-30 IV上	須恵器 耳	35	(130) (85)	35 4	28 1／2以上		細密	クロ目 クロ底	ヘラ切り	
12	泥原 P	P-31 III	須恵器 耳		(18)	2	1／4以下		細密	クロ目 クロ底	圓軸赤り	底部ヘラ括き付
13	泥原 P	Q-29 III	須恵器 耳		(11)	4	底部のみ		細砂渦	クロ目 クロ底	圓軸赤り	底部ヘラ括き付
14	泥原 P	O-30 III	須恵器 耳		(19)	3	1／4以下		細砂渦	クロ目 クロ底	圓軸赤り	底部ヘラ括き付
15	泥原 P	Q-30 IV	須恵器 有台环		(128)	43.5	23		細砂渦	クロ目 クロ底	圓軸赤り	外周 歯土形成 焼台付
16	泥原 P	Q-30 IV	須恵器 有台环		(140) (93)	53 4	26 1／4以下		細砂渦	クロ目 クロ底	?	海綿骨針
17	泥原 P	Q-30 IV上	須恵器 有台环	37	138 84	50 7	30 3／4以上		細砂渦	クロ目 底走ヘラ割り クロ底	ヘラ切り 圓軸ヘラ割り	海綿骨針 兔頭
18	泥原 P	Q-30 IV上	須恵器 有台环	68	(142)	55	20		細砂渦	クロ目 底走ヘラ割り クロ底	ヘラ切り 圓軸ヘラ割り	海綿骨針 色調におい桂色
19	泥原 P	Q-30 IV	須恵器 有台环		(139)	47.5	28		細砂渦	クロ目 不真	ヘラ切り	海綿骨針

表 6 土器観察表(27)

計測単位 mm

調査番号	出土遺物 灰原ブロック	グリッド順序 灰原層序	種別 器種	R P%	口径 底径	高さ 厚さ	口径 底径	内傾度(°) 底凸	胎土 施成	外相 内面	底・天井部切削 切削痕形状	備考
67	20 灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 青台坪	32	146 92	56 4	26 3/4以上	縦密 不真	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	回転ヘラ切り 回転ヘラ削り	縫跡骨針 色面にぶい緑色	
21	灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 青台坪	26	(119) (64)	56 3	13 1/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	ヘラ切り	縫跡骨針多い	
22	灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 青台坪	28	(114) 66	59 4	25 1/2以上	粗砂面 底	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	ヘラ切り	外相 回転ヘラ削り 内面 回転ヘラ削り	
23	灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 青台坪	31	(105) 70	48 3.5	19 1/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	縫跡骨針	
24	灰原 P	Q-31 IV下	直筒器 青台坪	26	(194) 67	47 4	19 3/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 ヘラ削り ロクロ底	ヘラ切り	縫跡骨針 魚腹	
25	灰原 P	O-38 IV	直筒器 青台坪	104 68	58 4	15 1/2以上	粗砂面 底	ロクロ目 カズレ ロクロ底	ヘラ切り	縫跡骨針		
26	灰原 P	Q-38 IV	直筒器 青台坪	(122) 65.5	56 4	24 3/4以上	縦密 底	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	ヘラ切り	縫跡骨針		
68	1 灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 青台坪	(137) 87	55 5	24 1/2以上	縦密 不真	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底	ヘラ切り	縫跡骨針 色面にぶい緑色		
2	灰原 P	P-31	直筒器 青台坪		(35) (64)	2	1/4以下	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底		骨面ヘラ削り「土」	
3	灰原 P	Q-30 IV	直筒器 青台坪	(146) (92)	53 4	22 1/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	底部ヘラ削り「万」		
4	灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 青台坪	30 (38)	51 4	23 1/2以上	縦密 不真	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り			
5	灰原 P	Q-30 IV中	直筒器 青台坪	71 (34) (82)	41 3.5	22 1/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り			
6	灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 青台坪	66 88	156 5	49 3/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	?	海跡骨針 ナデ		
7	灰原 P	Q-30 IV	直筒器 青台坪	(132) 76	43 5	27 1/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	停止ヘラ切り			
8	灰原 P	Q-30② IV	直筒器 青台坪	70 (146) (92)	56 5	19 3/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	縫跡骨針 色面にぶい緑色		
9	灰原 P	Q-30 IV	直筒器 青台坪		(14) 48	4	1/4以下 1/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	?	直筒ヘラ削り「万」	
10	灰原 P	P-30 IV	直筒器 青台坪		(24) (95)	4	1/4以下 底	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	直筒 ヘラ削り	
11	灰原 P	Q-30 IV	直筒器 青台坪		(42) 88	3	1/4以上	縦密 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	直筒骨針	
12	灰原 P	Q-30 IV	直筒器 青台坪		(29) 10	4	底部のみ 1/4以下	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り?	直筒 ヘラ削り×	
13	灰原 P	P-31	直筒器 青台坪		(18) 88	4	1/4以下	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
14	灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 丹葉	68 (158)	27 7	1/2以上 不真	粗砂面 底	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底			直筒骨針 色面にぶい緑色 茎ねじ底	
15	灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 丹葉	29	155	33 7	1/4以上	粗砂面 底	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底		直筒骨針 色面にぶい緑色 茎ねじ底	
16	灰原 P	Q-30 IV上	直筒器 丹葉	68	(149)	32 5.5	粗砂面 底	ロクロ目 回転ヘラ削り ロクロ底		直筒骨針 色面にぶい緑色 茎ねじ底		
17	灰原 P	P-30 III	直筒器 丹葉		(24)	7	1/4以下	粗砂面 底	?	直筒ヘラ削り ロクロ底		
18	灰原 P	P-31	直筒器 丹葉		(34)	12	1/4以下	粗砂面 底	ロクロ目 ロクロ底		直筒 こね跡 底部に連続削突穴	

表6 土器観察表(28)

計測単位 mm

標印番号	出土遺物 記録ブロック	グリッド層序 記録順序	種別 器形	R P No.	口径 底径	高さ 器耳	頸径 胴径	外傾度(°) 残存	胎土 焼成	外側 内面	底・天井部切削 切離像皮形	備考
68	19	灰原 P	P-31		(18)	4		1/4以下	粗砂質 良	クロ目 刻り クロ板		
	20	灰原 P	P-31 III		(23)	20		1/4以下	粗砂質 良			こね跡 底部に通説刺突
	21	灰原 P	O-30 III		(14)	27		1/4以上	粗砂質 良	クロ目 クロ板		
	22	灰原 P	P-31 IV中		(25)	10		口縁部のみ 良	粗砂質 良	クロ目 クロ板		
	23	灰原 P	P-36		(31)	4		1/2以上	粗砂質 良	クロ目 クロ板		
69	1	灰原 P	Q-30 IV		(16)	(54)	6.5	1/4以下	粗砂質 良	クロ目 クロ板		外・内面に自然點 波状沈殿 2段
	2	灰原 P	P-30 III		81	(73)	42	1/4以下	粗砂質 良	クロ目 クロ板		
	3	灰原 P	O-30 IV中	須恵器 底	76	86	63	3/4以上	粗砂質 良	クロ目 クロ板		安瓿り 底部中位に沈緑
	4	灰原 P	P-30 III	須恵器 底		(72)	10	1/4以下	粗砂質 良	クロ目 クロ板		表面に骨瓦と三段 の波状沈殿
	5	灰原 P	P-31 IV中	須恵器 底		(35)	11	破片		タテキ アラ底		
	6	灰原 P	N-30 IV N-29~31 P-30	須恵器 底	(240)	(290)	(192)	1/4以下	粗砂 良	タテキ アラ底 ハケメ	-	
70	1	灰原 P	Q-30D IV	土師器 环	65	140	44		粗砂質 良	クロ目 クロ板	回転手切り	底部へラözき「×」 色調赤褐色
	2	灰原 P	Q-30 IV	須恵器 T 底		(92)	10	1/4以下	粗砂質 良	クロ目 タテキ ナデ クロ板 カラン		
	3	灰原 P	Q-31 V	黑色土器 有台板		(23)		1/4以下	粗密 良	ミダキ	回転手切り	底部 ヘラözき「×」
	4	灰原 P	P-30D	須恵器 耳	(132)	46	39		粗密 良	クロ目 クロ板	回転手切り	色調赤褐色
	5	灰原 P	O-30 IV	土師器 底		(43)	9	口縁部のみ	粗砂質 良	ハケメ ハケメ		外側 保 持鉢骨針
	6	灰原 P	O-31	土師器 底	232	341		1/2以上	粗砂質 良	ハケメ 刻り ハケメ 刻り	?	
	7	灰原 P	P-30 IV中	土師器 底	78	(337)	7	(182)	1/4以上	粗砂質 良	ハケメ 刻り クロ板 カキメ	?
71	1	灰原 S	R-30 IV上	須恵器 耳	39	(124)	32		粗砂質 良	クロ目 クロ板	ヘラ切り	
	2	灰原 S	R-30 IV上	須恵器 耳	40	(130)	44	23	粗砂質 良	クロ目 クロ板	ヘラ切り 回転ヘラ切り	板状底
	3	灰原 S	R-30 IV上	須恵器 耳	61	(130)	41	23	粗砂質 良	クロ目 クロ板	ヘラ切り	
	4	灰原 S	R-30 IV上	須恵器 耳	53	134	(46)	27	粗砂質 良	クロ目 クロ板	ヘラ切り 回転ヘラ切り	外側、内面に火葬
	5	灰原 S	R-30 IV上	須恵器 耳	62	139	36	27	粗砂質 良	クロ目 クロ板	ヘラ切り	
	6	灰原 S	R-30 IV	須恵器 耳		99	5	3/4以上	粗砂質 良	クロ目 クロ板	回転手切り 回転ヘラ切り	底部へラözき「×」
	7	灰原 S	R-30 IV上	須恵器 有台板		44	8	1/4以下	粗砂質 良	クロ目 クロ板	ヘラ切り	調滑骨針 にいし様色

表6 土器観察表(29)

計測単位 mm

標印番号	出土遺物 灰原ブロック 灰原層序	種別 器種	R P No.	口径 底径	口高 壁厚	側径 側傾	外傾度(°)	底土 被覆	外面 内面	底・天井部切跡 切離後成形	備考
71	8 灰原 S	S-30 有台耳	79	(127) 73	45 5		30 1／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	海綿骨針
9	灰原 S	R-30 IV上 有台耳	23	(134) (80)	42 4		21 1／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	海綿骨針多い
10	灰原 S	R-30 IV中 有台耳	25	(146) (82)	53 4		21 1／2以上	粗砂混 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
11	灰原 S	S-30 IV 有台耳		(134) (77)	46 3.5		24 3／4以上	粗砂混 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	小破損 海綿骨針
12	灰原 S	S-30 IV中 有台耳	79	(124) 76	46 4.5		28 1／2以上	粗砂混 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
13	灰原 S	R-30 IV 有耳耳		(94) (66)	46 4		14 1／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底		外面 自然輪 海綿骨針
14	灰原 S	R-30 IV中 有台耳	69	(120) (86)	42.5 3.5		26 1／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
15	灰原 S	S-30 IV 有耳耳		(68) (58)	6.5		1／2以上	粗砂混 良	ロクロ目 粗砂へテヅリ ロクロ底	ヘラ切り	海綿骨針
16	灰原 S	S-30 IV 平底		(196)	35 5		1／2以上	粗砂混 不良	ロクロ目 粗砂へテヅリ ロクロ底		海綿骨針 色調にぶい褐色
17	灰原 S	G-30② IV中 平底	71	(142)	25 6		1／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 粗砂へテヅリ ロクロ底 面ナデ		海綿骨針
18	灰原 S	R-30 IV上 平底	24	134	29 5		1／2以上	粗砂混 良	ロクロ目 粗砂へテヅリ ロクロ底		外周・内面に灰黒り 張き台付
19	灰原 S	R-30 IV 平底		155	29 7		3／4以上	粗砂混 不良	ロクロ目 粗砂へテヅリ ロクロ底		海綿骨針 石斑現 色調にぶい褐色
20	灰原 S	R-30 IV 平底		(160)	30 6		3／4以上	缺歯 不良	ロクロ目 粗砂へテヅリ ロクロ底		海綿骨針 色調にぶい褐色 塗抹痕
21	灰原 S	R-29 IV 有耳耳	43	90 64	51 4		12 3／4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り 手持へテヅリ	外周・内面に灰黒り 張き台付
22	灰原 S	S-29 IV 堆積直		(116) 90	(75) 7		(116) (140) 1／4以上	缺歯 良	ロクロ目 クヌリ・ナデ ロクロ底・タキメ		

表6 土器観察表(30)

計測単位 mm

検出番号	出土遺物	グリッド順序 段階	種別 器種	R/P%	口径 底径	腹高 縦厚	綱径 横径	外傾度(°) 傾斜形	胎土 焼成	外側 内面	底・天端切離 切離法成型	備考	
72 1	E U30 F1		須恵器 耳	148	142 54	49 4.5		43 傾斜形	細密 良	ロクロ目 アラミ	回転永切り	合口の耳	
2	E U30 F1		土師器 耳	147	139 63	43 4.5		35 傾斜形	粗面 良	ロクロ目 ロクロ底	回転永切り	内面に落書きあり 合口6耳 面端	
3	E U30 F1		土師器 壺	74	288 104	320 7	198 232	211 傾斜形	粗砂面 良	ロクロ目 ヘラ切り ロクロ底		底面に穿孔 合口埋設工事	
4	E U30 F1		土師器 壺	75	237 126	330 7	211 243	211 傾斜形	粗砂面 良	ロクロ目 ヘラ切り ロクロ底		底面に穿孔 合口埋設工事	
5	S K34		須恵器 环盡	171	153	40			破壊 良	ロクロ目 回転ヘラ切り ロクロ底		内面 沈坡り 背面骨片	
6	S K34		須恵器 环盡	176	(154)	29			粗砂面 不良	ロクロ目 回転ヘラ切り ロクロ底			
7	S K47		須恵器 环盡			(13)			粗砂面 良	ロクロ目 回転ヘラ切り ロクロ底			
8	S K48		土師器 台付壺	571	113	(45)			粗砂面 不良	ロクロ目 ヘラ切り		内面 傷	
9	S K48		須恵器 环盡			(15)			粗砂面 良	ロクロ目 回転ヘラ切り ロクロ底	回転永切り		
10	S K53		須恵器 环盡	861	(162)	(30.5)			粗砂面 不良	ロクロ目 回転ヘラ切り ロクロ底		背筋骨片 小理痕	
11	S K49		須恵器 寶台坪		(150)	43	22		粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
12	S K53		須恵器 耳	856	(143)	36		26	粗砂面 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
13	S K49		須恵器 耳		(146)	38.5		26	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り		
73 1	S K54 Y		土師器 耳	879	(132)	52 60	3	37 1/2以上	粗砂面 不良	ロクロ目 ロクロ底	回転永切り?		
2	S K56		土師器 耳	863	(143)	45.5 58	5.5	37 3/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	回転永切り	内面に付着物	
3	S K64		黒色土器 有合輪		(144)	50		35 3/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 シガキ	回転永切り	内面	
4	S X76		須恵器 耳		(124)	37.5 (58)	3	35 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	回転永切り		
5	S X76 Y		須恵器 耳	869	(134)	39		35 1/2以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	回転永切り		
6	S X76		須恵器 耳		(31)	30		30 1/4以上	破壊 良	ロクロ目 ロクロ底	回転永切り	内面 黒ねじき痕 (耳付部)	
7	S P73 Y		須恵器 环盡	863	169	46		28 1/4以上	粗砂面 良	ロクロ目 回転ヘラ切り ロクロ底			
8	S P73		須恵器 環			(46)	6	破片		タクタ アラミ		丸底膨時のシザ痕	
9	S K87 Y		須恵器 壺			(87)	12		粗密 良	タクタ アラミ			
10	西区	I-33 VI上	須恵器 耳	572	137	36	28	粗砂面 傾斜形	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	外側、内面に火葬		
11	西区	H-32 VI	須恵器 耳	163	(132)	30.5 61	5	39 1/2以上	粗砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	回転永切り	外側、内面に火葬	
12	西区	N-32 II	須恵器 耳		(142)	34		21 1/4以下	粗砂面 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	色調微変	

表6 土器観察表(31)

計測単位 mm

探査番号	出土遺物	グリッド番号	種別	RPN	口径	縦高	横径	外傾度(°)	底厚	胎土	外表面	底・天井部切削 切削後成形	備考
73	西区	X-0	直底器 耳		(145) (82)	39 5		34.5 1/4以上		細砂混 無	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	底部へテ抜き×
14	西区	I-32 VI	直底器 耳	173	139 64	39 4		39		細密 無	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
15	西区	I-32 VI	直底器 有台耳	176	138 76	38 5		19 はん完形		細密 無	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	丸底
16	西区	I-32 VI上	直底器 耳	180	156 67	31 4		52 3/4以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	底部に丸底
17	西区	M-32 VI	直底器 耳	160	(156) (164)	46 3		25 1/4以上		細砂混 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
18	西区	H-31① IV上	直底器 鋸歯		(146) (75)	29 4				細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	色調微色
19	西区	J-31① IV上	土器器 皿	359	(166) (75)	(39) 4.5		49 1/4以下		細砂混 不良	ロクロ目 ロクロ底	?	色調明赤褐色
20	西区	J-31② IV上	直底器 鋸歯	359	(128) (77)	(31.5) 4		50 1/2以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
21	西区	P-32 VI	直底器 耳			(133) 56				細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	底部 番書△
22	汎用	X-9	陶器 円筒瓶			84	(15) (5.5)			細密 無	ロクロ目 ロクロ底		
74	1	S G31	C-33 IV下			(150) (160)	44 6	22		細砂混 不良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	剥離骨片多く含む
2	2	S G31	D-32 V上			(150) (160)	39 3	25		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	
3	3	S G31	E-29 IV下			(152) (90)	48 5	24		細密 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	剥離骨片多く含む
4	4	S G31	B-30 IV下	直底器 耳	114	(136) (70)	35 5	35 1/4以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
5	5	S G31	B-31 IV	直底器 耳	144	41 66	31 3.5	39 1/2以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
6	6	S G31	D-33 IV下	直底器 耳	145	38 74	43 4	43 1/2以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
7	7	S G31	D-31 V上	直底器 耳	138	34.5 62	45 4.5	43 1/2以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
8	8	S G31	D-31 IV下	直底器 耳	(138)	41 60	38 5.5	38 1/2以上		細砂混 不良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
9	9	S G31	C-30 IV下	直底器 耳	17	148 56	49 5	40 3/4以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
10	10	S G31	D-31 IV下	直底器 耳	93	(160) 54	46 5	43 3/4以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
11	11	S G31	D-31 V上	直底器 耳		(144) 60	38 4	40 1/2以上		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	剥離骨片多い
12	12	S G31	C-33 IV中	直底器 耳	85	148 58	52 4	33 1/2以上		細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
13	13	S G31	B-30 IV下	直底器 有台耳		(142) 78	65 5	24 1/4以下		細密 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
14	14	S G31	D-31 V上	直底器 有台耳	103	129 72	57 4	24 3/4以上		細密 不良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	歪み
15	15	S G31	D-31 IV下	直底器 有台耳	81	(146) 90	47 3.5	22 1/2以上		細密 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り	

表6 土器観察表(32)

計測項目

件目番号	出土遺物	グリッド順序 灰原層序	種別 形態	RPNs	口徑 底径	壁厚	頸部 調査	外傾度(°) 調査	動土 焼成	外側 内側	底・穴井切削 切削状況	備考
74	16 SG31	D-33	復原器 皿		(55)	4		1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	内面 斜材等
	17 SG31	B-31 IV	復原器 有台耳	(156)	76	4		21	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
	18 SG31	B-31 IV	復原器 有台耳	(148)	58	3		24	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	曲線骨付
	19 SG31	B-31 IV	復原器 耳	(16)	76	3	頸部のみ		密	開り ロクロ底	?	外側内面 火拂 焼跡骨付
	20 SG31	D-30 IV下	復原器 耳	(138)	37	5		23	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ削り	底面 ヘラ削り
	21 SG31	D-32	復原器 有台耳	(149)	62	5		29	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	曲線骨付多い
	22 SG31	D-31 IV下	復原器 有台耳	94	130	55		36	ほび充形	ロクロ目	回転余切り	自然崩 灰波り 焼き色
75	1 SG31	D-30 IV下	復原器 耳		(24)				粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ削り	外側 底部 ヘラ削り
	2 SG31	D-32 IV下	復原器 耳	(148)	40	3		1/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	?	
	3 SG31	B-31 V上	復原器 耳	116	125	5		3/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底		内面 灰波り
	4 SG31	E-30 V上	復原器 耳	(174)	29	6		1/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 刻り ロクロ底	回転余切り	内面 灰波り
	5 SG31	D-30 V上	復原器 耳	183	28	5		ほび充形	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底		外側 灰 焼跡骨付
	6 SG31	C-30 IV	復原器 耳	(21)	3.5			1/4以下	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	外側 ヘラ削り
	7 覆原 G	F-31 V上	復原器 耳	(190)	(51)	7		1/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 刻り ロクロ底 ハゲメ	ヘラ削り	
	8 SG31	C-32 V上	復原器 耳	(87)	5			1/4以下	密	ロクロ目 ロクロ底		
	9 SG31	D-31	復原器 耳	(117)		12		1/4以下	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底		内面 自然崩
	10 SG31	D-31 V上	復原器 耳	(96)	6			1/4以下	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底		頸部に三条の沈線
	11 SG31	D-31 V上	復原器 耳	115	111	104			粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	回転余切り	
	12 SG31	C-32 IV下	復原器 耳	(177)	(149)	55	132	3/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底		こね跡 底面に凹あり
	13 SG31	D-31・32 V上	復原器 耳	163	276	6		3/4以上	粗砂混 良	タキリ ロクロ底	静止余切り 手持ヘラ削り	
76	1 SG31	D-31 V上	復原器 耳	(294)	(224)	(223)		1/4以上	粗砂混 良	ロクロ目 タキリ ロクロ底 アケ痕		
	2 SG31	D-31 IV	復原器 耳	(142)	12		口縁部のみ		粗	ロクロ目 ロクロ底 ハゲメ		内面 灰波り 底状沈線
	3 SG31	D-32 IV	復原器 耳	(138)	16		口縁部のみ		粗	ロクロ目 ロクロ底		曲線骨付 小標識 底状沈線 2段
	4 SG31	C-33 IV下	復原器 耳	(126)	8			1/4以下	粗砂混 良	ロクロ目 カキメ ロクロ底 ハゲメ		内面 灰波り
	5 SG31	B-33 IV	復原器 耳	138	674	7		1/2以上	粗砂混 良	ロクロ目 ロクロ底		内面 灰波り こね跡

表6 土器観察表(33)

調査番号	出土遺物	グリッド順序 底面ブロック 底面層	種別 器種	RPNo.	口径 底径	器高 底厚	腹径 胴径	外側径(+) 通存	胎土 焼成	外觀 内面	計測単位 mm		備考
											底・天井部切離 切離後成形		
76 6	S G31	D-31 V上	須恵器 盤		(128)	9		3／4以上	磨砂面 良	ロクロ目 タタキ ロクロ底 アラ底 ハゲメ			
77 1	S G31	D-32 V上	土師器 耳		(128)	46	33		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り	塔	
2	S G31	D-32 IV下	土師器 耳	91	136	45	31		磨砂面 不良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り		
3	S G31	D-32 IV下	土師器 耳	119	136	47	37		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り		
4	S G31	D-31 IV下	土師器 耳	98	136	44.5	35		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り		
5	S G31	E-32 V上	土師器 耳	(140)	43	39	39		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り	高底	
6	S G31	D-32 IV下	土師器 耳	(132)	46	30			磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り	高底	
7	S G31	D-31 IV下	土師器 耳	102	(140)	44	41		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り		
8	S G31	D-31 IV下	土師器 耳	105	137	52	39		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り	高底	
9	S G31	D-32 IV下	土師器 耳	(140)	47	33			磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り	高底	
10	S G31	D-31 IV下	土師器 耳	123	126	47	28		磨砂面 不良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り		
11	S G31	C-32 V上	土師器 背台环	106	(180)	64	39		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り		
12	S G31	D-32 IV	土師器 背台环	176	(64)				磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り	高台大頭 背台环	
13	S G31	B-30 IV下	土師器 裏	(140)	(88)	10	1／4以下		磨砂面 良	ロクロ目 ナデ ロクロ底 ナデ			
14	S G31	C-33 IV下	土師器 裏	14	(60)	11	1／4以下		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底		輪模み?	
15	S G31	D-31 V上	土師器 裏	(185)	219				磨砂面 良	ロクロ目 裂り ロクロ底	?	底部に穿孔	
78 1	S G31	F-30D IV F-29D IV上	土師器 裏	(286)	(156.5)	(236)			磨砂面 良	ロクロ目 カキメ ロクロ底			
2	S G31	D-31 V上	土師器 裏	(184)	(77)	6	1／4以上		磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底			
3	S G31	B-32	土師器 背台环	(58)	19		1／4以下		磨砂面 良	ロクロ目 カキメ ロクロ底		内面 塔	
4	S G31	D-32 V上	土師器 小腹突	(100)	68				磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り		
5	S G31	C-33 IV下	土師器 裏	(43)	6	1／4以下			磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底	圓板水切り	底部 ハラ指印×	
6	S G31	B-33 IV	土師器 裏	(150)	(100)	(130)			磨砂面 良	ロクロ目 ロクロ底		油煙	
7	S G31	D-32 V上	土師器 裏	(224)	(183)	(192)			磨砂面 良	ロクロ目 裂り ロクロ底			
8	S G31	C-32 IV D-32 IV	土師器 裏	(140)	152		1／4以上		磨砂面 良	ロクロ目 裂り ロクロ底 カキメ	ヘラ削り	圓錐骨盆 石灰岩	
79 1	S G31	D-32 IV+V上	土師器 裏	(600)	(193)	8	1／4以下		磨砂面 良	ロクロ目 裂り ロクロ底 カキメ			

表6 土器観察表(34)

計測単位 mm

測定番号	出土遺物	グリット標示 灰原断面	縦割 断面	R Pts	口径 底径	壁厚	継径 胴径	外輪(+) 酒存	胴上 焼成	外輪 内側	底・天井部切端 削離後底形	備考
79 2	S G31	D-32 V上	土師器 皿		(288) 45 120	8		1/2以上	細砂渦 良	ロクロ目 剥り ロクロ底 ハケメ	ヘラ削り	底面
3	S G31	D-31 IV下	土師器 耳	109	138 44 58	4.5		26 1/2以上	細密	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	内側 縦き
4	S G31	B-30 IV下	土師器 鉢	230	9			1/2以上	細砂渦 良	ロクロ目 剥り ロクロ底 ヒガキ	ヘラ削り	
5	S G31	D-31 IV下	土師器 有台杯	101	142 54 42	6		40	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底 ヒガキ	圓輪余切り	
6	S G31	D-31 IV下	黒色土器 有台碗	120	(150) 52.5 (60) 6			1/2以上	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底 ヒガキ	?	内底
7	S G31	E-31 V上	黒色土器 有台碗	563	158 (56) 72	5.5		29 3/4以上	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底 ヒガキ	圓輪余切り	内底
8	S G31	D-31 V上	須恵器 耳		(160) 47 (97) 8.5			20 1/4以上	細砂渦 不良	ロクロ目 ロクロ底 ハケメ	ヘラ切り 手持ヘラ削り	晋世 圓輪者青瓷 色蓋に付い青色
9	S G31	C-32 IV下	黒色土器 有台碗	89	120 50 59	3.5		37 1/2以上	細砂渦 良	ロクロ目 ヒガキ		内底
10	S G31	C-32 V上	土製品 土鉢				(44) 6 (84)	1/2以上 不良	細密	剥り		上部欠損、頭口繊状
11	S G31	B-30 IV下	土師器 皿	66	22				細密	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	灯明底形
12	S G31	E-30 V上	土製品 土鉢				(30) 7	3/4以上	細密	剥り		
80 1	S G31焼て器	E-34 F4	須恵器 耳	408	(140) 44 56	4		39 1/4以上	細密	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	
2	S G31焼て器	E-34 F4	須恵器 耳	459	(140) 43 (52) 5			37 1/4以上	細密	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	
3	S G31焼て器	E-34 F4	須恵器 耳	446	(130) 44 59	3		36 1/4以上	細砂渦 不良	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	色調灰白色
4	S G31焼て器	E-35 F4	須恵器 耳	482	(133) 45 54	3.5		37 1/2以上	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	亞み
5	S G31焼て器	E-35 F4	須恵器 耳	438	(140) 43 58	4		41 1/4以上	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	
6	S G31焼て器	E-34 F4	須恵器 耳	397	(142) 45 52	4		38 1/2以上	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底		
7	S G31焼て器	E-34 F4	須恵器 耳	443	95 37 98 6			15 3/4以上	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	
8	S G31焼て器	E-35 F4	須恵器 耳	493	144 42 110 4			15 3/4以上	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底	ヘラ切り 手持も削り	
9	S G31焼て器	E-35 F4	須恵器 耳	481	126 (70) 6			1/4以下	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底		外輪底張り 軸 内輪底張り 脱 焼き合に転用
10	S G31焼て器	E-34 F4	須恵器 耳	447	(132) 64 68	5		1/4以下	細密	ロクロ目 カキメ ロクロ底 カキメ ハケメ	圓輪余切り	
11	S G31焼て器	E-34 F4	黒色土器 有台碗	432	(150) 52 (63) 4			42 1/4以上	細砂渦 良	ロクロ目 ヒガキ	?	内底 高台火痕
12	S G31焼て器	E-34 F4	土師器 皿	445	(266) 5	7.5		1/2以上	細砂渦 良	タスキ 剥り ロクロ底 ナデ	丸底	
13	S G31焼て器	E-34 F4	須恵器 耳	493	(150) 47 56	3.5		38 3/4以上	細砂渦 良	ロクロ目 剥り ロクロ底	ヘラ削り	内底 灰被り 小環底
14	S G31焼て器	E-34 F4	土師器 耳	419	(150) 47 56	3.5		38 3/4以上	細砂渦 良	ロクロ目 ロクロ底	圓輪余切り	

IV 出土遺物

表6 土器観察表(35)

計測単位 mm

発掘番号	出土遺物 伝統ブロック	グリッド編序 伝統	RPNs	口径 幅	器高 厚	側径 側厚	外傾度(°) 側厚	胎土 焼成	外観 内面	底・天井部切端 切削後成形	備考
80 15	S G31油て場	E-35 F4	土器器 耳	484 56	128 6	40	37 1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
16	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	427	134 52	44 5	38 1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
17	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	435	(138) 58	32 4.5	37 1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
18	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	431	138 62	48 6	32 3/4以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
19	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	417	128 50	45 5	38 1/2以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
20	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	458	131 54	51 9	33 1/4以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	裏面
21	S G31油て場	E-35 F4	土器器 耳	483	136 56	45 4	40 3/4以上	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
22	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	444	(124) 62	45 4	39 3/4以上	細砂混 不良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
81 1	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	412	(146) 89	(137) 5	(134) (145)	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
2	S G31油て場	E-35 F4	土器器 耳	488	(150)	149		細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
3	S G31油て場	E-34 E-34 F4	土器器 耳	451	(143) (75)	(138) 4	(124) (136)	細砂混 良	ロクロ目 ロクロ底	圓軸余切り	
4	S G31油て場	E-35 F4	土器器 耳	500	176 122	191 6	390	ほぼ完形	細砂混 良	ロクロ目 繪り ロクロ底 カキメ	里み
5	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	441-439	179 82	171 6		細砂混 良	ロクロ目 繪り ロクロ底 ナデ		
6	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	442		(182) 7		細砂混 良	割り カキメ ロクロ底 カキメ		外観 落 石突起
7	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	420	(156)	(150) 5		細密 良	ロクロ目 ロクロ底		外観 落
8	S G31油て場	E-34② F4	黑色土器 耳	801		(195)		細砂混 良	ロクロ目 ミガキ	?	内黒
9	S G31油て場	E-34 F4	土器器 耳	391	(266) (215)	283 8		細砂混 良	ロクロ目 繪り ロクロ底		後腰下部に2種 三対の穿孔あり

V まとめと考察

1 平野山古窯跡群第12地点遺跡の窯関連遺構

本遺跡は、縄文時代と奈良～平安時代との2時期に分かれる。奈良～平安時代は土器の生産跡で、須恵器の窯跡が12基と窯関連の遺構が検出された。窯跡の遺存状態はあまり良くないが、全て半地下水式の登窯と見られ、第1・2次調査を通じて15基の登窯が確認されたことになる。

今回見つかった窯跡は、河岸段丘縁辺部で氾濫原との境目の標高約112mの東斜面に並列して構築され、その斜面下に灰原帯があった。窯関連の遺構は斜面上の比較的平坦な段丘面上にロクロピット3基・焼土遺構2基・粘土貯蔵穴・粘土採掘坑と見られるもの等が検出された。掘立柱建物跡などの工房的な構築物は確認されなかった。しかし隣接する第1次調査区では、北側の標高約115～117mの緩傾斜地に工房あるいは工人の住まいと見られる堅穴住居跡6棟が見つかり、内1棟では埋設された須恵器の甕に貯蔵された柔らかい白色粘土が出土した。その東側の小谷斜面には2基の窯跡が重複して構築されていた。焼土遺構も2基確認された。窯体の一部が検出された地点は今回調査したSQ9の西隣傾斜地にあたり、擾乱を受ける以前には何基かの窯跡および灰原があった可能性が指摘される地区である。また良質の白色粘土層も分布しており、時期の特定は出来ないが粘土の採掘跡が確認された。以上、第12地点遺跡を総合的に捉えると、工人集団が窯を築き、原料となる粘土を採掘して貯蔵し成形・乾燥させた後に焼成、窯出し時に選別して焼き損じを捨てる、という一連の工程を彷彿とせるものである。

次に、前章中では扱いきれなかった事項について、短く列記しましておく。

(粘土・胎土) 材料分析の結果、貯蔵粘土塊は海成粘土で混和材を含んでいない。混和材としては火山ガラスが検出された。また肉眼で観察した限り、須恵・土師器双方とも海綿骨針を含む物が多い。甕などの大型品には石英が多く見られた。土師器の大型品には雲母が認められる。土器の種別や器種により混ぜ合わせる粘土や混和材とその量を調整するものと思われる。

(窯の燃料) 灰原出土の炭化材を樹種同定したところ、燃料は好適と言われるマツではなく、SQ1が落葉広葉樹のクヌギやコナラで、SQ33もクヌギであった。花粉分析からは当時の遺跡周辺の植生はナラ類を中心とした二次林で、しかも粗林であった可能性が示されている。平野山古窯跡群周辺は百年以上にもわたる燃料材の伐採により、植生が変化していたことが伺える。

(重ね焼き) 灰原帯の重ね焼き資料から、一度でより多く焼成しようと詰め込んだことがわかる。特に、B群土器の有台环は环の上に裏返した蓋を置いたセットを幾つも積み上げ、C群土器の無台环や口径の小さい有台环では、正位の状態で幾点も積み重ねる方法が多い様である。

(酸化焰焼成) SQ33窯体内から還元焰焼成された土師器器形の甕や鍋が出土したが、焼台としての2次焼成である可能性が否めない。土師器は、灰原G～Jブロックから大量に出ているが窯体内では確認されないため、本登窯で酸化焰焼成を行ったかどうかは不明である。

(各窯の操業時期) 後述の遺物分類に従い、SQ1はA群窯=8世紀第3四半期、SQ5はB群窯=8世紀第4四半期、SQ33がC群窯=9世紀第2四半期となる。D群土器に対応する窯跡は検出されていない。それ以外は出土遺物が少ないかまたは皆無のため分類できなかった。

2 一括土器群とその変遷について（第84～97図）

平野山古窯跡第12地点遺跡の第2次調査で出土した須恵器などは、後述する理由で8世紀中葉から9世紀末葉にかけての時期と考えられる。第IV章の3節で述べた各遺構および灰原の遺物のうち、遺存状況が比較的良好な窯体内とその東下の灰原から出土した次の四つの資料は、なお層位の吟味が必要であるが、一括土器群として把握することが可能である。

<A群> S Q 1 窯体内と灰原Lブロックの土器群

<B群> S Q 5 窯体内と灰原Pブロックの土器群

<C群> S Q 33 窯体内と灰原Hブロックの土器群

<D群> S G 31 捨て場の土器群

以下これらの土器群について、その内容や変遷および年代の検討などを行っていく。なお、坏類を主とした土器法量の計測に際しては、実測遺物のほか新たに138点の資料を追加した。

<A群> S Q 1 窯体内と灰原Lブロックの土器群（第84・85図）

まずS Q 1 窯体内と灰原Lブロックの土器群について述べる。本土器群からは、須恵器の坏・有台坏・蓋・高坏・壺・壺・横瓶などが出土している。坏は底部の切り離しが大半回転ヘラ切りで、形態は平底で底径が広いA-5類（85-4・6～9）が主体を占め、次いで身の深いA-3類（同3・5）が多い。底部の切り離しが板状工具によるA-4類（2）も1点ある。体部下半の調整はほとんどみられないが、手持ちヘラ削りの再調整が施されるA-2類（1）も3点ある。第84図上段にはS Q 1 窯体内的無台坏について、口径と器高を基とした法量分布図を示した。口径は140～146mmのものと151～154mmの二群があるが、高径指数（器高÷口径×100）は20～30の範囲内に収まる。同図中段は灰原Lブロック無台坏の法量分布である。口径は130～157mmまで多様であるが、高径指数は20～30の範囲内にほぼ収まる。

有台坏も底部の切り離しが回転ヘラ切りで、底径が広い逆台形のB-5類（10～13）が大半を占める。10は体部下端に削りを伴わない緩い稜をもつ。灰原Lブロックからは身の深いB-3類や底部の切り離しが静止糸切りによるB-4類（14）も少量出土している。体部下半の調整はほとんど認められない。第84図下段は灰原Lブロック有台坏の法量分布である。口径は140～158mmまで多様であるが、高径指数は20～35の範囲内にほぼ収まる。

高坏は脚部が1点出土している（23）。蓋は緩やかな丸味をもつF-4類（18・19）が6点、天井部が平坦で偏平なF-5類（20・21）が4点出土している。この他に平坦な頂部に直線的な縁部がつくF-1類（16）と疑宝珠形のつまみをもち天井部が丸いF-3類（17）、つまみをもたない小型のF-11類（22）が各1点ある。

壺の形態は短頸壺・長頸壺・四耳壺などがある。短頸壺は短い口縁部が直立し体部が丸みをもつI-1類（25）がある。長頸壺は四耳壺と思われるJ-4類（28）が2片出土している。壺は口縁部が外反し体部が直線的に立ち上がるK-1類と、口縁部が外反し体部中位に最大径をもつ大型壺L-2類（27）がある。横瓶は短い口縁部に横に長くやや角張った体部がつくM-1類（30）が1点出土している。29は横瓶の口縁部と思われる。

<B群> S Q 5 窯体内と灰原P ブロックの土器群（第86・87図）

つぎに S Q 5 窯体内とその下の灰原P ブロックからは、須恵器の环・有台环・蓋・鉢・壺・甕などが出土している。环は底部の切り離しが回転ヘラ切りのものがほとんどであるが、S Q 5 からは回転糸切りの环も1点出土している。形態は平底で底径が広い逆台形のA-5類（87-4～7、9～11）と、底部が丸味をもヘラ削りのあるA-1・2類（同1・2）・身の深いA-3類（3・8）が相半ばしている。同86図上段は灰原P ブロック無台环の法量分布である。口径は130～144mmであるが、高径指数は25～35の範囲内にほぼ収まる。

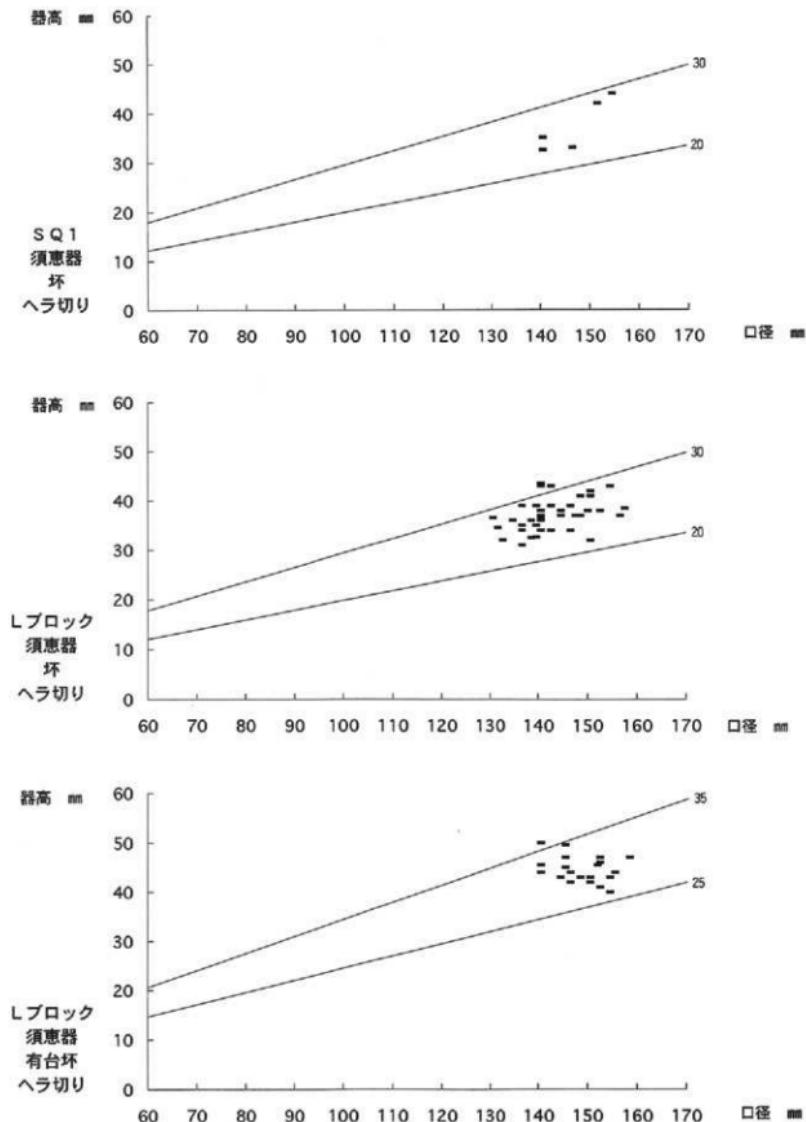
有台环の底部の切り離しは回転ヘラ切りが主であるが、静止糸切り（19）もある。形態は体部下半に軽い稜をもつ口徑の大きいB-1類（12～14）や口徑の小さいB-2類（15・18）が主体を占める。いくつかの体部下半には回転ヘラ削り調整が認められる。17は体部が丸味をもつて切り離し手法は不明である。同86図下段は灰原P ブロック有台环の法量分布である。口径が110mm前後と140mm前後の二群があり、高径指数は前者が50前後、後者が30～40の範囲内にほぼ収まる。蓋は天井部全面に回転ヘラ削り調整をもち偏平なF-5類（20・21）が3点と、天井部がやや丸味をもつもの（22）が1点出土している。

鉢は口縁部がほぼ直立し体部上半に波状沈線をもつH-1類（29）と、底部が丸く連続した刻み目をもつこね鉢H-3類（26・27）がある。壺は長頸壺が主で、口縁部が長く外半し体部中位に最大径をもつJ-1類（23）と、やや長い口頭部が直立のち外半するJ-2類（24）がある。甕はS Q 5 から体部下半から底部にかけてヘラ削り調整が施されるK類（28）、灰原P ブロックから口縁部が強く外反し体部中位に最大径をもつL-2類（25・31）が出土している。鍋は体部と口縁部の境が明瞭でなく口唇部が外半するもの（30）がみられる。このほかP ブロックから、内外面にハケメ調整が施される土師器甕K-1類が3点出土している。

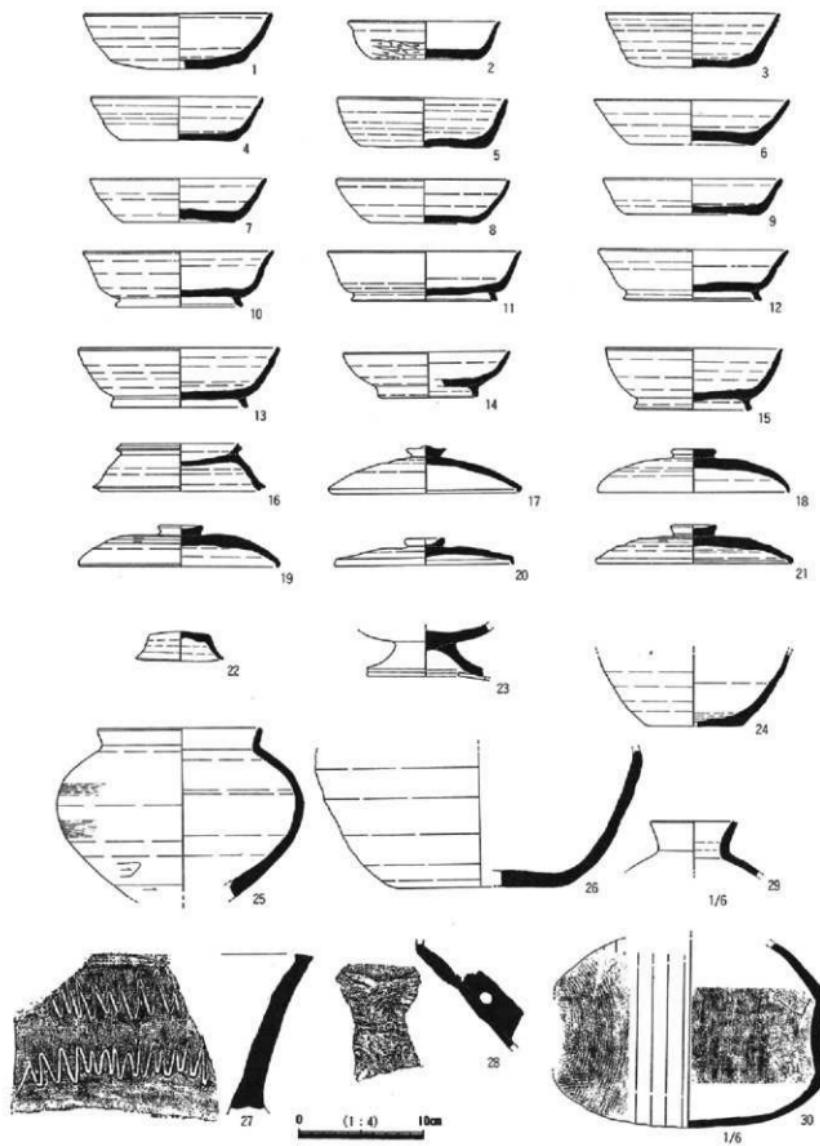
灰原P ブロックの北側に隣接する灰原S ブロックの土器群の内容も、B群土器とほぼ類似する。ただし、須恵器环はA-1・2類だけでA-5類が認められること、および有台环がB-1・2類だけでB-4類が認められないことなどに若干の差異がある。同88図下段は灰原S ブロック有台环の法量分布である。口径は124～140mm、高径指数は30～40の範囲内に收まり、P ブロック有台环二つの群とのほぼ中間値を示している。

A群およびB群の土器に類似した資料として、河北町不動木遺跡S D 1 溝跡出土の土器群がある。S D 1 溝跡は、調査区の中央を東西に走る幅2～2.2m、深さ80cm前後の溝跡で、長さは70m以上に達する。このうち溝跡の北側寄りの15mの範囲から、整理箱10箱分程の須恵器と土師器が共伴して出土している。溝跡の覆土は11層に分かれるが、遺物は1・2層からのみ出土し、3層以下からは遺物が全く出土しないという。調査者は、これらの遺物は短期間に集中的に廃棄されたもので、一括遺物という解釈をしている（文献14）。

遺物のうち136点が報告書に図示されているが、第89図にその主なものを再掲した。須恵器のうち無台环は、底部の切り離しがほとんどヘラ切りであるが、回転糸切りのものも2点（89-15・16）出土している。底部にヘラ削りなどの調整がなく、器高がやや低く体部が直線的に立ち上がる本報告書のA-5類（同5・6、9～14）が主体を占めるが、身が深く体部が



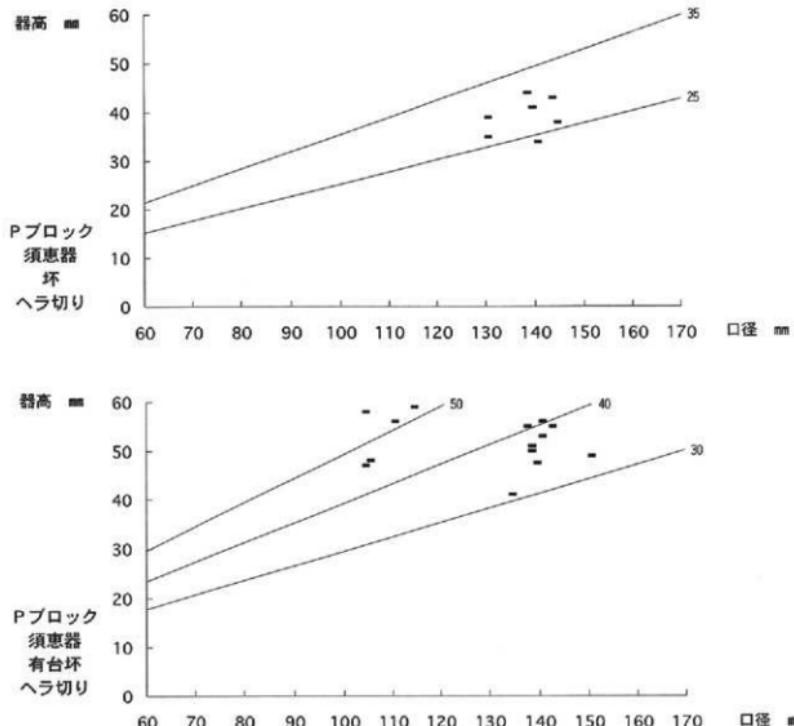
第84図 壺類土器の法量分布 (1)



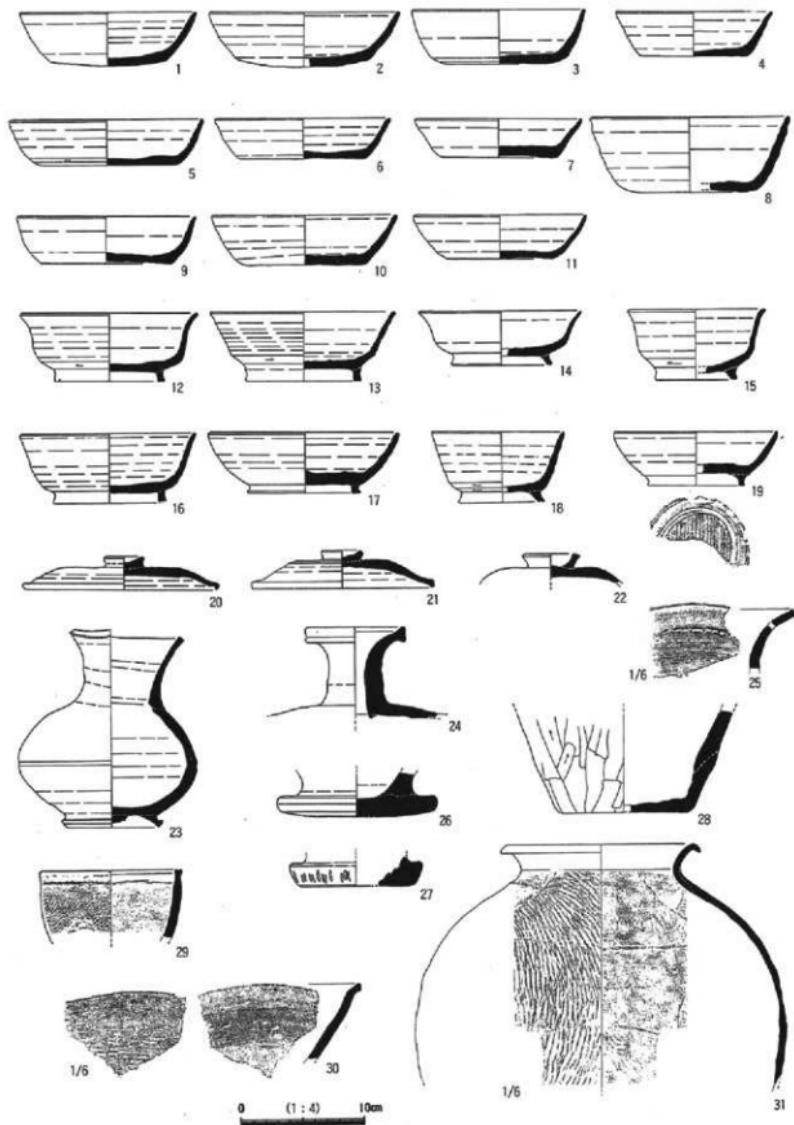
第85図 S Q1・灰原Lブロック出土土器群

直線的に立ち上がるA-3類(1~4、7・8)も一定量存在する。有台环は底部の切り離しがすべてヘラ切りである。高径指数から三つに分類されているが、特に30未満と30から33の範囲に集中する傾向がある。器形は体部下半に稜をもつB-1類(17~21)と口・底径が大きく稜をもたないB-5類(22~27)とに大別される。前者のうち17と19~21の体部下半には回転ヘラ削り調整が認められる。後者には体部が丸みをもつもの(22~24)も含まれる。このほか器高が高いB-8類も1点(28)存在する。环蓋は3類に分類されているが、つまみ部の形態が凝宝珠形のもの(29~33)と中央がくぼむもの(35~37)があり、前者の数が多い。ただし天井部は平坦なF-2ないしF-5類のものが多く、天井部が丸みをもつF-3・4類(34)は少ない。なおこれらと一緒に、内面にヘラミガキのち黒色処理が施される土師器の环(46~49)が出土している。46は丸底で有段の环である。

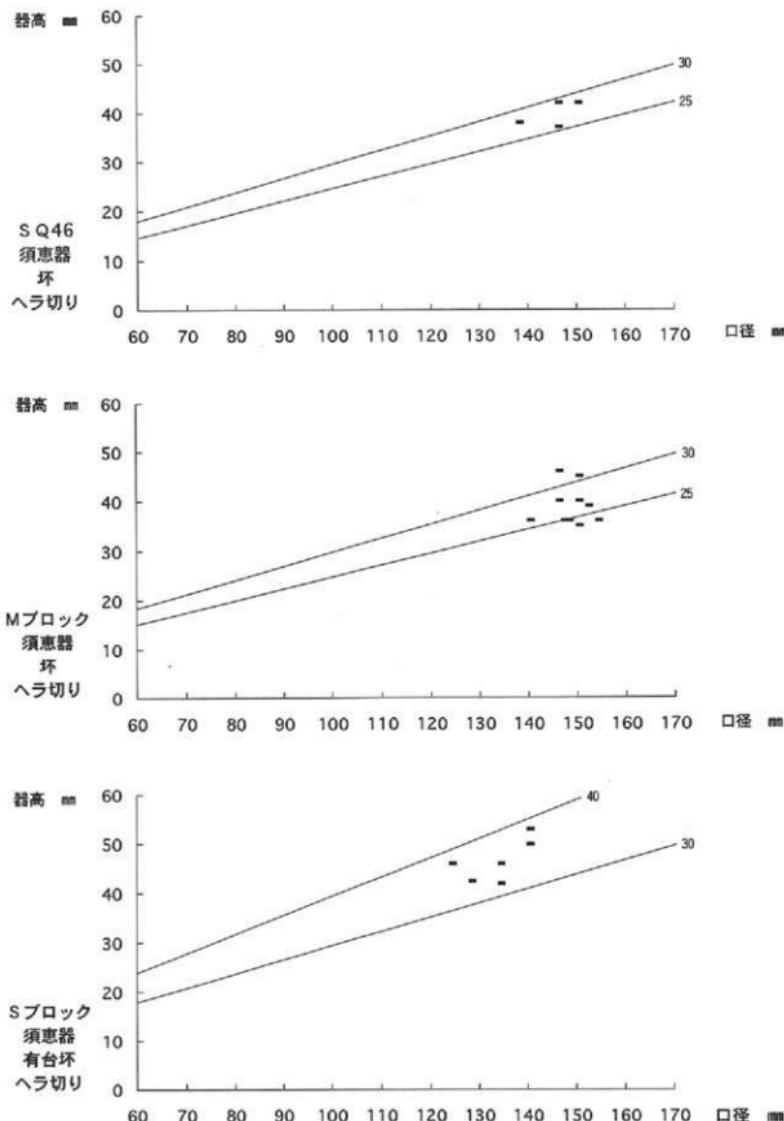
不動木遺跡SD1溝跡出土の土器群は、平野山古窯跡第12地点遺跡の上記A・B二つの土器群を包括するものと考えられる。同溝跡の土器の年代について、調査者は土師器环の共伴関係



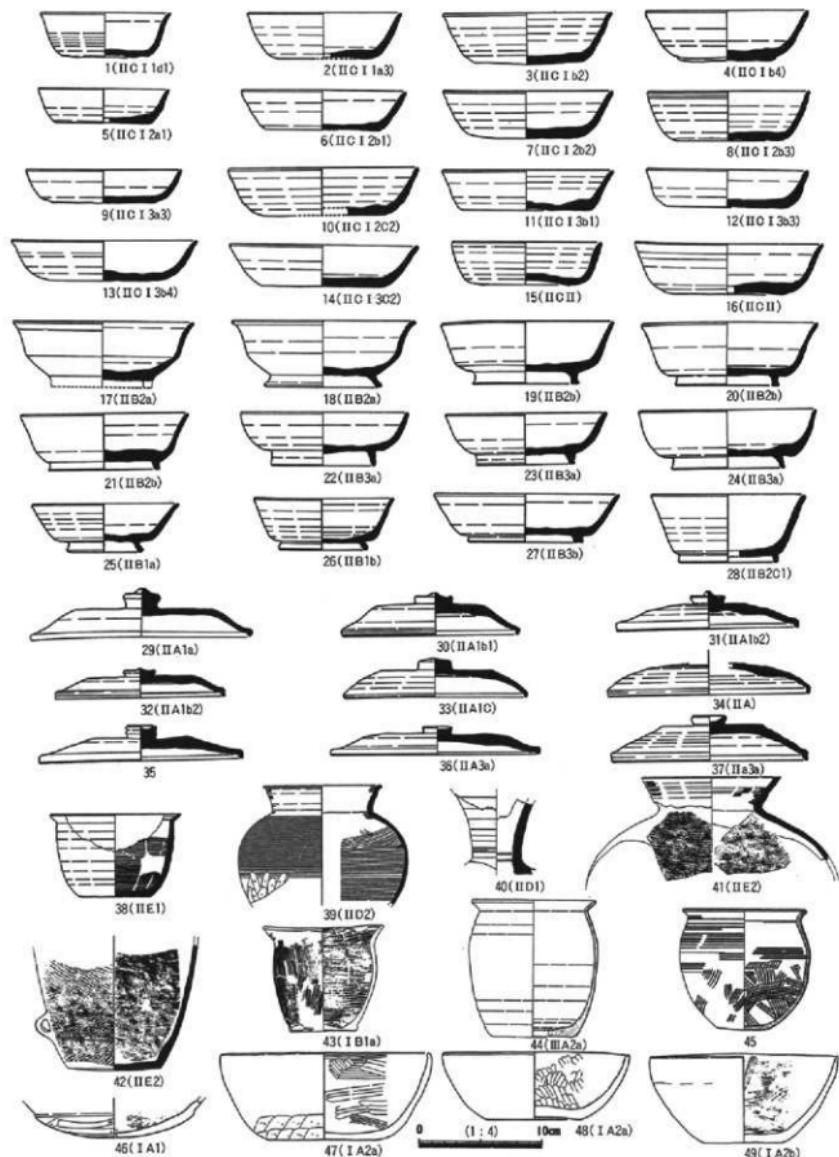
第86図 壁類土器の法量分布 (2)



第87図 S Q5・灰原Pブロック出土土器群



第88図 壱類土器の法量分布 (3)



* ()内は長横1986による分類基準

第89図 河北町不動木遺跡 S D1溝跡出土土器群
— 153 —

などから国分寺下層式の終末8世紀末葉頃としているが、全体として8世紀後葉まで遡らせて良いと思われる。しかし上記A・B二つの土器群は杯類や蓋の形態などにおいて明瞭な差異があり、8世紀後葉の中でもA群の土器群が時期的に先行するものと考えられる。

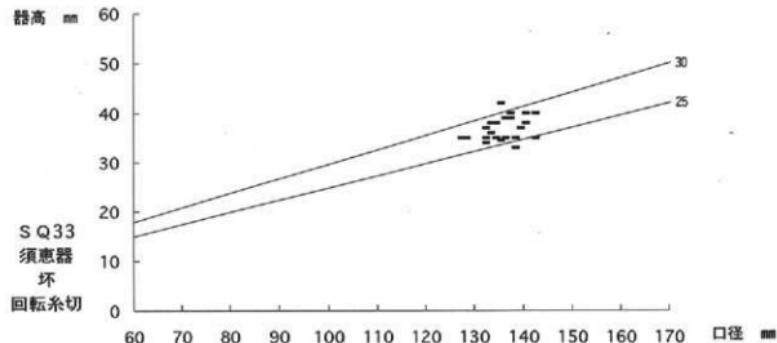
また、平野山古窯跡群第12地点1次調査1・2号窯からも、同様な須恵器が少量出土している。器種には壺A-5類・有台壺B-5類・短頸壺I-1類・甕がある（文献19）。S Q 2より新しいとされるS Q 1の壺類は、やや小ぶりで体部下端が丸みをもつものが目立つ。

<C群> S Q 33窯体内と灰原Hブロックの土器群（第90～92図）

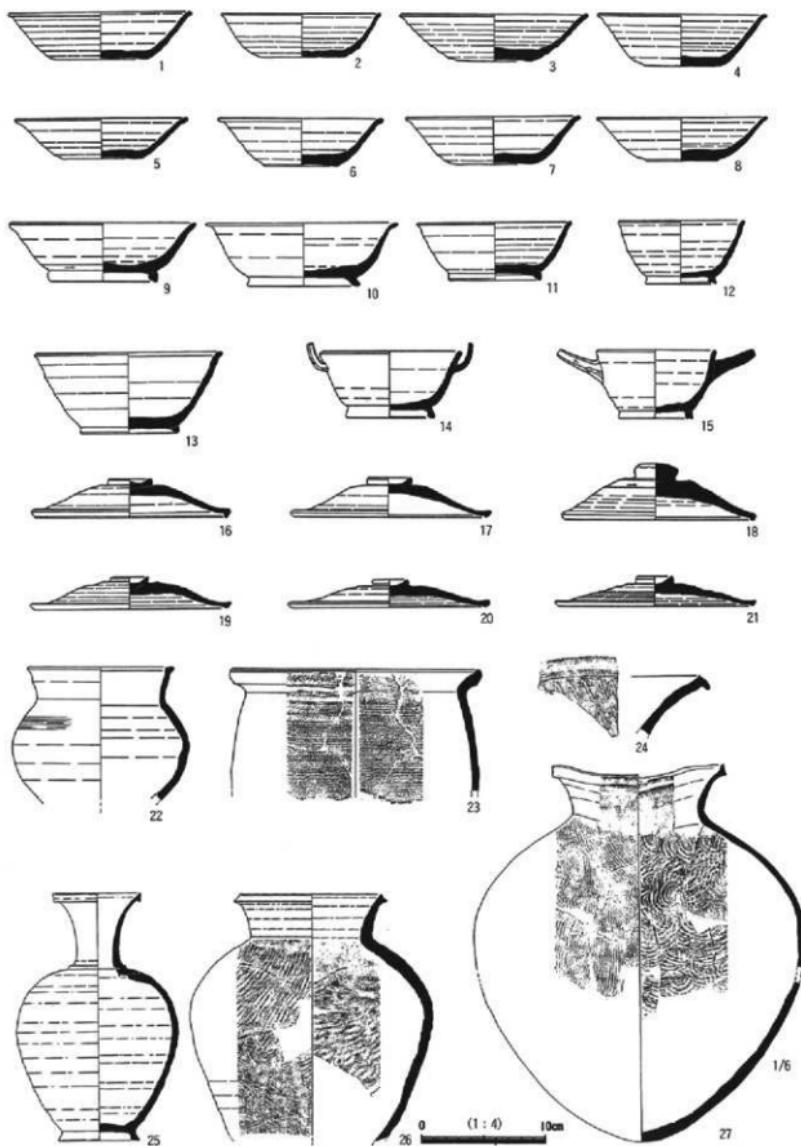
S Q 33窯体内とその下の灰原Hブロックの土器群からは、須恵器の壺・有台壺・双耳壺・蓋・壺・横瓶・甕・鍋と陶硯などが出土している（第91図）。壺は、底部の切り離しが回転糸切りで、器高と底径がやや小さく体部が直線的に外反するA-6類（1～8）のみである。第90図はS Q 33窯体内無台壺の法量分布である。口径が127～142mm、器高が33～42mmであるが、高径指数は25～30の範囲内にほぼ収まる。第92図上段は灰原Hブロック無台壺の法量分布である。口径が128～149mm、器高が33～44mmまでとS Q 33窯体内に比べて多様であるが、高径指数は23～30の範囲内にほぼ収まる。有台杯も底部の切り離しがすべて回転糸切りで、口径に比して器高がやや低いB-7類（91-9～11）と高いB-8類（13）がある。第92図中段は灰原Hブロック有台壺の法量分布である。口径が(a)95～101mm、(b)130～136mm、(c)150～154mmまでの三群があり、高径指数も(a)が50前後、(b)と(c)が30～40の範囲内とに分けられる。

双耳壺は灰原Hブロックからのみの出土で、ほとんどが斜方向の把手が付くC-1類（15）である。蓋はほとんどの天井部の切り離しが回転糸切りで、縁端部は内側に鋭く折り返されている。器高が高く天井部と体部の境が角をなすF-6類（18）と、器高が高く天井部と体部の境が不明瞭なF-7類（16・17・19）、器高が低く天井部と体部の境が不明瞭なF-8類（20・21）の3種があるが、F-7類が量的に多い。

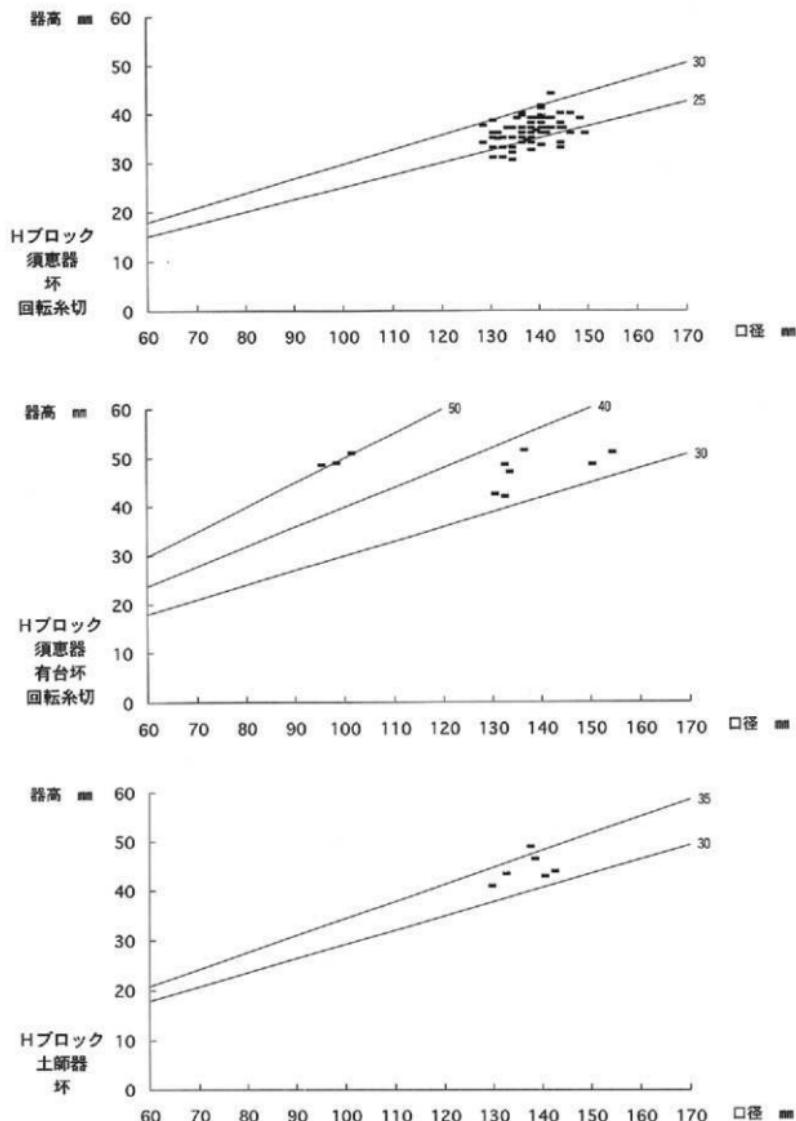
短頸壺は短い口縁部が直立のち外反し体部がやや長く丸みをもつI-3類（22）、長頸壺



第90図 壺類土器の法量分布（4）



第91図 S Q 33・灰原Hブロック出土土器群



第92図 壊類土器の法量分布 (5)

は長い口縁部が直立ののち外反し体部上半に最大径をもつJ-3類(25)がある。甕は長胴甕K-1類(23)と体部上半に最大径をもつK-3類(26)大型甕L-2類(24)とL-3類(27)がある。横瓶は細長い体部がつくM-2類、鍋は口縁部がやや長く外反するものである。

灰原Hブロックからは須恵器の他に、風字硯や土師器坏A-1類、甑O-1類、土師器Bの黒色土器坏A-1類、壺I-1類なども出土している。第92図下段は灰原Hブロックの土師器無台坏の法量分布である。口径が132~142mm、器高が43~49mmであるが、高径指数は30~35の範囲内にほぼ収まる。S Q33窯体内の須恵器無台坏と比べて高径指数の値が大きい。

C群のS Q33窯体内と灰原Hブロックの土器群に類似した器種の組成として、1984年に寒河江市教育委員会が発掘調査を実施した平野山古窯跡群第14地点1・2号窯及び捨て場の出土土器がある(文献8)。須恵器の器種には坏・有台坏・双耳坏・蓋・壺・甕などがある(第93図)。

坏は底部の切り離しがすべて回転糸切りで、器高と底径がやや小さく体部が直線的に立ち上がるA-6類(1~10)、有台坏は器高がやや低いB-7類(13・14・17)と、高いB-8類(12・19)がある。双耳坏は斜方向の把手が付くC-1類(18)である。蓋は天井部が回転糸切りで、器高が高く天井部と体部の境が角をなすF-6類(20・25・27)と、器高が高く天井部と体部の境が不明瞭なF-7類(22~24・26)が多い。縁端部は内側に折り返されている。

短頸壺は口縁部が直立ののち外反し体部がやや長く丸みをもつI-3類(28)、長頸壺はJ-3類(32)がある。31は水瓶の器形を示す。甕は口縁部が外反し体部中位に最大径をもつK-2類(35)、口縁部が直立ののち外半する大型甕L-3類(36)などがある。

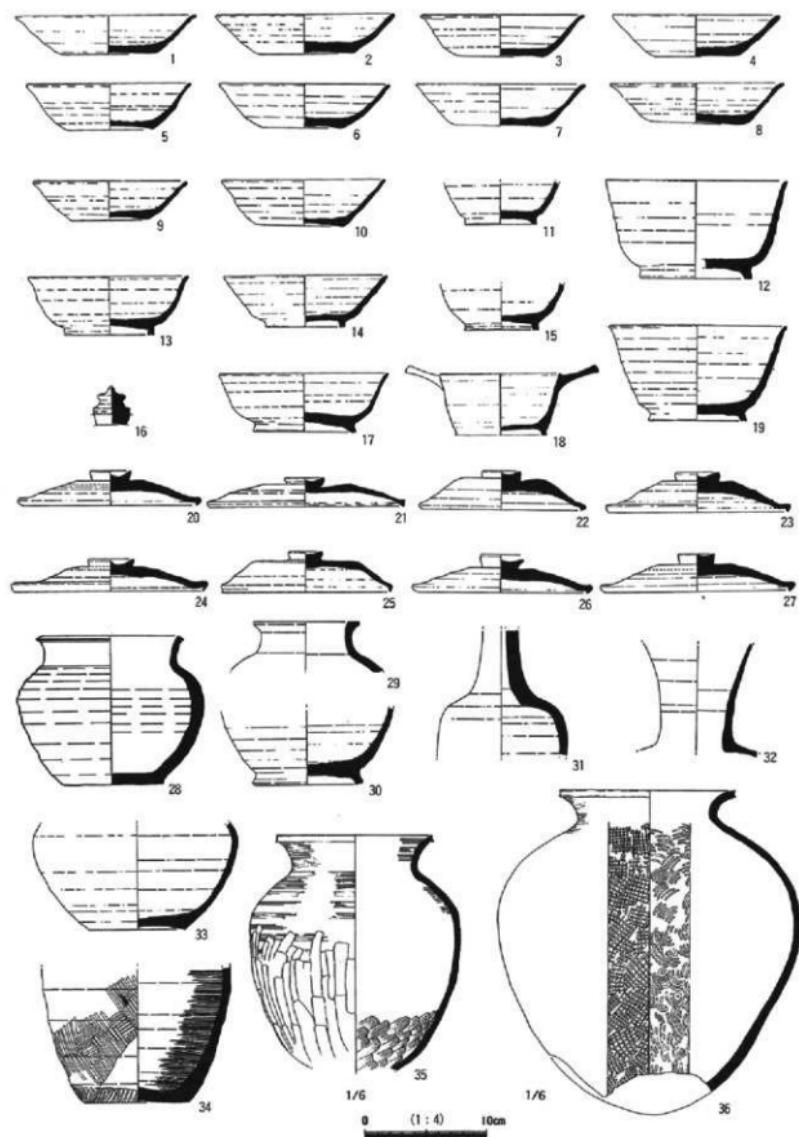
(D群) S G31捨て場の土器群(第95・96図)

S G31捨て場の土器群は、ロクロ使用の土師器Aが主体を占め、須恵器は坏と壺の二器種が少量出土している(第96図)。須恵器坏は底部の切り離しが回転糸切りで、底径が小さく体部が直線的に外反するA-7類(1~6)が主体を占め、これに口径と器高が小さく椀形を呈するA-8類(7)が1点加わる。第95図中段はS G31捨て場の須恵器無台坏の法量分布である。口径が134~148mm、器高が43~45mmであるが、高径指数は30~35の範囲内にほぼ収まる。S Q33窯体内の須恵器無台坏と比べて高径指数の値が大きい。壺は長い口縁部が直立ののち外反する長頸壺J-3類(10)とその体部と思われるもの(9)が出土している。

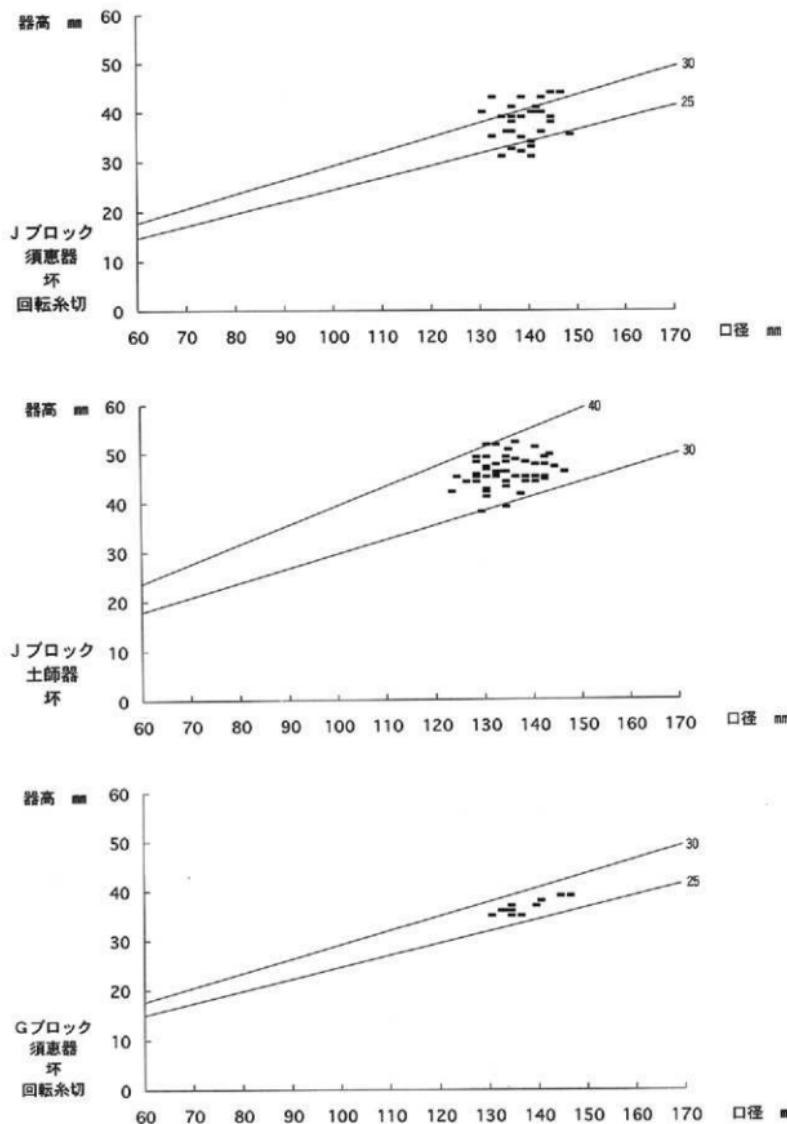
土師器Aは坏・壺・甕・甑などの器種がある。坏はロクロを使用し酸化焰焼成によるもので、すべて底径が小さく体部が直線的に立ち上がるA-2類(13~18)である。第95図下段はS G31捨て場の土師器無台坏の法量分布である。口径が128~142mm、器高が40~50mmであるが、高径指数は30~40の範囲内に収まる。S Q33窯体内の土師器無台坏と比べて高径指数が大きい。

甕は器高がやや高く口縁部が内湾するK-2類(19~22)がほとんどである。甑はO-2類(23)が1点出土している。さらに、これに土師器B黒色土器の有台椀B-2類(24)と甕(25)が伴う。

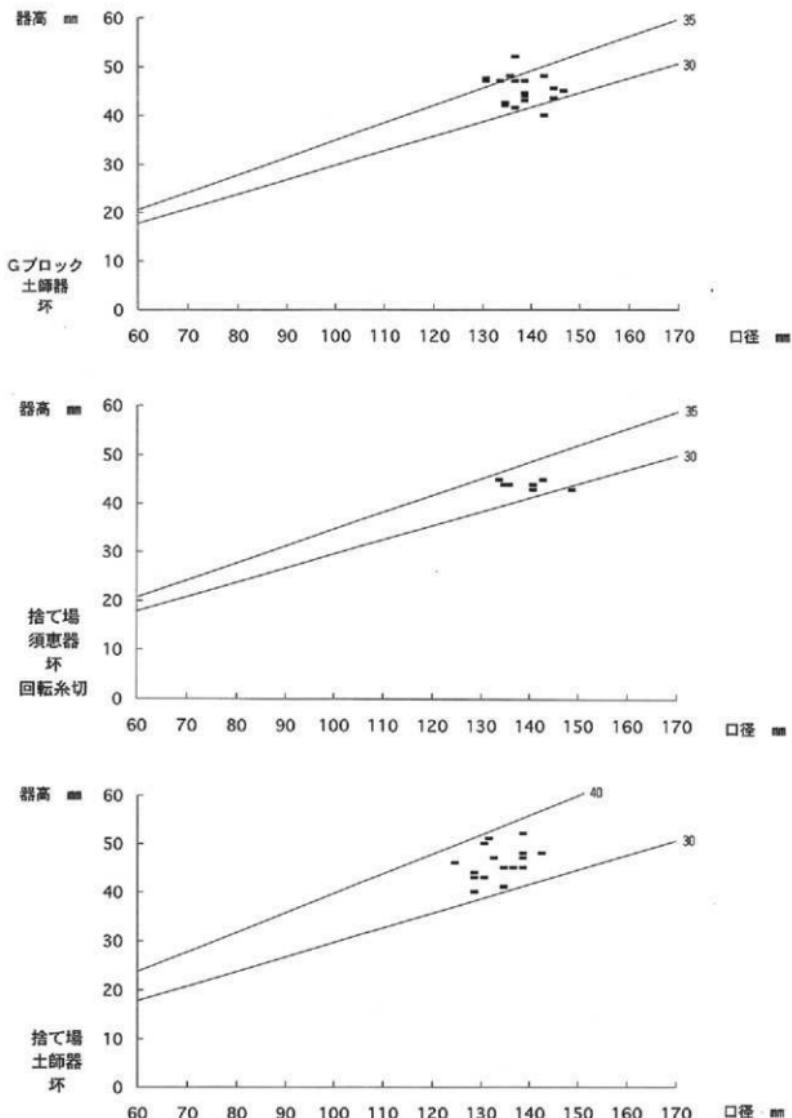
また、E U30埋設土器の4点(8・12・26・27)もD群と同じ時期と思われるもので、須恵器と土師器の共伴関係を示す好資料である。



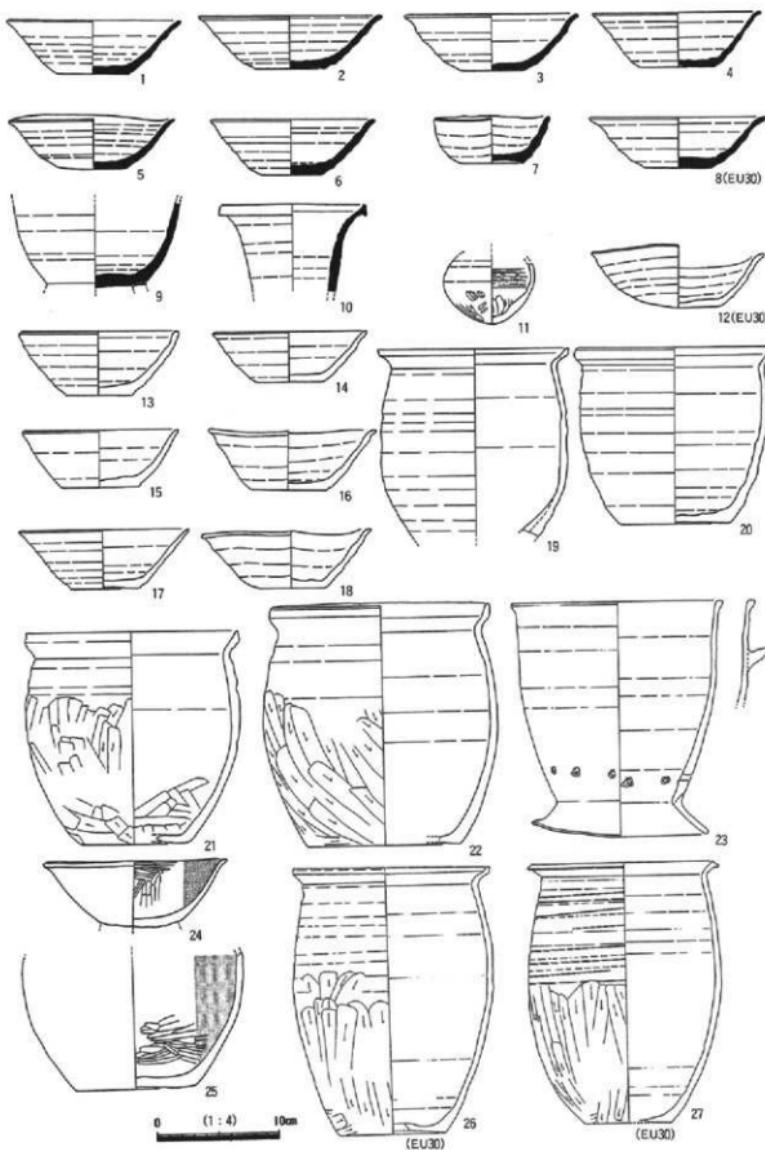
第93図 平野山古窯跡群第14地点1・2号窯・捨て場出土土器群
— 158 —



第94図 壺類土器の法量分布 (6)



第95図 壊類土器の法量分布 (7)



第96図 SG31捨て場・EU30出土土器群

9世紀末葉の資料としては、昭和40年に柏倉亮吉らが発掘調査を実施した平野山古窯跡群第1地点2号窯及び捨て場の出土土器がある。須恵器の器種には壺・有台壺・蓋・壺・甕などがある。壺は底部の切り離しがすべて回転糸切りで、形態はほとんどがA-7類である。岩見氏らによる報告では、これらの高径指数は25~35の範囲内に収まるという（文献15）。有台壺はB-8類がある。蓋はF-7・8類、壺I-4類、甕は口縁部が外半するL-2・3類がある。

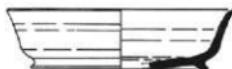
最後に各土器群の変遷とその年代について述べる。灰原土層断面の観察からは、全体として灰原Hブロック（C群土器）が最も新しく、灰原Lブロック（A群土器）はそれより古いという新旧関係が読みとれる（第13図）。各土器群の器種分類の組成表（表7）をみると、A・B群土器とC群土器の間には、須恵器壺類の底部や蓋の天井部の切り離しがヘラ切り→回転糸切りという大きな変化がある。D群土器（S G31捨て場）がC群土器に後続し、本遺跡で最も新しいものであることも妥当であろう。D群土器の器形や高径指数は、平野山古窯跡群第1地点2号窯及び捨て場の出土土器とほぼ類似している。またC群土器は平野山古窯跡群第14地点1・2号窯及び捨て場の出土土器と比較的類似するが、第14地点1・2号窯の無台壺の高径指数の分布範囲が20~30と小さい（文献15）ことなどから、D群土器がやや新しくなる可能性がある。

問題はA群土器とB群土器の新旧関係であるが、B群土器のうち色調が赤褐色を呈する有台壺と壺蓋の重ね焼き資料7点が大きな手掛かりとなる。口径が大きく体部下端に稜をもつ有台壺B-1類と、天井部に回転ヘラ削りがあり器高の低い壺蓋F-5類という組成は、秋田県竹原窯跡S J 05 a~e 窯跡に好資料があり（文献17）、A群土器に特徴的な天井部が丸みをもつ壺蓋F-3・4類よりは後続するものと考えられる。また、米沢市教育委員会が平成5年に発掘調査を実施した大神窯跡2号窯からも、体部下端に稜をもつ有台壺と、器高の低い壺蓋という組成が確認されている。第12地点の高径指数は、A群土器の壺が20~30・有台壺が25~35、B群土器の壺が25~35・有台壺が30~40となっており、B群土器の値が大きくなっている。

各土器群の年代については、A群土器（灰原Lブロック）を不動木遺跡SD 1溝跡出土の土器群との比較などから8世紀第3四半期、B群土器（灰原Pブロック）を8世紀第4四半期、C群土器（灰原Hブロック）を山形市今塚遺跡で仁寿三年（853）年の木簡を出土した付近のSD 377・967溝跡出土の土器群（文献22）の比較などから9世紀第2四半期、D群土器（SG 31捨て場）を9世紀第4四半期頃と把握しておく。なお今回の考古地磁気測定による焼成年代の推定では、SQ 33窯体内的須恵器についてA. D. 890±90年という年代が出ている。

また、寒河江市長岡山洲崎窯跡から、底部の切り離しが回転ヘラ切りで底径の大きい須恵器有台壺（第97図）が出土しているが、これは時期が8世紀第1四半期まで遡り得るものである。

B群土器とC群土器の間には9世紀前葉段階の空白があり、ここに壺類について言えば、底部の切り離しが回転ヘラ切りを主とし、一部回転糸切りも混じえながら、8世紀後葉のものに比して小ぶりな一群が入ると思われる。山形盆地における9世紀前半の資料は少ないが、上山市久保手2号窯や同市三千刈窯（文献15）が本時期に相当すると思われる。



第97図 長岡山洲崎窯跡出土須恵器

表7 各遺構・灰原土器組成表

遺構・灰原 土器分類	A群土器				B群土器				C群土器				D群土器			
	SQ1	灰原L	SQ48	灰原M	SQ9	灰原S	SQ5	灰原P	灰原J	SQ33	灰原H	灰原G	SQ31	SQ31 焼成品	計	
遺構	A 無台环	1	3	1		2	4	1	3			1	1	1	4	
	2	10	2	4			1	2	1		1	1	1	15		
	3			1					1					21		
	4								1					2		
	5	5	35	1	9	2			7	6		3		65		
	6		5						1	28	27	19	7	161		
	7										7	2	7	9		
	8											1	1	1		
遺構	B 有台环	1	2			2	6	16					1	13		
	2					1		6						12		
	3								1					4		
	4								2					26		
	5	1	22		1				1					2		
	6								1		1	4	1	11		
	7								2		2	1	5	12		
	8	1							1		1	1	5	12		
遺構	C 灰耳环	1				2		1			9	2	1	14		
	2										1			1		
	D 指轮	1												2		
	E 高环	1								1				1		
	2		1							1				1		
	3									2				1		
	4										1	1		2		
	5	1	6	1	1		30	3	2		1	1	1	15		
遺構	F 瓢	1								5	12	1		18		
	2								6	24	1			36		
	3								5	12	1			14		
	4								6	12	1			1		
	5								5	12	1			1		
	6								5	12	1			18		
	7								5	12	1			18		
	8								5	12	1			14		
遺構	9								5	12	1			1		
	10								5	12	1			1		
	11		1						5	12	1			1		
	H 鍤	1							1				1	1		
	2								2					5		
	3													1		
	I 烟嘴座	1	2			1			1	1	1		1	5		
	2								1	1	3		1	5		
遺構	J 長柄匙	1				1		2	1		1	1		2		
	2								1		1			2		
	3								1		1			2		
	4		2						1		1			2		
	5								1		1			2		
	6								1		1			2		
	7								1		1			2		
	K 鍤	1	2			1			1		1			2		
遺構	L 大匙	1	1	1					1	1	1			1		
	2								1	1	1			9		
	3								1	1	1			4		
	M 横瓶	1	3		1					1		2		5		
	N 瓶	1							1		1			2		
	G 瓶	1			1						1			1		
	2										1			1		
	H 瓶	1										2		3		
遺構	I 空瓶座	1										1		1		
	A K 鍤	1							3	5		1	4	10		
	2								1	1		2	3	7		
	3								1			1		1		
	4								1			1		1		
	5								1			1		1		
	N 瓶	1									1		1	1		
	2										1		1	1		
遺構	O 瓶	1								2			1	1		
	2								1			1		2		
	3													1		
	A 棺	1									1	1		2		
	2										1			1		
	3													1		
	B 有台碗	1	1		1				1	5	2	3	3	16		
	2				3				1		3			1		
B	F 瓢	1												1		
	I 瓶	1												1		
	K 瓶	1												1		
計		10	105	6	26	4	22	4	49	120	48	167	61	20	33	727

〈参考文献〉

- (1)田辺昭三：『陶邑古窯址群I』 平安学園考古クラブ 1966年
- (2)柏倉亮吉・伊藤 忍：『平野山古窯跡群－山形県における古代窯業遺跡の研究』 寒河江市教育委員会 1970年
- (3)岡田茂弘・桑原滋郎：『多賀城周辺における古代形土器の変遷』 宮城県多賀城跡調査研究所 研究紀要 I 1974年
- (4)中村 浩：『考古学ライブラリー 5 須恵器』 ニューサイエンス社 1980年
- (5)手塚 孝 他：『道伝遺跡発掘調査報告書』 川西町埋蔵文化財報告書第2集 1981年
- (6)小井川和夫 他：『長者原貝塚 上新田遺跡』 宮城県文化財報告書第78集 1981年
- (7)佐藤庄一 他：『新青渡遺跡第1次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第67集 1983年
- (8)宇野修平 他：『平野山窯跡群第14地点遺跡発掘調査報告書』 寒河江市埋蔵文化財報告書第3集 1984年
- (9)大江町教育委員会：『大江町史』 1984年
- (10)中村 浩：『考古学ライブラリー 13 窯業遺跡入門』 ニューサイエンス社 1984年
- (11)小井川和夫：『いわゆる赤焼土器について』 東北歴史資料館研究紀要第10号 1984年
- (12)岩見誠夫・船木義勝：『秋田県の須恵器及び須恵器窯の編年』 秋大史学第322号 1985年
- (13)山形県：『土地分類基本調査 左沢』 五万分の1 土国調査 1986年
- (14)長橋 至：『不動木遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第100集 1986年
- (15)岩見誠夫 他：『山形県の須恵器および須恵器窯の編年』 山形考古第4巻第2号 1988年
- (16)利部 修：『東北横断自動車道発掘調査報告書 XI -竹原窯跡-』 秋田県文化財報告書第209集 1991年
- (17)利部 修：『竹原遺跡の須恵器編年』 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第7集 1992年
- (18)大戸古窯跡群検討会：『東日本における古代・中世の窯業の諸問題』
大戸窯検討会のための「会津シンポジウム」資料集所収 1992年
- (19)須賀井新人 他：『平野山古窯跡群第12地点遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書 第178集 1992年
- (20)桜田 隆 他：『富ヶ沢A・B・C窯跡』 秋田県文化財報告書第220集 1993年
- (21)手塚 孝 他：『大浦 大浦B遺跡発掘調査報告書』 米沢市埋蔵文化財報告書第36集 1993年
- (22)須賀井新人 他：『今塙遺跡発掘調査報告書』 (財)山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集 1994年
- (23)寒河江市史編纂委員会：『寒河江市史 上巻 原始・古代・中世編』 1994年
- (24)山形県教育委員会：『分布調査報告書(22) 平野山古窯跡群第12地点遺跡』 山形県埋蔵文化財調査報告書第195集 1995年
- (25)(財)山形県埋蔵文化財センター：『平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次調査説明資料』 1995年
- (26)鈴木良仁 他：『富山2遺跡発掘調査報告書』 (財)山形県埋蔵文化財センター調査報告書第41集 1996年
- (27)大宮富善 他：『高瀬山遺跡(市道山西線)発掘調査報告書』 寒河江市埋蔵文化財報告書第14集 1997年
- (28)利部 修：『出羽地方の丸底長胴甕をめぐって』 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第12集 1997年
- (29)利部 修：『辺境における出羽北半の窯跡出土須恵器』 日本考古学協会1997年度秋田大会シンポジウム II 資料集所収 1997年
- (30)佐藤庄一：『考古学からみた古代最上郡の成立と展開』 西村山地域史の研究第15号 1997年

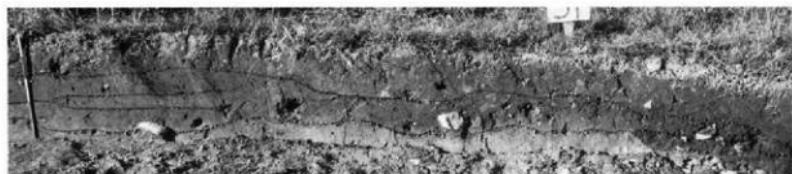
報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 卷次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日	ひらのやまこうしきんだいじゅうにちていいせきだいにじはくつちょうきほうこくしょ 平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書						
シリーズ名 佐藤庄一・須賀井明子 財団法人 山形県埋蔵文化財センター	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号 第52集							
編著者名 西暦 1998年2月25日	佐藤庄一・須賀井明子						
編集機関 所在地 西暦 1998年2月25日	財団法人 山形県埋蔵文化財センター 〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
ふりがな 所収遺跡名 平野山古窯跡群 第12地点	ふりがな 所在地 山形県寒河江市 大字柴橋字高松 ほか	コード 市町村 06206	北緯 440	東經 38度 22分 26秒	調査期間 140度 14分 38秒	調査面積 (m ²) 19950821～ 19951208 4,700	調査原因 東北横断自動車道酒田線(寒河江～西川間)建設工事
所収遺跡名 平野山古窯跡群 第12地点	種別 包蔵地 繩文時代 前期～晚期	主な時代 河川跡 石組遺構 土坑	主な遺構 河川跡 石組遺構 土坑	主な遺物 繩文土器 石器	特記事項 調査区南側の河川跡下層および台地の下から繩文時代の遺物を検出。		
	生産遺跡 奈良～平安時代	窯跡 土坑 溝跡 埋設土器 河川跡		須恵器 土師器 石製品 木製品	調査区東側の台地斜面から、須恵器窯跡列と多量の遺物を検出。村山地区の須恵器編年を考える上で好資料を得た。		
					750箱		

図 版



遺跡近景（南から）



西区土層断面（南西から）



南区土層断面（北東から）



東区土層断面（南西から）



調査風景（南から）



遺跡全景（南東から）



作業風景（北西から）



調査説明会風景（南から）



窯跡列全景（南上空から）



窯跡列全景（南西から）



SQ1検出状況（南東から）



SQ1焼成部横断面（南東から）



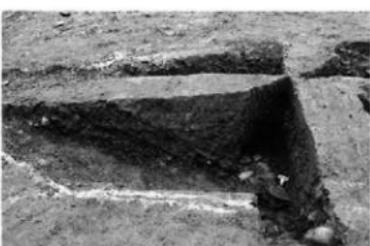
SQ1遺物出土状況（南東から）



SQ1燃焼部横断面（南東から）



SQ1発掘状況（南東から）



SQ1焚口付近縦断面（北東から）

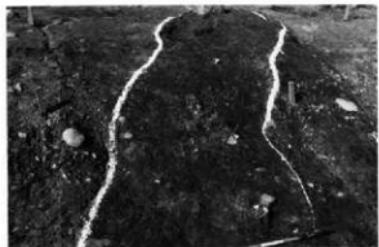


SQ1空中写真（手前が南西）



SQ1窯壁断面（北西から）

SQ1窯跡



SQ33検出状況（南から）



SQ33焼成部横断面（南から）



SQ33遺物出土状況（北から）



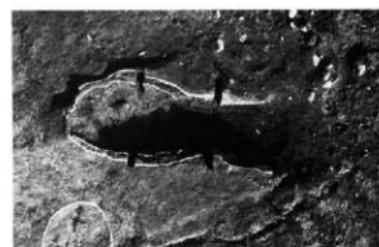
SQ33燃焼部横断面（南から）



SQ33焼成状況（北から）



SQ33焚口横断面（南から）

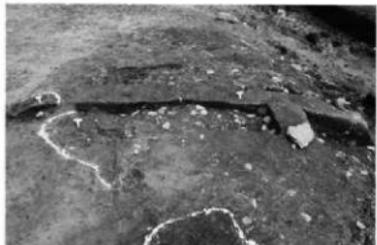


SQ33空中写真（手前が西）



SQ33縦断面（西から）

SQ33窯跡



SQ4縦断面 (南西から)



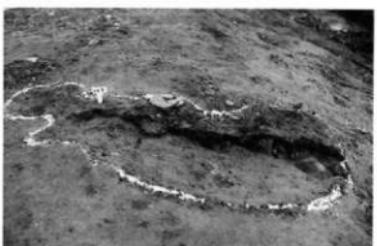
SQ46遺物出土状況 (北から)



SQ5縦断面 (南から)



SQ46縦断面 (南西から)



SQ8縦断面 (南から)



SQ46発掘状況 (南東から)



SQ40横断面 (南東から)



SQ40発掘状況 (南東から)



SQ41検出状況（南東から）



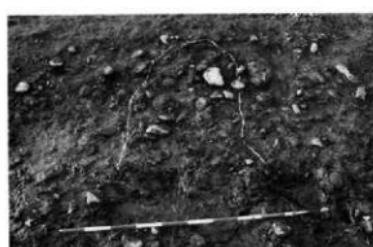
SQ41完掘状況（南東から）



SQ42検出状況（南東から）



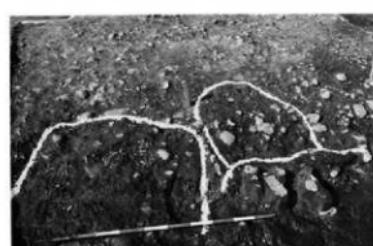
SQ42完掘状況（南東から）



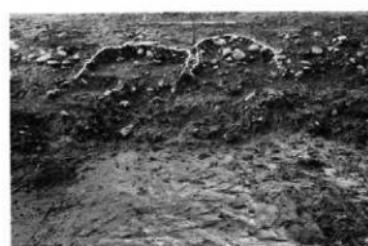
SQ43検出状況（南東から）



SQ43完掘状況（南東から）



SQ44・45検出状況（南東から）



SQ44・45完掘状況（南東から）

SQ41～45窓跡



SQ1灰原検出状況（南から）



SQ1灰原遺物出土状況（南から）



SQ1灰原遺物出土状況（北西から）



SQ1灰原東西ベルト土層断面（南から）



ヘラ掘き土器62-5出土状況（南から）

SQ1灰原（Lブロック）



SQ33灰原検出状況（南東から）



グリッドライン東西ベルト土層断面（南から）



SQ33灰原発掘状況（南から）



SQ33灰原土層断面（南から）

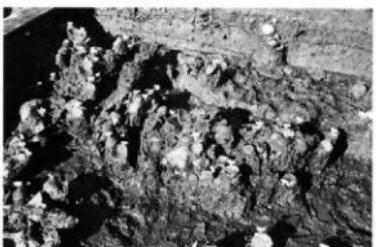


Hブロック 土器出土状況（南東から）

SQ33灰原（Hブロック）



Gブロック SQ40灰原土層断面（南から）



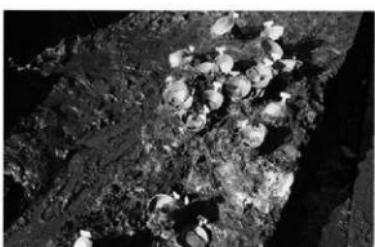
Gブロック 遺物出土状況（東から）



Jブロック SQ43灰原土層断面（南から）



Jブロック 須恵器出土状況（南東から）



Jブロック 土師器出土状況（東から）



Jブロック 黒色土器58-14出土状況（南東から）



Mブロック SQ46灰原土層断面（南から）



Mブロック 86-8出土状況（北西から）



Pブロック SQ5灰原土層断面（南から）



Pブロック 土器出土状況（南から）



Sブロック R-30土層断面（北西から）



Sブロック 土器出土状況（東から）



東区 完掘全景（南から）



東区 L-29土層断面



東区 田下駄83-2出土状況（北から）



東区 石器出土状況（南東から）



西区北側 完掘全景（手前が南東）



EU30合口廻出土状況（北から）



EU30土層断面（南東から）



SX6完掘状況（東から）

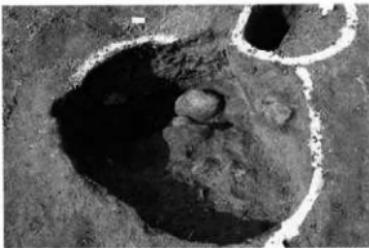


SX6石組断面（南西から）

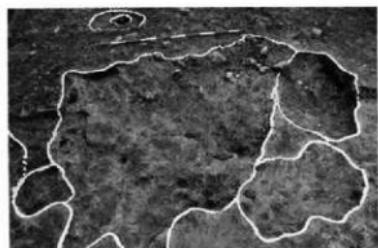
西区北側



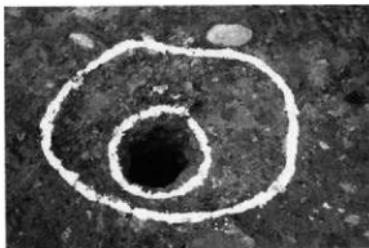
西区中央 完掘状況（北東から）



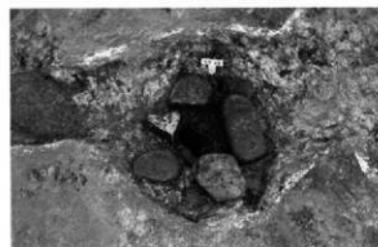
SK50粘土塊出土状況（東から）



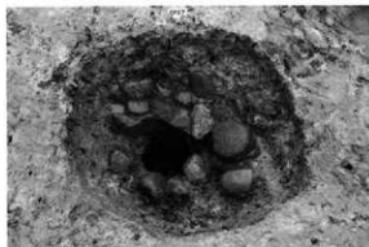
SX70・71完掘状況（北東から）



SP84完掘状況（南西から）



SP85完掘状況（南から）



SP57完掘状況（北から）



SK67完掘状況（南から）



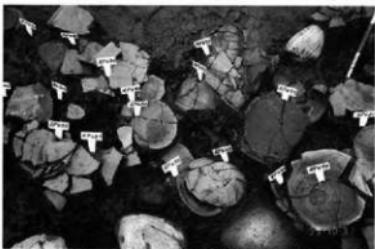
SK68完掘状況（西から）

西区 中央／南側

図版14



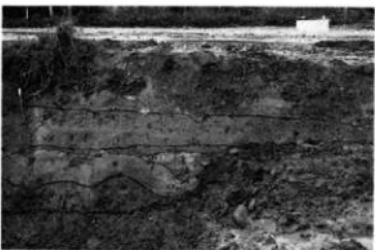
SG31土器捨て場 遺物出土状況（東から）



SG31土器捨て場(E-35内) 遺物出土状況(西から)



SG31土器捨て場(E-34内) 遺物出土状況(西から)



SG31河跡土層断面（南東から）

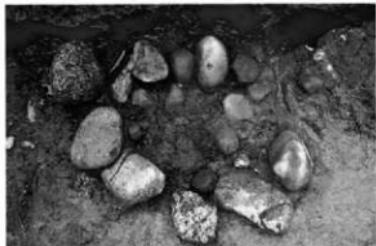


SG31土器捨て場 81-8出土状況（南西から）

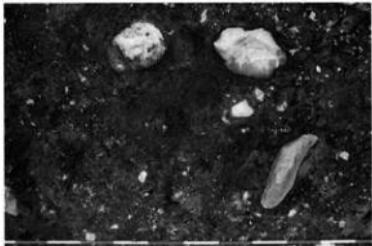
SG31土器捨て場



南区 EL2・3検出状況（北西から）



EL2完掘状況（南西から）



EL3完掘状況（北から）



南区 石器出土地点（南から）



南区 23-1出土状況（北から）

南区（縄文時代）



南区 SG31発掘全景（北西から）



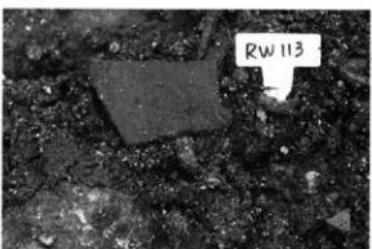
SG31土器出土状況（西から）



SG31土器出土状況（南から）

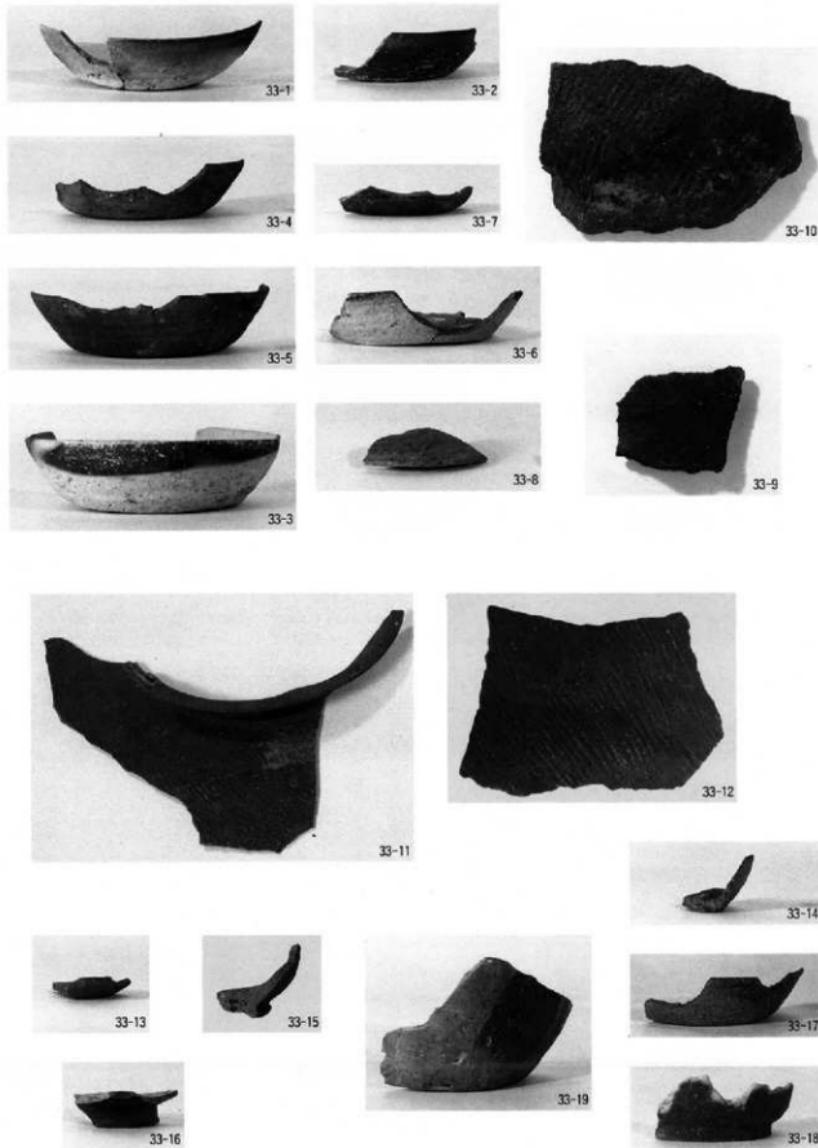


SG31木製品83-3出土状況（西から）

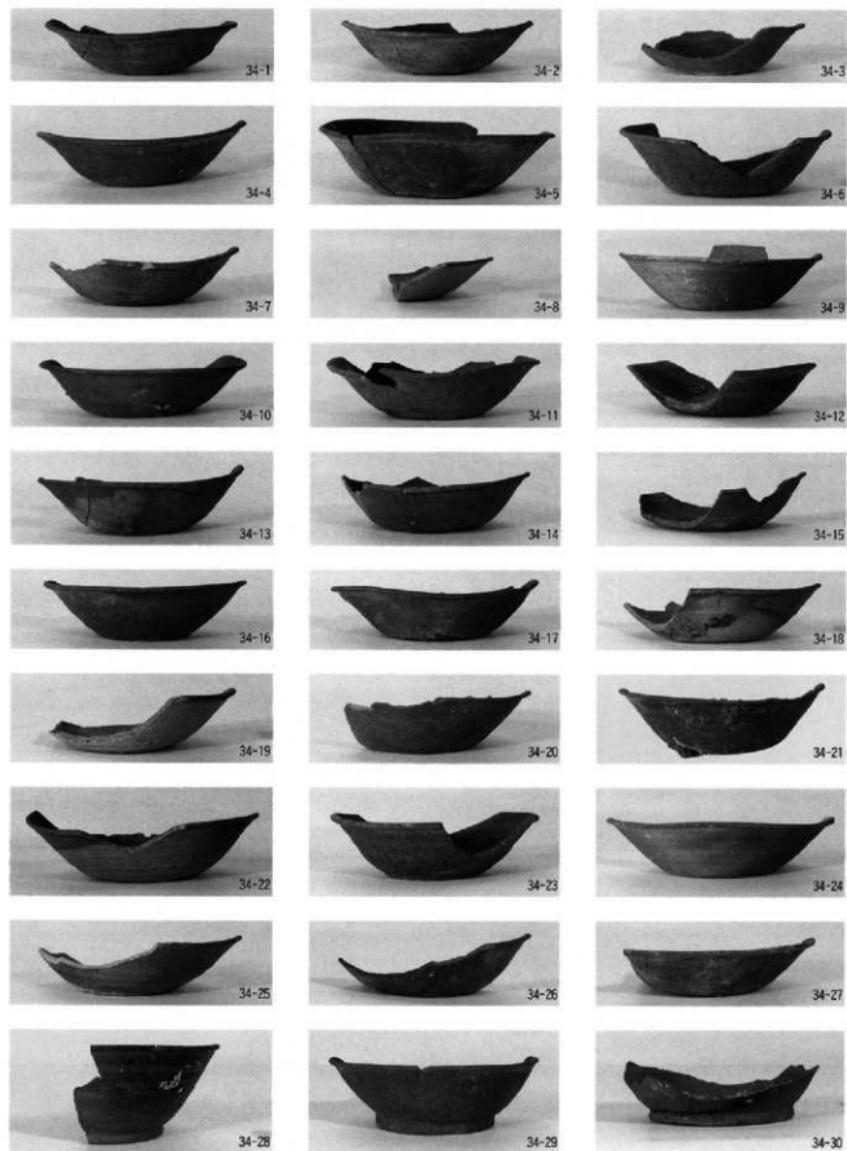


SG31木製品83-8出土状況（西から）

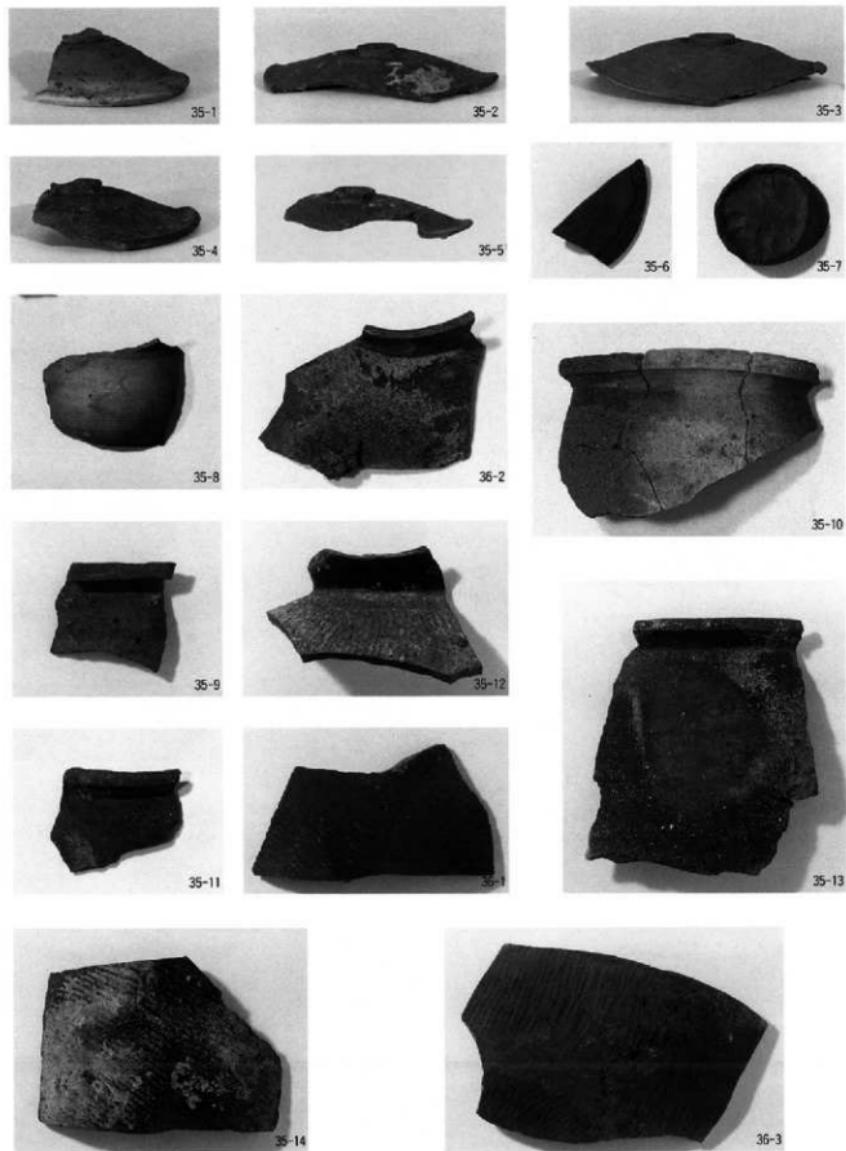
南区（平安時代）



图版18

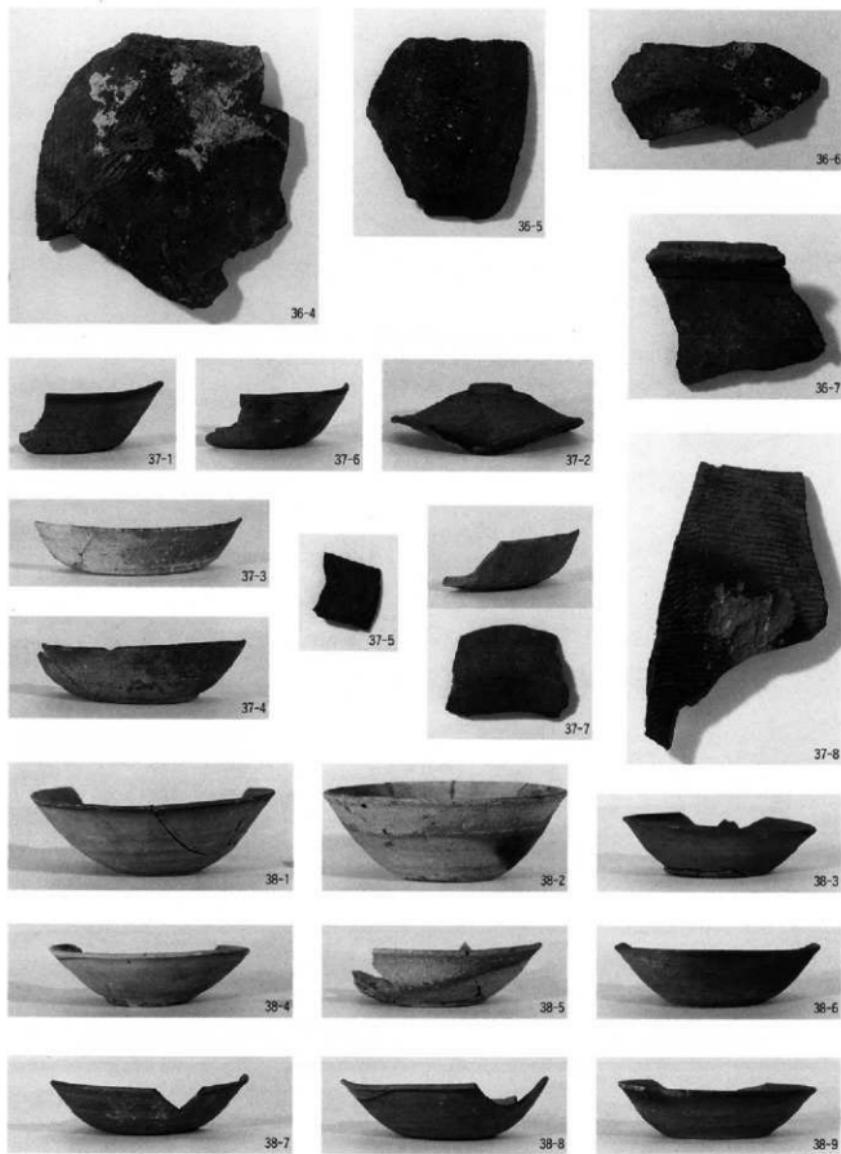


SQ33出土須恵器(1)

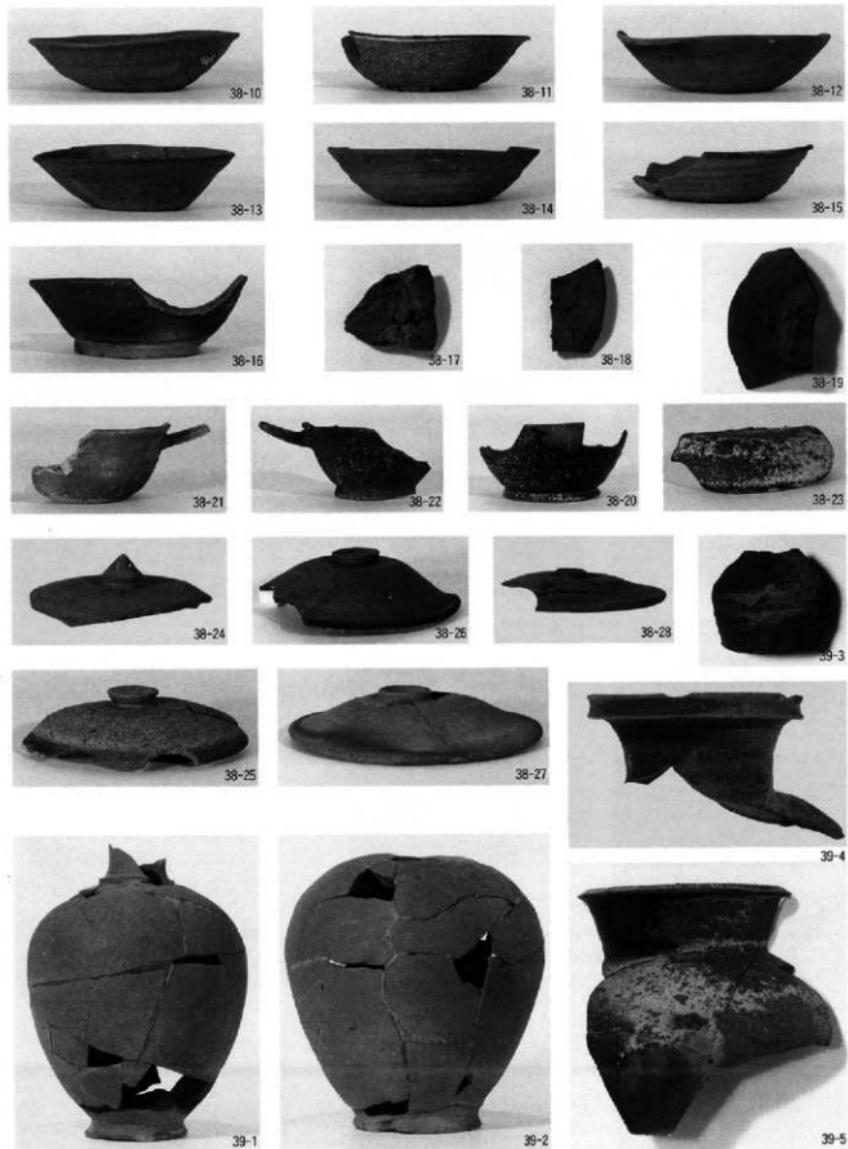


SQ33出土須恵器(2)

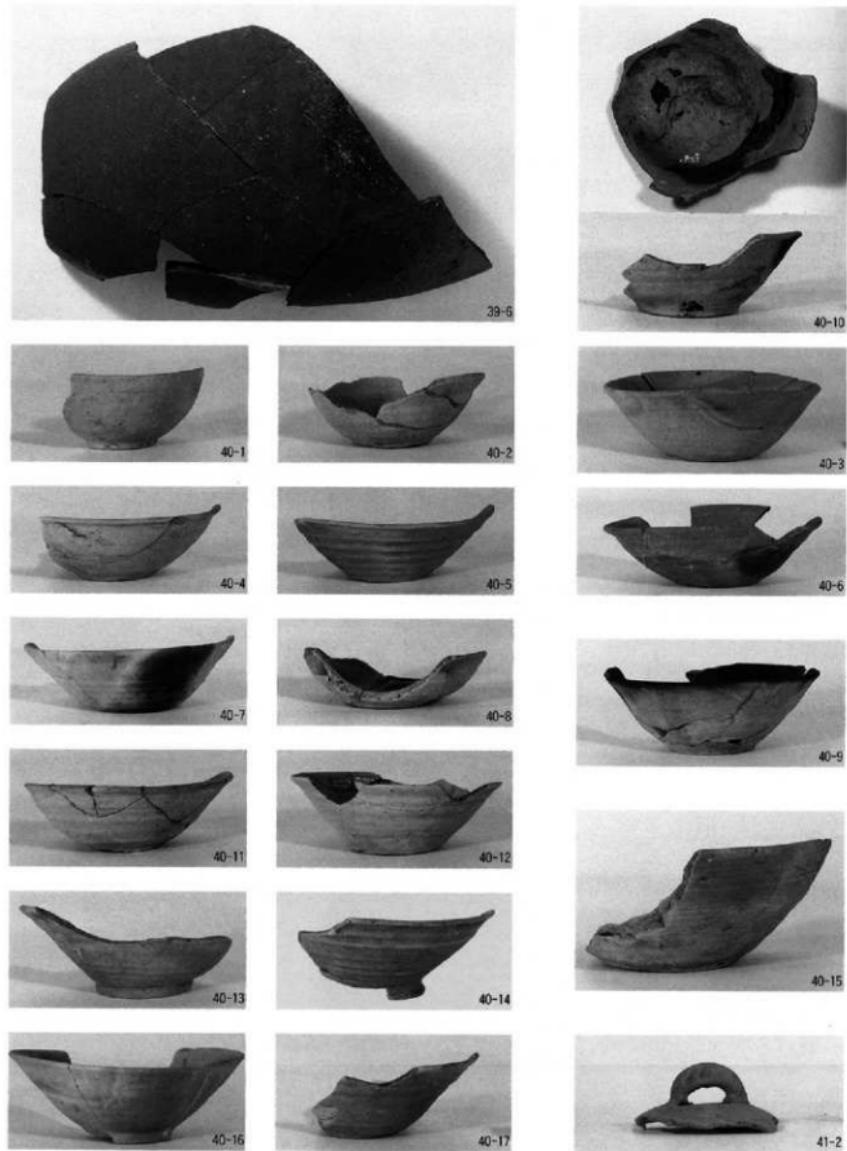
図版20



SQ33出土須恵器(3)・Gブロック出土須恵器(1)



Gブロック出土須恵器(2)・土師器(1)



Gブロック出土須恵器(3)・土師器(2)



40-18



41-4



41-7



41-8



41-6



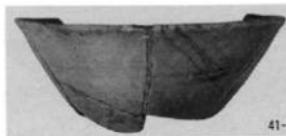
40-19



41-11



41-9



41-5



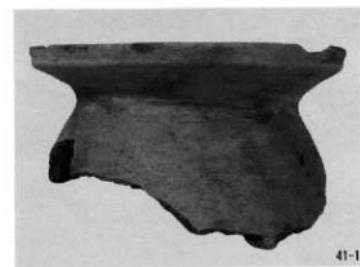
41-10



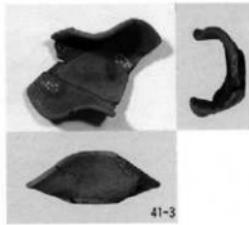
41-13



41-12



41-1



41-3



41-14



42-1



42-2

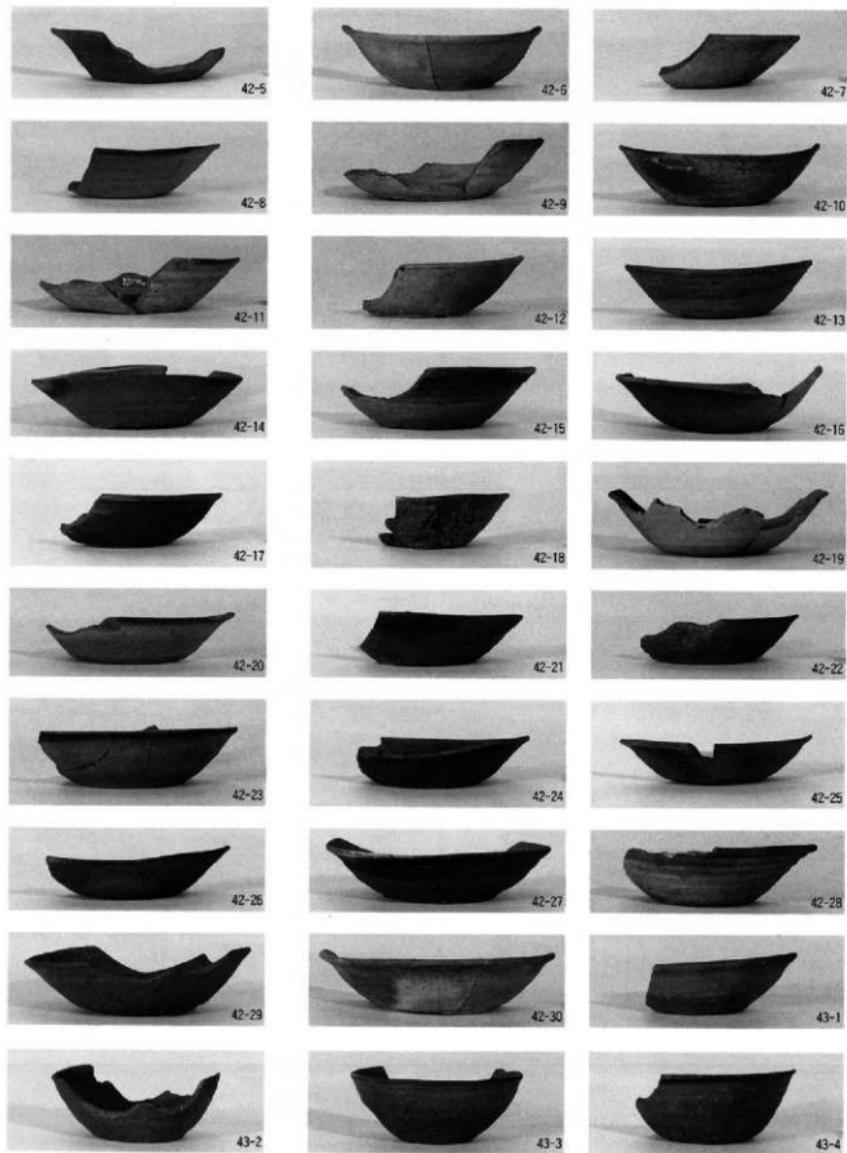


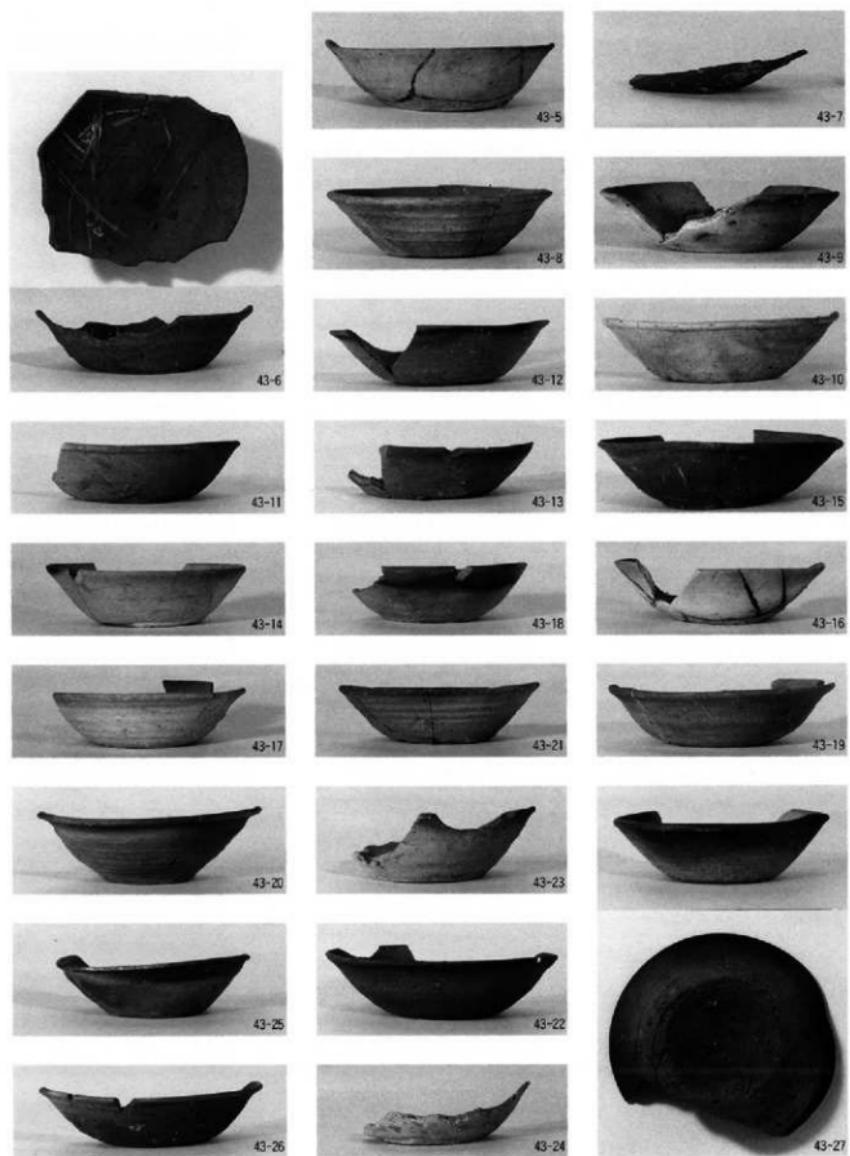
42-3



42-4

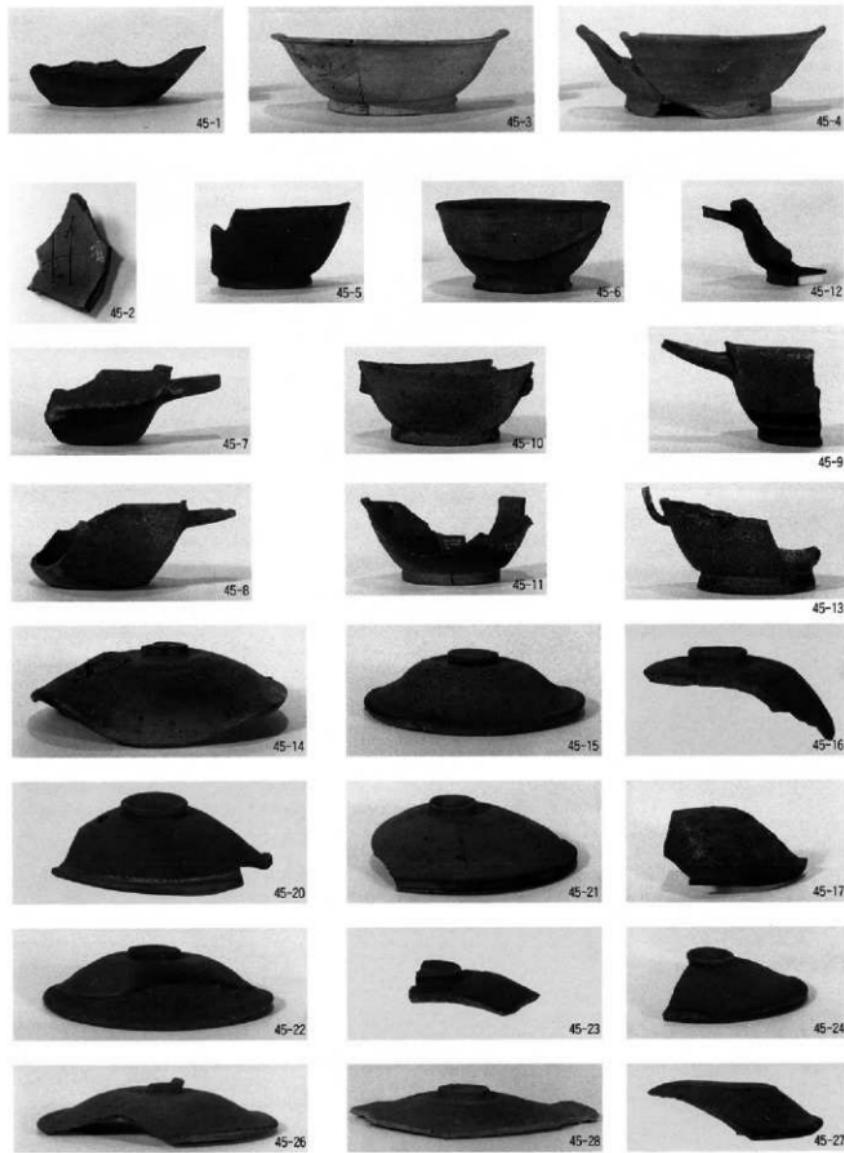
図版24



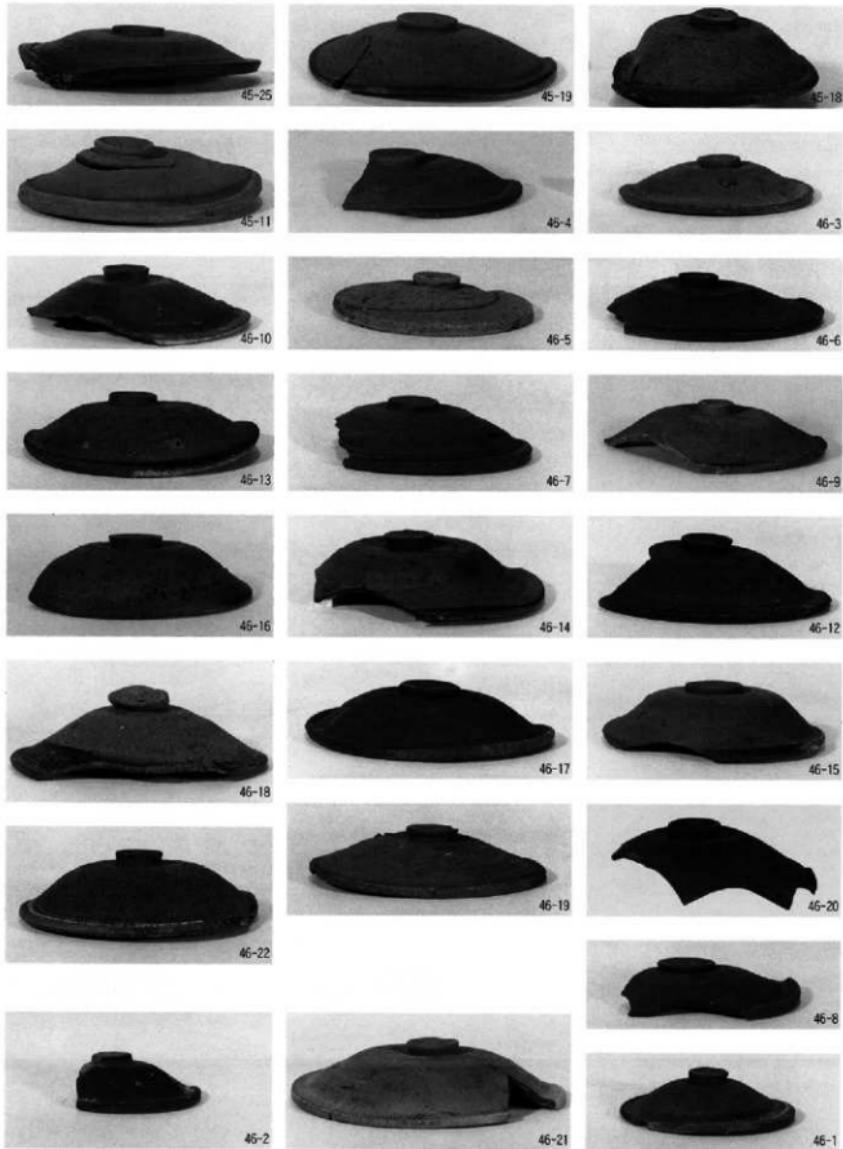


図版26

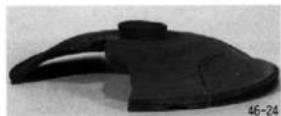




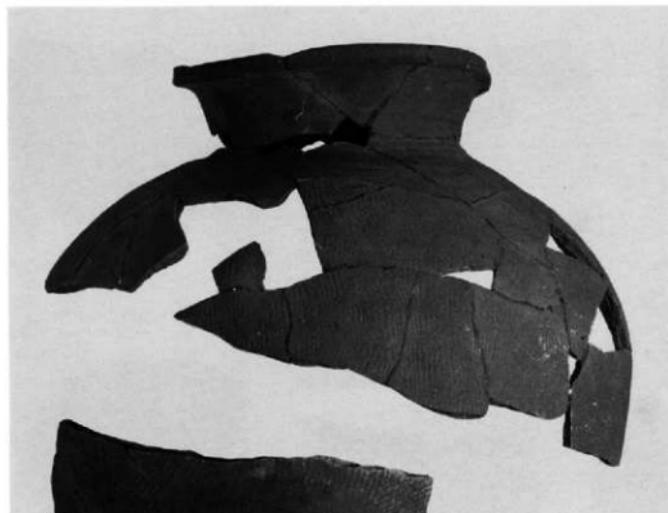
図版28



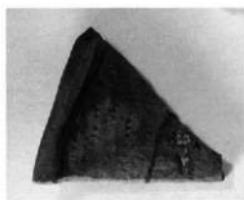
Hブロック出土須恵器(6)







48-8



49-1



49-2



49-3



49-5



49-4

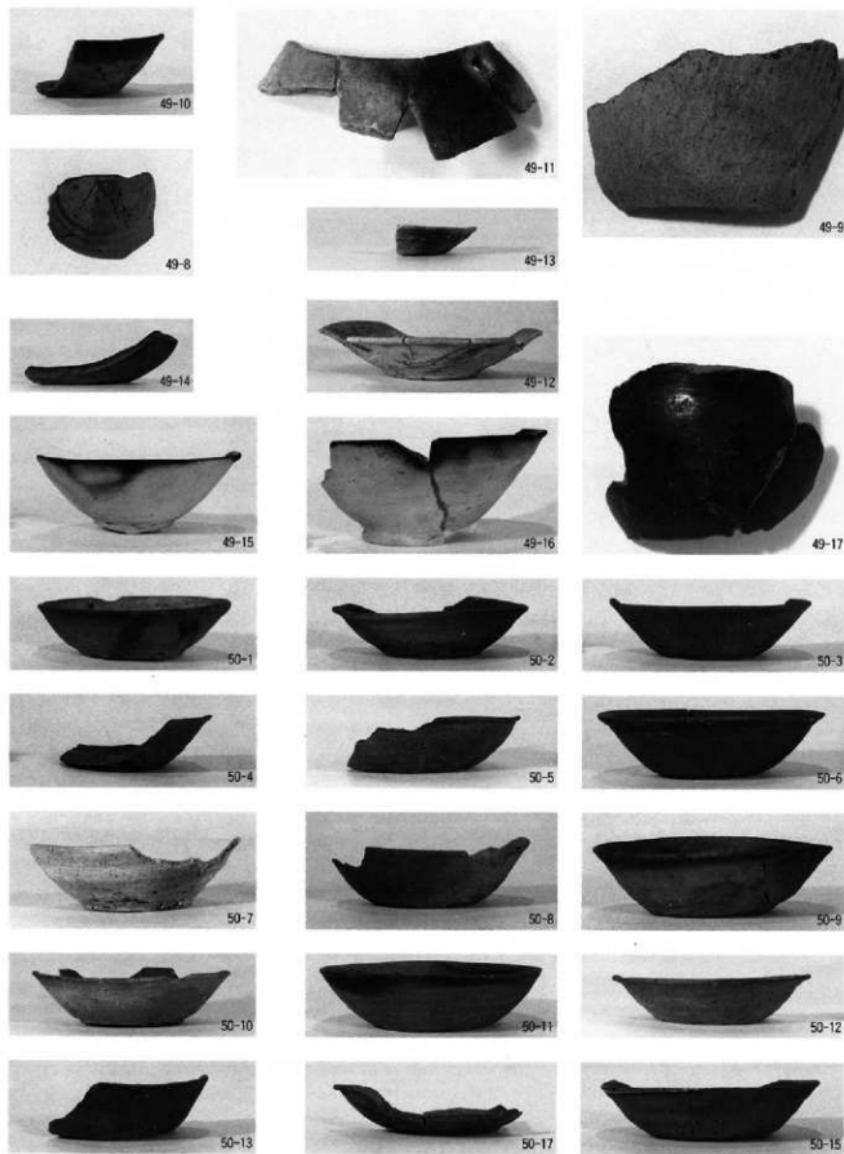


49-7

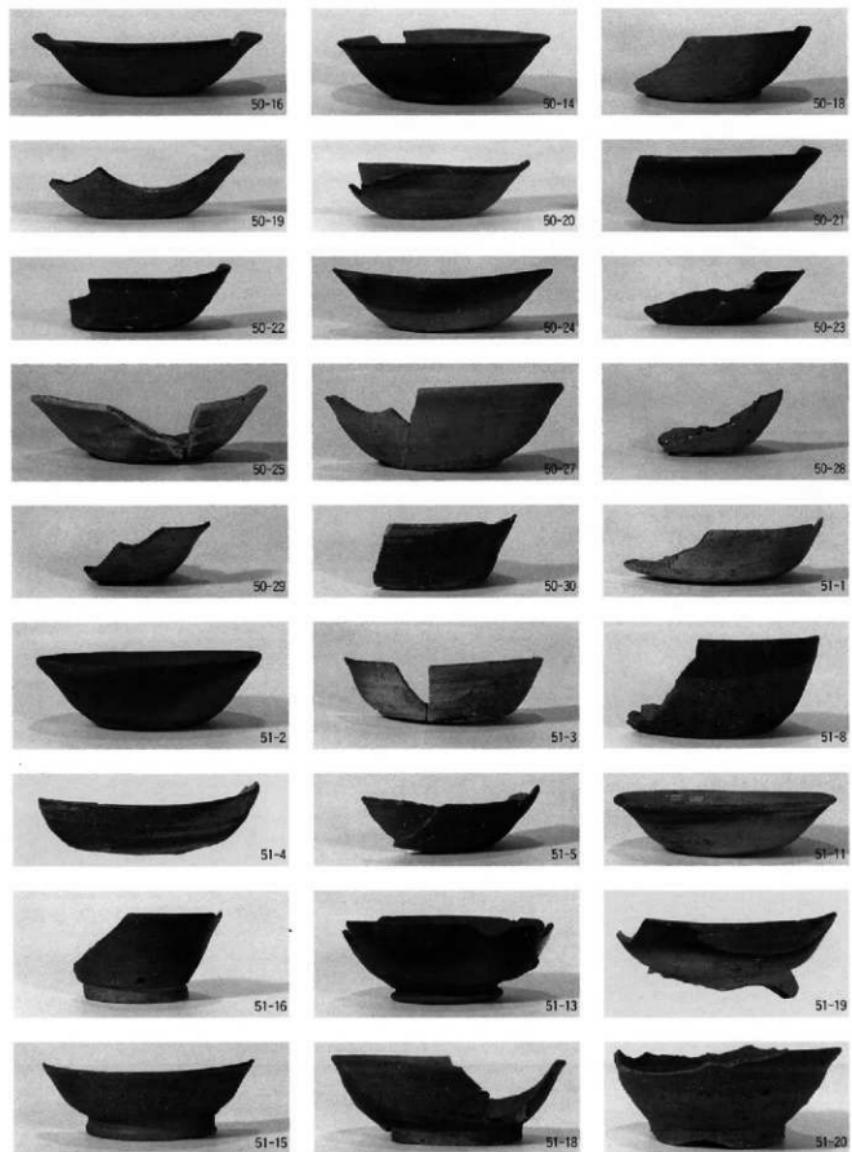


49-6

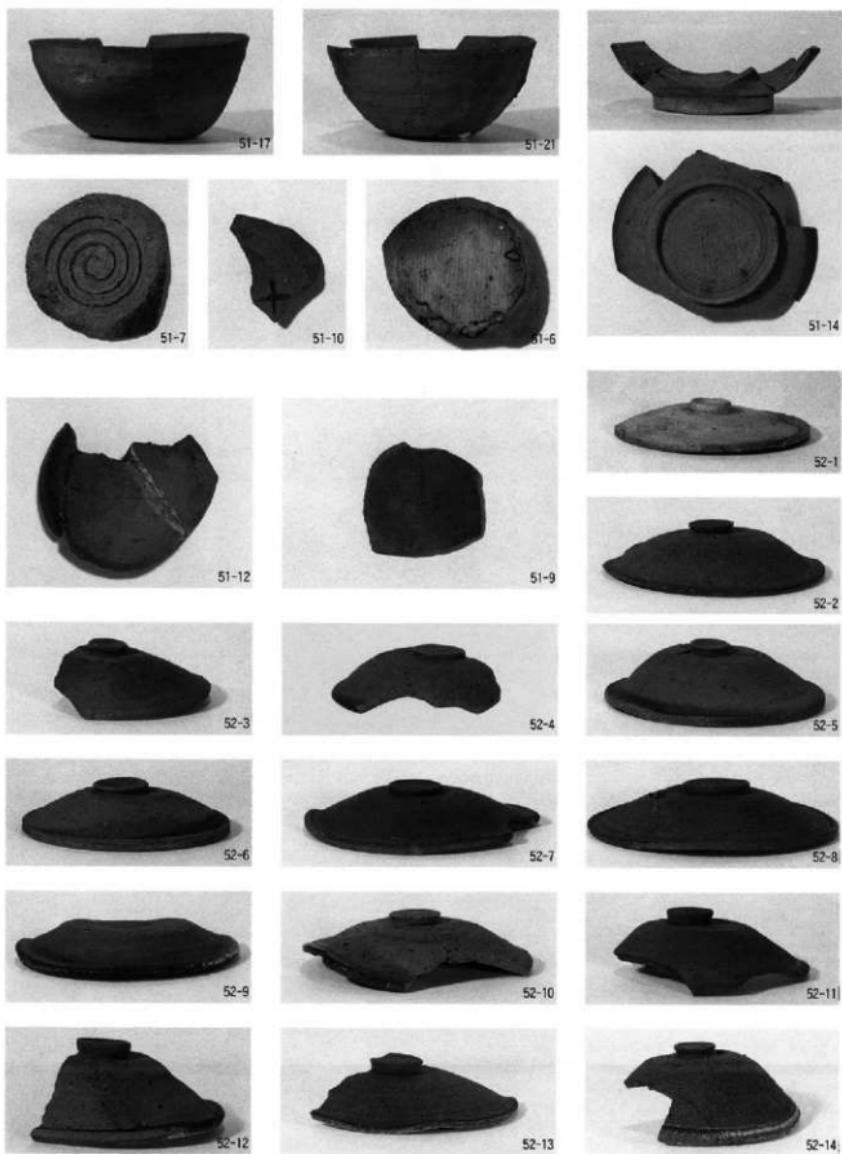
図版32



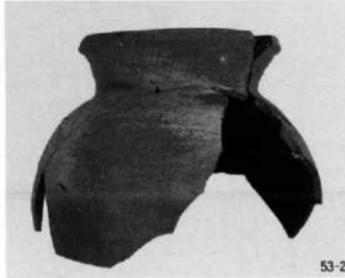
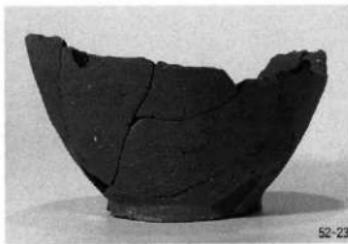
Hブロック出土須恵器(2)・Jブロック出土須恵器(1)



図版34

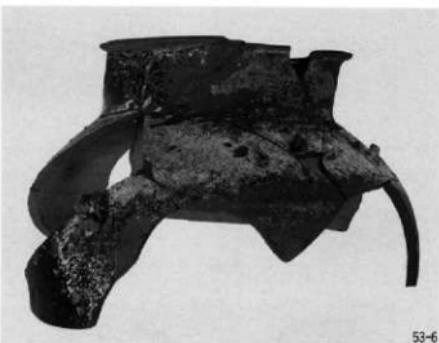


Jブロック出土須恵器(3)





53-5



53-6



55-1



55-2



56-1



56-2



54-2



56-3



56-4



56-5



56-6



54-1

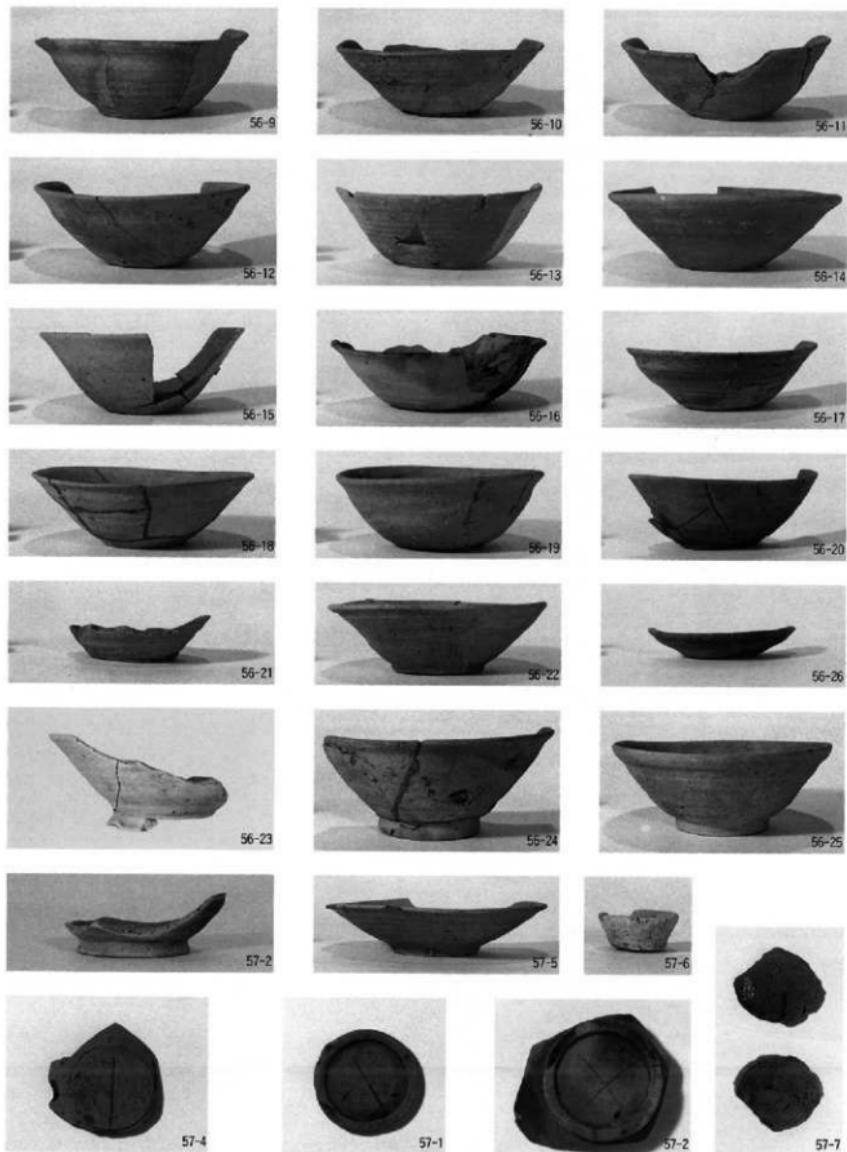


56-7



56-8

図版38



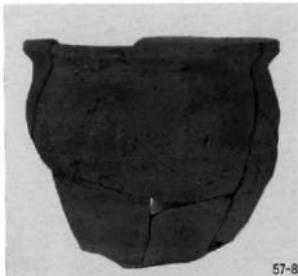
Jプロック出土土師器(2)



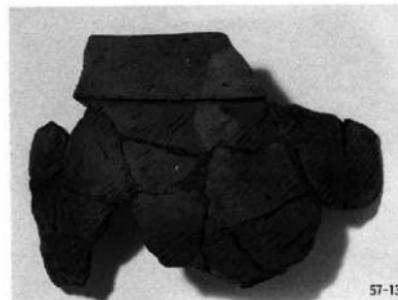
57-3



57-10



57-8



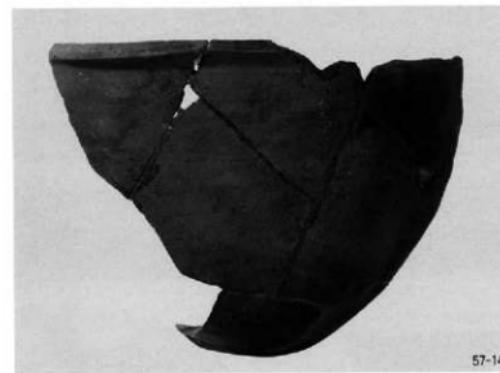
57-13



58-3



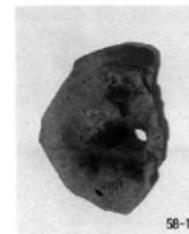
57-9



57-14



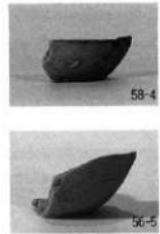
57-11



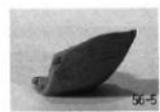
58-1



58-2



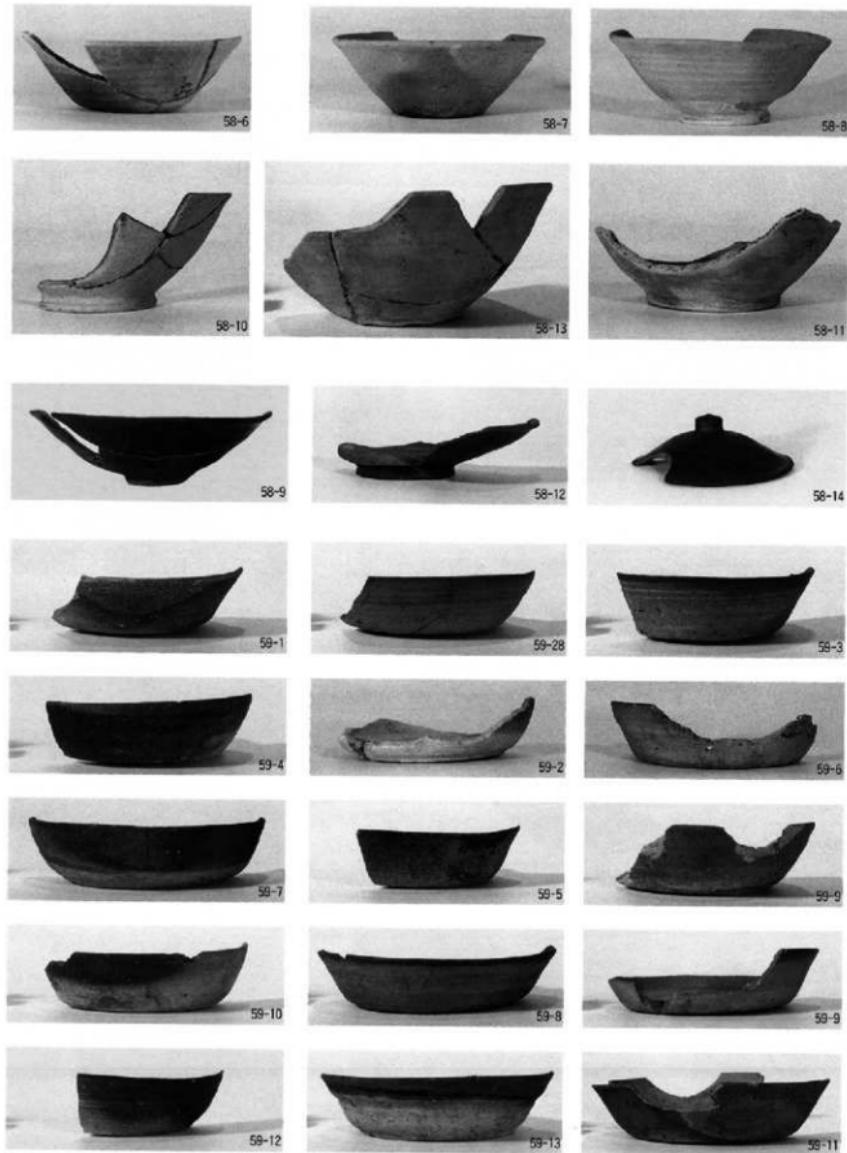
58-4



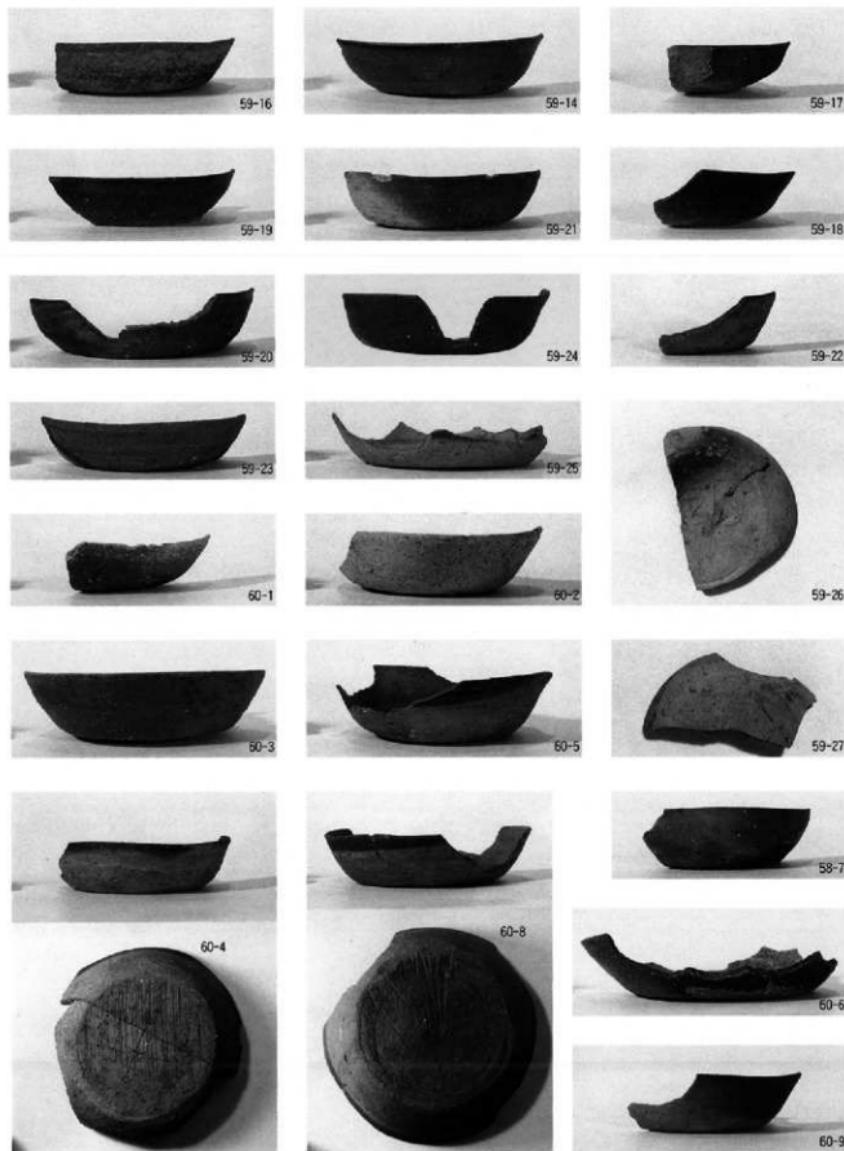
58-5



57-12

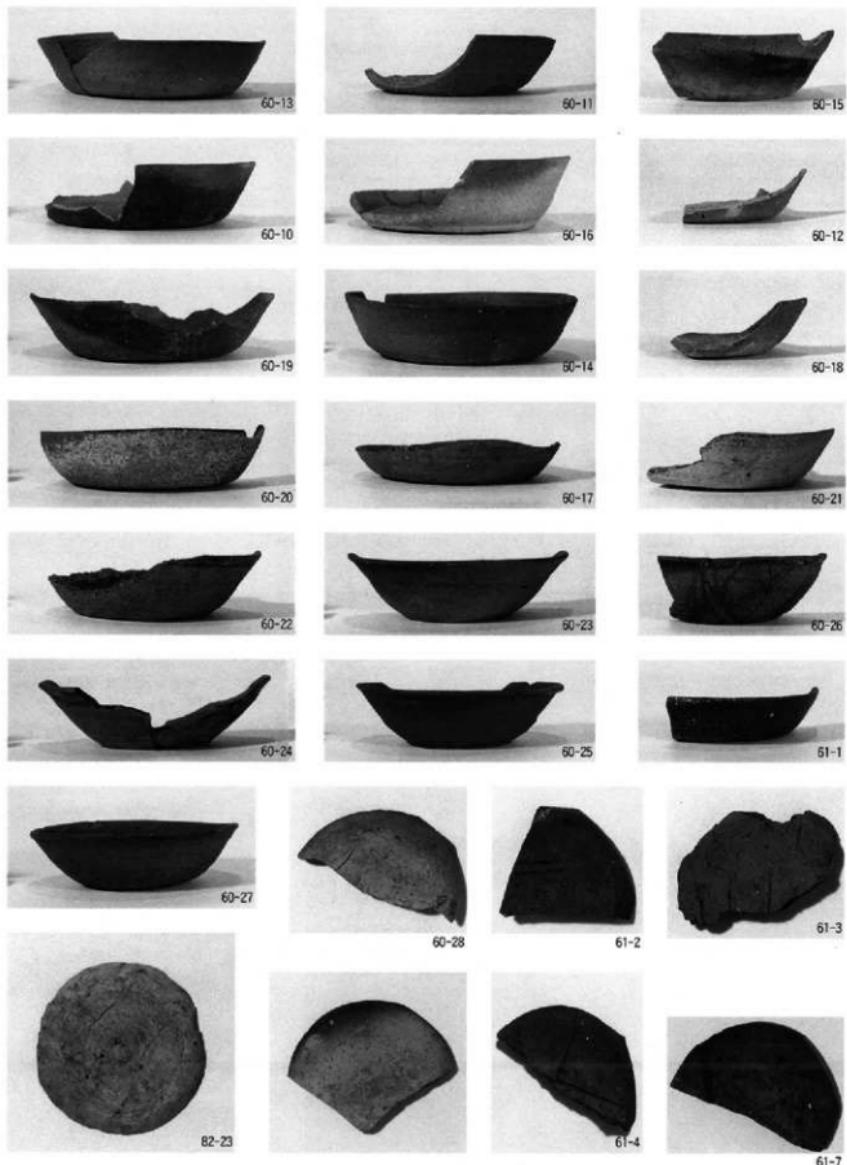


Jブロック出土土師器(4)・Lブロック出土須恵器(1)

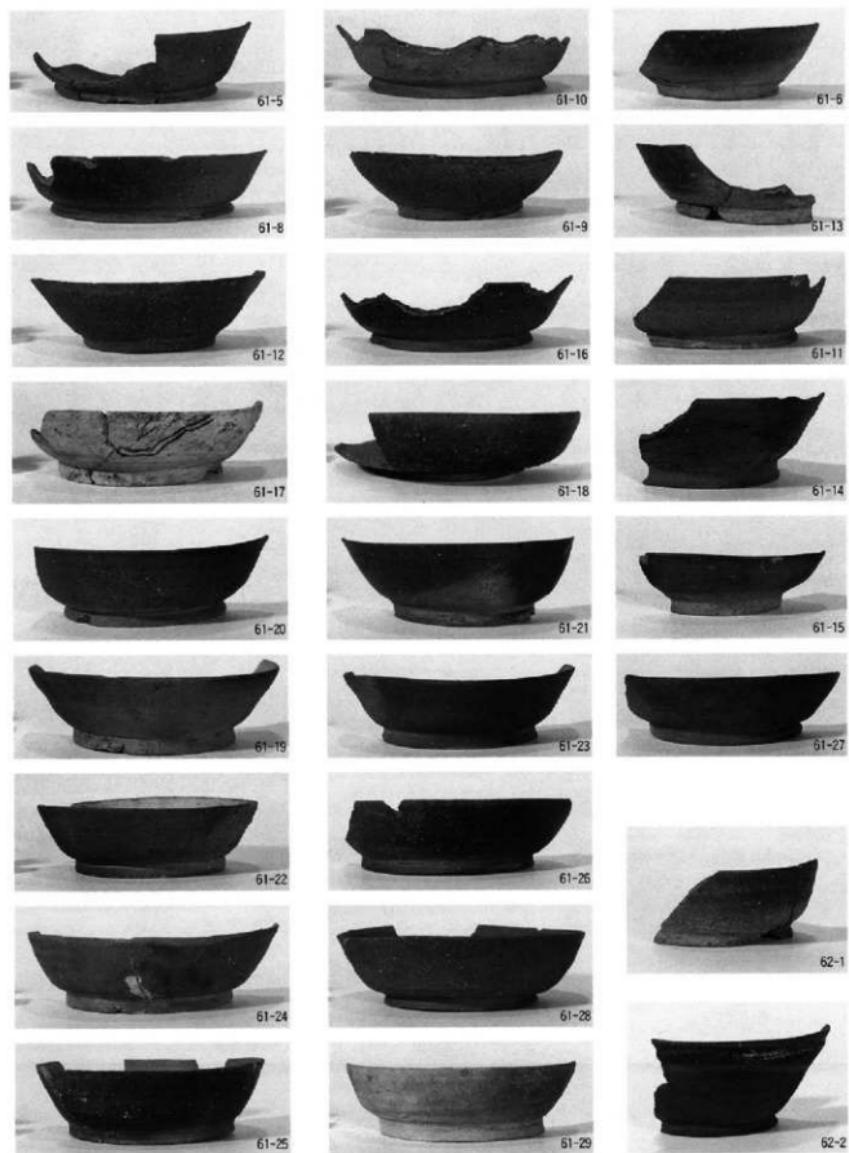


Lブロック出土須恵器(2)

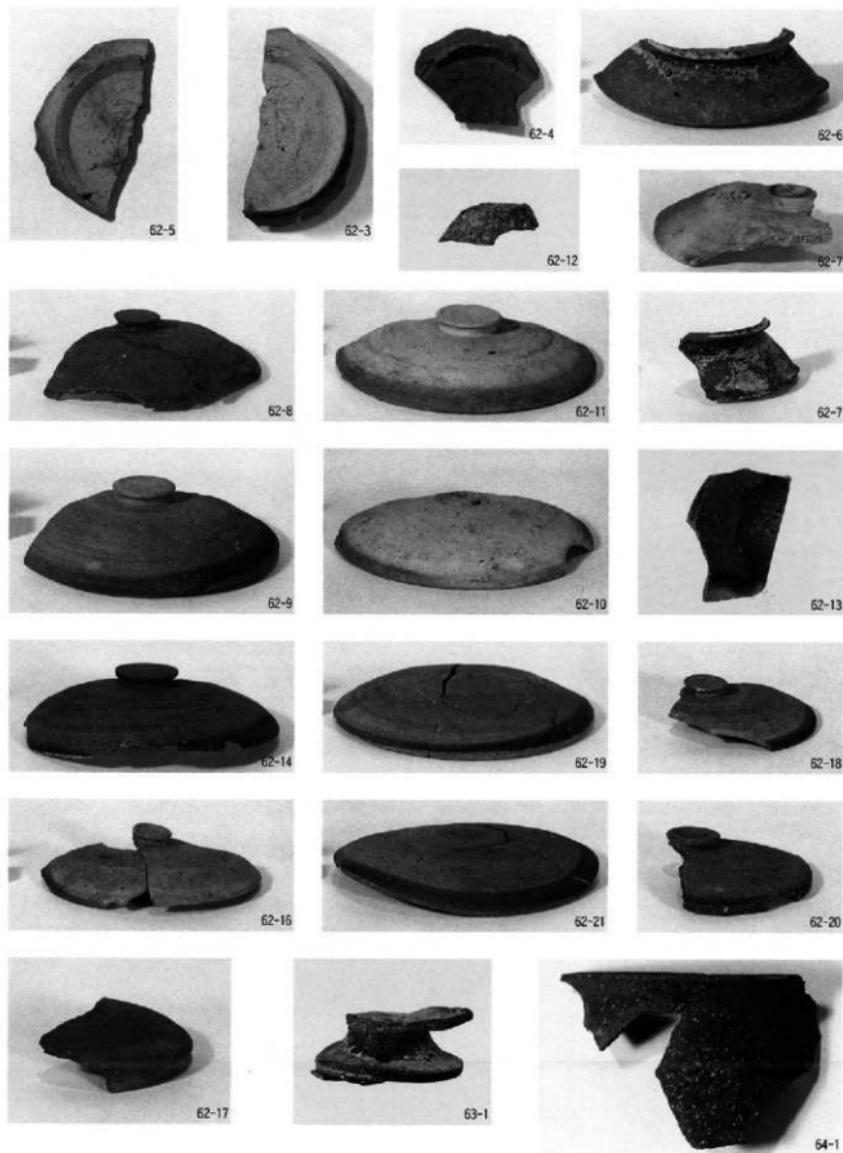
図版42



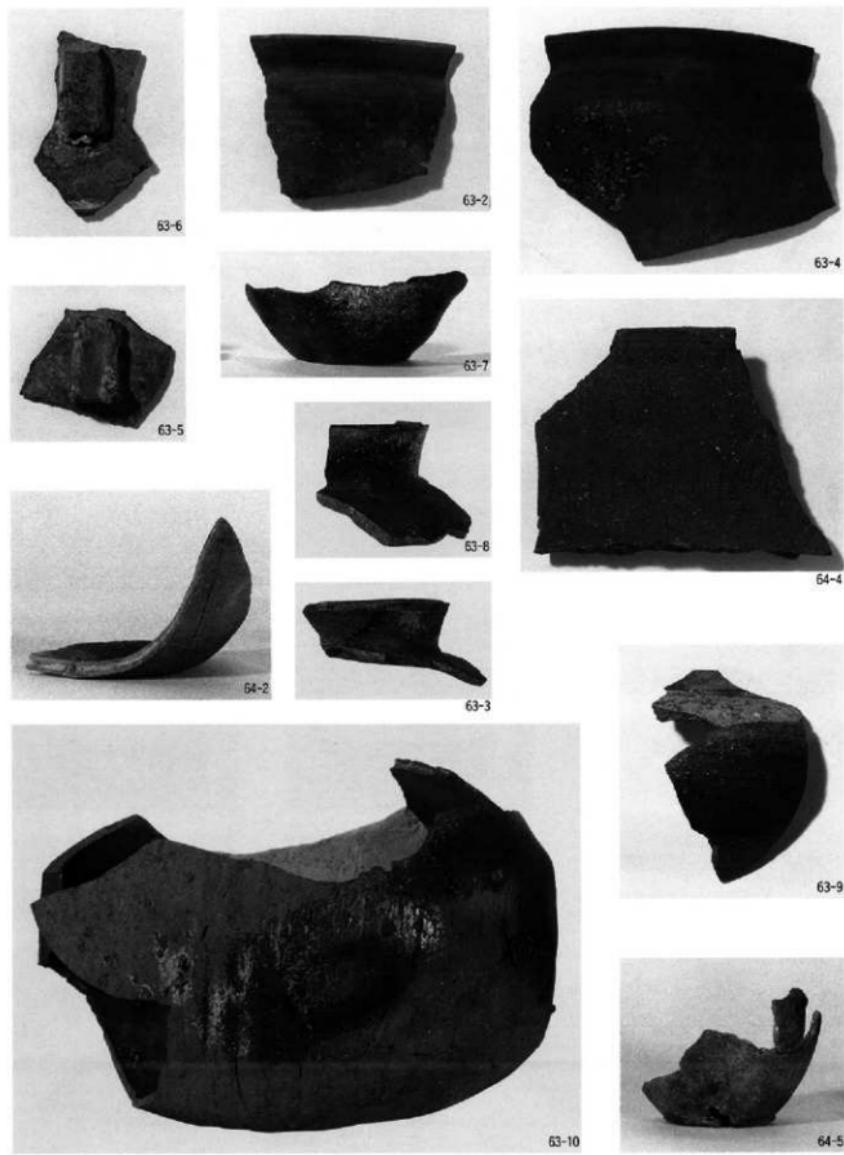
Lブロック出土須恵器(3)



図版44

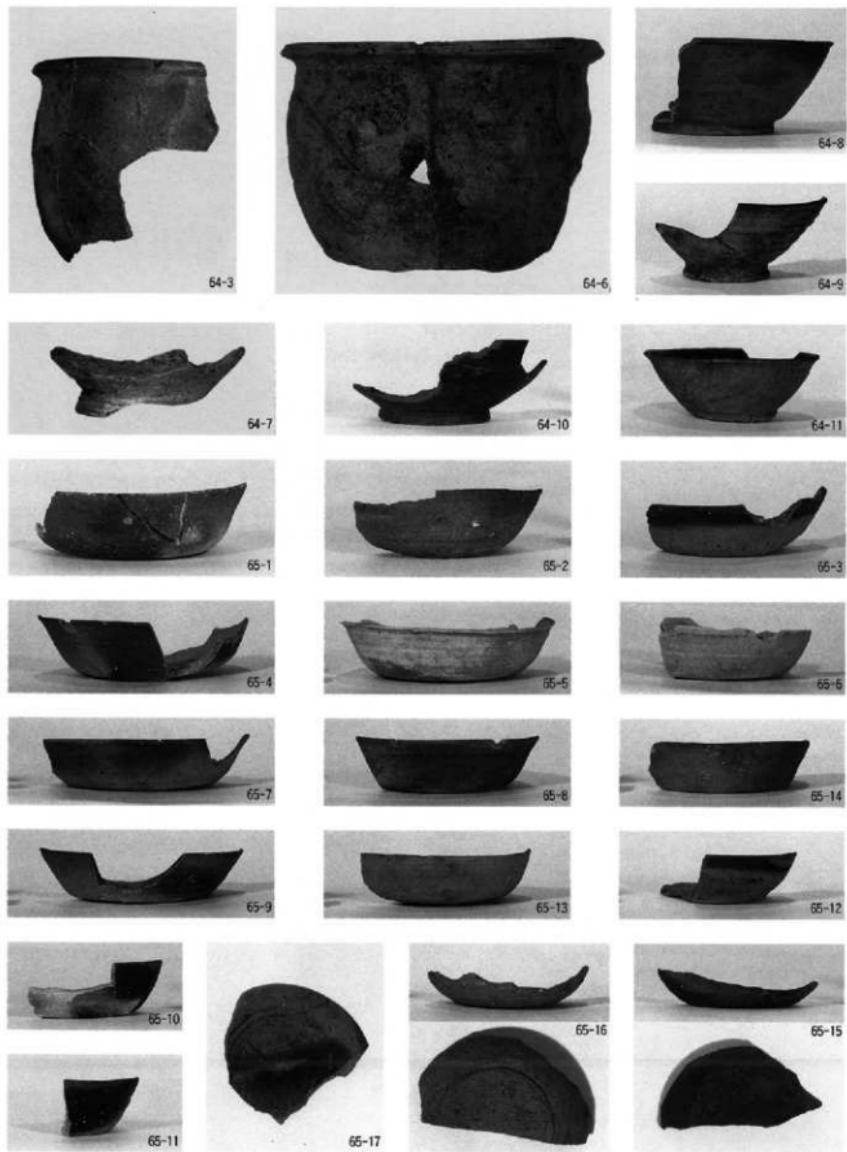


Lブロック出土須恵器(5)



Lブロック出土須恵器(6)

図版46

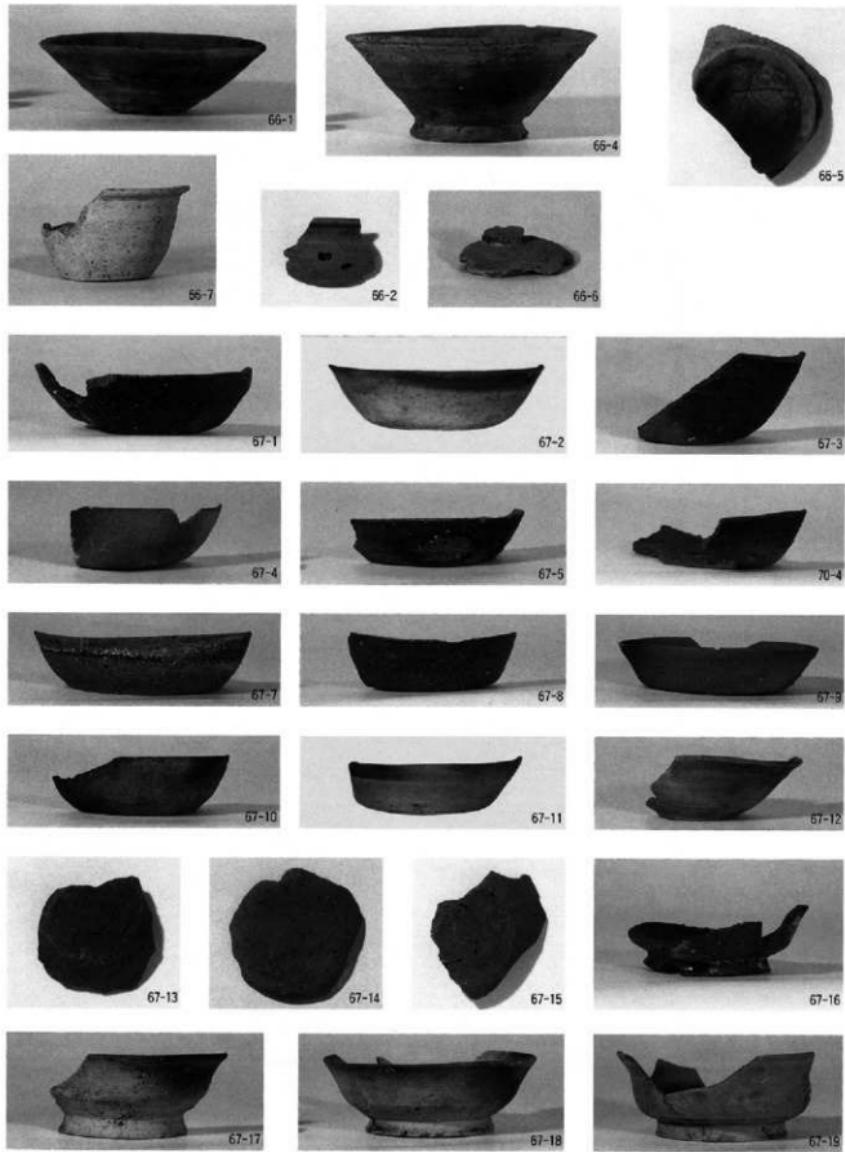


Lブロック出土土器(1)・Mブロック出土須恵器(1)

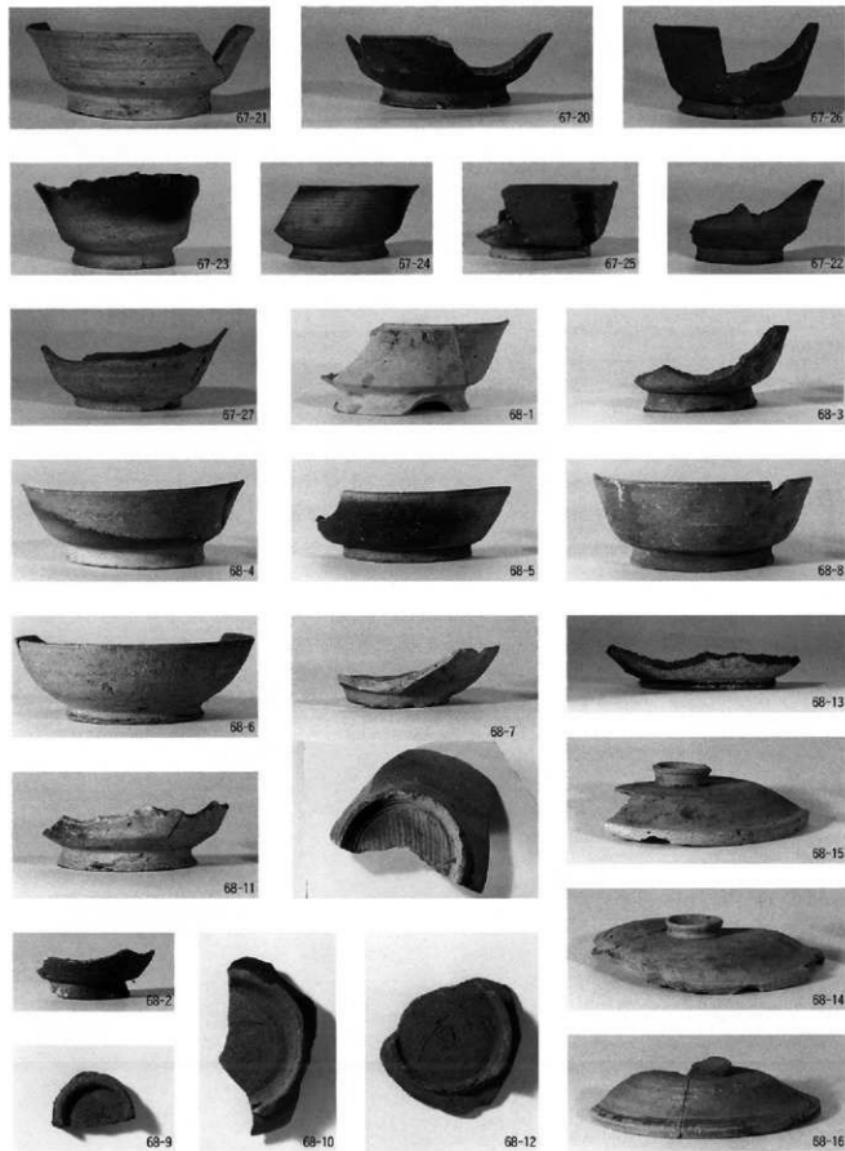


Mブロック出土須恵器(2)

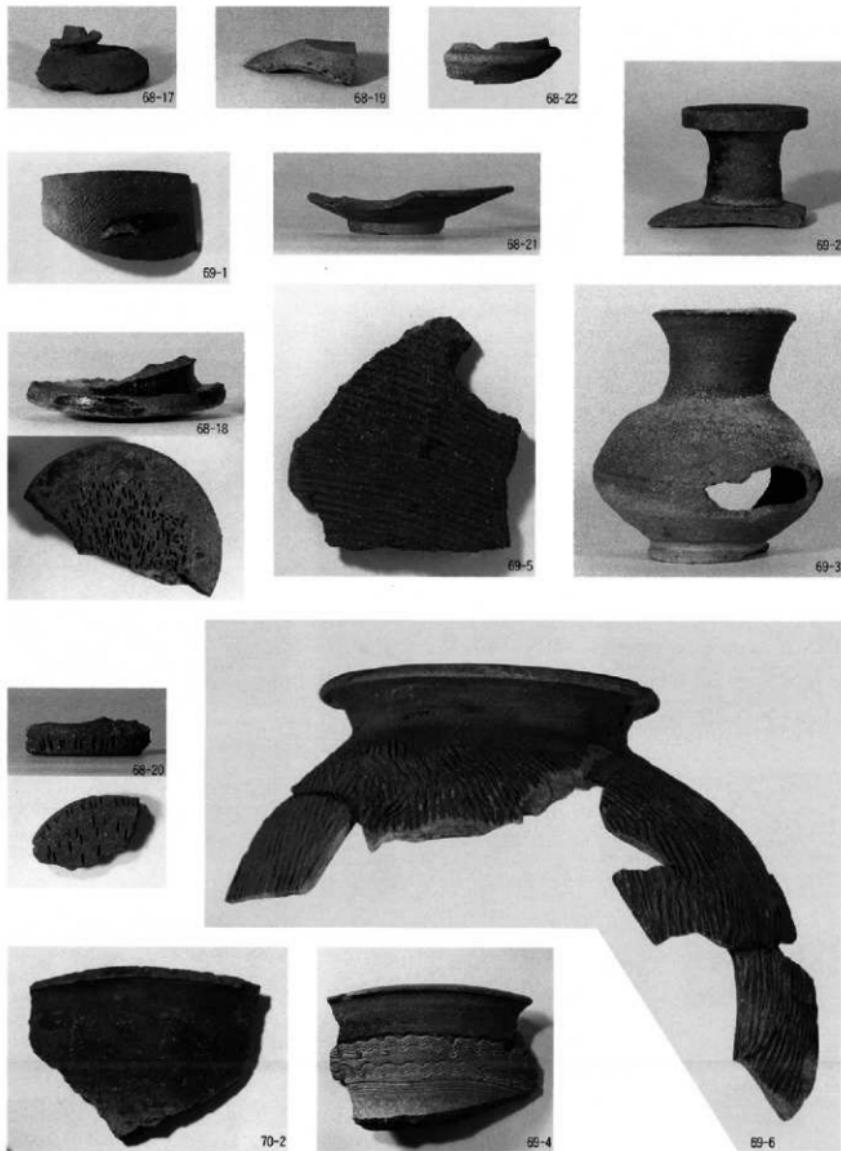
図版48



Mブロック出土土師器・Pブロック出土須恵器(1)



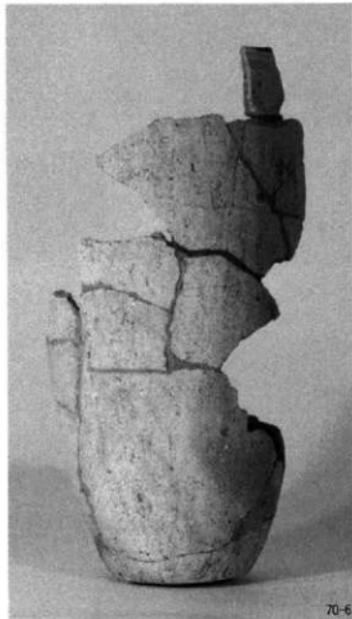
図版50



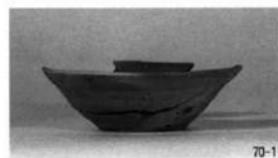
Pブロック出土須恵器(3)



70-5



70-6



70-1



70-3



70-4



71-1



71-2



71-3



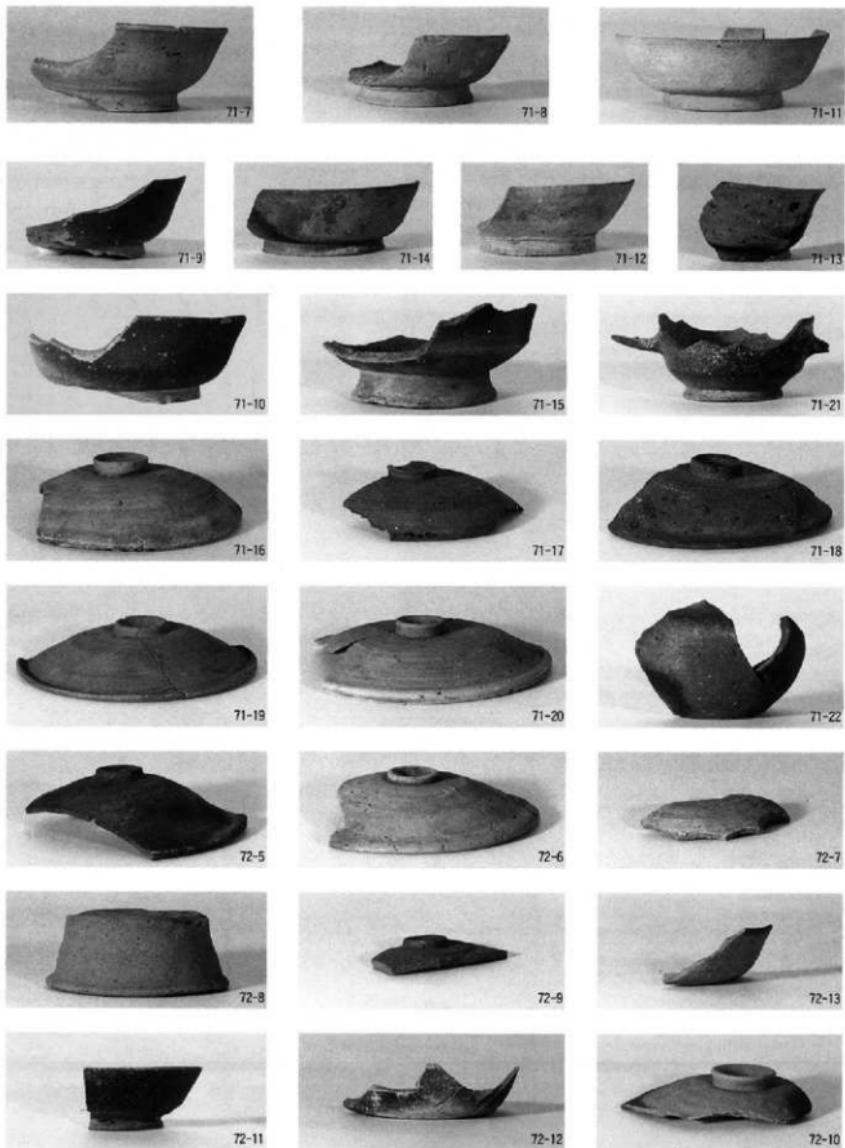
71-4



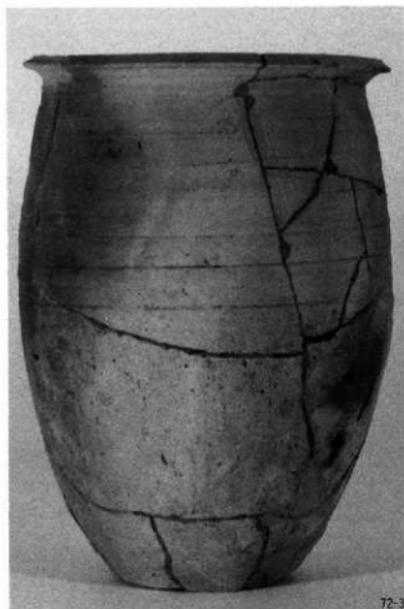
71-5

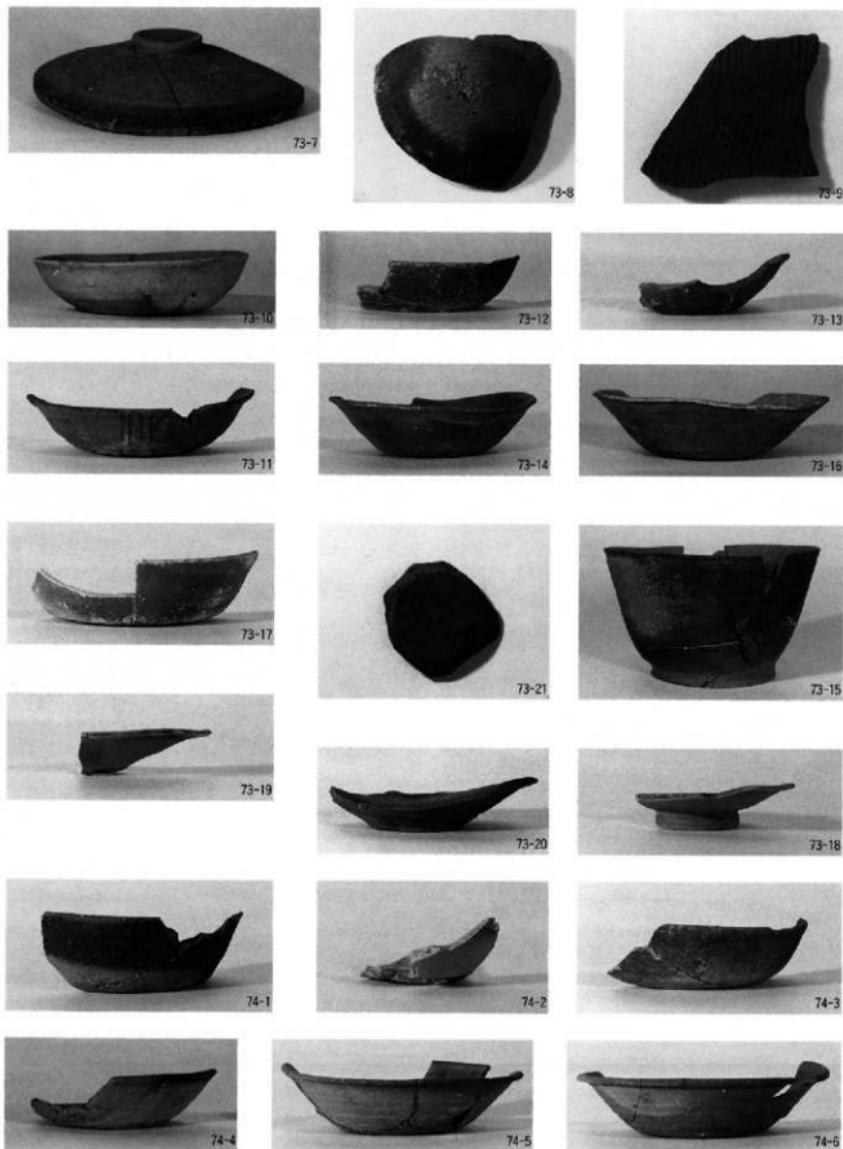


71-6

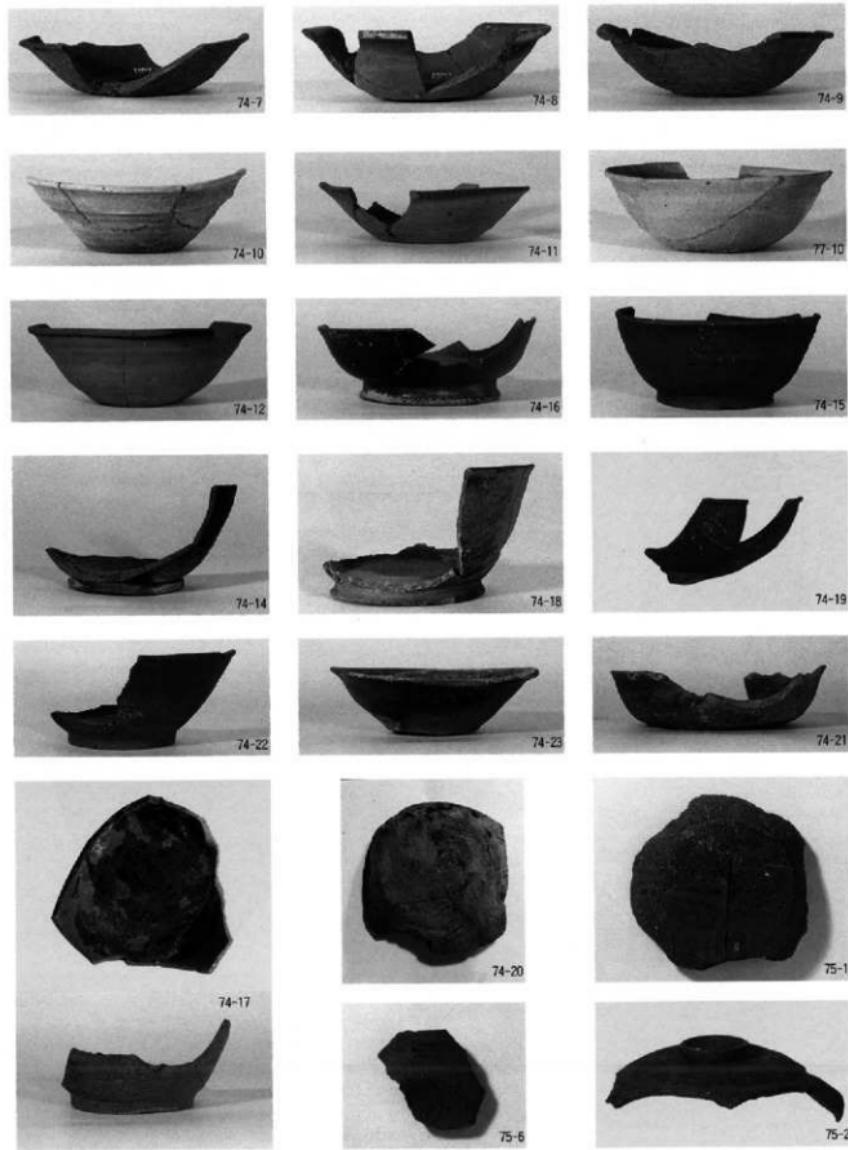


Pブロック出土須恵器(5)・その他の遺構出土遺物(1)





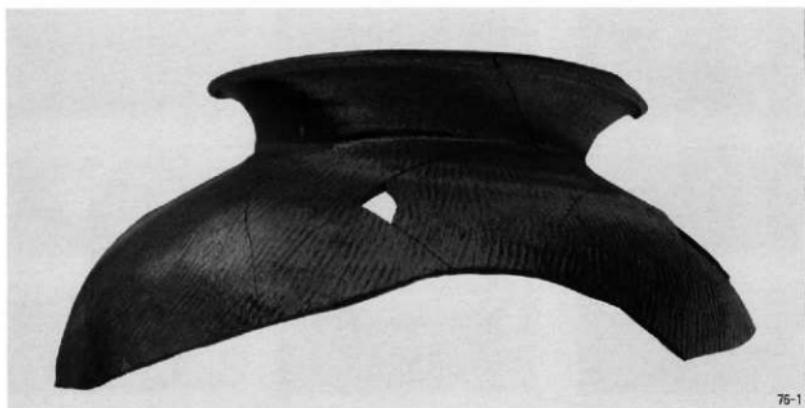
その他の造構出土遺物(3)・SG31河跡出土須恵器(1)



SG31河跡出土須恵器(2)



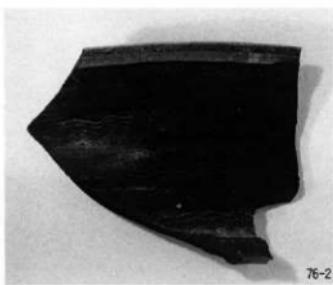
SG31河跡出土須惠器(3)



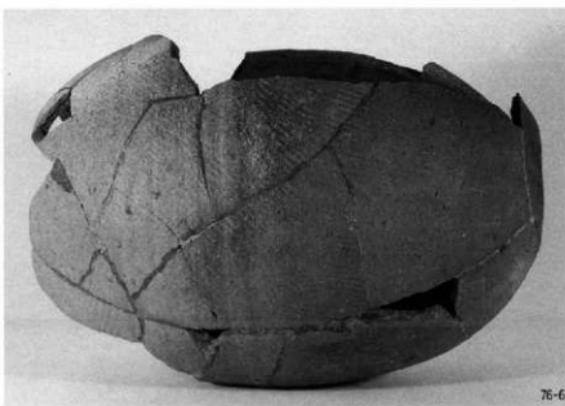
75-1



75-3



75-2

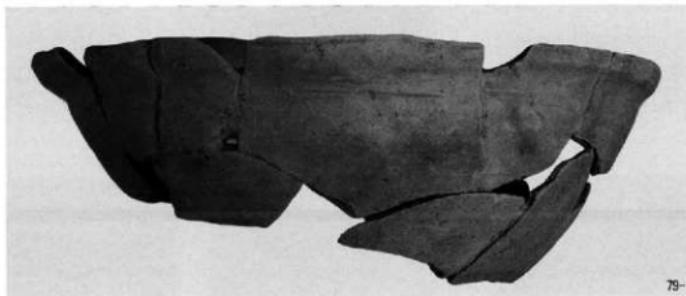
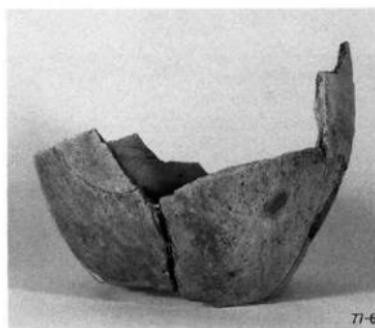


75-6

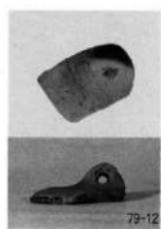
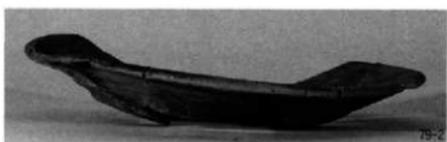
図版58



SG31河跡出土土師器(1)



図版60



SG31河跡出土土師器(3)・SG3捨て場出土須恵器(1)



80-3



80-4



80-6



80-5



80-7



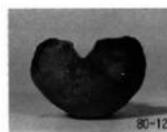
80-13



80-9



80-10



80-12



80-11



80-14



80-15



80-16



80-17



80-18



80-19



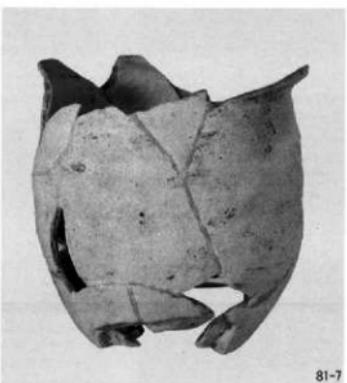
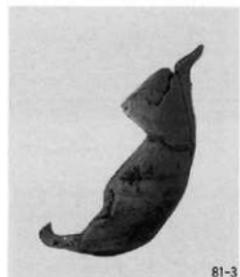
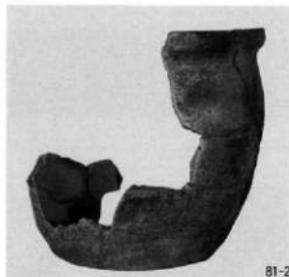
80-20

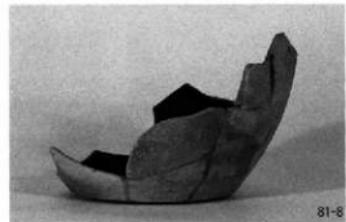
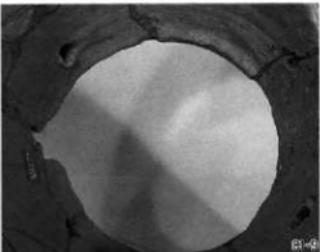


80-21

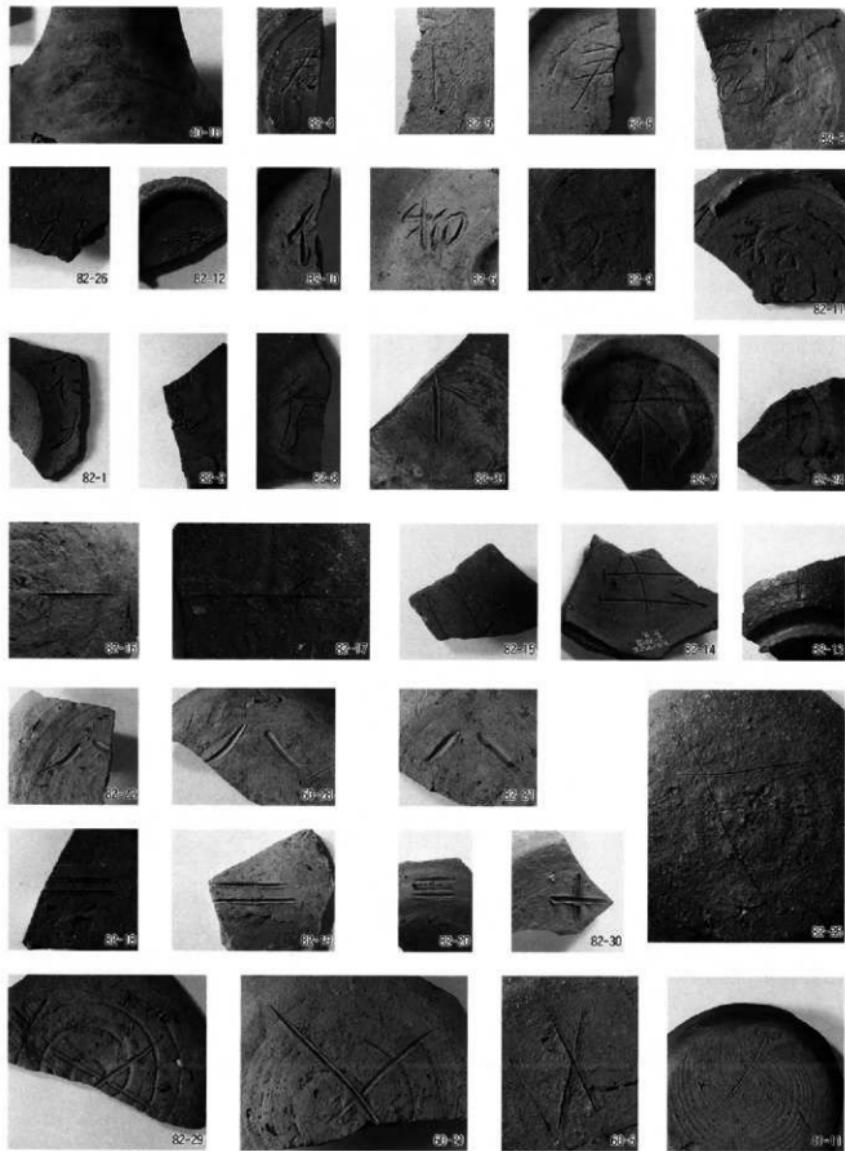


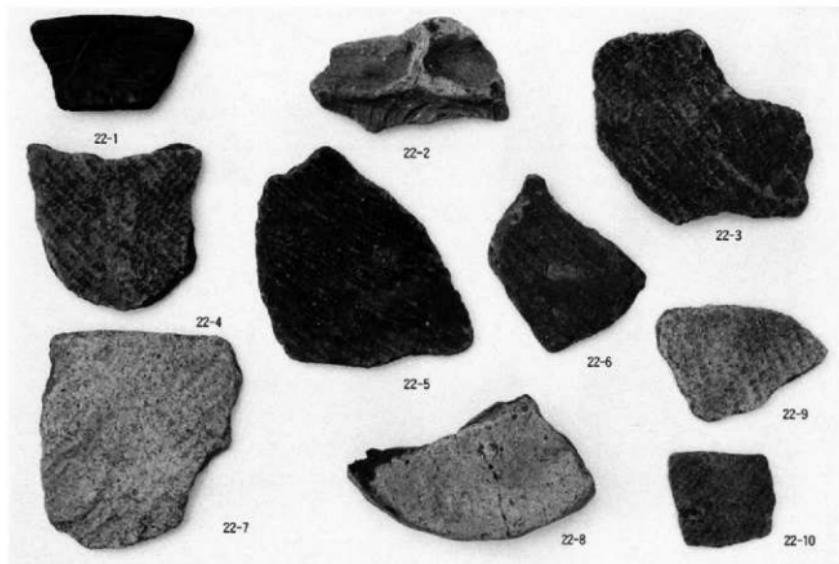
80-22





SG31捨て場出土土器(3)・灰原出土須恵器重焼き



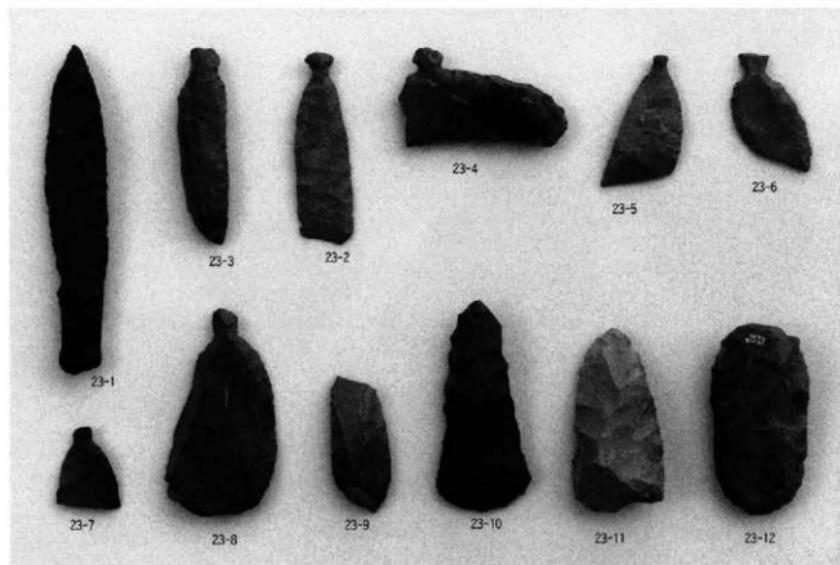


網文土器

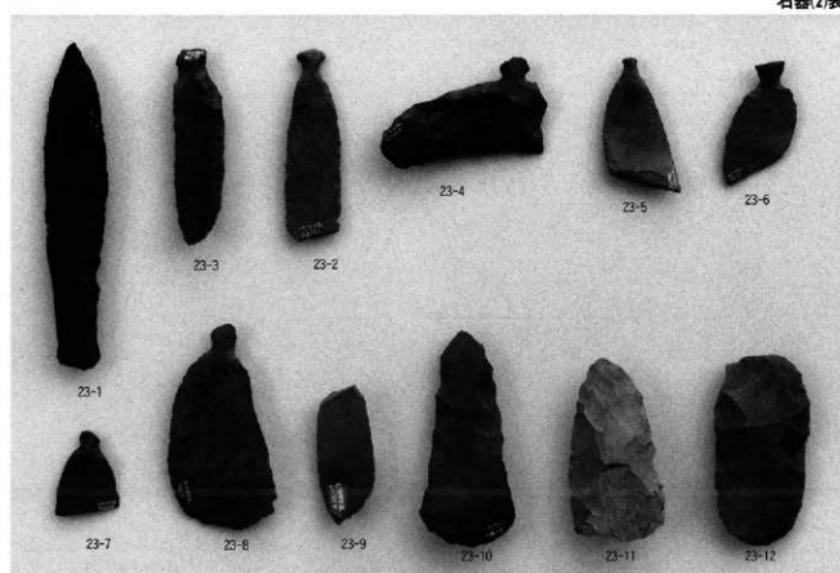


石器(1)

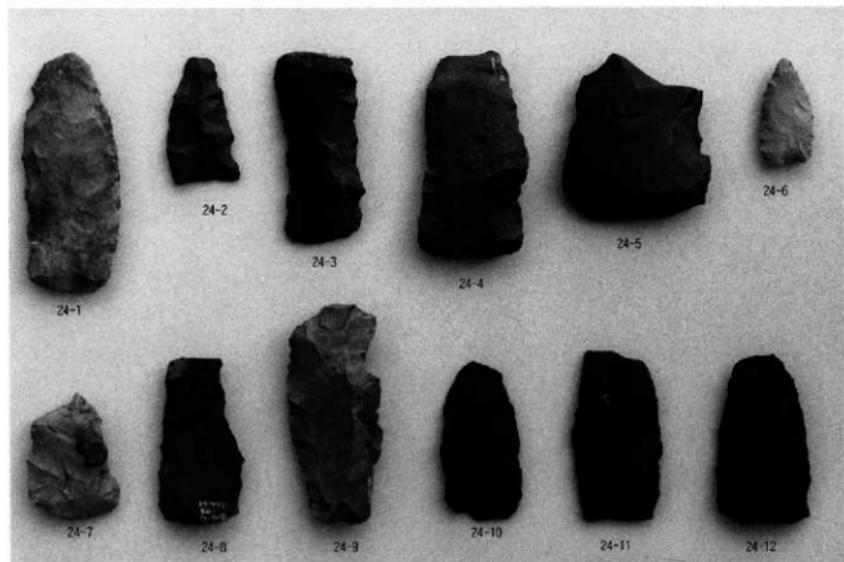
圖版66



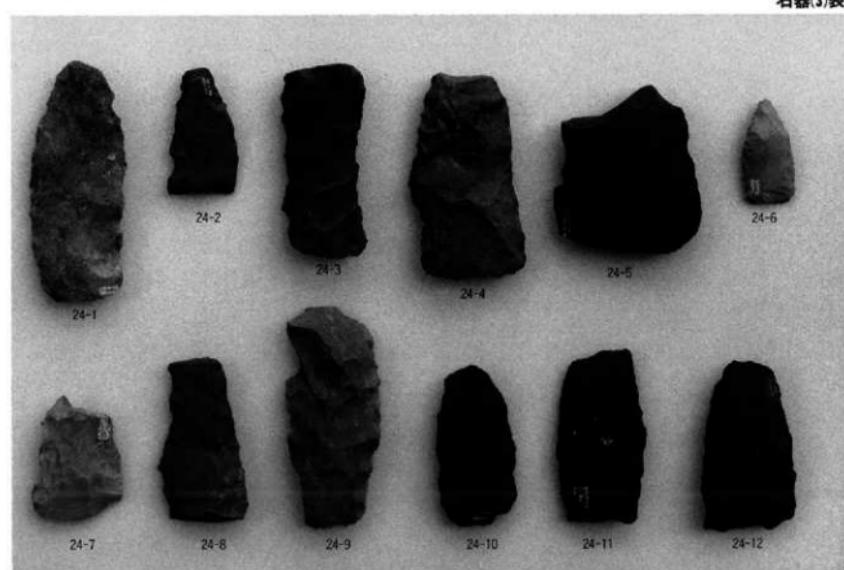
石器(2)表



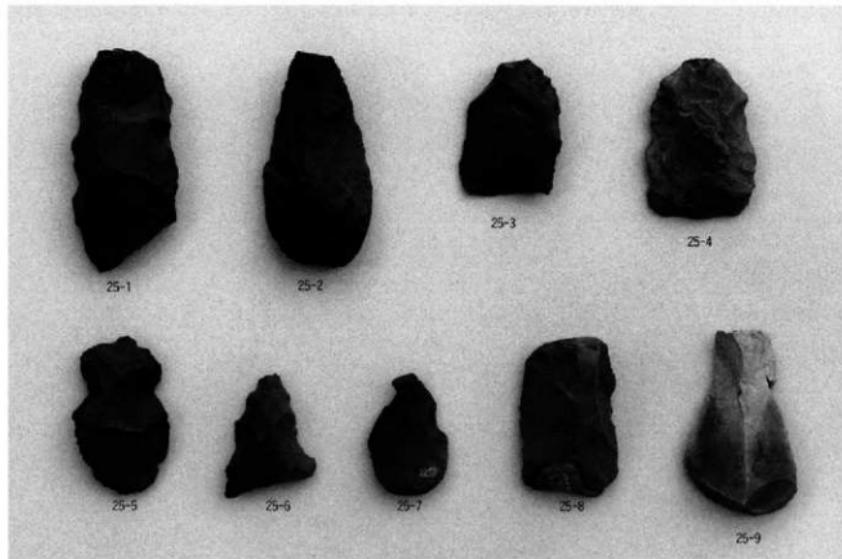
石器(2)裏



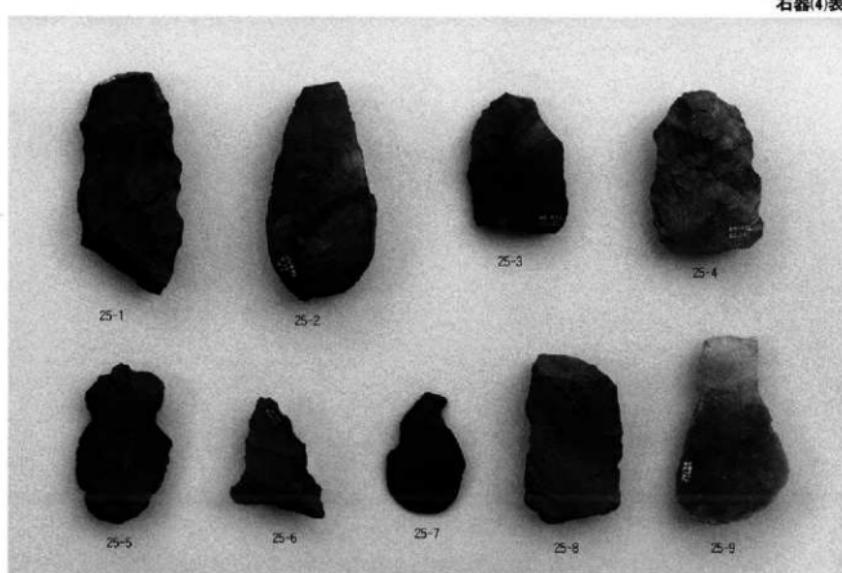
石器(3)表



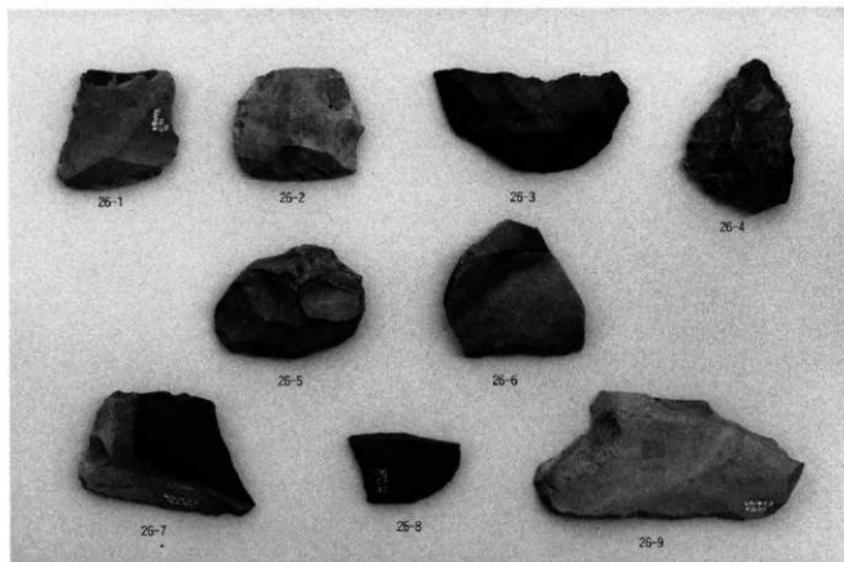
石器(3)裏



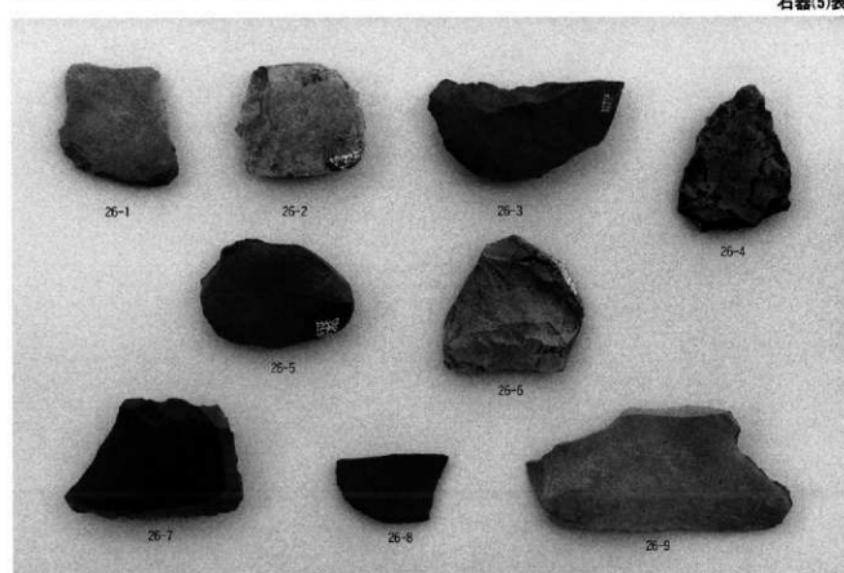
石器(4)表



石器(4)裏

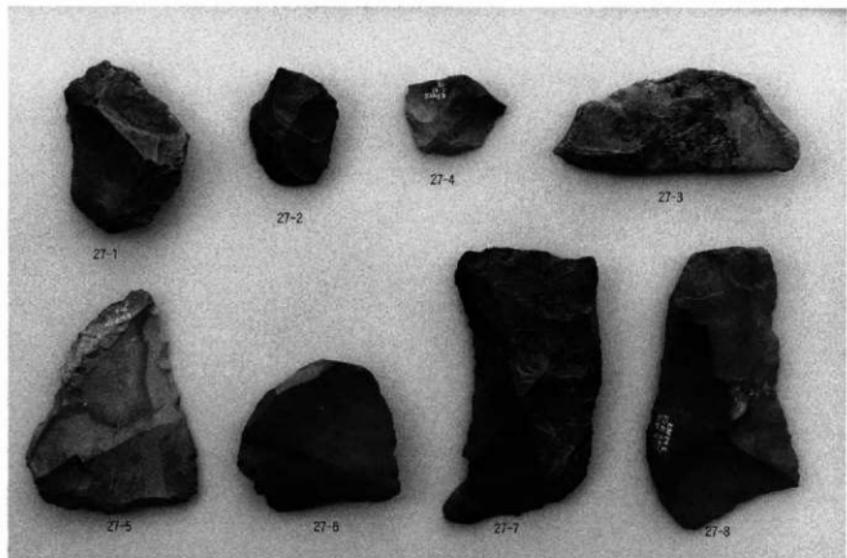


石器(5)表

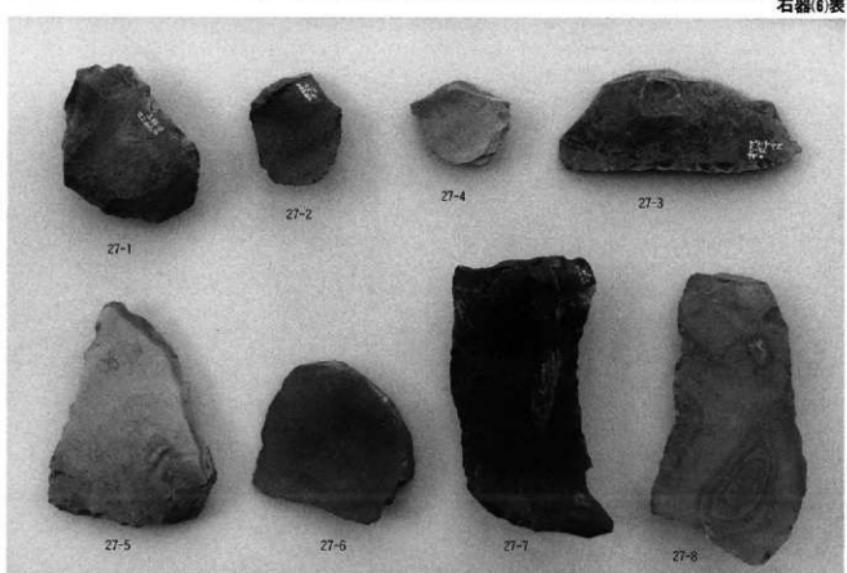


石器(5)裏

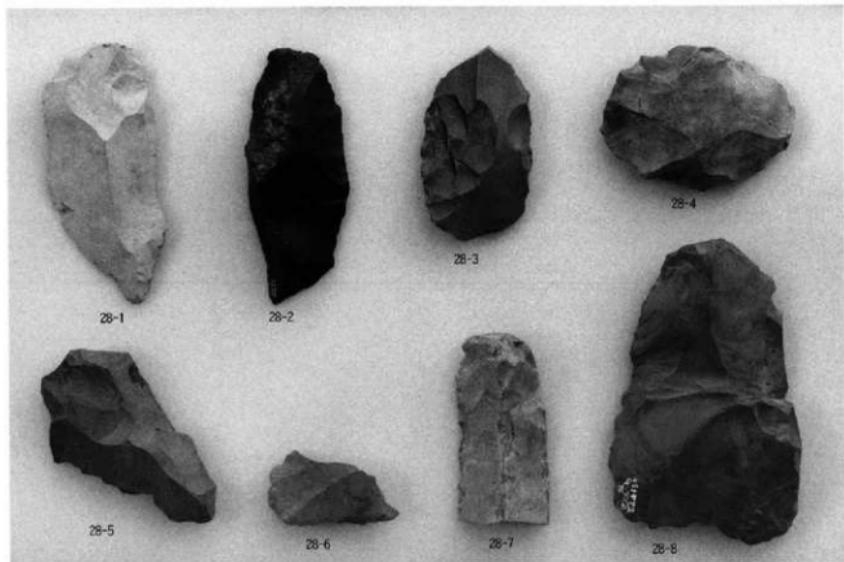
图版70



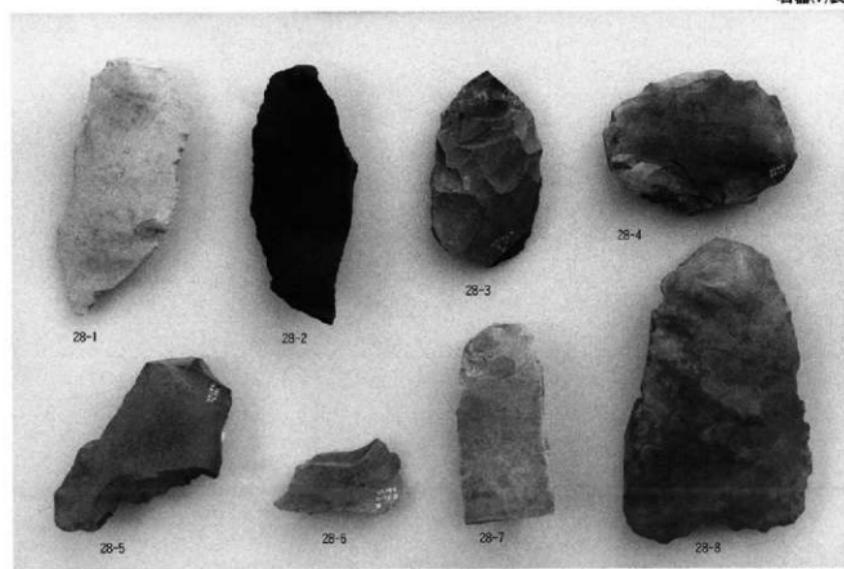
石器(6)表



石器(6)裏

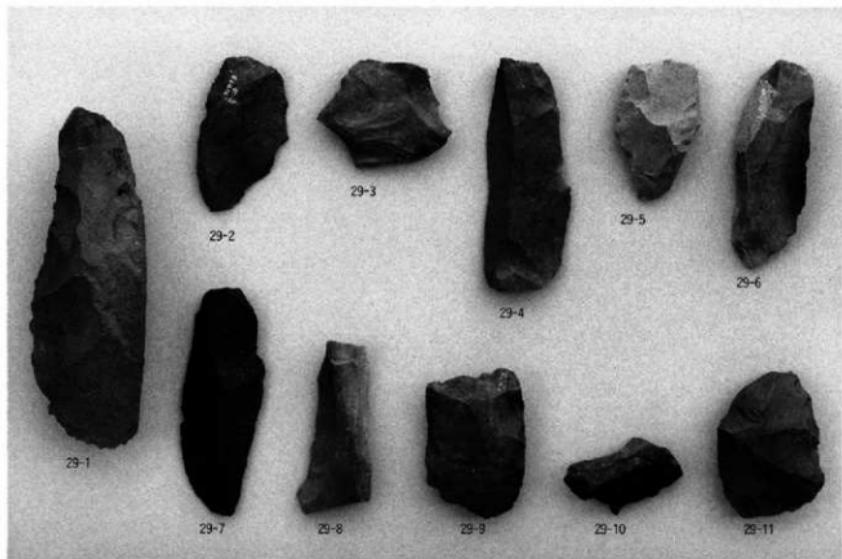


石器(7)表

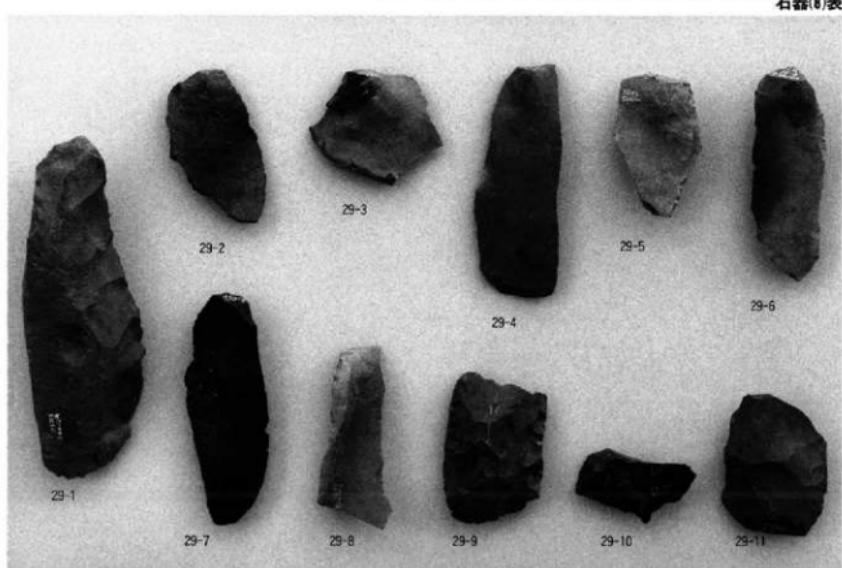


石器(7)裏

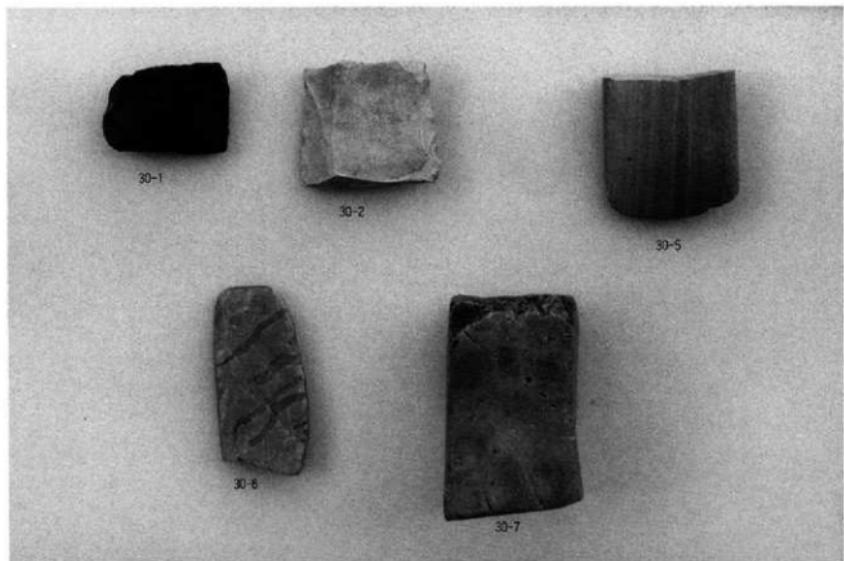
図版72



石器(8)表



石器(8)裏



石器(9)



木製品

付 編

1. 平野山古窯跡群第12地点遺跡における考古地磁気年代推定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

平野山古窯跡群第12地点遺跡は、寒河江市字大字柴橋字高松ほかの丘陵地南端部に位置する。この地域は、県内では古くから知られた窯跡群で、今回の調査においても12ヵ所の窯跡が検出されている。ここでは、このうち比較的遺存の良い2基の窯跡について、考古地磁気に基づく焼成年代の推定を試みた。

2. 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北（地図上の経線方向）からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。寒河江市の現在の偏角は約7.53°、伏角

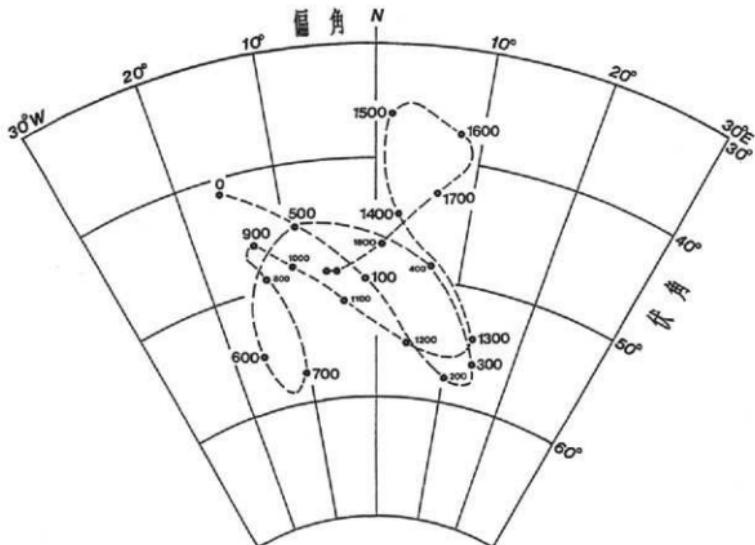


図1 広岡（1977）による地磁気永年変化曲線

は約52.00°、全磁力（水平分力）は29174.1(nT)である。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。

こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、地磁気極もその位置を変えている。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代とともに変化する。また、その強度（全磁力）も変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁石になれる鉱物）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化の測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977；図1、Shibuya, 1980）。また、湖や浅海の堆積物の堆積残留磁化を測定し、過去11,500年間の地磁気変化曲線も求められている（Hyodoほか、1993）。

年代のよく分かっている遺跡の焼土や火山岩の熱残留磁化測定あるいは堆積物の堆積残留磁化から地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土の残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較すると、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている遺跡焼土についても、遺物とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、¹⁴C年代測定法などの他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、考古遺物等による推定年代が参考となる。

3. 試料採取および残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a)測定用試料の採取および整形、b)残留磁化測定および統計計算を行い、c)地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成時の年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認・検討するために、段階交流消磁も行った。

a. 測定用試料の採取および整形

熱残留磁化測定を行った試料は、S Q 1 および S Q 33 の 2 基の須恵器窯跡である。S Q 1 の焼土はブロック状の還元焼土層、S Q 33 の焼土は還元焼土層を伴わない赤化部分である。試料

は、これら焼土面において、①一辺数cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや堅め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まつた後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cmの立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、S Q 1 が 8 試料、S Q 33 が 12 試料である。

b. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算

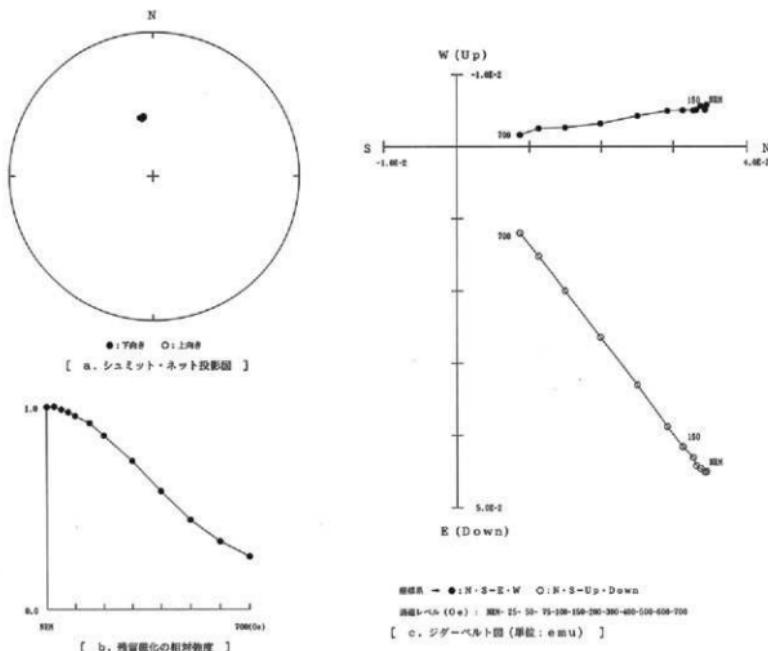


図2 S Q 33 窟跡（試料02）の段階交流消磁測定結果

表1. 各窓跡の熱残留磁化測定結果 (150Oe消磁) と統計計算結果

(偏角補正前)							
遺構	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	強度 (x10 ⁻²)	備考	統計処理項目	統計値
S Q 1	01	-31.4	50.6	2.400	段階交流消磁	試料数 (n)	8
	02	-37.2	41.7	10.400		平均偏角、Dm (° E)	-5.24
	03	-42.9	63.5	2.210		平均伏角、Im (°)	41.93
	04	-42.3	60.4	3.090		誤差角 (δD) (°)	26.04
	05	12.6	22.4	1.140		誤差角 (δ I) (°)	19.37
	06	15.2	24.9	1.720		信頼度係数 (k)	9.14
	07	14.4	23.7	0.835		平均磁化強度 (x10 ⁻² emu)	2.85
	08	16.7	25.3	0.973		試料数 (n)	6
	09					平均偏角、Dm (° E)	-11.94
	10					平均伏角、Im (°)	48.67
	11					誤差角 (δD) (°)	4.88
	12					誤差角 (δ I) (°)	3.22
	13					信頼度係数 (k)	433.72
	14					平均磁化強度 (x10 ⁻² emu)	2.67
S Q 33	01	-9.1	52.7	5.240	段階交流消磁	試料数 (n)	6
	02	-12.5	50.7	2.900		平均偏角、Dm (° E)	-11.94
	03	-15.5	51.8	2.580		平均伏角、Im (°)	48.67
	04	-21.8	47.1	6.710		誤差角 (δD) (°)	4.88
	05	-26.3	47.0	1.200		誤差角 (δ I) (°)	3.22
	06					信頼度係数 (k)	433.72
	07					平均磁化強度 (x10 ⁻² emu)	2.67
	08	-11.9	47.3	1.820			
	09	16.1	44.9	1.060			
	10	-10.7	43.5	1.340			
	11	-12.1	45.9	2.130			
	12						
	13						
	14						

試料の熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計 (S MM-85: 勝夏原技研製) を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、各窓跡試料について任意1試料 (S Q 1 がNo02、S Q33がNo01) について交流消磁装置 (D E M-8601: 勝夏原技研製) を用いて段階的に消磁し、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した(図2)。その結果、磁化強度は $10^{-1} \sim 10^{-2}$ emu前後と非常に強く、磁化保持力は150Oe (エルステッド)においてNRM (自然残留磁化) の約89~92%前後を示している (b. 残留磁化の相対強度)。また、磁化方向も、100~700Oeでは中心に向かってほぼ直線的に変化し、安定した方向を記録している (c. ジグーベルト図)。以上のことから、150Oeで消磁した時の残留磁化方向を、当時の地磁気の方向として採用した。また、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料についても、150Oeで消磁した後に残留磁化を測定し、各試料の磁化方向とした。

こうした複数試料の測定から得た偏角 (Di)、伏角 (Ii) を用いて、Fisher (1953) の統計法により平均値 (Dm, Im) を求めた (表1)。ただし、S Q33の試料No04、No05およびNo09は、他の試料と比べ伏角あるいは偏角が10度以上外れるため統計計算から除外した。計算した結果は、S Q 1は信頼度係数 (集中度) は悪いものの、S Q33は信頼度係数 (k) が433.72と高い数値を示している。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した7.53°Wを使用した。また、伏角は、標準曲線が作成された地域（西南日本）より5°程度深いことから、その補正も行った。その結果は、広岡（1977）による地磁気変化曲線とともにプロットした（図3）。図中測定点に示した椭円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。なお、SQ 1は集中度が悪く誤差円も大きいことから、図示していない。

c. 窯跡の焼成年代

図3を見ると、SQ 33は永年変化曲線からやや西側に外れているが、年代は推定可能である。曲線に最も近い位置に移動した場合、A.D. 530±25年とA.D. 890±90年が推定される。出土須恵器は、平安時代の始め9世紀頃が考えられていることから、後者が妥当な年代と考える。ただし、SQ 1はブロック状の還元焼土層であるため（すなわち動いている）、測定誤差が大きく、従って年代誤差も大きい値である。

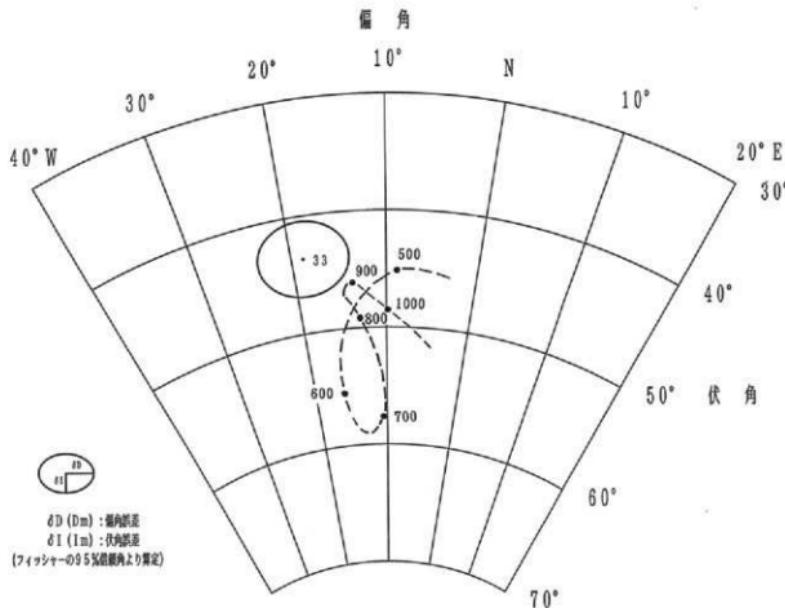


図3 热残留磁化方向と永年変化曲線（広岡、1977）

表2. 考古地磁気測定による焼成年代の推定

遺構	出土遺物による推定	考古地磁気推定年代 (A.D.)
S Q 1	奈良時代後葉 (8世紀)	推定不可能
S Q33	平安時代始め (9世紀)	890±90 (530±25)

引用文献

- Fisher, R. A., 1953 : Disparison on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, p.295-305.
- 広岡公夫, 1977 : 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、p.200-203.
- Hyodo, M., C. Itota and K. Yaskawa (1993) : Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetizations of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan, J. Geomag. Geoelectr., 45, p669-696.
- 理科年表、1993 : 国立天文台編、丸善、p952.
- Shibuya, H. 1980 : Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文、54p

2. 平野山古窯跡群第12地点遺跡の奈良・平安時代の花粉化石群

吉川昌伸（パレオ・ラボ）

1. 概要

平野山古窯跡群は、山形盆地西部の寒河江市に位置し、調査区は平野山斜面から低地にまたがる。この窯跡群は奈良・平安時代の須恵器を焼く登窯を中心とする遺構からなる。ここでは、東区の湿地帯（H-30グリッド）と南区の河川跡（D-34グリッド）から採取された2試料について花粉化石の検討を行い、平野山古窯跡群周辺の奈良・平安時代頃の植生について検討した。なお、以下では各グリッド記号を試料番号として用いる。

堆積物は、H30は東区の木材遺体直下から採取され、未分解の植物遺体が混じる黒褐色有機質粘土からなる。また、D-34は河川跡（SG31）の底部より採取され、黒褐色シルト質粘土に粗～極粗粒砂を比較的多く混じえる。この河川跡は9世紀後半頃と推定されている。なお、試料採取地点や層序については考古の関係する章を参照されたい。

花粉化石の抽出は、試料約3～5gを10% KOH（湯煎約15分）－傾斜法により粗粒砂を除去－48%H F（約30分）－重液分離（比重2.1）－アセトトリシス処理（硫酸と無水酢酸の混液）の順に行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、タッヂミキサーで十分攪拌後マイクロビペットで取りグリセリンで封入した。

2. 花粉化石群集の記載

同定はプレパラートの全面を行った。この間に出現した花粉化石のリストを表1に、主要花粉分布図を図1に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉・胞子数を基数として百分率で算出した。なお、図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。また、クワ科には樹木と草本があるが、区別が出来ないため暫定的に草本花粉に含めてある。図版に示したPAL.MY番号は、単体標本の番号を示す。これら標本はパレオ・ラボに保管してある。

花粉化石の産出傾向はH-30とD-34で概ね同様な組成を示す。すなわち、落葉広葉樹のコナラ亜属とハンノキ属が高率ないし比較的高率に出現し、ブナ、クリ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属、クルミ属などや針葉樹のマツ属やコウヤマキ属、スギなどを伴う。一方、草本類の産出傾向はH-30では草本は稀でシダ植物胞子が卓越し、河川跡のD-34ではイネ科やカヤツリグサ科が出現し、水生植物のガマ属やサジオモダカ属を伴う。

3. 花粉化石群集からみた若干の考察

遺跡周辺の山地には、ナラ類を主としブナを稀に伴う落葉広葉樹林が形成されていたと推定される。この森林には、落葉広葉樹のクリ属、ニレ属－ケヤキ属などや針葉樹のニヨウマツ亜属なども森林構成要素になっていた。また、遺跡全面に広がる低地にはハンノキ湿地林が形成

表1. 平野山古窯跡群から産出した花粉化石の組成表

和名	学名	H30	D34
樹木			
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	2
マツ属半端葉束葉属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>	-	2
マツ属硬葉束葉属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	-	6
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	2	9
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	3	1
スキ属	<i>Cryptomeria</i> japonica (L.fil.) D.Don	1	3
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	-	2
クヌキ属	<i>Juglans</i>	1	4
タマシキ属アサガ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	-	2
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	74	67
ブナ属	<i>Fagus crenata</i> Blume	2	16
コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	28	122
コナラ属アカガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	1
クリ属	<i>Castanea</i>	1	8
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	1
ニレ属イケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	1	4
エノキ属	<i>Dipterocarpaceae</i>	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	1	1
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	-	1
草本			
ダマスカニ属	<i>Typha</i>	-	1
サジオモグリ属	<i>Alisma</i>	-	1
イネ科	<i>Gramineas</i>	3	36
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	-	24
クサ科	<i>Moraceae</i>	-	3
サクマタデ科ウナギカヌイ科	<i>Polygonaceae</i> , <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	3
アザガヤ科	<i>Chenopodiaceae</i>	-	1
キンポウゲ科	<i>Bartsiacaceae</i>	1	-
フウロソウ科	<i>Geraniaceae</i>	1	-
ツリフネソウ属	<i>Iapatiaceae</i>	-	1
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	8
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	2	21
他のキク科	other Tubuliflorae	11	9
タンポポ科	<i>Liguliflorae</i>	-	2
シダ植物			
ゼンマイ属	<i>Osmanthus</i>	5	2
單果型孢子	<i>Monolete spore</i>	394	31
三重型孢子	<i>Trilete spore</i>	1	7
樹木花粉			
樹木花粉	Arboreal pollen	114	254
草木花粉	Nonarboreal pollen	18	110
シダ植物孢子	Spores	400	40
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	532	404
不明花粉			
不明花粉	Unknown pollen	3	7

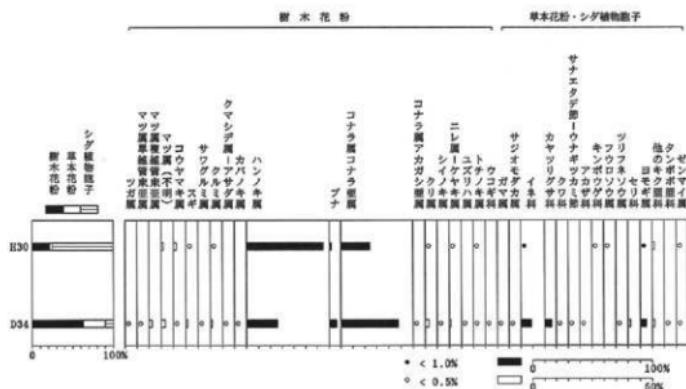
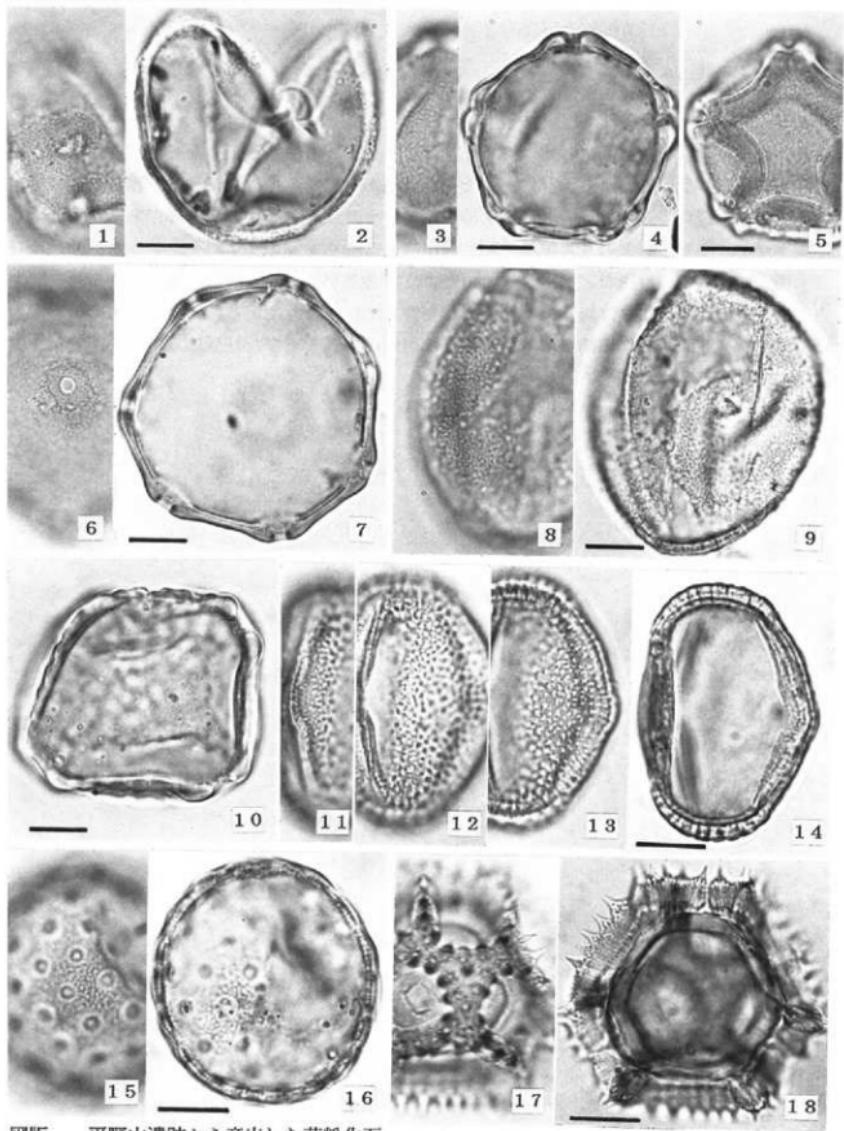


図1 平野山古窯跡群の主要花粉分布図

(出現率は、樹木は樹木花粉総数、草本・胞子は花粉・胞子数を基準として百分率で算出した)

され、低地周辺ないし谷筋にはオニグルミやトチノキなども生育していたであろう。一方、樹木花粉の比率が低いことから疎林であった可能性があり、この付近の森林は登窓の形成や燃料材の多量の消費による森林への著しい干渉の結果、ナラ類を主とする二次林であった可能性を示唆させる。また、低地の9世紀後半頃の河川内には抽水植物のイネ科やカヤツリグサ科及びガマ属、サジオモダカ属などが生育していたようであるが、概ね同時期と推定されるH-30地点ではまともな草本植生は無く、シダ植物が生育していたようである。一般に河川の後背湿地で、水生シダを除くシダ植物が卓越する地点は河川の氾濫をたびたび受けるような不安定な環境にある場合が多いようである。



図版 平野山遺跡から産出した花粉化石

1-2:スギ(*Cryptomeria japonica*), D34, PALMY 2418. 3-4:ハンノキ属(*Alnus*), D34, PALMY 2413. 5:ハンノキ属(*Alnus*), D34, PALMY 2415. 6-7:クルミ属(*Juglans*), D34, PALMY 2418. 8-9:コナラ亜属(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*), D34, PALMY 2419. 10:ケヤキ属(*Zelkova*), D34, PALMY 2417. 11-14:ウコギ科(Araliaceae), D34, PALMY 2420. 15-16:アザ科(Chenopodiaceae), D34, PALMY 2416. 17-18:タンボポ亜科(Liguliflorae), D34, PALMY 2412. (スケールは10μm)

3. 平野山古窯跡群第12地点遺跡出土木材の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

平野山古窯跡群からは、平安時代始め9世紀の窯跡が数多く検出されている。第12地点遺跡の第2次調査では、丘陵の縁辺部とその前面に広がる低地部の調査が行われた。

ここでは、窯跡灰原から出土した燃料材と考える炭化材と前面の低地部から検出された立ち株材の樹種について検討した。

2. 方法と記載および結果

試料は、窯跡灰原から出土した炭化材と低地部から検出された立ち株木材である(表1)。

このうち炭化材は、実体顕微鏡下で横断面について観察し、同定できる試料と同定できない試料とに分類する。これら同定できない試料と同定される典型試料は、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡(日本電子機製 JSM T-100型)で観察する。

また、立ち株木材は、片刃カミソリを用いて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面をつくり、ガムクロラール(Gum Chloral)で封入し、永久標本を作成する。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40~400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下では、標本の記載と同定の根拠を示す。

表1. 出土炭化材と立ち株木材の樹種

No	遺構	時代	樹種	備考
1	S Q 1 灰原	奈良時代後半	クヌギ節・コナラ節	炭化材
2	S Q 33 灰原	平安時代始め	クヌギ節	炭化材
3	低地部H-30	〃	ハンノキ節(6点)	立ち株(生材)
4	低地部H-30	〃	トチノキ(2点)	立ち株(生材)
5	低地部M-30	〃	コナラ節	生材(焼跡有)

ハンノキ節 *Alnus sect. Gumnothysus* カバノキ科 図版1a~1c.

中型の管孔が放射方向または塊状に2~4個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、10本程度横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、同性単列と集合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科ハンノキ属のハンノキ節の材と同定される。ハンノキ節の樹木には、平野部の水湿地に生育するハンノキ(*A. japonica*)、平野部から山地の斜面にかけて生育するヤマハンノキ(*A. hirsuta*)などがある。これら樹木は、いずれも樹高20m、幹径50mに達する落葉広葉樹で、陽のよく当たるところに生育する。

クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版5a～5c.

年輪のはじめに大型の管孔が1～2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものとがある（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のクヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ（*Q. acutissima*）と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ（*Q. variabilis*）がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版2a～2c、4a～4c.

年輪のはじめに大型の管孔が1～2列並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面）。

以上の形質からブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ（*Q. serrata*）やミズナラ（*Q. mongolica* var. *grosseserrata*）、カシワ（*Q. dentata*）、ナラガシワ（*Q. aliena*）などがある。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume. トチノキ科 図版3a～3c.

小型の管孔が単独または2～4個程度放射方向に複合し、やや密に散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が見られる（放射断面）。放射組織は、同性単列まれに1～2細胞幅で、3～10細胞高で、この樹種を特徴づけるリップルマーク（規則的な層階状配列）を示している（接線断面）。

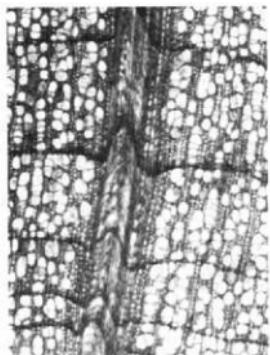
以上の形質から、トチノキ科トチノキ属のトチノキと同定される。トチノキの樹木は、樹高30m、幹径2mに達する北海道から九州まで分布する落葉広葉樹である。

3. 考察

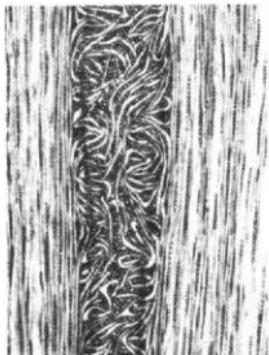
窯跡灰原から出土した炭化材は、S Q 1が2点、S Q 33が1点である。樹種は、いずれもコナラ亜属のクヌギ節あるいはコナラ節の木材である。これらは窯跡の灰原から出土しているため、当時の窯業の燃料材であることは間違いない。これらの樹木は、周辺の丘陵に多く生育していたことが想像される。

一方、今回の調査において、東区の低地部からは、数多くの立ち株からなる木材が検出されている。なお、一部の木材（M-30の木材）には焼跡が認められ、窯業に関わる木材であることが予想される。これらの樹種を検討したところ、ハンノキ節あるいはトチノキであることが分かった。当時、この低地部は沼沢湿地であったため、燃料材としては丘陵上に生えるコナラ節やクヌギ節の木材を利用し、この低地部に生えるこれら樹木は利用していないことが推定される。

図版. 出土木材樹種の顕微鏡写真



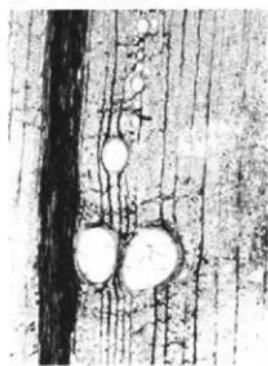
1a.ハンノタケ (横断面) bar : 0.5mm



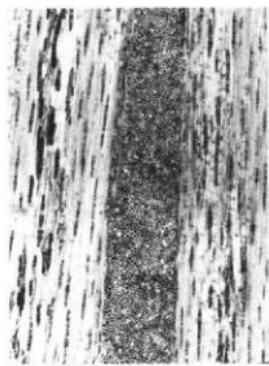
1b.同 (接線断面) bar : 0.5mm



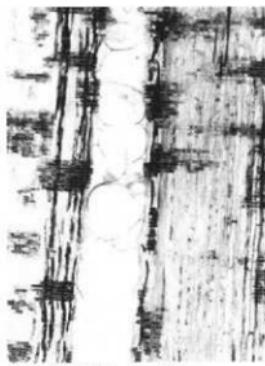
1c.同 (放射断面) bar : 0.5mm



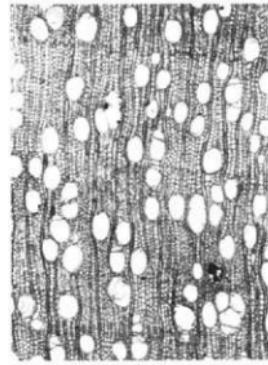
2a.コナラ節 (横断面) bar : 0.5mm



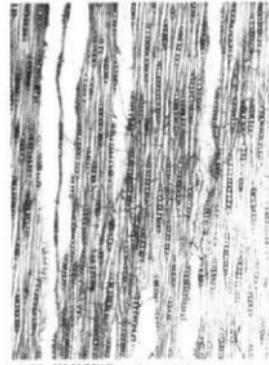
2b.同 (接線断面) bar : 0.5mm



2c.同 (放射断面) bar : 0.5mm



3a.トチノキ (横断面) bar : 0.5mm



3b.同 (接線断面) bar : 0.5mm



3c.同 (放射断面) bar : 0.2mm

図版。出土木材樹種の顕微鏡写真



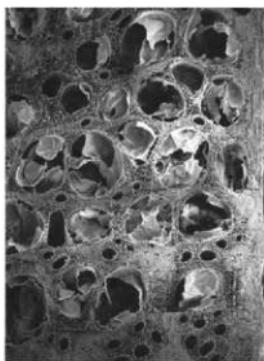
4a.コナラ節（横断面） SQ1 bar : 1mm



4b.同（接線断面） bar : 0.5mm



4c.同（放射断面） bar : 0.5mm



5a.クヌギ節（横断面） SQ1 bar : 1mm



5b.同（接線断面） bar : 1mm



5c.同（放射断面） bar : 0.5mm

4. 平野山古窯跡群第12地点遺跡出土須恵器等の材料分析

古橋美智子・藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

平野山古窯跡群は古くから知られている窯跡群で、須恵器窯が数多く調査されている。遺物としては、須恵器や土師器が出土している。

土器の材料（胎土）は、粘土と混和材（主に砂粒である場合が多い）から構成されている。縄文土器や弥生土器あるいは土師器などは焼成温度が低いため、材料粘土の起源を指標する珪藻化石や骨針化石などの微化石類が残っていることが期待される。一方、胎土中の砂粒は、細砂から2mm以上の礫まで含まれることがあり、すべての粒子に対して正確に岩石名を付けることはできないものの、製作地の岩石学的特性（あるいは地質学的特性）を反映する粒子群を含むことが期待される。

こうした土器胎土中の粘土の特徴記載により、使用された粘土の起源を推定すると同時に、砂粒組成により土器胎土を分類し、その特徴について検討することが可能である。また、こうした検討により非在地系土器胎土の識別も可能となる。

ここでは、平野山古窯群第12地点遺跡から出土した須恵器や土師器や土塙から検出された粘土塊など8点について、これら土器胎土の材料を中心に検討した。

2. 分析試料

検討した土器は、第12地点遺跡から出土した土器群8点である（表1）。

表1. 胎土材料の検討した土器胎土試料

番号	出土地点	層位	種別	器種	時期
1	SK 5 0	Y	粘土	土器材料？	不明
2	SQ 1	Y	須恵器	壺	8世紀後半
3	L-3 0	F 2 0	須恵器	壺	8世紀後半
4	SQ 3 3	Y	須恵器	壺	9世紀後半
5	F-3 0④		土師器	甕	9世紀後半頃
6	F-3 0④		土師器	壺	9世紀後半頃
7	G-3 0④		土師器(内黒) 有台椀		9世紀後半頃
8	G-3 0④		土師器(内黒) 有台椀？		9世紀後半頃

3. 処理と方法

ここでは、土器胎土の特徴を最大限に引き出すために、土器薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察による方法を行った。各土器胎土は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の土器薄片(プレパラート)を作成した。

- (1) 土器試料は、岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させ、平面を作成した後、エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行なう。
- (2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着する。
- (3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製する。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群ごとに同定・計数する。同定・計数は、 $100\mu\text{m}$ 格子目盛を用いて任意の位置における約 $50\mu\text{m}$ (0.5mm)以上の鉱物や複合鉱物類(岩石片)あるいは微化石類を対象とし、石英・長石類および微化石類以外の粒子が約100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に、薄片全面について、微化石類(放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、胞子化石)や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

4. 分類群の記載

〈文 章 省 略〉

5. 各胎土の特徴および計数の結果

土器胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(表2)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や 0.1mm 前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類の記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No 1 : 150~600 μm 前後が多い(最大粒径1.3mm)。泥岩質・砂岩質》石英・長石類、複合石英類、ガラス、斑晶質、放散虫化石(5個体)、海水種珪藻化石を含む泥岩質、珪藻化石(海水種: *Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属)、骨針化石(網目構造も含む)、胞子化石

No 2 : 150~800 μm 前後が多い(最大粒径1.4mm)。石英・長石類》複合石英類、斜長石(双晶)、複合石英類(微細)、ガラス、灰質塊(植物珪酸体化石が密集)、海水種珪藻化石を含む泥岩質、放散虫化石(3個体)、珪藻化石(海水種: *Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属、不明種)、骨針化石多量(網目構造も含む)、胞子化石

No 3 : 50~200 μm 前後が多い(最大粒径800 μm)。石英・長石類》複合石英類、灰質塊(植物珪酸体化石の密集)、ガラス、放散虫化石(1個体)、珪藻化石(海水種: *Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属、淡水種: *Pinnularia viridis*, *Eunotia praenupta* var. *bidentata*, *Hantzschia*

amphioxys, *Pinnularia*属、*Eunotia*属、*Diploneis*属、不明種)、骨針化石多量(網目構造も含む)、胞子化石多量

No 4 : 50~120 μm 前後が多い(最大粒径800 μm)。石英・長石類》複合石英類(微細)、複合石英類、放散虫化石(*Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属)、骨針化石(網目構造も含む)

No 5 : 150~400 μm 前後が多い(最大粒径1.8mm)。石英・長石類》複合石英類》複合石英類(微細)、カリ長石(パーサイト)、雲母類、(火山)ガラス、珪藻化石(海水種：*Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属、不明種)、骨針化石多量、胞子化石

No 6 : 60~120 μm が多い(最大粒径800 μm)。石英・長石類》複合石英類、雲母類、ガラス、放散虫化石(2個体)、珪藻化石(海水種：*Coscinodiscus marginatus*, *Stephanopsis*属、*Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属多い、淡水種：*Pinnularia*属、*Eunotia*属、*Diploneis*属、不明種)、骨針化石、胞子化石

No 7 : 60~150 μm が多い(最大粒径800 μm)。石英・長石類》複合石英類、ガラス、放散虫化石(1個体)、珪藻化石(海水種：*Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属、*Coscinodiscus*属、不明種)、骨針化石(網目構造も含む)

No 8 : 100~400 μm 前後が多い(最大粒子700 μm)。石英・長石類》複合石英類(微細)》複合石英類、ガラス、放散虫化石(1個体)、珪藻化石(海水種：海水種：*Arachonoidiscus ehrenbergii*, *Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属、汽水種：*Navicula yarrensis*、淡水種：*Pinnularia*属、*Synedra*属、不明種)

6. 微化石による材料粘土の分類

検討した土器胎土中には、その薄片全面の観察から、放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10~数100 μm (実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μm 程度)、放散虫化石が数百 μm 、骨針化石が10~100 μm 前後である(植物珪酸体化石が10~50 μm 前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9~62.5 μm 、砂が62.5 μm ~2mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は、土器胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考へる。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、土器製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した土器胎土は、微化石類により、a)海成粘土を用いた胎土、b)海成粘土と淡水成粘土が混合した胎土、である。

a) 海成粘土を用いた胎土 (No 1, No 2, No 4, No 5, No 7)

これら胎土中には、外洋で堆積した堆積物中に見られる放散虫化石や海水種珪藻化石の*Coscinodiscus*属または*Thalassiosira*属が含まれる。なお、No 5 の胎土では放散虫化石は見られない。また、これら胎土中には、海綿動物の骨格の一部の骨針化石や網目構造を持つ骨針化石を

比較的多く含む。

出羽丘陵では、第三紀の中部中新統（中新統（世）は、約2,300万年～約500万年前の地層である）の主に深海～半深海成の泥岩が分布する。山形盆地西縁部には、砂岩からなる月山沢砂岩部層と深海～半深海成の石灰質泥岩からなる本道寺泥岩部層から構成される大井沢層、軽石凝灰岩などを挟む灰白色のシルト岩からなる水沢層などが分布する（日本の地質『東北地方』編集委員会編、1989）。この平野山地域の基盤は、これら中部中新統のうちの本道寺泥岩部層に相当する地層が分布するものと考えられる。

これらの胎土に利用された粘土は、放散虫化石や海水種珪藻化石を含むことから、外洋成堆積物の特徴を示している。これら外洋成堆積物は、深海～半深海成の本道寺泥岩部層と類似した堆積環境であり、これら基盤の地層を探取し、土器材料として利用しているものと考える。なお、こうした基盤層については、今後放散虫化石や珪藻化石などの種類を調べる必要がある。

b) 海成粘土と淡水成粘土が混合した胎土 (No.3、No.6、No.8)

これらの胎土は、上記の放散虫化石や海水種珪藻化石を含むと同時に、これら微化石類とは対照的な淡水種珪藻化石を含む胎土である。淡水種珪藻化石は、No.3の胎土のように *Pinnularia viridis*, *Eunotia praerupta* var. *bidens* などである。これらは安藤（1990）が設定した沼沢湿地付着生指標種群であり、水深1m内外の沼沢湿地成の堆積物を指標する。また、No.6やNo.8では、これら沼沢湿地成堆積物中に見られる珪藻種の *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Diploneis* 属などが含まれる。

これら胎土材料の粘土の特徴は、a) の海成粘土の基盤層を解析して形成された谷部の泥質堆積物の特徴と推定される。この平野山古窯群は、西区の丘陵縁辺部に隣接して東区低地域が広がっている。こうした低地域には、低湿地成の泥炭質堆積物や有機質粘土が堆積することから、胎土中の沼沢湿地成の珪藻化石はこれら低地部の堆積物と推定される。ただし、海成粘土起源の放散虫化石や沼沢湿地成堆積物起源の淡水珪藻化石を明らかに、かつ同程度に含むことから、丘陵部の第三紀中部中新統の泥岩とこの沼沢湿地成堆積物を混ぜて、胎土の材料粘土として用いていることも考えられる。

7. 砂粒の特徴

ここで設定した分類群のうち、50μm以上の大複合鉱物類（岩石片類）は構成する鉱物や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩類とは直接対比できない。これは、対象とする岩石片が細粒で、岩石名を決定するのに必要な大きさがないことが原因である。このため、示される土器胎土中の鉱物、岩石片の岩石学的特徴は、地質学的状況（遺跡周辺の地質など）に一義的に対応しない。こうした場合、これら組織的特徴などに基づいた岩石片分類群から、統計的手法により土器胎土を分類することが可能である。また、複数の分類群の組み合わせから元の岩石群を推定することができる（例えば、藤根ほか、1996）。

ここでは、焼成条件の異なる土器群が含まれること、胎土の試料数が統計的に扱えるほど多

表2. 土器胎土中の粒子組成一覧表

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8
微化石類								
放散虫化石	1	1	1	-	-	-	-	-
骨針化石	1	6	5	1	1	2	4	-
珪藻化石 (海水種)	-	-	1	-	-	7	3	-
珪藻化石 (汽水種)	-	-	-	-	-	-	-	1
珪藻化石 (淡水種)	-	-	10	-	-	-	-	4
珪藻化石 (?)	-	1	12	-	-	-	-	23
孢子化石	-	-	1	-	-	4	-	26
植物珪酸体化石	2	43	81	5	18	36	31	35
鉱物類								
石英・長石類	30	46	44	56	64	77	71	44
石英・長石類 (含雲母類)	8	1	5	-	22	13	31	25
斜長石 (双晶)	4	2	6	4	5	9	3	3
カリ長石 (パーサイト)	-	-	2	1	-	3	3	2
カリ長石 (微斜長石)	-	-	-	-	-	1	-	-
雲母類	8	1	-	1	-	-	14	7
単斜輝石	-	-	3	-	1	-	1	1
斜方輝石	-	-	1	-	2	1	4	1
ガラス	-	46	17	7	17	26	11	18
濁ガラス	-	-	-	3	-	-	-	-
複合鉱物類								
複合雲母類	2	-	-	-	1	-	-	-
複合鉱物類 (含雲母類)	3	2	1	1	7	2	10	11
複合石英類 (大型)	-	2	-	-	1	-	-	1
複合石英類 (中型)	-	3	1	-	2	2	2	3
複合石英類 (小型)	5	12	49	24	31	25	8	8
複合石英類 (微細)	-	5	3	5	8	5	3	1
砂岩質	12	4	2	-	5	2	-	5
泥岩質	106	14	10	3	8	13	6	21
焼成生成物								
リング・ガラス	-	11	-	13	1	-	-	-
発泡ガラス	-	10	2	45	-	-	-	-
その他								
不透明	1	-	-	-	-	1	-	1
不明	1	7	5	-	1	3	4	1
総ポイント数	184	217	262	169	195	232	209	242

くないことから、No.1の粘土とNo.2～No.8の土器胎土に分けて、それぞれ含まれる粒子群の岩石学的特徴について概略を述べる。

No.1：泥岩質・砂岩質とされる分類群が多いが、これらの粒子中には珪藻化石の破片などを含んでいる。この試料は、土坑内から出土した粘土で土器材料の可能性が期待されるが、他の土器群の胎土と同様に海成起源の粘土である。このことから、多量に見られるこれら泥岩質の砂粒は基盤の地層が細粒化した粒子と推定される（すなわち完全に泥質化していないものと思われる）。これ以外の粒子分類群では、火成岩や堆積岩などの一般的な特徴と思われる複合石英類や火山岩起源の斑晶質の粒子などを含む。

No.2～8：量比には若干の違いが見られるものの、火成岩や堆積岩などの複合石英類や前述の基盤層の細粒化した粒子の泥岩質・砂岩質が含まれる。ただし、No.1の粘土中の粒子群と大きく異なる点として、テフラ起源の（火山）ガラスが比較的多く含まれることである。これらのガラスは、少量ならば堆積物中に含まれることが考えられるが、比較的高率であることから意図的な混入も考えられる（車崎ほか、1996）。また、微化石類により起源が同じと推定された粘土中には全く含まれないことも、意図的な混入の可能性を考えてみる必要がある。なお、No.2やNo.4は、須恵器であり高温焼成されたもので、長石類のガラス化が観察・認識されるが、ガラスに分類された粒子群の多くは曲面をもつテフラ特有の形態を示すことから区別される。

8. 胎土材料についての考察

須恵器や土師器などの胎土は、微化石類による粘土の起源と混和材の砂粒組成に分けて検討した。

粘土では、いずれも放散虫化石や海水種珪藻化石あるいは多くの骨針化石を伴うなど、外洋性堆積物としての特徴を示す。ただし、No.3やNo.6あるいはNo.8では、放散虫化石などと堆積環境の異なる淡水種珪藻化石が含まれることから、両者起源の異なる粘土を意図的な混ぜた可能性も考えられる。

一方、砂粒組成では、土器材料と思われるNo.1とこれ以外の胎土とに区別され、No.1は泥岩質の粒子が多いのに対し、No.1以外の胎土ではテフラ起源のガラスが特徴的に含まれる。No.1の泥岩質は基盤層の細粒化に伴って認められる粒子群であり、一般的に認められる混和材とは異なるものと考える。両者の大きな相異は、No.2およびNo.8においてテフラ起源のガラスが多く含まれている点である。これらガラスについても混和材の可能性を考えることができる。

これ以外の特徴として、No.2およびNo.3において、植物珪酸体化石が高密度で密集した灰白色塊が認められる。これらは、イネ科植物を焼いた際に出来る灰質塊と考えられる。

表3. 各胎土の特徴

番号	器種など	粘土起源	砂粒組成	その他特徴
1	粘土	—	泥岩質・砂岩質	
2	須恵器	环	複合石英類・火山ガラス	灰質塊
3	須恵器	环	複合石英類・火山ガラス	灰質塊
4	須恵器	环	複合石英類・火山ガラス	
5	土師器	甕	複合石英類・火山ガラス	
6	土師器	环	複合石英類・火山ガラス	
7	土師器(内黒) 有台椀	海成粘土	複合石英類・火山ガラス	
8	土師器(内黒) 有台椀?	海成粘土 (+淡水成)	複合石英類・火山ガラス	

9.まとめ

ここでは、土器胎土の材料について、微化石類による粘土の起源と混和材と思われる砂粒組成に分けて検討した。ここで記載した微化石類は、新第三紀中部中新統の基盤層に含まれるものと思われる。この遺跡は窯跡であることから、窯が成立する必要条件として材料粘土の分布やその特徴は重要と考える。今後、この窯周辺の粘土の分布や微化石類を検討することにより、土器材料の実体が明確になるものと考える。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42、2、73-88.
- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編 (1981) 「増補改訂 地学事典」、平凡社、1612p.
- 藤根 久・菱田 量・車崎正彦 (1996) 第2節 弥生土器の胎土分析。「下戸塙遺跡の調査—第2部 弥生時代から古墳時代前期—」、648-692. 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室
- 菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久(1993) 岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—。日本文化科学学会第10回大会研究発表要旨集、34-35.
- 日本の地質「東北地方」編集委員会編、1989 日本の地質2 東北地方。338p. 共立出版株式会社。

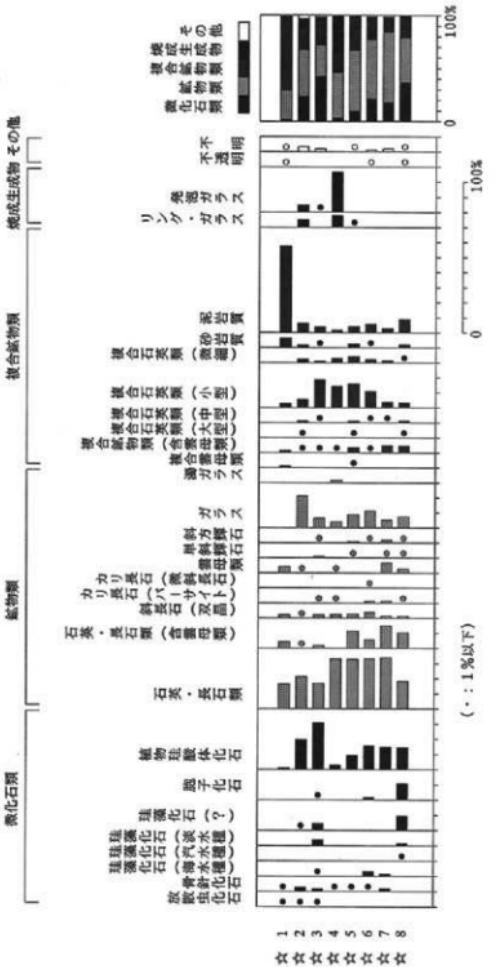
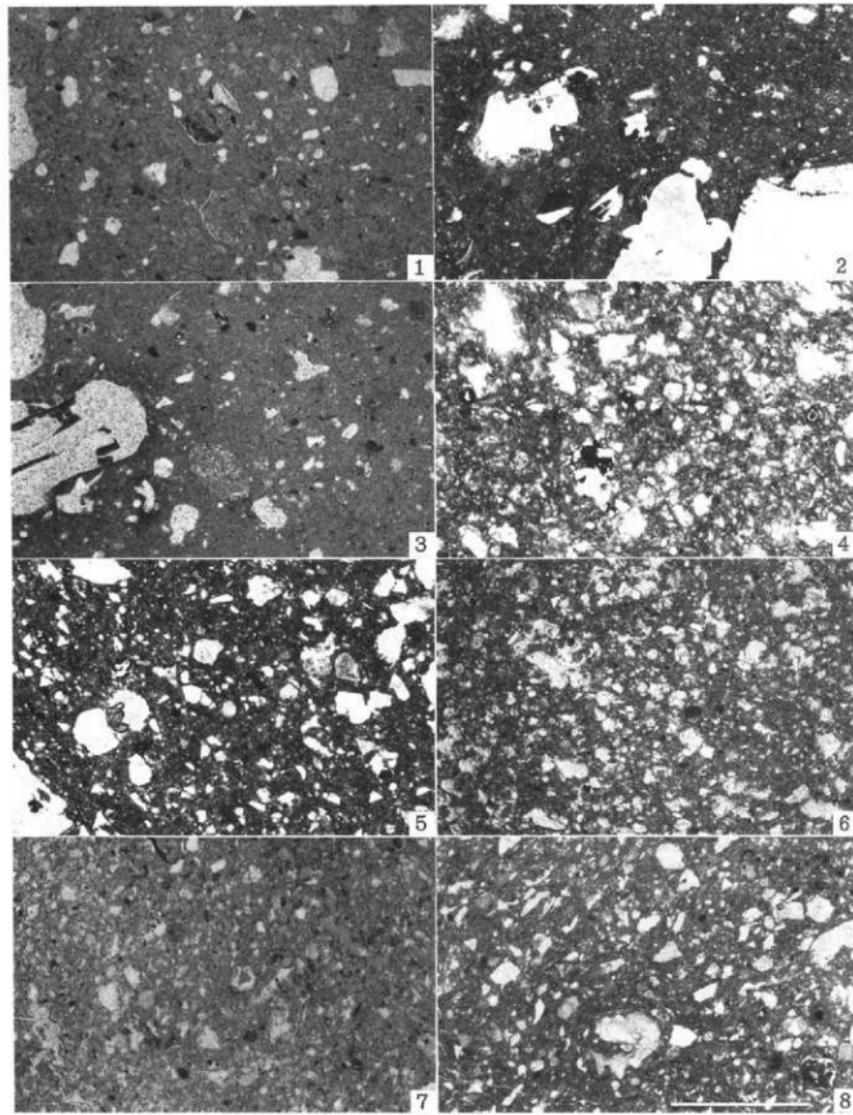
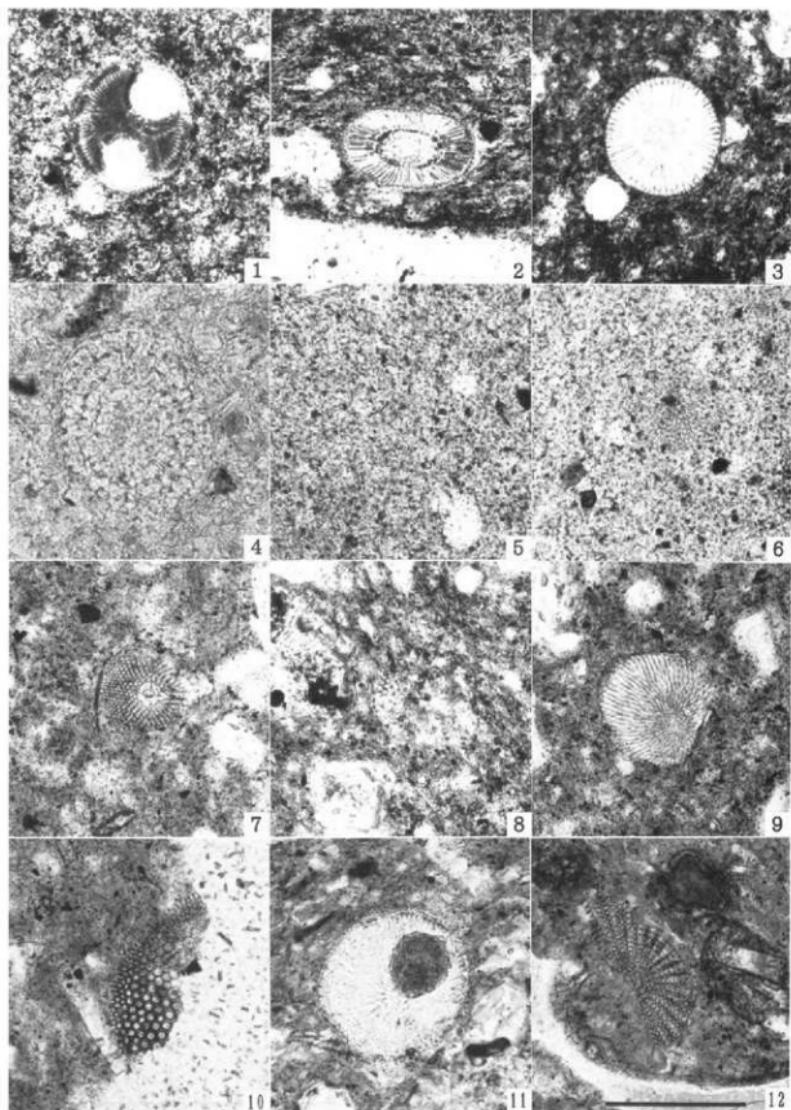


図1 土器胎土中の粒子組成図(全分類群を基数とした百分率で表示)
 粘土起源、☆：海成粘土
 ただし、No.3・No.6・No.8は、淡水種珪藻化石を含む



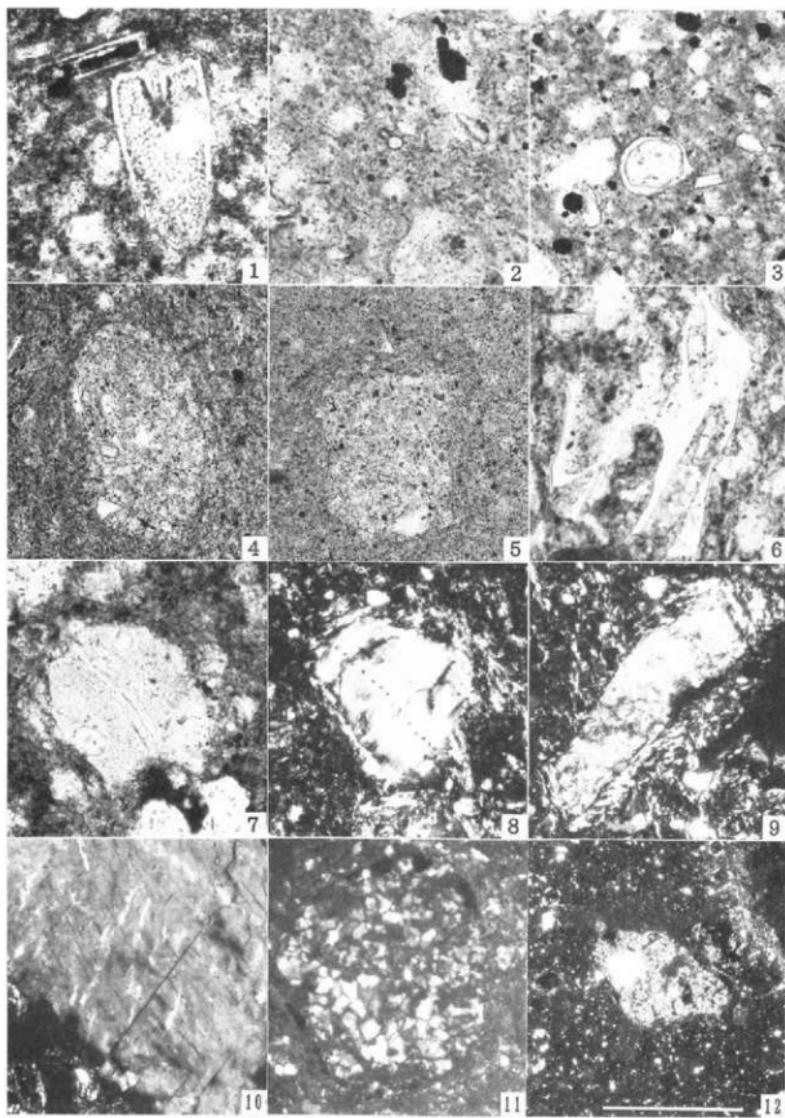
図版 1. 土壌粘土の偏光顕微鏡写真 (スケールbar: 100 μ m)

1. 状況写真解放ニコル №1
2. 状況写真解放ニコル №2
3. 状況写真解放ニコル №3
4. 状況写真解放ニコル №4
5. 状況写真解放ニコル №5
6. 状況写真解放ニコル №6
7. 状況写真解放ニコル №7
8. 状況写真解放ニコル №8



図版2. 土壌駄土中の粒子顯微鏡写真 (スケール-bar: 100 μm)

1. 球藻化石 (海綿類)、No.2
2. 放散虫化石、No.2
3. 放散虫化石、No.2
4. 放散虫化石、No.1
5. 球藻化石 (Pimularia属)、No.1
6. 放散虫化石、No.3
7. 球藻化石 (Stephanopyxis属)、No.6
8. 放散虫化石?、No.4
9. 放散虫化石、No.3
10. 建藻化石 (Coccolinodiscus属)、No.6
11. 放散虫化石、No.7
12. 球藻化石 (Arachonoidiscus ehrenberii)、No.8



図版3. 土器胎土中の粒子顕微鏡写真 (スケールbar: 100μm)
 1. 骨粉化物(網目)、No.4 2. 鹿子化石、No.8 3. 植物珪酸体化石、No.8
 4. 灰質塊、No.2 5. 灰質塊、No.3 6. ガラス、No.6
 7. 苦胞ガラス、No.4 8. 硼長石(双晶)、No.8 9. 石英・長石類(含霞母層)、No.8
 10. カリ長石(←サリ)、No.8 11. 硼長石英類(小型)、No.5 12. 硼長石英類(微細)、No.2

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書

1998年2月25日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 田宮印刷株式会社
